

# 賢者の冒険

賢者さん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ゲーム脳賢者（自称）がアバンたちと共に冒険するお話（完結）

# 目次

アバンの冒険	1
アバンの冒険 2	12
アバンの冒険 3	23
アバンの冒険 4	34
アバンの冒険 5	45
アバンの冒険 6	59
アバンの冒険 7	72
アランの冒険 1	85
アランの冒険 2	96
アランの冒険 3	108
アランの冒険 4	120
アランの冒険 5	132

アランの冒険 6	144
アランの冒険 7	161
アランの冒険 8	175
アランの冒険 9	188
アランの冒険 10	201
アランの冒険 11	214
アランの冒険 12	226
アランの冒険 13	245
アランの冒険 14	263
アランの冒険 15	279
アランの冒険 16	294
アランの冒険 17	310
そして伝説へ	337

導かれし者たち

天地魔界の冒険(案)

ドラクエ4へ行ってみる

ドラクエ5に行ってみた1

ドラクエ5に行ってみた2

ドラクエ5に行ってみた3

ドラクエ5に行ってみた4

365

467

479

504

538

577

626

## アバンの冒険

「よし、これで中級呪文は全部マスターできたぜ」

カール王国の中心部から少し外れにある森の中で一人黙々とモンスターを倒して魔法の習得に勤しんでいたアランはその眩きと共に息を吐き出し、そしていずれ来る戦いに向けて更に精進するのでした。

本来魔法を使える人材というのはただでさえ貴重であり、その中でも攻撃呪文に回復呪文や補助呪文などを使いこなす存在など世界中の国が欲しいと思うのですが、彼：アランに限ってはそういった事にはならず、日々モンスターと戦い経験値を稼ぐ毎日を送っていました。

パプニカ王国には賢者と呼ばれる者たちがおり、それらの存在は多様な呪文を使いこなすエキスパートとして世界中に知られています。アランもまた賢者と呼ばれるだけの力を周囲に示しているのですが、アランがいるカール王国はそのような事をしようとしませんでした。

普通ならば王国に召し抱えられ重用されるなど栄誉な事なのですし、この世界で生き

てきた人間ならば国に召し抱えられるとなれば迷わず首を縦に振るでしょう。しかし  
そういった常識が通じないほどにアランという青年は常識外れ：いえ原作知識に凝り  
固まっていたのでした。

「今いったい何レベルなんだろう…？」

アランがひたすらモンスターを倒しレベル上げを行うのは魔法が好きだからではあ  
りません。そこにはアランなりの魔王を倒すといったしつかりとした理由があつたの  
です。

…

…

…

彼が物心ついた頃には家族などはおらず、なぜか森の中にある小さな小屋にいまし  
た。ここがどこなのかも、なぜ1人であるのかもわかりません。当然子供1人で生活し  
ていけるわけもなく、森で生きていける知識もなかった彼は人里を求めて出かけるよう  
になりました。

その結果フラフラになりながらもその少年は小さな村落を発見し、助けを求めた事で何とか生き延びるに至ったのです。そこからはその村でお手伝いをしながら生活していたのですが、そんなある日この世界を知る転機はやってきました。

森の中に山菜を取りに行った際に怪我をしてしまった少年が治療しようと神父さんに薬はないか聞こうとしたところ、思いもかけない言葉と驚きがアランを襲いました。

「怪我をしてしまったんだね。すぐに治るから心配いらないよ…ホイミ」

「えっ…?」

その言葉と共にみるみる傷口がなかったかのように消え去ってしまいました。神父さんは当然といった様子ですが、それを初めて目の前で見た少年は驚き立ちすくんでいました。

ホイミ…この言葉は少年の知識の中にしっかりとあります。とっても有名なファンタジーRPGの中でも代表的な回復呪文の名前です。意味がまったくわかりませんが事実として神父さんがそれを唱えれば小さな光と共に傷が治るのですから疑いようがありません。

そこから少年はいろんな事を神父さんから聞きました。傷を癒やすのにやくそうという物があったり、毒になったらどくけしそうという物があったりと、少年が知っているアイテムたちの名前が出てくるのですから疑いようがありません。

そしてそういった事実を知った少年が思ったのは『勇者は既に決まってるだろうから……せめて僧侶か魔法使い、あわよくば賢者になつてみたい』というものでした。今は平和に見えるこの世界だけど、きつと竜王とか魔王とか出てきて世界を征服しようとするはずだ……という何の根拠もない考えだけを根拠にして、少年は当然のように世界を救う一助となるべく修行を始めるのでした。

なお、実は既に魔王はこの世界を侵略しており、世界各国はモンスターと戦っているのです。しかし運良くアランがたどり着いた村はかなり辺境にあるため、そこまでの被害を受けていないだけなのです。

今の自分が何の職業なのかわからないのでまずは魔法使いか僧侶になりたいと思つたのですが、どうやって僧侶や魔法使いになればいいのかわかりません。ダーマの神殿が近くにあれば言う事なしなのですが、神父さんに聞いても「そんな神殿は聞いた事がないね」と期待した答えはもらえませんでした。

ついでに次のレベルに上がるための必要経験値も聞いてみたのですが、そこでも神父さんは「君は一体何を言っているんだい？」と、言葉は通じているのに噛み合っていない様子でした。

しかし少年はそんな事では挫けません。

少年の中では「きつとこの村は小さいから神父さんも知らないんだろうな。それとも



神父さんは生き返らせるとかだけで、経験値とかの話は王様なのかな？」と、本人が聞いたら「きみ、頭大丈夫？」と言われそんな事を考えていました。

そうやってしばらくは付近の小さなモンスターを暗殺していた少年ですが、そこそこ倒しているのにレベルが上がった感じがなかったので神父さんに相談してみることになりました。ちなみに暗殺なのは、堂々と正面から戦っても勝てるかわからないのでゴソゴソ隠れて不意打ちで倒しているからです。

「ねえ、神父さん。結構モンスターを倒してるんだけど、ホイミすら覚えないんだけど何でかわかる？」

「呪文というのは契約することで使用できるようになるんだよ？どうしてモンスターを倒して呪文が使えるようになるなんて思ったんだい？」

「え……なにそれ……」

呆れ声の神父さんから聞かされたのは衝撃の事実でした。モンスターと戦って、倒して経験値を得て、そしてレベルアップした事で覚えるのだろうと思っていたのですが、契約することで使えるようになるなんて思いもしなかったのです。

どうやら呪文をえるようになるには儀式を行う必要があるようで、神父さんから魔法陣の掲載された書籍などをもらった少年は早速儀式を行ってみることにしました。

とにかく片っ端から儀式を行い契約していった結果、少年はホイミとメラ、そしてヒヤドを習得し使用することができたのです。少年の頭の中では僧侶の呪文と魔法使いの呪文を両方使えるようになるというのは賢者以外にいないはずなのですが、あと1つだけ攻撃呪文と回復呪文を使える職業がいる事に気づきました。

「もしかして…俺って勇者?」

攻撃呪文と回復呪文を使える者は実はこの世界には結構いるのですが、そんな事を知らない少年は自分が選ばれし者ではないかと期待するのです。そして日々モンスターを倒して経験値を稼いでいるつもり少年は、裏技で一気にレベル99まで上げられる方法も知識として知っているのです。

その方法は……『ばふばふ』です。

つまり少年は『ばふばふ』する事でレベルを99に上げようと考えているのです。そこに疚しい気持ちや厭らしい気持ちは一切ありません。勇者（仮）や賢者（仮）として魔王と戦うからにはすべてのステータスをカンストさせた上で圧倒したいというガチ勢の考え方が染み付いているだけなのです。

そして最低でも1人でアッサラームに行って周囲のモンスターと戦えるくらい…つまりレベル20前後くらいまでは今のうちに上げておきたいなどと打算的に考えているのです。この裏技の場合、運が悪いとレベルだけ上がって魔法を覚えないというり

スクがあつたのですが、呪文が契約制だという事を知ったことでその懸念もなくなりま  
す。

つまり何の憂いもなく『ばふばふ』することができるのです。

胸に希望と期待を秘めて少年のレベルアップ活動が勢いを増していく中、ふと自分の  
名前は何だろうと思ひ出しました。この村に助けを求めて教会に保護された少年です  
が、今のところ村の住民からも神父さんからも『坊主』だとか『坊や』としか呼ばれて  
いませんでした。

「どうせだから口ト…は駄目だよな。『そんな名前を付けるなんてとんでもない！』とか  
言われちゃいそうだし…アランでいいか」

少年の頭の中には『ハンソロ』や『キッド』『スミス』『マーリン』などといった候補  
もあつたのですが、連れて行くかどうかともわからない仲間の名前ではなく自分が名乗り  
魔王討伐の旅に出る事前前提だったので、それっぽい名前で勇者にも賢者にも語呂が良さ  
そうな名前にしたのです。

こうして少年はアランという名前が決まり、いつかきつと世界征服に乗り出してくる  
であろう魔王や大魔王を倒すという目的も決まりました。

自身の名前と目的を神父さんや数少ない村の住民たちに伝え、修行という名のモン  
スター退治により一層熱を上げる少年アラン…村の住民たちは『そんな危ない事をしなく

ても……でもまあおとぎ話に憧れる子供のする事だから』と心配しながらも見守っていました。

調子に乗って手痛い反撃を食らったり、時には瀕死になりながらも回復呪文を駆使し何度もモンスターと戦うアラン。村人たちからは「危険な真似はするな」と言われたりもしますが、本人が望んでいて、それで村の周囲のモンスターも減っているのだから村としてはあまり強く止める事もできません。

そんな日々から数年の月日が過ぎ去り、もうすぐ青年と呼べるくらいには成長したアランは遂に村を出て本格的に旅をすることを決意します。

この村はカール王国という国の中でもかなり外れのほうにあるらしく、アランはひとまずカール王国の中心部を目指すことにしました。この小さな村では情報という情報は滅多に入っていないため、ルイーダの酒場やダーマ神殿などといった施設がどこにあるのかなどがまったくわからないのです。

そのためアランはひとまずカール王国の中心であるお城を目指し、王様に会えるなら次のレベルまでの必要経験値などを聞きたいと思っていました。

「アラン、身体には気をつけないといけませんよ」

「いつでもこの村に戻っておいで」

「手紙待つとるからな」

神父さんや村人たちに見送られ、アランは村を出発します。人数が少ないからか、村1つが家族のような暖かさがあり、世界を救ったらこの村でのんびり過ごすのも悪くないな…などと考えながらカールのお城を目指すアラン。

道中のモンスターたちを呪文で倒したり、立ち寄った村でお手伝いをしたりしながら順調に旅路を進んでいました。これぞ勇者の旅って感じだな…などと考えていたのですが、障害はこの後やってきます。

「ここがカール王国ってところかあ…」

ついにカール王国の城下町までやってきたアラン。さっそく王様に会うためにお城を目指し、城門を通ろうとしたところ衛兵に声をかけられたのですがここで問題が発生しました。

「待て、この先は王城だ。一般人は立ち入ることはできない」

「いや、王様に会いたいだけど」

「王に会いたいだと？何の用で王に会いたいだ？」

「いや、次のレベルに上がるための経験値とか聞きたいんだよ」

「こいつは何を言ってるんだ…？」

結局アランと衛兵は話が噛み合わず、アランは王様に会うどころかお城に入ることもできませんでした。それどころか「怪しいやつ…ちよつとこつちまで来てもらおうか」

などと連れて行かれかけたため思わず呪文で反撃してしまい、衛兵たちが驚いているうちに逃げ出したのです。

そこからはなぜかお尋ね者のような扱いになってしまい、巡回している兵士に見つかってはあまり怪我をさせない程度に返り討ちにしたり、たまに回復呪文で癒やしてあげたりしながらアランと兵士たちは日々を過ごしていたのでした。

実はカール王国の国王は病床に伏しており、現在は王女であるフローラが国を纏め上げています。それを知らずに王に会いたいと突然やってきたので、アランは怪しまれて当然なのでした。

それでも凶太く城下町をウロウロと情報収集したりしているアランですが、もちろんそんなアランを捕まえようと兵士たちはやってきます。たまに兵士だけでなく騎士団とか名乗る者がいたり、更には騎士団長とかいう人物もいたりするのですが、今のところアランは捕まることなくその全てを切り抜けていました。

そんなカール兵たちとの追いかっこはアランの敏捷性を鍛えたり動きを洗練させる役目は果たしてくれていたのです。しかし相手を倒したわけでもないので経験値にはならないため、アランはカールの城下町を離れて再度モンスターたちを倒すことになりました。

その頃にはカール城内でもアランの話は周知されており、様々な憶測と共に『王の命を狙っている』という突飛なものから『武者修行のために兵士と戦っている』『実は魔族だった』『騎士団長が負けた』『国を落とすか乗っ取るのが目的では』といった噂が尾ひれを付けて更に噂を呼んでいる状況だったのです。

そのため全部の噂が根も葉もないのですが、否定する本人が捕まらないため言いたい放題に言われているのです。

## アバンの冒険2

「よし、これで中級呪文は全部マスターできたぜ」

カール王国でいろいろと噂されているとは思わないアラン。彼はカール王国から少し離れた森の中で今日もレベルアップに勤しんでいます。兵士たちに追われる傍らで城下町では情報を集めたりもしていたのですが、今のところ誰もアッサラムどころかダーマ神殿もルイーダの酒場も知らないという結果しかありません。

中級呪文を使えるようになったのでそろそろレベル30くらいになっていてもおかしくないなあと思いつつ、カール王には会えないしもうそろそろ別の国に行つて違う王様に会つたほうが早いかな…などと考えていました。

「あなたが城で噂になっている凄腕魔法使いで間違いないですか？」

そんなある日、アランのもとに1人の青年がやってきました。特徴的なカールされた髪型、この世界では見かけなかった眼鏡をかけたその人物はアランを目的にやってきた事がわかります。



「あー…できればあまり警戒しないでもらいたいのですが…私、怪しい者ではありません」

その人物は自分で怪しい者ではないと言っており、自身の名前をアバンと名乗りました。そしてカール王国の騎士団に一応所属していて、騎士団すら翻弄する凄腕の魔法使いの噂を聞き会いにやってきたという事でした。

「凄腕の魔法使いってというのは人違いだと思うけど、ちなみにどんな噂なの？」

「えーとですね…」

そこからアバンが語った噂を聞いたアランの感想は『これは誰の話をしているんだ？』と言いたくなるほどに荒唐無稽な噂たちでした。王様の命を狙ったり王女様を拐って国を乗っ取ろうとしたり、騎士団を少しずつ倒して戦力を削ごうとしている魔族だったりバラエティに富んだ話がアバンの口から語られました。そしてその人物はいくつもの呪文を使いこなす恐ろしい實力を持った魔法使いであるということも…

そんなアバンの話を聞いたアランは確信しました。

「アバンさんや、どうやらそれは俺の事ではない。絶対に間違いなく人違いだ」

「私の事はアバンと呼んでください。ですがロカ…現在の騎士団長が言っていた風体とあなたの姿は一致するんですよねえ」

しかしアランの否定とは裏腹に、アバンは城で噂の人物とアランが同一人物である事

を疑っていない様子です。アランとしてはなぜ自分がそんな悪者扱いをされているのかまったくわかりません。アランの姿形で間違いないと言うのであれば実は自分には双子の兄弟とかが存在するか、別の誰かがモシヤスでも使って化けているんじゃないか？とまで考えていました。

わざわざ探しに来るし噂は意味不明だしで、もう面倒になってきたので別の国にでも行こう：とアランが考えていると、どうやらアバンは自分を捕まえるためにやってきたのではないという事です。

「ふむ、私が見た限りあなたは噂のような人物ではなさそうですね。どうしてこんな噂が立ったのか、良ければ話を聞かせてもらえませんか？もしかしたら力になれる事があるかもしれません」

力になるも何も人違いだというのに：と思いつながらアランはカールの城下町やお城へ訪ねた時のことなどをアバンに話して聞かせました。城下町では行きたい場所があるので誰か知らないか聞いて回っていたり、お城では王様に会おうとして断られたので大人しく帰ったり：その後はなぜか兵士と追いかけてこをしたりといった内容です。

アバンは「うんうん」と相づちを打ちながら聞いていたり「なるほどなるほど」などと頷いていたりとアランが話しやすいようにリアクションしながらだったので、アランもとても話しやすいためレベルを上げて魔王を倒すために修行をしているという事ま

で説明しました。

「…あなたは魔王を倒すつもりなのですか？」

「もちろんさ。今はまだそこまでの力はないけど、いずれ（ばふばふで）レベルを上げた  
ら仲間を探して冒険に出るつもりだ」

「そうですか…」

何やら神秘的な表情でアランの話を聞くアバン。どうやらアランの話を聞いて何か思  
うことがあるような様子です。そんな考え事をしているアバンを見つめながら、答えが  
出るまでアランは大人しく待つことにしました。

ほんの十数秒ほど経ち、アバンは顔を上げたと同時にアランに声をかけます。

「1人では修行をするにも魔王軍と戦うにも効率が悪いでしょう。私のほうから王国騎  
士団には伝えておきますので、一度城に顔を出してもらえませんか？」

「えー…まあそのうちね」

アバンとしては多少の打算もありつつも、噂がまったくのデマだった事でアランの疑  
いが晴ればという気持ちもありました。それを聞いたアランは『そろそろ鬼ごっこも  
飽きたし効率悪いのは事実だからいいかな』と、折を見てアバンを訪ねることにします。

実際にアランは兵士たちとそれなりにドンパチャやってるため噂は根も葉もないわけ  
ではないですが、とはいえ場合によつては回復呪文でちゃんと傷を癒やしてあげたりも

しているのでアランとしては問題ないと思っています。もちろん兵士の攻撃がアランに当たることもありますし、それは自分で回復しているのでその分を差し引いてプラスマイナスゼロという勝手な考えです。

最後に「待ってますからねー」というアバンを見送り、アランはとりあえず王城に行く支度をするのでした。

…

…

…

アバンが王城に戻り王女フローラやカールの重臣たちに『噂はただの噂で、本当は魔王を倒すべく修練している1人の青年である』と報告がなされ、周囲は半信半疑ながらも王女であるフローラがそれで納得したためアランに対する誤解が解かれた頃…アランはカール王国の王城に徒歩で向かっていました。

ルーラを使えば一瞬で移動できるのに…と思うものの、アランがルーラを唱えても何も起こりません。呪文の一覧や向かう先をカーソルで選択するような事ができないので、アランはルーラの使い方がわからないのです。

この世界のルーラは対象地を思い浮かべて発動する移動呪文なので、そのことを知らないアランは『ただ唱える』ことしかしていないので発動しませんでした。

自分が今どの呪文を使えるのかを一覧で見るといふ事ができないので、唱えてみて発動して初めて使えることを知るといふ行為を繰り返して自分の成長を実感するしかないのです。思案した結果ルーラを使えないのは『かしこさ』が足りないからまだ使えないのかもしれない……という可能性に至ったので、かしこさを上げるためにもアバンからの誘いは渡りに船といった状況でした。

「あなたがアバンが言っていた魔法使いなのですな」

王城に到着したアランは門兵に追いかけられるという事もなく城に入る事に成功し、あれよあれよという間に謁見の間へと案内されます。そこには誘ってきた本人であるアバンと衛兵や重臣つばい人たち、そして何やら美人なお姉さんが待っていました。

そしてそのお姉さんがアランに声をかけ、自身はこの国の王女であるフローラであると告げます。アランも自身の名を名乗り、魔王を倒すために修行しているので王様にご会つて次のレベルに上がるための経験値を聞きたかったと目的を伝えました。

少々意味のわからない部分ではありますが本人から城下で起こした出来事の目的などを聞いたフローラは周囲の者に「この者はアバンの言った通り危害を加えようとした

者ではないので警戒は不要」と告げたあたり、フローラのアバンに対する信頼の高さが伺えます。

「ところでお姫様、早速だけどいくつか聞きたいことがあるんだけどいいかな？」  
「何でしょう？」

アランはひとまずダーマ神殿やアツサラームなどの場所を知らないか訪ねますが、当然の事ながらフローラもアバンも重臣たちも誰も知りません。次のレベルまでの必要経験値も訪ねてみますが、返ってきた答えは「あなたが今以上に経験を糧とし、成長する事ができればきつとレベルアップしてきますよ」というふわつとした回答でした。

フローラ王女のほうも突然聞いたこともない場所を聞かれた上に、次のレベルになるにはどれくらい経験値が必要かなんて聞かれてもわかりません。それでも取り乱すことなく説いてみせたのは、この魔王軍が侵略してくる世界で一国の先導者として立つ王女の気質や人柄とでもいうべきものなのでしょう。

結局欲しい情報を得る事は叶いませんでしたが、アランは王城内にある書物庫に案内してもらおう事ができました。今回王女とアランを引き合わせたアバンが案内人となってくれて、ついでに知りたい事があるなら一緒に探してくれるという事です。

アバン曰く「自分の家は代々学者の家系です」ということで、戦ったりするよりも勉強などのほうが得意ということでした。アランはその話を聞いたので、アバンにルーラ

が使えなかったという事を相談してみることになりました。

アランの予想が正しければ、現在中級呪文は使用できるようになっているためレベル30くらいにはなっているはずなのです。もちろん呪文を習得するには儀式だけでなく色々な要素があるのですが、アランの場合は覚えられないわけがないと思いついてみるためある意味良い方向に転がっているだけなのでした。

「ねえアバン、ルーラが使えないんだけど何でだろ？レベル的には問題ないと思うんだけどさ」

「そうですねえ…私も使えるわけではないのですが、ルーラとは目的地を思い浮かべて使用するものだったはずですよ。きちんと行きたい場所のイメージができていないのかもしれませんねえ」

「…イメージ？」

「ええ、ルーラもトベルルーラも明確なイメージを頭の中に描かないとうまくいかないとも聞きますし、まずは自分の周囲などをしっかり観察する癖をつけばうまくいくかもしれませんよ？」

「トベルルーラ？そんなのあったっけ？」

何気なしにアバンに質問してみたただけだったはずが、思わぬところから答えがやってきました。何度唱えても使えなかったのは、ルーラを使用するには目的地をイメージす

る必要があったという事だったので。言われてみればアランはルーラを唱えた時には明確なイメージなどしていませんでした。「カール城に行きたいな、ルーラ」くらいでは発動しないのは当然だったのです。

そして更にアバンの口から出てきたのはトベルーラという名前の呪文です。詳しく聞いてみるとルーラは遠方の目的地に移動する呪文ですが、トベルーラは空中を飛翔する呪文ということでした。更に術者のレベルが高ければ速度も上がるという呪文らしく、レベルカンをストを指すアランにとっては自身のレベルを計るのに適した呪文と言えます。

アバンも普段は騎士団の特訓などをするわけではないということで、侍女たちへのお料理教室などの合間にアランはいろいろと教えてもらったりしていました。途中なんとなく見覚えのある騎士団長とかいう男が乱入してきたり、アバンにいろいろと小言を言ったりしていましたがアランにとっては些細な事です。

ついでにアランも騎士団長である口カに絡まれたりもしましたが、ルーラを覚えトベルーラも使えるようになったアランの敵ではありませんでした。元々敵ではないのですが、たまに挑まれることがあるので学んだ事を実践するにはちょうど良い相手だったのです。

こうしてアバンの協力もありかしこさも上がっていったと思われるアランは、上級呪



文を使えるようになるべく次の修行に移ろうとしていました。しかしそんなアランのカール修行ライフは終わりを迎えることとなります。

いつも通り書物庫と鍛錬場を歩き来していたある日、突如として城内が騒がしくなり兵士たちが慌ただしく動き回っていたのです。理由を聞いてみると、王女の姿見に魔族からのメッセージが書かれており簡単に言えば『今夜お姫様をもらいに行くね 魔王』という内容だったという事でした。

アランは遂にこの日が来たかとまさに一日千秋の思いです。魔王が姫を拐うというのは一種の様式美のようなものと考えているので、アランの中ではフローラ王女が今夜魔王によって連れ去られるのは確定事項のようなものです。

つまりここからアランの冒険が始まると言っても過言ではありません。

今の自分が何の職業なのか、レベルはいくつなのか、誰も教えてくれないのでわからない事はたくさんあります。しかし冒険者である事には間違いないので、アランは装備や道具を揃えるために駆け回るの事にしたのでした。

本当は出発前に王様からわざわざかりのお金と装備をもらいたいところではありませんが、カール王国の王様は病気で寝込んでいるらしく会えないという事でした。そのためフローラ王女が国の先頭に立っているという事もアランは聞かされています。

つまりアランの知っているストーリー的にはフローラ王女が魔王に拐われてしまい、

助け出す旅に出発するのに餞別を渡す役目もフローラ王女になってしまうのです。そんなバグみたいな事にはなるはずもないため、せめて装備くらいは良い物を持っていうと考えたのです。

魔王を見てみたいという気持ちもありませんが、やはり初対面は玉座の間で座して待つ魔王と対峙するという構図と「配下になるなら世界の半分をやろう」というセリフが欲しかったため断腸の思いで見物欲を抑え込んだアラン。

そのためアランにも魔王襲来に対する召集がかかっていましたが、後ろ髪を引かれる思いで城下町へアイテムなどを買い揃えるために繰り出すのでした。

## アバンの冒険3

「ええ？お姫様無事なの？」

「ええ、なんとか魔王を撃退することに成功しました」

「…魔王ってそんな弱かったの？」

「いえ、決して油断できるような生易しい相手ではありません。今回は相手がこちらを侮っており、その慢心があったからこそその結果でしかありません。しかし外のほうはあなたがいってくれて助かりましたよ」

王城内が魔王襲撃により激戦となっていた中、アランが冒険の準備のために城下町へと向かおうとしていたところにもモンスターが突如として現れたのです。進軍してきた様子もなく、ルーラで飛んできたようにも見えないモンスターたちは出現と同時に暴れ始めました。

そのためアランも兵士たちの先頭に立って戦う事にしたのです。

どうやら今まで戦ってきたモンスターたちよりは強かったようで、兵士たちも同じように戦っていたものの戦況は押されている状況でした。アランは兵士が怪我を負えば

回復してあげ、毒を受ければ解毒をしてあげ、合間に攻撃呪文で敵を攻撃しつつ八面六臂の活躍をしていました。

そしてそんな中、今までどこにいたのかアバンが現れモンスターたちを混乱に陥れたのです。モンスターたちは敵も味方も関係なく暴れまわるようになったため、そこからは遠距離からの攻撃呪文によってモンスターたちは倒されたのでした。

結果として負傷者は大勢出たものの、魔王の配下のモンスターたちは倒されることとなりました。暴れていたモンスターたちを退治し終わった頃にやってきたアバンに事の顛末を聞き、アバンはお姫様が無事だった事や魔王を撃退する事ができたなどの話を聞いて驚いていたのです。

「アラン、私は今の力では魔王に勝てないと実感しました。魔王を倒すため…世界に平和を取り戻すために、私と一緒に戦ってくれませんか？」

「それはこっちとしてもありがたい話だけど、アバンって学者さんじゃなかったっけ？死ぬ度に教会で生き返らせるのとか棺桶を引きずって歩くのとかは嫌だよ？」

「あはは、私が学者の家系なのは間違いありませんが、これでも多少くらいは戦えますよ」

アランとしては本気で心配しているのですが、アバンから見れば冗談にしか聞こえませんが。しかしそんな冗談であっても魔王を倒すという目的の前に恐れることなく言え

るアランはとても心強い仲間に見えるのでした。

アバンがアランを誘った理由は、アランと初めて会ったとき「魔王を倒す」と言っていたのを覚えており、そしてカール城にいるときも自身のレベルアップに余念がなかったのをずっと見ていたからでした。何気ない会話の中でもそれは感じ取ることができ、並々ならぬ決意があるのだと思ったのでパーテイに誘ったのです。

アバン自身も回復呪文や攻撃呪文などを操ることができませんが、今必要なのは魔王を退けた技をきちんと自分の物として昇華させること…そのためには自身と同じかそれ以上に呪文を操る仲間がいてくれるというのは非常に心強く、そして最初から打倒魔王を掲げているのだから共に旅をするのにアランはまさに適任と言えるのでした。

「魔王を倒す旅…ですか」

「ええ、アランも一緒に来てくれる事になりましたし、明朝にでも出発しようかと思っ  
ています」

アバンがフローラ王女に魔王討伐の旅に出ることを報告している中、アランはその様子  
子を眺めています。見たところフローラ王女は魔王の襲撃を受けておきながらまったく  
無事のように、少し前に会った時と変わらない美人なお姉さんのままでした。

ほんの少しだけ…本当に少しだけ『もしかしたら犬になったりしてるのかも』などと

アランは思っていたのですが、何もなかったようで何よりです。フローラ王女はムーンブルクの王女ではないですし、この世界にはハーゴン教団もないのでいらぬ心配なのですが…

そんな無駄な妄想をしていたアランなどいなかったかのように、アバンとフローラ王女の話は進んでいきました。そしてやっとフローラ王女はアランに声をかけます。

「アラン、あなたも無事で戻ってきてください。そしてアバンの事を頼みます」

「心配しなくても魔王を倒してちゃんとお姫様のところに送り届けるさ。お姫様も信じて待つてなきや駄目だからね」

「ええ、必ず魔王を打倒し、戻ってきてくれると信じています」

ここまで2人のやりとりを見せられればいくらアランだって気づきます。『あ、これアバンが勇者じゃない？』という事と『この2人相思相愛なんじゃない？』という事です。さすがに「きのうはおたのしみでしたね」を邪魔するような下世話な嗜好をしていないアランは、しばらく会えなくなる2人のためにさっさとその場から離れるのでした。

そして明朝、フローラ王女に見送られたアバンをこっそり覗き見してから合流し冒険の旅に出発しようとするアラン。しかしそこにカール王国騎士団長であるロカが現れ、

共に魔王討伐の旅に出る事を告げます。

「お前の光る剣に希望を見た！それに…モンスターと戦うのに盾になる戦士がいたほうがいいだろう？」

「ロカ…」

「確かに盾が居てくれたほうが楽だね。頑丈さは俺もよく知ってるから別にいいんじゃない？」

アランもロカとは何度も手合わせしており、その頑丈さは認めています。騎士団長がいなくなるのはカール王国としてはどうなんだろうという心配はありますが、アランは騎士団に属しているわけでもないので気にしないことにしました。

こうして3人となった魔王討伐パーティは、それぞれが自身のレベルアップを目指し旅を始めるのでした。アバンは魔王を退けた技を極めるため、ロカはそんなアバンを支え盾となるため、そして『ばふばふ』でレベル99になつて魔王を蹴散らすために…それぞれが目標を胸に秘めてカール王国を旅立ちました。

…

…

…

3人で冒険の旅に出たアランたちは、雄大な自然が多く存在するロモス王国へとやってきました。このロモス王国の城下町で聞いた話では山奥に『武術の神』と呼ばれる人物がいるらしく、幻の必殺技を現実とするためにその人物に教えを乞いたいということになったのです。

武術という事はその人物の職業は武闘家でしょうし、その中でも神様とまで呼ばれるのであれば高レベルな武闘家という事なのでしょう。今まで武闘家は見たことがなかったのでアランも噂の神様に会えるのを楽しみにしていました。

そんなロモス王国ですが、城下町での情報だけを頼りに森の奥深くへとやってきてみればモンスターがウジャウジャと湧いて出るかのように出てきます。更にどうやらこの国のモンスターはカール王国のモンスターよりも少し強いようでした。

カール王国のモンスターが特段弱いというわけではないはずなのですが、どうやらロモス王国のモンスターは豊かな自然に育まれて栄養たっぷりだからなのかサイズも大きくなっています。周囲をモンスターに囲まれながらお互い背中を合わせつつ警戒していました。

さすがにターン制バトルのように順番に攻撃しあうような事はないので、アランは後衛から攻撃呪文でモンスターを狙いアバンとロカが前衛で戦うことになっています。



スカラヤスクールト、ピオリムにバイキルトとアランの知っている補助呪文を重ねがけすれば楽に戦えるのですが、まだ呪文の契約もできていないため今回は攻撃に比重を置いて戦っています。

「おいアラン！ 攻撃ばかりしないで回復してくれよ！」

「いや、ゆっくり回復してる暇がないだろ。相手が待つてくれるんなら回復してやるけどさ」

「そりやそうか」

この世界ではホイミと唱えて即時回復とはいかないものなのか、それともアランのレベルやステータスが低いからそうなるのかわかりませんが呪文の効果が出るまでに時間がかかることがあります。そのため自分のイメージする『呪文を唱えて即効果発動』という事ができるようにしたいというのがアランの現在の目標でもあります。

「アラン、ロカ。このまま戦っていても埒が明きません。もらった地図ではもう少し進んだところに村があるはずなので、そこまで一気に突っ切りますよ」

「確かにこのままじゃジリ貧だな。よっしゃ！ 先頭は任せろ！」

「んじや突破口を開くぞ！ ベギラマ！ イオラ！」

さすがに大量のモンスターたちに囲まれては危険と判断したアバンによって村を目指すことにした一行は、アランの呪文で牽制しつつロカが退路を切り開いて走って撤退

することにしました。追ってくるモンスターたちを呪文で攻撃しては退き、少しずつ数を減らしながら村にたどり着いた時には3人は疲労困憊といった様子です。

「もう大丈夫っぽいね。とりあえず…ベホイミ…あとよろしく…」

モンスターたちが村まで襲ってこない事を確認してから地面に腰を下ろし、ひとまずアバンとロカを回復させるアラン。この村に宿屋でもあつてゆつくり休めるといいな…と思いつつ疲れ果てたアランはアバンとロカに後の事を任せてその場に寝転がってそのまま眠りに入ってしまった。

「ん…ん…なんかよく寝た気がする」

「アラン、目が覚めましたか？」

「うん、あれからどうなったんだっけ？」

地面に寝ていたはずが、起きてみればベッドの上で目覚めたアラン。どうやら建物の中にいるようで、そこには椅子に座ったアバンが剣の手入れをしていました。

状況がわからないので聞いてみると、この村の神父さんが教会の部屋を貸してくれたということです。そして神父さんのご好意に甘え、泥人形のように寝ているアランを運んでから村人たちから情報収集していたという事でした。

アバンはこの村がネイル村という名前である事、森には多くのモンスターたちが生息

している事、目的としている山奥へ行くためには通ってきた森を抜ける必要がある事などを教えてくれました。ちなみに部屋にいない口力はというと、何かお礼でもできないかという事で力仕事を手伝っているという事です。

そしてこの教会のシスターが目指す山奥までの道案内までしてくれろという事でした。いくら善意で言ってくれているとはいえ、さすがにモンスターが蔓延る森を案内させるのはどうなんだ…とアバンに言ってみたのですが、それは当然アバンも口力も思っていた事で遠慮したけれど男も含め村人の中で一番腕が立つという事でご厚意に甘えることにしたそうです。

そのシスターの名前はレイラというらしく、今は食事の用意をしてくれているという事でした。アランはぐっすり眠れたので時間の感覚が狂っていたのですが、今はもうお昼前の時間らしくちやうど良かったと言われました。

「レイラと申します。まだまだ修行中の身の上ですがよろしくお願いします」  
「こちらこそよろしくシスター。危なくなったら口力を盾にしていからね」

神父さんとレイラ、そしてアバンたちは朝食を頂きながら改めて自己紹介をしています。アランは眠ってしまったためこの2人とは初対面ですし、神父さんとレイラも眠っているアランしか見ていないのでちやうどよかったです。

アバンとロカはアランが問題を起こすとは思っていませんでしたが、アランはたまに意味不明な事を言い出すのでそれだけが心配でした。なにせ2人の主君であるフローラ王女に対してすら「次のレベルまでの経験値いくつ？」と聞くようなアランですから、初対面であるからといってそういうった面では油断できないのです。

そしてそんな心配は現実のものとなりました。

「おいアラン！おれを盾にするんじゃないやねえよ！」

「大丈夫だつて。もし死んでもちやんと神父さんのところに連れて来て生き返らせてあげるからさ」

「…え？おれ死ぬまで盾にされるの？」

「むしろロカ以外の誰がやれるのさ？」

これがアラン流のジョークだと思っているアバンは気にしていませんが、ロカは死ぬまでは大袈裟でも瀕死くらいまでなら盾にさせられるのでは…と戦慄しています。そしてなぜか死者を蘇らせる役目にされている神父さんのほうもビククリしていました。

とはいえあまりにも現実的ではない話だったので、アランが幼少期に教会でお世話になっていたと聞いていた神父さんは『きつとその時にそんな冗談を言われて真に受けて信じてしまったのかもしれない』と頭の中で必死に辻褃を合わせています。

最終的に「あれは恐らくアランの冗談ですよ」というアバンのフォローによつて神父

さんとレイラはやっと安堵することができました。補足としてアバンはアランをパーティに誘った際に同じような内容を言われていたので、今回も同じような話の流れだったという事も伝えておきました。

アバンは剣や魔法や料理に雑学と非常に多才ですが、なんとアランに対するスルースキルまで獲得していたようです。アラン以外にこんな意味不明な事を言う人間が他にいないため、このスルースキルはアラン専用スキルといってもいいでしょう。

ムードメーカーのロカと気配りのアバンがいるお陰なのか元々の村の気質なのかわかりませんが、ネイル村の人たちは突然やってきた余所者の男3人を暖かく迎え入れてくれていました。その上いくら魔王討伐のための旅をしているとはいえ道案内までしてくれるのですからとてもありがたい話です。

しかし道案内をしてくれるとはいえ、今の時間から出発しまえばすぐに日が暮れてしまいモンスターたちが凶暴になるので明日出発するという事になりました。そのため各自が村の手伝いをしたりしながら明日に向けて英気を養うのでした。

## アバンの冒険4

「…てな感じが今のところの土産話かなあ」

「まさかこんなに早く近況を教えてもらえるとは思っていませんでしたけれど、順調そうですね、どうでしたか？」

「手紙とかを届けてもらおうっていうのも良いかもしれないけどさ、やっぱり気になる相手の事だし心配もあるだろうからこうして直接話しにきたってわけさ」

その日の晩、アランは1人ルーラでカール城に戻ってきておりフローラ王女に報告してあげていたのです。ネイル村の人たちの手伝いをして夕食を取った後、それぞれが明日の準備や特訓などをしている間にアランが思いついたのはお節介でした。

アバンの帰りを待っているだけのフローラ王女が余計な心配をしないように…というアバンにとってはありがた迷惑のような事を思いついたのです。それならばアバンを連れてカール城にルーラで移動すれば良いだけでも関わらず、あえて近況だけを伝えているのは『やつぱり魔王を倒して世界に平和を取り戻してから再会したほうがドラマチックだよな』というアランの大好きな様式美の感覚のせいです。

「気になるだなんて……」

「え？王女様つてばあんな態度しておいて、実は意中の相手じゃないとか言ったら思わせぶり半端ないよ？」というか俺とは接する態度が違うんだから見てればわかると思うんだけど……気にならないんだつたらもう報告しに来なくてもいい？」

「いえ、それはこれからも引き続き聞かせてください」

謙遜なのか、それとも王女としての立場のせいなのか曖昧なフローラ王女をアランはぐいぐいと詰め寄っていきます。アバンと話している様子とアランと話している様子では明らかにフローラ王女の態度が違うのはひと目でわかる事でした。しかしこれはアランの初対面の印象もあつたのでそれは仕方のない事だったのですが……

しかし気になるか気にならないかと問われれば当然気になるフローラ王女。乙女心的にも王女という立場的にもあまり褒められた行為ではありませんでしたが、わざわざ教えてくれるものを断る理由もありません。よってこれからもアランによる『アバンの冒険』のお話は教えてもらうことにしたのです。

アランとしてもお節介でできるのはルーラで戻れる町や村に寄った時だけですし、あくまでもアランが見た主観での話をお茶を飲みながらする程度なので大して負担にもありません。アバンやロカにバレても別に構わないし……と、どうせアバンとお姫様は結婚するんだから無問題だと勝手に思っていました。

「それじゃまた来るよ。お姫様も知らない間に拐われたりしちや駄目だからね」

「ふふつ、これ以上アバンに余計な心労をかけないように気をつけますね」

ちよつと乙女成分が前面に出過ぎじゃないですかね…？と思いつながら口には出さないアランはルーラでネイル村へと戻っていききました。

…

…

…

翌日、アバンたち3人に案内人のレイラを加えた一行はモンスターたちを撃退しながら森を進んでいきます。倒しても倒しても現れるモンスターたちをそれでも倒しながら進んでいく中、1匹の亜人面樹という人形の面樹とも言えるようなモンスターが立ちほだかりました。

レイラの打撃もロカの斬撃も効かず、更にはアバンのメラゾーマでも効果が薄いという亜人面樹を相手にピンチに陥るパーティ。そしてそんな4人を前にして亜人面樹は優越感に浸りながら、オーバーキルするのが楽しいという事を語ります。

3人が相手を倒すために傷つきながらも頭を回転させる中、アランだけは違う事を考



えていました。

それはこの亜人面樹が言った内容に対して共感を覚えていたからです。亜人面樹の言う「オーバーキル」とはスライムにギガデインを使うような過剰攻撃を指すのですが、雰囲気的に言いたいのは『相手よりも遥かに強い力でもって苦戦する事なく圧倒的に勝つ』という事だと判断しました。なぜならこれこそアランが求めるものであり目指すものだったからです。

言いたい事には共感すれども「所詮は木のモンスターだし頭が悪い言葉が不自由なんだろう」と亜人面樹の評価をひっそりと下げるアラン。

未だ『ぼふぼふ』してくれる相手すら見つからないためレベル99になっていない現状とはいえども、さすがに人面樹を相手に苦戦するのは納得できないという謎の自信と『燃えないなら凍らせれば良いじゃない』という逆転の発想に至ったアランは攻撃に出る事にしました。

「燃えないのなら冷やしてやらあ！ヒヤダルコ！バギマ！もういつちよヒヤダルコ！」

「無駄さ！その程度の冷気でどうにかできるほど……何っ!？」

「今だ！アバン！」

超高温の樹液であろうと液体である以上冷やし続ければ凍り、そして動きが鈍くなります。最初のヒヤダルコでは表面しか凍らなかつたとしても、そこにバギマで表皮を剥

ぎ更に冷気を当てる事で完全に凍らせることができなくとも樹液の防御力を下げた  
きを鈍らせることになったのです。

そして動きが鈍ったところにアバンの渾身の一太刀が決まったのでした。

亜人面樹を倒したアランたちは這々の体ながらも山奥までたどり着くことができ、そ  
こにポツンとあつた山小屋に住むという老人と出会います。老人は『土ふまずぺたんこ  
病』という病に侵されているという事で、ゴホゴホと咳をしながらも4人を迎え入れて  
くれました。

しかし老人に話を聞いてみるところ武術の神様という人物の事は知らないようで、残  
念ながらアバンの当てが外れてしまったようです。しかしこのままネイル村に帰るに  
は危険なため、老人のご厚意もあり山小屋でしばらく休ませてもらうことにしたので  
す。

今回の亜人面樹との戦いによってまだまだレベルアップする必要を強く実感したア  
ランは、アバンから聞いたことのあつた魔法力の強化に取り組むことにしました。アバ  
ン曰く『呪文の威力などは魔力の強さによって決まる』という事だったので、つまり魔  
力を多く扱う事ができれば呪文の攻撃力や回復力なども上がるといふ事なのです。

アランは呪文の威力というのは誰が使っても一定だと思っていたのですが、その事を教えてもらったことよって魔力というステータスが存在することを知ったのです。これはアランの勘違いなのですが、この世界にまりよくというステータスは存在しません。しかし魔力が高いと威力も上がるという法則はあるので、結局のところ魔力の絶対量を上げるといっては間違っていないのです。

そして呪文の威力が上がればアランが目指す呪文の即時効果にも反映されると考え、アランは「ちよつと修行してくる」と言付けし1人で森に入りモンスター相手に戦いを繰り返すのでした。ロカは危険だからと一緒に行こうとしてくれていましたが、この程度を1人でどうにかできなければ裏技を使う時にできるはずもない…と無駄に強い意思を秘めたアランに断られるのでした。

「アバン、なんかスツキリとした顔してない？」

「そうですね？」

アランが森の中でモンスター相手に大立ち回りをしてしばらく…やつと戻ってきたアランを出迎えたロカとレイラでしたが、モンスターと戦っていたアランよりも山小屋にいたはずのアバンのほうが何か雰囲気が変わっていたようです。

どうやら山小屋の老人と話す事よって何かコツを掴んだらしく、更には倒したと

思っていた亜人面樹がまだ生き残っていた上にアバン1人を呼び出して襲ってきたところを返り討ちにしたということでした。倒したはずのモンスターが生きていたというのも驚きでしたが、アランは4人で苦戦しながら戦っていた相手を1人で倒せるまでにレベルアップしていたアバンに一層驚きを隠せません。

何がどうなつてそうなつたのかアランはしつこく聞き、山小屋の老人の助言があつて1つの技を完成させることができたという事を聞き出すことができました。しかしアランが「じゃあ俺も何か助言もらつてくる」と言つて老人のもとに行こうとすると止められてしまいます。「私も具体的に何かを教えてもらつたわけではありませんし、何よりこうして人里離れて生活しているのだからあまりあれこれ聞いたり詮索したりするようなものではない」というのがアバンの弁でした。

森のモンスターが凶暴化していた原因を突き止める事もできたので口力とレイラのほうも探し人については気にしているような様子はなく、アランが武術の神様に会えなかつた事について聞いてもアバン自身は「目的は果たせたのもう大丈夫」との事です。もともと武術の神様を探していたのはアバンが幻の必殺技を完成させるためのヒントを得るためなので、それがどんな形であれ求めていたものを得ることができたので良かったのでしよう。

まだ武術の神様に会いたそうなアランへその代わりというわけではありませんが、ア

バンはこの後ネイル村にレイラを送り届けた後に向かうつもり場所をアランへと告げました。そしてそれを聞いたアランは老人の助言のことなどすっかり忘れて次に向かう場所へと期待に胸を膨らませるのでした。

一行はネイル村へと戻り、村人たちに森のモンスター凶暴化の原因や対処法などを説明していきます。その対処をロモス王国の兵士たちがやるのか村人たちがやるのかはわかりませんが、少なくとも凶暴なモンスターが徘徊するという問題を減らすことはできるでしょう。喜ぶ村人たちは祝杯を上げようとし、アバンたちも少しだけという事で村の喜ばしい出来事を共に祝うことにしました。

亜人面樹との戦いでは魔力の籠もった攻撃を受けたりもしていましたが、回復呪文を阻害する暗黒闘気が込められていたわけではなかったのでアランとレイラの回復で問題なかったのです。とはいっても回復呪文で即回復というわけにはいかなかったため、アバンたちは祝杯をあげた後は早々に退席しゆっくりと休むことにしていました。

アバンが言うには「明日にでも出発しないと魔王の配下たちが私たちを狙ってこの村を襲って来ないとも限らない」という事です。そういえば何でモンスターたちって村とか町は襲わないんだろ？という疑問がアランの頭に浮かびましたが、積極的に町や村を襲う魔王軍とかが存在したらとつくに人間は滅びているかもしれません。そんな世紀

末的な世界は王道が好きなアランとしても望むところではないのです。

「……というわけで、明日にはネイル村を出発して古代遺跡を目指す事になりましたとさ」

「やはり魔王軍は手強いようですね。それでも森に潜みモンスタ―たちをより凶暴にしていた元凶を断てたのは僥幸でした。これでロモス王国も少しは持ち直せるでしょう」  
「本当にあの手のタイプは厄介だから良かったよ。まあ次があつたら今後はこつちが圧倒してみせるけどね」

ネイル村で村人たちが祝宴を開き、アバンとロカは休んでいた頃……アランはまたもやフローラ王女のもとへとやってきてアバンの冒険を聞かせています。村にいた僧侶レイラを一時的にパーティに加え襲ってきた亜人面樹との戦いなどを聞かせていたのですが、やはりそこはカール王国を束ねる王女様……勇者アバンの心配もですが海を越えた隣国ロモス王国の心配もしていました。

アランとしては戦った亜人面樹が自分と同じタイプだったので、次にやってくる時は大幅に強化されてやってくる事は想像に難くないのです。しかし次に行く古代遺跡が魔法使いにとつてとても好奇心に駆られる場所のため悲観はしていません。アバンが

言うにはその場所は現代では失われた魔法や呪法などが多く眠っており、これからも戦いを続ける中で新たな力となる事は間違いないという場所らしいのです。

「それにしても森を案内してくれる僧侶がいてくれて、更にはそんな危険な山奥に住む方からも助言をもらえるなんてとても幸運でしたね」

「俺が助言もらおうとしたら止められたけどね…なんか難病みたいだったから仕方ないね」

「私も聞いた事のない病名ですが、本当にその方は大丈夫なのかしら？」

「たぶん大丈夫なんじゃないかな？意外と元氣そうなおじいちゃんだったよ？」

「それならいいのですが…」

話を聞いたフローラ王女は他国の山奥に一人で住む老人の心配までしています。魔王軍に対抗するために病床の王に代わりカール王国騎士団を率いたり忙しいのにも関わらず、アバンの心配だけでなくそこまで気にかける王女様はとても器の大きい女性なのかもしれません。アランのようなある意味失礼な相手に対しても普通に接してくれるだけでも十分に度量の大きい人なのは間違いありませんが……

アランとしてはフローラ王女はいざアバンの伴侶となる人物だと思っているので、友人知人の将来の嫁程度にしか考えていません。むしろこれで破局なんてした日にはアランはきつとその原因が何なのか突き止めに奔走する事になるでしょう。そう思え

るくらいにアバンとフローラ王女は思い合っているようにアランには見えたのです。

アランは明日には早々に次の目的地に向けて出発しないといけないというのに……そしてフローラ王女もまた魔王軍からの襲い来るモンスタたちから臣民を守るために先頭に立つというのに、2人は気にした様子もなくおしゃべりを楽しんでいました。これを捻くれた人間が見たら深夜に逢瀬だ何だと騒ぎ立てるような光景ですが、そこにいるのは『勇者とお姫様をくつつけたいお節介賢者モドキ』と『勇者の冒険を聞いて自身も負けないよう頑張ろうと思っっているお姫様』でしかないので実際に問題になるような事はありません。

フローラ王女はそんな思いを決して表に出すような事はしませんし、カール王国の臣下たちもそんな事に勘付く事はないでしょう。アランの前でもそんな表情を見せた事はないのですが、アランは見ていたのです。アバンを見送った時のフローラ王女の切なそうな心配そうな、それでいて何かを渡して見送る健気な姿を……そんな姿を見られていたとは思ってもいないフローラ王女は澄まし顔でアランの話の話を聞いているのです。



## アバンの冒険5

アランが定例のお茶会に行きアバンとロカがネイル村で休んでいた頃、アバンの人探しに同行した僧侶レイラは悩んでいました。今までこの村で父である神父と共に教会で務めを果たしていたレイラですが、今回森を抜けて山奥までの案内とはいえ付近のモンスターだけでなく魔王軍の強敵と共に戦った事思うところがあるようです。

アバンのパーティには戦士であるロカと魔法使いっぽいアランがおり、回復呪文も扱うアランがいれば僧侶の自分がいなくても…と思う気持ちと、パーティの盾となり前線に立つロカを心配する気持ちなど複雑な心境でした。アランからは「何かあつたらロカを盾にしているから」と言われていた通り、ロカはモンスターたちと戦う際には常に一番前で敵に立ちふさがっています。

そして自分に敵の注意が向かないようにしてくれている事がわかるからこそ、そんな戦い方を続けていれば傷つく一方だという事は言うまでもない事なのでした。もちろん戦いの最中だけでなくモンスターを倒した後にはアランも回復呪文をかけてくれた

りしています。しかし攻撃呪文を多く操るアランはどちらかというと回復や補助よりも攻撃に偏っているのではというのがレイラの心配なのでした。

パーティ全体を見て敵に合わせて作戦を練るアバン、突然1人で修行したりどこかへ行ったりするけど攻撃呪文も回復呪文も操る賢者のようなアラン。その2人に比べるゝと力任せで前線に立つしかできないと語りながらも常に周囲を見ていて、村人たちさえも気さくに話しかけるムードメーカーの口力は案外人たらしな一面があるのかもしれない。

そして自分ではまだ自覚していないまでも、レイラの中に何か今までに感じた事のない感情が湧き上がっているのも事実なのでした。

まだまだ魔王軍が倒れたわけでもない、森のモンスターの凶暴化の元凶を突き止めただけ：しかしアバンたちに任せて自分たちは村を守るだけでいいのか：そんな考えがレイラの頭の中で渦巻いている中、そこにやってきたのはカール城からルーラで戻ってきたアランです。

「よつと、あれ？レイラこんなところで何やってるの？」

「アラン、あなたどこに行ってたの？」

「いやあ、ちよつと冒険のお話を聞きたい人に話してきただけだよ」

ちようどルーラの着地点にいたレイラにちよつとビックリしたアランですが、流石に

お姫様に勇者の冒険譚を話してきたとは言いません。こういうのはアバンとフローラ王女が結ばれて、生まれた子供に寝物語のように聞かせてあげるのがアランの中にある様式美なのです。そしていずれ本にして世界中に『勇者アバンの冒険』と『勇者と姫君の恋物語』を知らしめるところまでがセットなのです。

ちなみにレイラはアバンのみ『様』を付けて呼んでおり、アランとロカは呼び捨てで呼んでいます。これはロカもアランもそのように呼ばれる事を嫌ったからです。アランとしては『賢者様』とか呼ばれるのであれば気にしないのですが、さすがに自分の名前に『様』を付けられるのは違和感がすごかったので普通に呼んでくれと頼んだのでした。

そんなアランの思惑なぞ考えも及ばないレイラは深く問う事をせず、しかし少しだけアランに気持ち打ち明けてみて意見を聞く事にしました。それに対するアランの答えは簡単です。今は自分とアバンとロカの3人なわけですから、そこに回復呪文が得意な僧侶が入ってくればついに4人パーティーになるわけです。

「よし、それじゃあレイラも今からパーティーの一員だね！」

「ちよつと！なんでそうなるのよ!？」

「だってレイラはロカが心配、この村がまたモンスターに襲われるかもしれないのも心配なんですよ？だったら一緒に行つてさっさと魔王を倒すしかないじゃん」

「でも、もし私がいけない間にこの村がモンスターに襲われたら…」

思い悩むレイラですが、アランはこの話を聞いた瞬間に勘付きました。いくらアランでも『アバン様はこれから危険な旅をするから』や『アランはフラフラしてるし何を考えてるのかわからない』などと言う傍らで『ロカはちゃんと見てないとすぐに傷だらけになる』とか『人の事はよく見てるくせに自分の事には無頓着』だとか文句を言うフリをして心配しているのが丸わかりなロカ評で気付かないわけがありません。

その結果アバンとフローラ王女をくつつけようとしているアランの悪い虫が騒ぎ始め、魔王討伐の旅の帰りを待つ女性は2人いららないという身勝手な考えのもと、アランはレイラをパーティに誘うという行動に出たのです。もちろん僧侶であり共に戦える事がわかっているからこそその誘いなので、お姫様のように戦いの場に連れて行くわけにはいかないという理由があるわけでもないのも要因の1つです。

しかしまだ悩むレイラに対して、アランは1つの賭けに出ることにしました。

「まあ村が心配な気持ちもわかるよ。とはいえ俺たちも魔王を倒すって目的で旅をしてるから、もしかしたら途中で力尽きてしまう事だって有り得る事なんだよね」

「…っ！」

「もちろんそうならないように頑張るけど、俺の回復呪文だけじゃ足りないかもしれないし…どこかに一緒に戦ってくれるような心優しくて心配性で回復呪文が得意な人い

ないかなあ？できれば僧侶とかだったら言う事なしなんだけどねー」

「…そうよね。魔王を倒せばモンスターが暴れる事もなくなるし、そんな危険な相手を倒すんだからアランしか回復できないなんてダメよね」

アランと話した事で考えが固まったのか、レイラは早々に教会へと戻っていきます。それを見送ったアランですが、考えるまでもなくアバンとロカがいるのは教会なので遅れながらも同じ道を歩いて行くことにしました。

そして翌朝、村の入り口で住人に見送られるアバン、ロカ、アラン、そしてレイラ。

レイラは昨晚教会へ戻ってから父親である神父さんに自分の考えを話し、そしてアバンたちの旅に同行する事を許してもらったのです。最初は愛娘が魔王を倒す旅に出るという事に渋っていましたが、森のモンスターがより凶暴化する原因が巨大な植物であったのと同じように世界中でモンスターが暴れている元凶が魔王であるという事…そしてその魔王を取り除く事が村だけでなく世界の平和に繋がると力説されては頷かないわけにはいきません。

そしてその結果を翌朝アバンとロカに告げ、アバンからは歓迎を…そしてロカからは内に秘めた喜びをアバンに告げ口されています。アランは自分が誘った側でもあるのですが、この結果に「案外言ってみるもんだなあ」と半分他人事のように考えていま

した。

レイラがロカを特に気にしているのがわかったとしても、さすがに仲間になってくれればラッキーくらいだったのです。アバンが誘えばまた違ったかもしれないと思いつつも、余計なお節介根性が働いた結果だったのです。

少々レイラの心配を煽るような物言いをしたのは事実ですが、アランの中では誰かが力尽きても教会で生き返るし……という樂觀的な考えがあります。自身はまだザオラルも覚えていませんが、いずれはザオリクまで覚えてしまえば安心できますし、旅の途中でそのうち手に入れるであろう『せかいじゆのは』などといった蘇生アイテムだって世界のどこかにはあるはずという考えです。

村人たちから見送られ、アバンたちは次の目的地であるパプニカ王国南西部にある古代遺跡を目指します。ルーラで行ければ楽だったのですが、アランはまだパプニカ王国に行った事がなかったのもルーラでも行くことができないのでした。

ロモスの港から船に乗り、パプニカ王国があるホルキア大陸を目指します。ロモスの港ではアバンがカール王国行きの商船の乗組員にフローラ王女宛ての手紙を託したりしていました。アランはこれから訪れる古代遺跡が待ち遠しい様子を隠しません。

その脇ではロカとレイラが話していたりアバンが何やら巻物を読んでいたたりしており、各自が船旅の中で気負う事なくホルキア大陸までの海路を過ごしていました。

そうして海を越えてアバンたちが辿り着いたのは、様々な願いを叶える力があるときれながらも訪れる人が滅多にいない秘境・ヨミカイン遺跡でした。遺跡と呼ばれるだけあって周囲の建築物は崩れていたり苔や蔦だらけだったりとまさに秘境という言葉に偽りのない光景です。

そんな景色を眺めながら歩いてきた4人に、遺跡の番人と言わんばかりにモンスター群れが襲いかかってきました。人が寄り付かず朽ちた遺跡はモンスターたちにとって絶好の住処となるのか、それともこの遺跡にすることに意味があるのかバーサーカー群れが一行へと群がってきました。

そんなバーサーカーの群れを撃退し、本格的に探索するのは少し休んでからにしようという事で休息を入れる事にしたアバンたち。アランもアバンの手伝いで木の実などを集めて軽食を用意してくれる様子を見ていたのですが、レイラの言葉によって口力がない事がわかりました。

「アバン様、アラン、口力がいないわ」

「トイレじゃない?」

「…それならいくらなんでも一言くらい声をかけると思っただけだよねえ」

なぜか誰にも声をかけずにいなくなってしまった口力を探すため、3人は休憩を切り

上げて行動することにします。アランはトブルーラで空中へと移動し、高所から探すことにしました。その結果しばらく進んだ先に丸く窪んでおり、雨で水が溜まったのか小さな湖のようになっていて中央に明らかに周囲と様子が違う物体が存在していることがわかりました。

いくつもの四角いキューブを重ね合わせたかのような異様な物体を見つけたアランはそのまま戻り、そしてその話を聞いたアバンはそこが今回の目的地であるヨミカイン魔導図書館であると結論付けます。

つまりアランの本命もそこという事です。この遺跡に入るためにも仕掛けがあるようで、アバンはその仕掛けを持ち前の頭脳と知識で解き明かすことに成功しました。魔導図書館の中はその名に恥じないだけの本が所狭しと並べられており、アランはひとまずロカの搜索はアバンとレイラに任せて魔導書へと向かうことにします。

「ねえ、ロカを探すのは任せていい？ちよつと新しい呪文とか覚えてくるね！」  
「あつーアラン、待ちなさい！」

レイラが止めるのも聞かずに言うだけ言つて魔導書を探しに行つてしまうアラン。同じ建物の中にはいるんだし、自分たちはひとまずロカを探そうと落ち着いているアバン。レイラは自分だけがなぜか必死にロカを探しているという事には気付いていません。



「ここに全部が呪文書つてわけでもないのか：なんだこれ？ピオラ？そんな呪文あつたかなあ？」

そしてアランはというと、数々の本から呪文書を探しては契約してみるという行為を繰り返すことになります。中にはアランの知識にない魔法もあつたりするのですが、ひとまず契約しておけば困ることはないだろうという考えのもとでまずは契約していくのでした。

アランの頭にあつて契約していない呪文の中にはルカニやバイキルトなどといった補助呪文があるため、できれば今後のためにも契約しておきたいのです。レベルを上げて伝説の装備を整えたとしてもそれだけで圧倒できるわけではないと知っているのです。ここで更にダメ押しの一手となる呪文を覚えたいというのがアランの考えなのでした。

数々の呪文の魔導書以外にも魔力の効率的運用法や底上げのための修練法など、魅力的で様々な魔導書が図書館内のいたるところに存在しているためアランはあつちこつちと忙しくウロウロしていました。

そんな中、かなり地下深くの階層にいた突然の地響きの音と揺れがアランに襲いかかります。そして更には足元から少しずつ水が上がってきており、理由はわかりませんがこのままでは水没してしまう事は簡単に想像できてしまいます。

これらは上のほうでアバンと魔王軍の幹部が戦っていたためなのですが、道中でミイラっぽいモンスターしか見ていなかったためアランは気付かなかったのです。そして本来はいるはずのないモンスターたちのはずなのに違和感がなかったのは、こういったダンジョンっぽいところだからモンスターくらいいるだろうという先入観が仕事をしたせいでもありました。

この状況は本来ならばアバンたちに合流して脱出するのが最善です。しかしアランは先程読んだ魔導書の内容を思い出しました。そこには『水中で魔力を放出することで魔力運用の精密さを増すという修煉方法』が書かれており、つまり「この図書館は知識だけでなく実践までできる場所なのかもしれない！」という明後日の答えを弾き出したのです。

普通に鍛えるのだって空气中よりも抵抗の大きい水中のほうが効果が大きいんだから、つまるところ魔力だって同じという事か……という考えに至ったアランは既に胸元までできている水を物ともせず魔力を呪文という形にせず纏わせる事を考えつきました。

この世界には闘気を身体に纏わせて戦ったりする戦闘方法も存在するため、魔力でも出来ないことはないのでしょうか。事実として武術の神様はホイミで殴るといって技を編み出しているのです、魔力を使用した格闘術というものは周知されていないだけで存在しています。

しかし格闘戦に秀でていない非力な魔法使いが魔力を纏わせて近接戦をするという事の発想が思い浮かばないという事もあるのかもしれない。

そんな常識に囚われないアランは、この修練を乗り越えればまた一步最強への道が近づくと信じて疑っていませんでした。その結果水没する遺跡の中に取り残された形となり、新たに大魔道士の助力を得たアバンたちはロカの次はアランを探すために水没した遺跡を探索することになるのです。

「お前さんがあいつらの言ってた魔法使いのアランで間違いないみたいだな」

「……だれ？」

「アバンたちから聞いてた通りマイペースな野郎だな。オレはマトリフ…大魔道士マトリフ様だ」

水底で魔力を放出していたアランを探していたパーティー一行の中で、見つけ出したのは新しく魔王討伐の旅に加わった大魔道士マトリフでした。そのままアランを引っ張って地上まで出てきたマトリフはそのまま自己紹介と共に一緒に魔王討伐の旅をするという事を告げます。

いつの間にか新しい仲間が増えていた事に驚愕するアランでしたが、勝手に図書館に突っ走って行って魔法を契約するだけでは飽き足らず修練まで始めてしまっていたの

でアバンたちに非はまったくありません。むしろ仲間が魔王軍の幹部と戦っていたのに気付かず階下のほうで本を読み漁っていたことを咎められる立場なのです。

そんなアランはマトリフに連れられてアバンたちの待つている場所へと戻って行きました。そこには軽食を用意しているアバンたちが待つており、アバンとロカはともかくレイラは確実に怒っている様子が見て取れます。ロカも普段なら怒る側なのですが、今回ばかりは自分も迷惑をかけた側なのでそこまで強くは出れないでしょう。

「アラン！あなたどうして勝手な事ばかりするの!?今回だつてあなたがいればあそこまで……」

「まあまあ、ロカもアランもきつと反省していますからレイラもそこまでしておきましよう。ね？」

「しかしアバン様……」

どうやらアランがいなくなっていた間にレイラは随分とストレスが溜まっていたようです。マトリフに連れられたアランを見るなりお説教が始まるうとして、その様子を見たアバンに何とか宥められていました。今回突然いなくなったのはロカとアランだったので、アバンとしてもこの2人が反省しているからという事です。

しかしアランがまったく反省なんてしていない事をアバンは見抜いていました。だからこそロカの名前を出し、反省しているという言葉の前に『きつと』と付け加えてい

たのです。ロカもレイラも世話焼きの気質があるためか、たまにアランの言動に口を出す事があるので今回もその結果こうなってしまっただけでした。

「アラン、勝手にいなくなっておれが言うのも何だが、お前も同じ事やってたんだから何か新しい呪文とか使えるようになったらどうな？」

「俺を甘く見てもらっちゃ困るよロカくん。まだまだ修行が必要だけどバッチリ契約してきたさ」

ロカの問いにも自信満々の表情で答えるアラン。とても頼もしい返事ですが、アランは今の自分のレベルに満足していないのでこの魔導図書館でまだ修練をしたいという気持ちがありました。そしてちょうど良い事にこのタイミングで新しい仲間が加入したというのもアランの考えを後押しする結果となったのです。

そのためアランはパーティメンバーに「俺ちよつとしばらくここで修行するから！」という事を告げました。まだしばらくは魔王討伐の前にアバンのレベルアップが必要でしょうし、その旅に付き添うよりも一旦別れて専念したほうが良いという判断です。そこに『勇者パーティはやつぱり4人じゃなきゃね』という考えもあつたりなかつたりするのですが、各々がレベルアップを必要としているという事は今回の魔王軍の幹部と戦った事で実感していたため思つたよりもすんなりと受け入れられました。

「しばらくはここに居るから魔王と戦う前には絶対に教えてね」

「ええ、もちろんです。次に会うのを楽しみにしていますよ」

「お前がいなくても大丈夫なくらい強くなってやるさ」

「あなたのほうもサボったりしちやダメよ？」

一時の別れとはいえ湿っぽい雰囲気など全然なく、魔導図書館に残るアランを見送るパーティメンバーたちは再会を約束しています。新たな仲間となったマトリフもこの光景は好ましいものだったのか特に口を挟むこともなく見守っていました。

「マトリフ、みんなの事よろしくね！」

「ケツ、あんまり遅えとオレが魔王を倒しちまうぜ？」

「まあ頑張つて間に合わせてみせるよ」

最後にマトリフにもアバンたちをよろしく頼み、アランはそのまま魔導図書館の中へと戻っていききました。アバンたち一行はそのまま魔導図書館を後にして次の場所へと向かいます。今回の敵だった魔王軍の幹部であるガンガディアと戦った事によって、大地斬だけでは倒せないとわかったアバンは次なる必殺剣を求めて旅を続けるのでした。

## アバンの冒険6

アバンたちと別れて魔導図書館で呪文の研究や修練を繰り返しているアラン。すでに数ヶ月の月日が過ぎ去っているのですが、図書館で引きこもりのような生活を続けているアランには既にそのあたりの感覚が薄くなっていました。

アラン自身は比較対象がいなかったため自分がどこまで強くなっているのかもわかっていないのですが、既に魔力の運用という点ではかなりのレベルまで達していました。そして今まで覚えていなかった呪文たちも使用できるようになり、今や自分のイメージしている賢者という人物にとても近くなっているという手応えも感じています。

そこに久しぶりに…そして以前の別れ以来の見知った顔がやってきました。

「久しぶりだな。お前…随分とレベルアップしてみたじゃねえか」

「お…？マトリフ…てことはいよいよ魔王と戦うって事だね？」

「間違っちゃいねえが…ちつとばかし事情があつてな。まあ詳しい話は向こうで聞きな」

全員で移動するのは効率が悪いからマトリフが1人で呼びに来たようですが、しかしマトリフの話し方は決戦のための呼び出しのそれではありません。更に何か理由があるらしく、ここでは話せないから行ってから聞けという事でした。

ロカあたりが死んだかな？でもそれなら生き返らせればいいだけだしなあ……と見当外れな上に縁起でもない事を考えているアランを余所に、マトリフはアランを連れてルーラで移動していきます。既にこの修練漬けの生活で蘇生呪文も習得しているアランは、僧侶であるレイラならばオラルくらい使えるようになっていようとうと勝手に決めつけていました。

「アラン……」

「みんな久しぶりだねえ。元気そうだけど何かあったの？」

マトリフにルーラで連れられた先にはアバンたち懐かしい顔が揃っており、棺桶を引きずっているわけでもないので誰かが死んだという事もなさそうです。とはいえしばらく共に旅をした仲間に久しぶりに会うのは嬉しいものなのでお互いが笑顔で再会を喜んでいました。

そしてそこでアランが聞かされたのは……これから魔王と戦いに行く、けれどここでもパーティを解散するということ、理由はレイラ懐妊というおめでたい内容でした。これにはアランもビックリです。そしてそれは心の声そのまま口から出ていました。



「子供ができた…？いやはえーよ!!」

「アラン…？突然どうしたんです？」

「なんなのこの前仲間になつたばつかじやんなんでもう子供ができてるのさいやおめでとう元気な子供がお子さんだね名前は何ていうの？」

「アラン！しつかりしなさい！」

アランは突然聞いた内容に驚きを通り越して混乱しています。アランの脳内計画では共に旅をしている中で少しずつお互いを意識するようになり、そしてレイラの窮地を口力が救うなどで一気に恋に落ちて結ばれるというものでした。

もちろんアランがいない間にそんな急展開があつたのかもしれませんが、魔王討伐の旅の途中に戦士と僧侶が子供を作つてパーティ解散とか信じたくないという気持ちなのかもしれません。そんな結果、アバンに気付けられるまで混乱してしまつたのでした。

口力のほうは最初是一緒に行くと言つていたのですが、アバンによつてレイラを置いていく事を窺められ最後は気絶させられてしまいます。そのため離脱する仲間の代わりにと呼ばれたのがアランでした。

口力はアバンの子供の頃からの親友であり、そんな親友を一人で魔王討伐に向かわせられないと一緒に旅をしていました。そしてレイラはネイル村で出会い、村がある程度

安全になったのとロカたちを放っておけないというところから仲間になっていきます。つまり2人も魔王を倒すというよりも魔王を倒す目的のアバンたちを助ける目的で仲間になっていたため、アバンとしても子供を宿したレイラと生まれてくる子供の父親となるロカを危険な旅に巻き込みたくないという気持ちがあったのです。

その点でアランは最初に出会った時から魔王を倒す事を念頭に置いて修練などを重ねており、それは今も変わっていないさそうなのでアバンとしてもマトリフとしてもロカとレイラの代わりとして魔王と戦うのに気兼ねしない相手だったのでした。

「アラン、そういうわけで魔王を倒す旅に付き合ってもらえますか？」  
「もちろんさ。ところであの2人の事も後で聞かせてよね」

「マトリフ、あなたは……」  
「皆まで言うな。オレは約束は守る男なのさ」

改めてアバンから魔王討伐の旅への同行を頼まれ二つ返事で引き受けたアランは、それよりもロカとレイラの進展のほうに気になっていっている様子です。これはお姫様に良い土産話ができたなあ…と、魔導図書館に引きこもっていたせいであつたか、顔を出す機会のなかったフローラ王女とのお茶会の話題にしようと考えていました。

マトリフのほうも魔王を倒すまでは付き合つてやるといふ言葉を反故にする気はないようで、このまま一緒に旅を続けるという事です。

ロカとレイラをネイル村へと残し次の目的地を問うアランに、マトリフの故郷であるギュータで得た古代の秘術の事を伝えるアバン。もちろん普通に戦って倒せれば言う事はないけれど、もしそれでも倒せなかった場合に最悪でも封印する事ができるという事でした。

そしてその封印する事のできる秘術を使用できるのは数百年に1度の皆既日食である今日という事でした。しかし今のパーティーメンバーはアバンとアランとマトリフの3人です。そして今まではロカが担っていた前衛としての役割を果たせるのがアバンのみとなってしまうため、アランにとつてその点だけが懸念なのでした。

しかしここで思わぬ相手が現れます。それは以前山奥に武術の神様を探しに行った際に出会ったおじいさんがアバンたちの前に現れ、そして一緒に行ってくれるというのです。

「おじいさん病気なのに大丈夫なの？ 確か膝枕すりすり病とかいう病気なんじゃなかったっけ？」

「そんな名前の病気でしたっけ？」

「ワシって……そんなに頼りない？」

2人して病名を覚えていませんでしたが、その後アバンの説明によりこのおじいさんが武術の神様本人という事がわかります。つまりアバンは以前武術の神様の教えを受

けて技を編み出す事に成功していたのだと知ることになります。

そしてこれにより武術の神様であるプロキーナに前線での攪乱を担ってもらい、アランとマトリフが攻撃や補助・回復に至るまで対応することができ、魔王との戦いも有利に進める事ができるというのがアバンの考える布陣でした。

どうやら魔王はアランが思っていたよりも積極的に前線に出てくるタイプだったらしく、アバンの感想は本拠地で座して待つ感じでは無かったという事です。

それはつまり戦略により魔王をこちらが迎え撃つという計画を立てる事も可能という事で、アバンはパーティを解散し1人で立ち向かう事も視野に入れていたのです。そして倒せずとも封印の虜囚とすることで魔王の邪悪な波動を抑え、世界各地のモンスターたちの動きを鈍らせることもできるだろうと思っていました。

…

……

………

アバンは自らの頭脳を活かし、魔王ハドラーを誘い出す作戦は成功となります。今までは戦闘で相手の弱点などを見抜く事に使われていましたが、戦略を練るという事にお

いてもアバンの頭脳はしっかりと働いてくれたようです。周囲に人里などがない場所を決戦の地として一気に魔王を倒してしまおうという計画が見事に功を奏し、更に魔王の性格なのかアバンの交渉力なのか場所だけでなく今日この時間を指定できたという最善の結果を齎す事になりました。

今はまだ自身の最高の必殺技を習得しきれていないアバンにとつてはまさに幸運というしかありません。この日この時間でなければ全滅も有り得たのですから、人間たちの敵でありこれから倒そうとしている相手とはいえ微かな敬意を抱いていました。

「あれが魔王？」

「ええ、あれこそが私たちの倒すべき相手……魔王ハドラーです」

今まで魔王の姿を見た事がなかったアランは確認のため聞き、かつてカール城でフローラ王女を狙ってきた頃から幾度と相対してきたアバンがその質問に是と答えました。アバンは「そういえばアランは魔王を見た事がなかったのですかね」と呟いていましたが、どちらかというのアランの想像していたものと全然違っていたための言葉なのです。

実はアランは魔王の姿をバラモスで想像していました。しかし目の前にいる魔王は思っていたよりも人に近い形をしていたのです。フード付きのローブのような格好のため中身はわかりませんが、見た感じネコミミのような突起が頭の上にあるのも特徴で

した。実際にその突起は尖った耳なので間違っていないのです。しかしアランは思った以上にネコミミのためネコミミ魔王という感想しか出てきませんでした。

「アラン、わかっていていると思いますが、油断できる相手ではありませんよ」

そしてそのアバンの懸念は現実のものとなります。数では圧倒的に多いモンスターたちを率いていた魔王ハドラーに対し、こちらは4人のパーティなのですからやはり多勢に無勢の戦況へと陥ってしまいました。それでもマトリフが攻撃と回復を、アランは攻撃回復に新たに会得した補助呪文などを、ブロキーナはその補助を受け攪乱を攻撃を繰り出していきます。

次々と襲いかかってくるモンスターに負けじと4人は戦いますが、途切れる事のないモンスターの群れと背後に控えている魔王の事を考えた結果…アバンはこのままではジリ貧になると感じ次善の札を切る覚悟を決めます。

「みなさん、私が魔王を封じますので援護お願いします」

このアバンの言葉によってそれぞれがアバンが魔王に仕掛けるために動き出しました。今までは長期戦を覚悟しながら戦っていましたが、一瞬の好機を生み出すべく今までの以上に連携しモンスターたちを葬り魔王へと挑んでいきます。

「ピオリム！ スクルト！ バイキルト！ ルカナン！ …いけアバン！」

「へえ…よくそこまで覚えたもんだな！ くらえ…マヒャド！」

「ホッホッ：ワシも負けてられないねえ：閃華裂光拳っ!!」

アランとマトリフが魔王への道を切り開くと共に周囲のモンスターを寄せ付けないうように牽制し、ブロキーナがアランによる補助呪文の恩恵を活かし体術で翻弄します。そしてその活躍によりアバンは秘術である『凍れる時の秘法』を使用し、魔王と共に動かぬ身となつてしまいました。

「…どうなった?」

「魔王だけ封印されたって感じじゃなさそうだね：マトリフは何か知らないわけ?」

「オレだって使った事のない秘術だ。だが、どうやらアバンは封印に巻き込まれたと見るのが正しいだろうな」

「ふむ…見た感じアストロンのようにも見えるけど少し違うようだね」

アバンの秘術によって魔王とアバンが止まってしまい、アランもマトリフも状況が飲み込めていません。その中でいち早くブロキーナが止まっている2人に近づき触つて確かめています。そんな中で出された結論は秘術の効果はあったがアバンも同じく秘術にかかったというものでした。

この間に魔王だけでも倒せないものかとマトリフは攻撃呪文を、ブロキーナは自身の最高の技を魔王に放つてみますが何も変わっておらずまるで効果があるようには見えません。

「メラゾーマー…マヒヤド!」

「ふむ…ならば、閃華裂光拳!!」

「…やっぱり変わってないかな?」

外側からの力には何も変化が起こらない状態ですが、周囲の残っているモンスターたちが攻め立ててこないところを見るに魔王の邪悪な影響は少なくとも軽減できているようでした。そのためこの場では対策が立てられないと考えた一同はアランが修行していた魔導図書館へとアバンを連れて帰ることにし、そこでこの秘術を解除する方法がないか探すという結論に至ります。

本当はアバンが使用した『凍れる時の秘法』を解除するのに、これを覚えた場所であるギュータという案も出ました。しかしこれを聞いたマトリフから「数百年に一度しか使えない以上安易に解除できるとも思えん。それならまだ魔導図書館のほうが少なくとも得られるものがある可能性が高いだろう」と言われたため3人は動かぬ勇者を連れて魔導図書館へと向かうことになったのです。

「そうですか…アバンが魔王と…」

「今はみんなで文献を読み漁っているとところだから安易なことは言えないけど、なんとかできるように頑張ってみよう」



ひとまず魔王による脅威が去ることになったのでアランはカール王国に戻り近況だけを簡単に説明しています。もしこの秘術が正しく機能しているのであれば次にアバンが意識を取り戻すのは数百年後になってしまうため、アバンとフローラ王女が生きて再会することは不可能となるでしょう。それはアランも望むものではありません。

立場が反対であれば『目覚めぬ姫を取り戻す勇者』というドラマチックでアランもニッコリの王道展開になります。しかし今回は勇者の帰りを待つお姫様が生きて再会する可能性のない勇者を待ち続けるというバッドエンドになりかねない状況のため、これをニヤニヤと見守るようなことはできなかつたのでした。

「きつとアバンは帰ってきてくれます。それまで私たちは彼が作ってくれた時間を無為にするわけにはいきません」

「そうだね。お姫様が信じてくれてたら舞い戻るのが勇者つてやつだ。アバンの事は俺たちがなんとかするから、お姫様は成功することを祈ってよ」

それでも旗頭である魔王が動けぬ状態となったことで魔王軍の勢いが急激に鈍くなった今、失意に暮れるわけにもいかず国を立て直すことを決めるフローラ王女に力強くアランは声をかけます。そして「また来るからその時は吉報を持ってくるよ」と約束し、アランは魔導図書館へと戻るのです。

「ただいまー！」

「おう、どうだったよ王女さんのほうは？」

「ちゃんと説明してきたよ」

マトリフとブロキーナが待つ魔導図書館へと戻り、ひとまずカールでの出来事を報告したアラン。水浸しになっていいる魔導図書館の中でそれらしい文献を探すという大変な作業をしていたマトリフとブロキーナからも進展のない状況を聞かされます。

そんな中、今回の戦いで思うところのあったアランからマトリフとブロキーナに対して1つの頼み事をしたのです。

それは「自分を鍛えてくれ」というものでした。

普段ならば戦士は戦士、魔法使いは魔法使いという職業に合った戦い方をするものという考え方を持っているアランが、自分よりもかなり年配にもかかわらず軽やかにモンスターたちを翻弄するブロキーナやいくつもの呪文を同時に使いこなしているマトリフを見て「自分にも頑張ればできるのでは？」と思ったのです。

未だにダーマ神殿が見つからず転職どころが自分が何の職業なのかもわからない中、マトリフは自分で大魔道士って名乗ってるし職業にこだわるのはやめようとなった瞬間でした。各々が魔王との戦いの結末に思うところがあつたマトリフとブロキーナはこれを承諾し、そしてこれによりアラン魔改造計画がアバン復活計画と平行して行われ

ることになったのです。

そこからはまさに地獄の特訓という言葉が似合うほどの修練の日々が始まりました。

いくつもの月日が流れ、進まないアバンの復活とは裏腹に体術や知識を深めていくアランたち。そんな特訓の成果はアランだけでなくマトリフにまで及んでいました。魔王との結末に悔いを残す形となったマトリフはアランへの修行だけでなく、今もまだ動けぬ魔王を葬り去るために新たな呪文を開発していたのです。

その結果できあがった究極の呪文もまたアランに受け継がれることになり、僧侶と魔法使いの魔法を使いこなし武闘家の武術までも吸収した武闘派の賢者が誕生することになったのです。武神流とされるプロキーナから閃華裂光拳を教えられ、本来はホイミで相手の細胞を崩壊させる技を自分で昇華させたアラン。他の呪文を使えるアランが使う事で閃華裂光拳は更に破壊力を増した技となりました。

## アバンの冒険7

魔王と勇者が時の封印に取り込まれて1年となった頃…事態は急展開を迎えることになりました。

今までどれだけ試行錯誤しても反応のなかったアバンの秘術が急に解けたのです。これには魚を焼いていたブロキーナも、魔法による組手を行っていたアランとマトリフもビックリです。

「アバンー！」

「……はっ？」

当然の事ながらアバンの時間は魔王に秘術を使用した時点で止まっているので状況がわかりません。しかし周囲に魔王たちがおらず、見渡せば覚えのある遺跡があり共に魔王に挑んだ仲間たちがいることからおおよその事は察することができたのです。

「皆さん、すみませんでした。この秘術を使うには私のレベルが足りていなかったようです」

「お前が謝るのはそこじゃねえだろ」

「ホツホツ、今回はレベルが足りなかった事を良しとしようじゃないか」

アバンの復活は喜ばしい事です。しかしアバンの秘術が解けたという事は、つまり魔王のほうの秘術も解けたと見るのが当然でしょう。アバンだけでなく全員が共通してその見解に至っており、そして次は魔王を倒しきつてみせると決意するのです。

秘術によって時間の止まっていたアバンはまさしくタイムスリップしたような状況なので体調などの問題もなく、意識だけが未来に飛んだと言える状態のため冒険に支障もありません。アランもマトリフもプロキーナも修行に関してほぼ完了したと言えるところまで進んでいたため、むしろレベルアップしてないのがアバンだけでも言える状態でした。

「アラン、まさかここまでレベルアップしているとは思いませんでしたよ」

「そりゃアバンが固まつてる間にもものすごく頑張ったからね。魔王を倒して終わりじゃないんだし、まだまだレベル上げておかないとね」

「頼もしいことです。しかし私も負けていられませぬええ」

魔王と対峙した時点との比較を含めてアバンとアランが軽く模擬戦を行ったのですが、結果はアランの圧勝でした。まだストラッシュが完成しておらず数百年に一度の皆既日食を保険に魔王に挑んだアバンと、そこから1年ほどの間ずっと地獄の修行に挑ん

でいたアランとの差が明確に出ていたのです。

アバンもまさか賢者として呪文を使っていたはずのアランが武闘家のように突っ込んでくるとは思ってもいませんでした。軽々とした身のこなしで攻撃を避け相手を翻弄しつつ、拳を当てながら呪文まで使われることの厄介さを身をもって体験したのです。呪文の威力が上がっていると詠唱や発動までの速度が上がっているといった予想をしていたアバンにとってはかなり驚かされる結果となりました。

アランのほうも魔王と戦った時点のアバンに簡単に勝てた事が自信となり、この戦い方が効果的であるという確信を持つことができたのでとても有意義なものでした。そして今回は補助呪文なしで戦っていたので、ここに呪文の力を上乘せれば十分な成果を得られるという事は考えるまでもなくわかる事なのです。

再び魔王討伐の旅へと出たアバンたち一行。途中アバンは遂に必殺剣を完成させる最後のピースである空の技を会得するに至ります。これによって大地を斬り、海を斬り、空を斬る技を手に入れたアバンは魔王と初めて対峙したあの日の幻の必殺技を手に入れたのでした。

そして数々の魔王軍やその幹部たちとの激戦を経て、アバンはその必殺技で魔王ハドラーを倒す事に成功したのです。

魔王へと続く扉の前には番人のようなホネなどいましたが、手が複数ある程度のホネに手こずるようなアバンたちではありません。そんなホネにトドメを刺そうとするアランが止められるという場面もあつたり、更にはホネなのに人間の子供を育てているから後を任せたと子供を託されるような事態もありましたが魔王は倒されました。

ちなみに人間の子供を任されても困ると考えていたのはアランです。勇者の帰還を心待ちにしているお姫様に向かつて子供連れで帰ったらダメじゃね？などと考えていました。あのおおらかなお姫様が「その子は誰の子よ!?」などと取り乱すことはないと思いたいですが、かといってこれから始まる甘い新婚生活なのに既に子供がいるのもなあ：などと明後日の方向に、しかも勝手に悩んでいたアランなのでした。

魔王討伐の報は瞬く間に世界中に響き渡り、そしてカール城においても喜びの声が街中で溢れています。ブロキーナは既にロモスの山奥へと帰り、マトリフも柄じゃないからと言ってパプニカへと帰っていききました。

カール城へはアバンが1人で向かう事になっており、アランはホネに託された子供であるヒュンケルという少年を連れて城下をウロウロしています。お姫様との感動の対面なのでさり気なく気を使つたつもりのアランは自己満足に酔いしれながら珍しい物

を見るようなヒュンケルを案内していました。

しかしヒュンケルの心の中には育ての父を失った事と、その父を倒したのが勇者であるアバンという考えが心を蝕んでいました。そこでヒュンケルは一緒にいたであろうアランに聞き、その考えを確信に変えようと思つたのです。実際はアバンは倒しておらず、またトドメを刺そうとしたアランを止めた功労者でもあるのですが見てないヒュンケルにはわかりません。

「おい」

「おいじゃない。アランと呼べ」

「…アラン。父さんを…地獄の騎士バルトスを倒したのはアバンだよな？」

「お前を託したあいつの事を言ってるなら違うぞ？」

「じゃあ誰が父さんを殺したっていうんだ!!」

ヒュンケルの問いに対しアバンではないと答えるアラン。流石にここでホネとは呼ばないのは子供に配慮したからでしょうか。しかし誰が殺したと問われてもアランにもわかりません。少なくともアランたちがいる間はあのホネは生きていたのです。

魔王はアバンが倒したから違うとしても、自分たちだつてトドメは刺してない…なのにヒュンケルはあのホネが殺されたと言っている。つまり密室殺人というわけです。冒険してモンスターを倒して世界がひとまず平和になったというのに、ここにきて殺モ



ンスター事件が発生するとは思いませんでした。

アバンであればこの事件を解決できるかもしれませんが、賢者といっても賢いわけではないアランにはこの事件は難解すぎました。そのためアランは自身の頭脳をフル回転させて出した答えをヒュンケルに告げることになります。

「ヒュンケル…この答えを聞いてどうするつもりだ？」

「決まってるだろ！父さんの仇を討つんだ！」

「それが…大魔王でもか？」

「……は？」

アランの導き出した答え…犯人は大魔王という言葉聞いて理解が追いつかないヒュンケル。魔王の存在は知っていましたが、大魔王などという存在は聞いた事もないので当然でしょう。しかもなぜ大魔王が地獄の騎士を倒す必要があるのかもまったくわかりません。

しかしアランはなぜ大魔王が犯人なのかをヒュンケルに説明していきます。まるで大魔王をさもよく知っているかのように…そして遠くない将来この大魔王と戦うことになるという予言のような確信を持った言い分に子供のヒュンケルはなぜか納得してしまいました。

「お前の父の仇は俺たちが討ってやるから…」

「嫌だ！父さんの仇の大魔王はオレが倒してやる！」

「ヒュンケル……」

もはやアバンの事など忘れ、大魔王に憎悪の念を燃やすヒュンケルにアランも困り顔でどうしたもんかと悩むことになりました。子連れで旅をするには危険が大きすぎますし、アランもいつまでも面倒を見るわけにもいきません。かといってアバンやフロラ王女をお願いするのは気が引けるので、できれば大人しくしてほしいのが本音なのです。

ここに口力がいれば修行だとか言つて鍛えさせるといふ名目で押し付ける事も可能なのですが、残念な事に口力はネイル村でレイラと暮らしており騎士団復帰も辞退しているため頼めません。魔王討伐の宿願が叶った際にネイル村にも報告に行つていたのですが、その時には口力は生まれたての娘を溺愛しており親馬鹿を発症していたために立たなそうなのでした。

しかしアランとしても子育てをしながら旅をする余裕はありません。アランの予定では、これから大魔王を倒すための準備で世界中を巡るつもりなのです。魔王がバラモスではなくハドラーだったことから、大魔王がゾーマではない別の何かな可能性もあります。しかし古今東西大魔王を倒すためのキーアイテムは存在するはずだという考えのもと、ひとまず竜王に関連するものなどを求めて探し歩くつもりだったのでした。

「……というわけで、ヒュンケルをどうしたらいいと思う？」

結局答えの出せなかったアランは、困ったときの頭脳としてアバンに相談することにしました。もちろんそこにはフローラ王女もおり、当の本人であるヒュンケルは騎士団の特訓に参加させています。

ちなみに魔王を倒し世界に平和を取り戻した勇者アバンの名前はもちろんのこと、その仲間として賢者アランの名前もまた世界中に勇名として響き渡っていたのです。そのおかげでかつてあった騎士団とのいざこざなども解消され、更にフローラ王女とも仲良く話しているところを見られているので子供を騎士団の訓練に参加させてくれという頼みを聞いてもらうのも問題なかったのです。

アランからの相談内容を聞き、アバンとしても一緒に旅に出るつもりだったので自分もいるからとヒュンケルを連れて行くことを提案してみたのですが……ここで『待った』がかかりました。しかしそれはフローラ王女ではなくアランからです。

「なんでアバンが旅に出ることになってるの？お姫様ごんだけ心配して待ってたと思ってるの？これから甘い時間が始まるのを期待してたのになんで？」

「アランは何を期待しているんですか……あなたが次の戦いを予期し準備を整えるというのなら、仲間である私も座して待つわけにはいきませんよ」

「今は魔王を倒して次の戦いまでの休息期間なんだから座して待つてよ……」

結局のところ話は平行線を辿り、お互いに納得のいく結論には至りません。アランとしてはあるかわからない『ひかりのたま』的なアイテムを探すだけなので子連れでなければそこまで大変な旅ではないと思っていますが、アバンとしては仲間が次の戦いのために旅を続けるというのに自分は何もしないというわけにはいきません。

助け舟と思いフローラ王女に話を振ってみても、王女は王女で良い女すぎてアバンの意見を尊重する構えのためアランの味方になってくれなさそうな空気でした。

しかしそこでアランの頭に天啓のごとき考えが浮かび上がります。

それは『もしかして実はアバンがオルテガ梓なのでは……?』というものです。アバンが当代の勇者であり、想い人のお姫様がいて魔王を無事倒した……ここまではいい。大魔王とこれから戦うとして、もしかしたら大魔王を倒すのはアバンの子供なのでは? などと考えついたのです。

アバンは剣のほうは必殺技を編み出していたりしますし、呪文のほうも回復や攻撃だけでなくアストロンやドラゴラムなどを含め操ることができる万能型です。そしてフローラ王女もまたただのか弱いお姫様ではなく多様な呪文を操ることができ、国だけでなく戦う騎士団の先頭に立って導くだけのカリスマと実力も持っています。

魔王を倒した勇者とそんなお姫様の恋物語によって生まれた子供……そしてそんな子

供を残して逝く無念の最後を見届け、その意思を継ぎ父の仇である大魔王を倒す…お姫様が拐われてないのは少々気に入らないけれど、アランの大好きな王道的な光景が脳内で展開されたのです。

そして魔王を倒した勇者と姫の子供である新しい勇者の仲間にはかつての仲間であつた戦士ロカと僧侶レイラの子供を入れ、大魔王に復讐の炎を燃やすヒュンケルを入れ、そんな子供たちの師匠ポジションの賢者である自分の姿。その頃には念願だつた『ぱいぱい』によつてレベルも99になり、マトリフではないけれど勝手に大賢者とか名乗つて戦う自分の姿…

その妄想の通りになるとアバンが子供の前で力尽きることになつてしまふのですが、一緒に旅をしてきたアランはそこまで薄情ではないので後で蘇生させてあげるつもりです。机上の空論と取らぬ狸の皮算用を足したような妄想と空想と願望を混ぜたその光景を思い浮かべたアランは、それを現実のものとするべくある提案を打ち出すことにします。

「わかつた。それじゃあこうしよう。アバンとお姫様との間に子供ができれば旅に出よう」

「どうしてそうなるのですかっ!？」

「あら…」

アバンとしてはアランから出された提案の意味がわかりませんでした。アランは今も『お姫様』と呼んではいますが、実際のところフローラ女王は既に即位し『女王』となつて居るのです。魔王が打倒された今、それぞれの国が復興していかないといけない状況でアバンとしては自分がいることでフローラ女王の政務に差し障りが出ることを懸念していたのです。

そういつた事も一つの要素だった事もありアランの旅に帯同するつもりだったのに、そんな中で出された提案が「子供を作つてから旅に出よう」など言語道断です。なぜそんな行きずりのような事をしないといけないのか…や、フローラ様には女王として相応しい方を…などという思いからその胸の内をふわつと伝えていくアバン。

なおそれを聞いて居るアランのほうは引く気はまったくありませんでした。最後のほうは「いつその事この国を俺が滅ぼして亡国の姫にしまえば…」などと物騒な事を考えていたりもします。そんなアラン魔王化計画をなかつた事にし、カール王国の存亡の危機を救つたのは女王となったフローラでした。

「アバン、あなたの懸念は理解できます。しかしまだ何も起こっていない懸念で旅立てては、私のこの想いはどうしたらいいのですか？」

「フローラ様…しかし…」

「それに…これ以上正直に言つてくださらないとこの場に魔王が誕生してしまいますよ

？」

「はい……？」

フローラ女王とアランのお茶会はそう数が多いわけではありません。しかし元より国政に関わり国を導く立場のフローラ女王はアランという人物を正しく理解していません。絵本やおとぎ話に読まれるようなものを好み、弱きを助け悪を挫くという展開などが大好きなアラン……旅に出ているはずなのに戻ってきては勇者の冒険を聞かせるだけでなく、共に旅立った戦士ロカと僧侶レイラの話など恋模様も多く聞かされています。

フローラ女王は立場上自分のその思いを打ち明けた事はありませんが、誰も気付いていなかった思いをアランに気づかれていたのは間違いありません。そうでなければアバンとの間に子供を作れなどと言うはずもないからです。

そして煮え切らない態度のアバンを見かねてフローラ女王のほうから確かめることにしたのでした。アランという第三者がのりくり避けてやうとするアバンの抑止となってくれている今こそ最大の好機なのです。

その結果アバンは遂に折れてしまいました。

もとより憎からず想っていた相手なわけですし、更には女性にそこまで言わせてしまつては立つ瀬がありません。そのためアバンも覚悟を決めました。アバンの懸念については「勇者と女王が結ばれたほうが余計な心配をせずに済むよ。むしろバラバラのほうがマズインじゃない？」というアランの言葉も後押しになったようです。

こうしてカール王国では魔王討伐に合わせ、フローラ女王の結婚という二重におめでたい朗報が国内を走りました。

国民たちは勇者と姫の結婚を皆喜び祝い、更にそれに合わせてどこからか『勇者とお姫様の物語』というやけに具体的な内容が書かれた本が出回るようになります。

美しい姫が魔王の手に落ちようとしていたその時、1人の青年が颯爽と現れ魔王を撃退する。そして世界に平和を取り戻さんと旅にでる青年と秘めたる想いを胸に抱き見送る姫。そこには1つの約束があつた。様々な冒険を乗り越え、遂に青年は魔王を倒し姫のもとへと帰ってくる。そして約束の通り想いの通じ合った2人は末永く幸せに暮らしましたとき。

そのような概要を聞いたアバンとフローラ女王は誰が書いたのかすぐに思い当たりましたが、お互いに顔を見合わせて苦笑するだけでした。



# アランの冒険1

「ここがテラン王国…？国ってどうか村？」

現在アランがやってきたのはテラン王国というカール王国の東側に位置する小国でした。王国とはいっても国民は百人にも満たない人数しかいないらしく、ある意味とても長閑な…しかしモンスターとかやってきたらどうするんだろう？というような場所でした。

今回アランがこの国にやってきたのは理由があります。本来ならば魔王討伐の功績として重臣の1人に迎え入れられてもおかしくないアランだったのですが、本人にその気がまったくなかつたため『ただの大賢者』というよくわからない肩書を名乗って過ごしていました。

魔王討伐だけではなくアバンとフローラ女王の結婚による幸せムードでまだまだ王国全体が賑わっている中、しばらく後に更にはフローラ女王懐妊という更におめでたいイベントまで発生しカール王国はそれまでの魔王軍の侵攻という物理的、精神的抑圧をバネにするかのように爆発的な盛り上がりを見せていました。

それだけであれば賑やかでとても良い事なのですが、それは同時にアランにとってはとても面倒な事態にもなっていたのです。

面倒な事態：それは魔王を討伐し平和な世界を取り戻した勇者パーティの一員という事でお見合い話が数多くやってきたためでした。勇者はお姫様と幸せな結末を迎えた中、そこに残るのは勇者と共に戦った賢者のみ：魔王の討伐前から女王の覚えも良くまるで友人のように接する姿は何度も重臣たちから苦言を投げられていたのにです。

しかしそこに世界を危機に陥れていた邪悪な魔王を倒したという箔が付いてしまい、まさに国内の政務に関わる貴族連中には格好の的となってしまうたのでした。「孫の婿に：」「娘を嫁に：」などと言われる毎日はアランにとって苦痛以外の何者でもなく、毎晩アバンとフローラ女王に愚痴を言うのが恒例行事となってしまうたほどなのです。

「ねえ、お姫様からも言っつてよ。俺は別にあいつらの孫とか娘とかいらんだけど：」「こちらにもたまに話が上がってきていますね。『賢者殿も偉業を成し遂げたのだから、そろそろこの国に根を下ろしてはどうか』ですって」

「もう十分に根付いてない？お城で寝起きしてるし、たまにヒュンケルの面倒も見てるしや」

アランはレベルアップのために『ばふばふ』したいという願望はありますが、普通の結婚をするなんてつもりはまったくありません。そしてお姫様とのラブロマンスをア

バンとフローラ女王がやっており、ロカとレイラは仲間内での恋を成就させています。そこに普通に権力目当ての見合いとか持って来られても興味が沸かず、結果として自分の結婚となると後ろ向きな姿勢なのでした。アラン本人が消極的な態度を取っている事がわかれば、臣下たちは次は結婚したてのアバンとフローラ女王へと話を持っていきます。アバンとフローラ女王も新婚なので、この2人から説得されればアランも納得せざるを得ないだろうという考えからでした。

ちなみにパプニカ王国にいるマトリフも縁談ではありませんが似たような事になっており、どこの国の大臣も勇者一行を自国に取り込もうという魂胆は同じなのでしよう。

大臣たちからそんな相談をされたアバンとフローラ女王ですが、2人ともアランの為人をよく知っているので大臣たちの話を承諾する事はありません。「自国に勇者と賢者がいるとなれば我が国も……」などと言われても、そういった事を懸念材料にしていた2人からしてみれば「やっぱり……」といった状態でしかなかったのです。

このままでは余計な軋轢が生まれてしまうと懸念したアバンは、早い段階から各国の復興や連携強化や様子見を名目としてアランをそれぞれの国に行かせることでそういった接触を抑えることにしました。行った事のある国や町ならばルーラでひとつ飛びますが、まだまだ訪れた事のない場所が多かったため陸路や海路を利用して移動する

必要があったのでちようど良かったのです。

魔王討伐後から比較的すぐに始まったそれは地底魔城のあったパプニカから始まりアルキード、ロモス、ベンガーナと続き次はテラン王国へと行く予定になっています。それぞれの国で勇者の冒険を語って聞かせたり、自筆した『勇者とお姫様の恋物語』を配ったりしながら各国を渡り歩いていました。

その間にカール王国へ戻ってきては生まれたばかりでシンシアと名付けられたアバンとフローラ女王の子供を存分に可愛がったり世話をしたりしており、国巡りとシンシア王女を可愛がっているうちに気がつけば2年ほどの月日が流れていました。カール王国に滞在中はずっと乳母の代わりにアランが面倒を見ていたため、周囲から案外良い父親になるんじゃないかと思われた事で更にお見合い話が加速したりもしましたが平穏な日々を過ごしていました。

しかしそんなアランによる子育て支援も国の復興や安定によってアバンたちが落ちてくことで一段落することになります。そしてアバンから「テラン王国は竜にまつわる古くからの伝承を残し伝える国」ということを聞いていたためアランは若干の期待を抱きながら次の目的地であるテラン王国まで1人向かっているのです。

ロモス王国へと向かった際にはついでにアバンの結婚や子供が生まれたという朗報を知らせてやろうとネイル村を訪れたのですが、そこにはデレデレと愛娘のマアムを相

変わらず溺愛する口力がいました。

その様子がなんとなくイラツとしたため、トベルーラでマアムと一緒に空の散歩をして可愛がりながら「パパ嫌い。パパ嫌い」と暗示のようにマアムに呟く姿は大賢者とは程遠いものです。そんな事は露知らず口力はハラハラして見ていましたが、マアムは空の散歩が気に入ったのか笑っていたので問題など何もありません。このあたりの肝っ玉は母親のレイラ似なのでしょう。

そんなネイル村での出来事は置いておいて、今回やってきたテラン王国は侵略された形跡などなく平和な様子でした。どこの国も魔王軍による侵略で多かれ少なかれ被害が出ていたというのにです。もしかしたら地上を支配下に置きたい魔王軍から見れば村にしか見えないこの国は優先度の低い国だったのかもしれない。

湖の畔できれいな景色に心が洗われている様子を誰も咎めることもなく、静かなこの場所はアランの中でお気に入り場所として登録されました。そしてそんな景色を眺めながら、頭の中でこれからの事を考えていました。

まずギアガの大穴を探す…これがアランの目標です。地下世界まで続いている大穴を見つける事ができれば余計な時間をかけなくて済みます。そしてこの世界にはトベルーラという便利な呪文があつたので、不死鳥ラーミアを蘇らせなくても移動することができます。

そしてギアガの大穴を見つけることができたのなら、次はいよいよ竜の女王を探してひかりのたまをもらおう事になります。これがあるのとないのとは戦闘の難易度がまったく違ってくるため、大魔王を相手に圧倒的なまでの力の差で翻弄するという目標が果たせないかもしれません。大魔王の闇の衣を取り去るためにもこのアイテムだけは欠かせないのです。

湖の景色を十分に堪能し目標を反芻したアランは情報を得るために城へと移動することにしたのですが、そこに赤ん坊を抱いた女性がやってきました。

「あら、もしかしてアラン様ですか？」

「ん？もしかして……ソアラちゃん？」

「ええ、以前城内でお会いして以来ですわね」

その女性はアルキードに行った際に出会ったソアラ王女だったのです。アルキード王に謁見した際に同席しており、また勇者とお姫様の物語を聞かせたときには目を輝かせていた王女様がなぜか子供を抱いてテラン王国にいました。

なぜこんな場所にいるのかを聞いてみたところ、なんとこの王女様はある男性と駆け落ちして国を出てきたという事でした。元々アグレッシブな性格なのかアランから聞かされたラブストーリーに感化されたのかわかりませんが、今はここテラン王国の森深くにある場所で息子であるディーノくんと3人で暮らしているということです。

相手の事も聞いてみれば何やら騎士っぽいようで、アランの脳内には騎士と姫の淡い恋物語が再生されました。きつと相手は騎士と言っても姫に釣り合うような地位ではないのでしょうか。もしかしたらソアラ姫に別の相手との結婚の話でも出てしまい、諦めようとしたけれどそれでも惹かれ合う2人は手と手を取り合つて愛の逃避行に及んだのかもしれない。

これにはアランも感動を禁じ得ませんでした。

政略結婚のために望まぬ相手との婚姻を強いられ、その胸に抱いていた仄かな恋心を忘れようとする姿…それでも消えてくれない意中の相手への想い。そして相手の騎士も守るべき姫に対して忠誠以上に溢れる感情に戸惑いながらも許されない想いを抱える葛藤。

なんとか政略結婚を破断か引き伸ばしにしようとするも叶わず…権力に翻弄されるそんな中で2人は決意したのでしよう。国を捨てて愛する人と一緒になることを…そしてこの森深い場所で末永く寂しくも幸せに暮らすのでしよう。

そんな恋物語が頭の中で展開され、感動したアランは勝手に恋の魔法使いとして一肌脱ぐことを決意しました。

「ソアラちゃん。話は全部理解した。この俺が来た以上、君たちはもう何も心配する必要はないんだ」

「はい……？」

「君と旦那さんとディーノくんの3人でカール王国へ行こう。思ったら善は急げだ。君の旦那さんは今どこにいるんだい？」

「え？…え？」

あまりにも急な展開についていけないソアラ姫ですが、アランの勢いに飲まれたからかひとまず自分たちが今住んでいる場所へと案内することになりました。そこには口ひげを生やしたザンバラ頭の男性がおり、最初こそ警戒されてしまいましたがソアラ姫の取りなしで事なきを得ました。

バランと名乗るその男性はあまり口数が多くないようで、きつとこういったタイプは出世には向かないんだろうなというのがアランの印象でした。カール王国でも重臣たちは多弁な人間ばかりで寡黙なのは見たことがなかったたので間違いないでしょう。

アランは自分が魔王を討伐した勇者の仲間であることやソアラ姫と面識があること、そしてカール王国へ招待することをバランに告げます。

「なぜ私たちを連れて行く必要がある？お前には何もメリットがないはずだ」

「メリットだけで人が動くと思つたら間違いだよ、バラン。俺くらいになると見たい物を見るためにお節介を焼くなんて朝飯前なのさ」

訝しみなかなか信用してくれないバランですが、ここからアランの減らず口の真骨



頂なのです。

駆け落ちしたという事は周囲に頼れる者など皆無な事は言うまでもなく、これからもずっと人里離れて暮らして行くわけにはいきません。そしてこれから育つていく子供に友達の一人もいないというのも教育にも良くありませんし、何よりも寂しいものです。

しかし何ということでしょう。カール王国に来ることによってソアラ姫は国家間のやり取りの中で知己となつたフローラ女王というママ友を得る事ができるのです。そしてフローラ女王にはシンシア女王という2歳の女の子がおり、ディーノくんにとって共に成長していける幼馴染を得る事にもなります。

環境も森の中の民家から王城へと移ることで衣食住が確保され、更にアルキード側から見れば出奔し連れ戻したいであろうソアラ姫を安易に手を出す事ができない他国の城という場所へと匿うことにもなるのです。

このアランの営業トーク的な勧誘にはバランスも否定することができませんでした。アランが言つた事が的確すぎて、そしてそれらは自分たちだけでは改善することが難しかった問題でもあつたのです。かなりこの勧誘に傾いているバランスでしたが、最後にアランへと真意を尋ねることにしました。

「お前の言うことは理解した。それで、お前は私に何をさせるつもりだ？」

バランは竜の騎士という神々が作り上げた戦士であり、自身の持つ力の大きさをきちんと理解しています。そんなバランに対して妻であるソアラ姫と息子ディーノくんへの平穩の提供など下心があるとは思えません。しかしアランから返ってきた答えは予想を大きく外れたものでした。

「バランはあれだよ。確か騎士なんだからソアラちゃんとディーノくんを守ることだけ考えればいいと思うよ。もう魔王は倒したし、残ってる大魔王は俺たちが倒すから何も心配する必要もないしね」

「大魔王と戦うだと？相手の強さを理解して言っているのか？」

「これでも魔王を倒した身だよ？きつとその魔王なんて子供程度にしか思えないくらいの力があることなんて承知の上さ」

これにはバランのほうが衝撃を受けました。魔王ハドラーが地上を席卷している頃、バランは魔界にて冥竜王ヴェルザーと戦っており瀕死の重症を負いながらその魂を封じる事に成功したのです。そしてそれほどの力を持つ冥竜王と広大な魔界を二分すると言われる大魔王を倒そうとする人間が存在するなどと思いませんでした。それどころか魔界の大魔王の存在を知っている事すら驚きなのです。

思案の果てにバランは突然やってきたはずのアランの話を受けることにしました。これにはソアラ姫も乗り気になっていた事も大きく背中を押した形です。ソアラ姫と

フローラ女王はカールとアルキードの会合などの際に女性同士で話すことも多かったらしく、もう会うことも叶わないと思っただけに降って訪れた機会に喜びを隠せませんでした。

こうして駆け落ちした姫君と騎士を助けるといふ恋の魔法使い作戦は成功し、アランは準備の整った3人を連れてカール王国へとルーラで戻るのでした。

## アランの冒険2

ソアラ姫一家を連れてカール城へと戻ってきたアランは、迎えてくれたアバンとフローラ女王の私室で事の次第を説明していました。

なお、ここで説明している内容は事実ではなくアランが勝手に考えた『姫と騎士の恋物語』のほうなのはどうでもありません。壮大に語られるソアラ姫と騎士バランの物語は感動を禁じえない良い出来だったのです。

そして普段なら話半分で聞いている2人なのですが、前例として『勇者とお姫様の恋物語』を知っているだけに今回は信じてしまいました。実際にはバランの力やソアラの夫という立場に対する嫉妬などによって自分たちの利己的な理由で大臣が魔物の疑いをかけたのですが、それを訂正する者は現在ここにはいません。

更にアランの言う政略結婚させられそうになつて駆け落ちしたのも、バランが現れた事で地位を危ぶんだ大臣から「あいつは魔物かもしれない」と言われ危険視され駆け落ちした事実もそう大きくは変わらないので結果的には何も問題ないのです。

「…というわけでソアラちゃんたちを連れてきたんだけど、何か質問とかある？」

「場合によつてはアルキード側から正式な形でソアラ姫たちを返せと言つてくるかもしれませんがねえ：何も知らせないというわけにもいきませんし、一応この国で預かつているという報せだけは送つておきましょう」

「なんか文句言つてきたらそこはアバンの腕の見せどころじゃない？ まああんまりしつこいようだったら俺が直接お話しに行くけどさ」

本来ならば他国の姫を拐つてきたと言われても仕方のない事をしてはいるのですが、アランのほうはアルキードが何かを言つてきてもアバンに丸投げするつもりです。アバンのほうもそうなるだろう事は未来視レベルで予想できているので特に動揺したりもしません。

そしてフローラ女王のほうもソアラ姫の境遇に心を痛め、自身の現在が幸せな事を考えソアラ姫を助ける事に躊躇などしませんでした。本来は国家間の問題に発展する可能性もあるため心もですが頭も痛めるような事態のはずが、自身の両隣には夫であるアバンと友人であるアランがいるためとても心強いのです。

「アラン、国家間の折衝などはこちらでやつておきます。それでソアラ姫たちは今どこに？」

「今はシンシアちゃんと一緒に遊んでくれてるよ。ちよつと呼んでくるね」

そうして別室にて待ちながらシンシア王女の面倒も見えてくれたソアラ姫とバラ

ンを呼びに行き、代わりにシンシア王女とディーノくんをアランが面倒を見ながら待つことになりました。

「バラン、ソアラちゃん。事情は説明してあるからお姫様たちとお話してくるといいよ。シンシアちゃんとディーノくんは俺が見てるからさ」

「あらー！」

「シンシアちゃん惜しいなあ…あらー…ん！」

ディーノくんを抱き、シンシアちゃんを膝に乗せて胡座の状態でゆつくりとトベルラ移動するのが最近のマイブームなのです。子供にとってはふよふよ浮いているのが楽しいのか、シンシアちゃんやママムには受けが良いのでアランも子守の時は率先して利用する移動手段なのでした。

アランがふよふよと浮きながら子供たちをあやしている頃、ソアラ姫とバランはアバンとフローラ女王とこれからの事を話していました。と言ってもこれに関しては話す事はそう多くなく「本当にいいのか」といった確認があった程度で後は世間話となっています。普通の会話であればこの状況は重苦しくなる状況だったでしょうが、アバンというムードメーカーがあるので和やかな雰囲気では進んでいきました。

ソアラ姫は現時点でアルキード王国にとって一人しかいない跡継ぎであり、立場的に

はかつてのフローラ女王と同じ位置にいます。つまりアルキード王国に新しい子が生まれ限り次期女王なのです。そのため本来ならばカール王国としてはすぐに送り返すのが正しいとわかつていながら、すべてを投げ出し愛する人と一緒に生きるという選択をしたソアラ姫の幸せを奪うような真似をアバンもフローラ女王もしませんでした。

当然ながら王族として生きてきたソアラ姫自身も、自分の肩に乗せられているもの重さは理解しています。自分に注がれてきた愛情も理解した上で、城を飛び出せばどうなるかもわかつていないはありますがありません。それでも尚、優しさを表に出せず口下手なこの人と共に：と思ってしまったのだから後悔はありませんでした。偶然とはいえないランというただの知人というには強力な力を持った人とテランで再会したのは何かの縁を感じずにはいられません。

そんな女性同士の和やかな様子を見た balan はソアラ姫をフローラ女王に任せ、魔王を討伐したという勇者アバンと2人で話をすることにしました。

「アバン殿、アランから聞いたが大魔王を倒すつもりというのは本当なのか？」

「ええ、私はまだ大魔王の事はアランから聞いただけです、アランが行くのなら当然行くつもりですよ」

「ならばそう多くはないが大魔王について私が知る事を話しておこう」

そこから語られるのは、竜の神、人の神、魔の神が作り出し古より世界のバランスを保ってきた究極の戦闘生命体が竜の騎士であり、そして当代の竜の騎士が balan であること：その balan がいるということは当然使命である天地魔界の balan スを保つためであり、魔王ハドラーと同じ頃に動き出し地上を我が物としようとしたり最後の知恵ある竜と謳われる冥竜王ヴェルザーとの死闘：そしてそんな冥竜王と同レベルの力を持つと言われる大魔王：ほとんどの人間が聞いたらおとぎ話や作り話だと思ってしまうような理解できないスケールの話でした。

しかしこれを聞いたアバンは疑うでもなく、ストンと腑に落ちる思いでした。

今までアランから「大魔王を倒す」という事は聞かされていましたしそれを信じていましたが、目の前の balan という男はアバンから見ても強大な力を秘めている事は理解できます。そしてそんな男が大魔王の存在を知っているのですから「やはり本当の事だったか」という納得が先に来しました。

「balan さんの今のお話で納得できました。やはりアランが言っていた事は間違っていないかったのですね」

「もし大魔王が地上を侵略するのであれば竜の騎士である私の役目だ。貴殿が無下に命を掛ける必要もあるまい？」

「私の個人的な打算で言えば balan さんに共に戦ってもらえるのであれば頼もしいので



すが：アランが言っていたようにソアラ姫とディーノくんのために生きるのも良いと思いますよ」

バランの話の聞いてもアバンの答えは変わりませんでした。そして出てきた打算というものもバランに戦わせるのではなく共に戦うというものです。ここまで違いがあるのか：と、アルキードで見てきた自分を魔物扱いする人間たちとアバンやアランなどとの違いにバランは少々面食らう思いでした。

もちろんアルキード王国側にも言い分はあったのでしよう。魔王ハドラーが倒されたとはいえ、モンスターの軍団が齎した爪痕はそんなに簡単に簡単に取り除けるわけではないのです。モンスターが根絶されたわけでもない状況でソアラ姫が突然連れてきた誰も知らない男が1人：そしてその風体から戦う者だと感じ兵士と戦わせてみれば誰も敵わない腕前。国家の将来を考えてみたときに危険視して「相応しくない」と排除の動きが出るのはある意味当然でした。

そうといった詳細まではわからずとも自身を追い出そうとしている動きを知り身を引こうとしていたバランですが、その時すでにソアラ姫のお腹の中には新しい命が宿っており：それぞれがそれぞれの思いで動いた結果この状況となってしまったのです。

勇者アバンと竜の騎士バランが：フローラ女王とソアラ姫がそれぞれ思いを伝え親交を深めている中、アランも小さな友人たちを連れて空中散歩していました。元々アラ

ンがシンシア王女を連れてウロウロするのはよく見られる光景だったため誰も何も言わず、そこに赤子が増えていても気にされないあたりにアランの肩書に『子守』が追加されているのかもしれませんが。

「アラン：なんでお前はいつも子守してるんだ？」

「おお、ヒュンケルか。こっちは新しい友だちのディーノくんだ。仲良くしろよ。」  
「仲良くって赤ん坊じゃないか…」

なんとなく騎士団の訓練場までふよふよと移動していたアランに声をかけてきたのは訓練中だったヒュンケルでした。現在ヒュンケルは騎士団の訓練に参加しながら、たまに時間の空いたアバンに教えてもらったりと復讐の牙を研いでいる最中です。アランから聞かされた「犯人は大魔王」という言葉を信じて、彼は今日も熱心に剣の腕を磨いているのです。もちろんそれを言ったアランはとくにそんな事は忘れていません。

アバン曰く「このまま成長していけば私よりも強い戦士となるでしょう」と言わしめるだけあって、まだ9歳か10歳くらいの少年ながらに騎士団の連中とも斬り結ぶことのできる実力を既に有しています。剣を使わないアランはあまりヒュンケルとの訓練はしないので知らない事ですが、大魔王を倒すために誰よりも強くなりたいと願うヒュンケルの打倒目標の中にアランはしっかりと入っているのです。

ヒュンケルとしては城内を子供連れでウロウロしている姿か、たまに一緒に城下に出

かけたりする姿しか見る事がないため半信半疑なところはあります。しかしアバンと共に魔王ハドラーを倒した事実と「アランは私よりも強いですよ」というアバンの言葉もあるため、アバンより強くなってアランをも倒せるくらい強くないと大魔王には勝てないという基準がヒュンケルの中にできているのでした。

「よしヒュンケルよ、ちよつと散歩に行こうぜ」

「はあ？オレは訓練するんだから無理だぞ」

「そう言うなって。しつかり掴まってるよ？ルーラー！」

そんなヒュンケルの考えなんて気にしていないアランは赤ん坊と子供2人を連れてルーラーでカール王国を飛び出してしまいます。実際のところカール女王の子供とアルキード王女の子供を連れて行き先も言わずに勝手にどこかへ行けるのはアランくらいのものでしょう。

いくらルーラーとはいえ高速移動であって瞬間移動ではないので、常人であつてもそれなりに風圧や抵抗があります。赤ん坊や子供にとつては決して少なくない負荷がかかるはずなのですが、そこはヨミカイン遺跡の魔導図書館で水中特訓をしていたアランです。自身の周囲に魔力の膜を張ることで子供たちにも安全安心な移動を実現していたのでした。

ヒュンケルとシンシア王女が短い空の旅を満喫して辿り着いたのはネイル村でした。

デイーノくんはキャツキャツ言ったり寝ていたりしています。まだ頭の中に未来の勇者育成計画があるアランは、今のうちから将来共に戦う予定にされているマアムと対面させておこうと思ったのです。

「マーアームーちゃん。あつそびーましょー」

「あつ！アランおじさんだ！」

「マアムちゃん、なんでおじさんと呼ぶの？せめてお兄ちゃんと呼んでくれないかな？」  
口カとレイラの家に向かって呼びかければ、ドタドタと足音がしてマアムが飛び出てきました。赤ん坊から幼女になったマアムは少しなら言葉も話せるくらいには成長しているようですが、なぜアランの事を「おじさん」と呼ぶのかわかりません。もしかしたら赤ん坊の頃のマアムにパパ嫌いの呪いをかけた事による口カの仕返しなのかと思ってしまいます。

「とりあえず新しい友だちを紹介するね。こっちはシンシアちゃん、こっちはヒュンケル。この赤ちゃんはデイーノくんだよ」

「私はマアム、よろしくね！」

家の中に招いてもらって紹介だけすれば後は子供たちの領分です。シンシア王女とマアムはすぐに仲良くなって2人でよくわからない遊びをしていました。アランは口カとレイラに散歩ついでに遊びに来た事を告げたいで子供たちの紹介をし、それを

聞いた2人は子供とはいえ他国の王族を連れて来る事に呆れていました。

「そうだ、ヒュンケルはロカにちよつと鍛えてもらえば？こんなおじさんだけど騎士団長やってたから城のやつらより勉強になるかもよ？」

「おいアラン！誰がおじさんだ！」

「俺だつてマアムちゃんにおじさんつて呼ばれたんだぞ！ちゃんとお兄ちゃんて呼ぶように訂正しとけ！」

「誰がお兄ちゃんだ年考えろこのアホ賢者！」

「黙れポンコツ戦士！」

ヒュンケルが呆れて眺めている中で罵倒し合う2人は見かねたレイラが宥めるまで続きました。気を取り直してロカとヒュンケルが外に出ていった後：マアムとシンシア王女が遊び飽きたのかアランに「ふよふよやつてー」とせがんできたので、デイーノくんをレイラに預けてアランたちも外へと出ていくのでした。

シンシア王女とマアムを膝に乗せて胡座トベルーラで浮いている様子を見ているレイラは内心溜息をついています。それもそのはず、ロモス王国にあるこの村にかつての仲間アランが連れてきたのは真正銘カール王国の王女なのですから：更に自分が今アランから預けられて抱えているのはアルキード王国の王女の子供という事もあり、少し離れた所で地底魔城で拾ったという子供に稽古を付けている夫がちよつとだけ羨ま

しい気持ちです。

これってちゃんと行き先とか言って許可を得てここに来ているのよね…？

アランの行動を多少なり知っているレイラはその事が心配になりました。アルキード王女の子供までいるのにお付きの者が1人もいないというのもおかしな話です。むしろカール王国の王女様を連れてきているだけでも十分におかしいのですが、戦友のアバンの子供でもあるためそこは有り得るかもしれないと納得していました。レイラは決して王室に明るいわけではありませんが、それでもアランの立場から見ても他国の赤ん坊の世話をするのであれば乳母なり侍従なりがいてもおかしくないはずというのが率直な感想です。

もしこれをアランに問いただせば「ただの散歩だしわざわざ行き先とか言わないよ」とか「ちよつと遊んですぐに戻るんだから付き人なんていらなくていいでしょ」という返事が返ってくるのは間違いありません。母親の勤なのか女の勤なのか…なんとなく嫌な予感のしたレイラは「きつとアランだつて予め言つてあるに決まってるわ」と、自分の中の疑問に自分で答えを出しディーノくんをあやす事にするのでした。

夕暮れ時になり、遊び疲れたお子様たちを連れて城内へと戻ったアランを待っていたのはいつも通りの光景です。バランだけが「ディーノを連れてどこに行つていったんだ」

や「どこかへ行くなら一言あってもいいんじゃないのか」と言っていました。アバンとフローラ女王は当然の事としてソアラ姫も動じた様子はありませんでした。

アバンとフローラ女王はアランの事を信頼しているため「城内ばかりじゃ飽きるから違う場所にも連れて行ってるんだろ」と傍から見れば呑気にも見えるほど落ち着いており、それを聞いたソアラ姫も「あらあらそうなんです」とこれまた気にした様子ではありません。

それを見たアランとしては「本当に大丈夫なのか？探しに行かなくていいのか？」と心配する自分のほうがおかしいのかという心境にもなりました。この世界の世間一般的に見てもアランの行動は完全に誘拐犯のソレなのですが、妻であるソアラ姫までもアバンたちと同じ様子だったためアランも信じて待つことにしたのです。

しかし遊び疲れて寝ている子供たちと共に戻ってきたアランを見て一言二言苦言を言わずにはいられないのは親として当然の行動なのでしょう。

こうしてソアラ姫一家はカール王城での生活を始めることになったのです。

## アランの冒険3

竜の騎士バランとその妻ソアラ姫、そして愛息子であるディーノくんがカール王国にやってきてから10年を超える月日が流れました。その間に大魔王が動き出すような事もなく、カール王国についてだけならば至って平和な時間と言えるでしょう。

赤ん坊だったディーノくんも立派な少年となり、舌つ足らずな甘えん坊だったシンシア王女も快活な少女として成長しています。2人の少年少女は立派な両親や身近な人物たちの教育の甲斐あつてか、聡明で純粋ながらもお茶目な子供として成長しました。

武術の面ではバランを筆頭にアバンやヒュンケルなどがおり、教養の面ではアバンやフローラ女王、そしてソアラ姫など見本となる人物がすぐ近くにいるため困ることがありません。そしてお茶目な面ではアランという抜きん出た見本がいたため、はっちゃけ賢者の真似をした行動で両親たちを驚かせる事も多々ありました。

そんなお茶目な見本となった賢者アランはこの10年……もはや見つからないダメ神殿やアツサラムを探すのは一旦置いておいて、子供たちの世話をしたりヨミカイン遺跡で調べ物をしたりあつちこつちで色々やっていました。これには各国を回った



事でもう地上にはダーマ神殿などは存在しないのかもしれないと判断した事と、既に様々な呪文を習得し使用できている事で探す意味が薄いという理由もあります。

途中宮廷魔道士としてパプニカのお城にいたはずのマトリフから突然呼び出されて『真の賢者は誰だ？賢者の賢者による賢者だらけのナンバー1決定戦』っぽいものをやつてアランが優勝した事が原因なのか結果的に宮廷魔道士を辞したり、その後マトリフの引越しを手伝つたりと様々なイベントがあつたりもしましたが概ねいつも通りでした。

その間に勇者のみが使用できると伝えられているライデインやギガデインをアバンではなくバランが使える事が判明したりするのですが、それを知つたアランはバランを大魔王討伐の仲間に加えるのではなくアバンに「お前もギガデイン使えるように頑張れ」と現実的に不可能な発破をかけていました。

そんな無茶振りをされているアバンはというとフローラ女王の夫として国政に携わりながら子育てに勤しみ、更にはいずれ来る大魔王討伐のために自身のレベルアップという忙しい毎日を過ごしています。城内を離れられない時はバランに手合わせを頼んだり、外遊という名の破邪の洞窟で修行だつたり各地に伝わる伝承などを調べたりと平和な時間を長引かせるため日々鍛えながらその優秀な頭脳をフル稼働させていました。

かつて地底魔城で地獄の騎士バルトスに託されたヒュンケルは年齢を重ねるごとに

劍の腕も上達していき、騎士団では相手にならなくなりアバンすらも認めるほどになっています。周囲は「もう騎士団長くらいしか太刀打ちできないのでは……」と思つていましたが、しかしそこで登場したのが竜の騎士バランでした。

アランに誘われたためカール王国で暮らすことになったものの本当に何も求められず妻と子供を見守る日々を送っていたバランなのですが、流石に何もしないというのも気が引けたのかアバンに「何か手伝えることはないのか？」と申し出ました。特に何も要求する気がなかったアバンでしたが、そのありがたい申し出に自身の教え子が日々上達している様子からバランにそれを伝え、アバン自身との手合わせやヒュンケルへの手ほどきをしてやってほしいという事などを頼む事にしたのです。

ここ最近ではアバンらとも対等に近いくらいには立ち合えると自信を深めていたヒュンケルにとってバランの登場は驚愕と喜びというに相応しいものでした。それもそのはず、脈々と受け継がれる竜の騎士の技術は並の人間が生涯かかっても辿り着けるか怪しいほどに卓越したものです。そしてそれらを目の当たりにして折れるような精神をヒュンケルは持つていませんでした。

今はカール王国にてアバンの庇護下に置かれ劍の腕を上げる事に楽しさを覚えていくヒュンケルではありますが、決して父の仇を討つという事を忘れていません。これももし父の仇をアバンだと思つていたのであれば復讐という憎悪の気持ちで過ごしてい

たでしょう。ただアランによって聞かされた「復讐する相手は大魔王」という言葉を信じているため、そして自分が敵わないと思わせてくれる相手が周囲にいたため素直に上に向かつて突き進めたのです。

もしアバンを仇として憎んだままで、更に剣術以外にも暗黒闘気の扱いを教える闇の師的な存在がいたりすれば、光と闇の闘気を操ることで不死身性を身に着けた魔剣戦士になっていたかもしれません。しかし今のヒュンケルの周囲には光の闘気を扱う者はいても暗黒闘気など話に出てくる程度です。

そして何よりもヒュンケルの心に憎悪の感情を芽吹かせることなく暖かさを齎したのはフローラ女王やソアラ姫の存在でした。それぞれが王族であるというのはいまでもないので、この2人はそこに『勇者の伴侶』と『竜の騎士の伴侶』という肩書がついてくるのです。つまり王宮にいる侍女などと違い、そしてただの王族とも違いヒュンケルにとってアバンやバランの妻というのは比較的身近な存在となるため話しやすいのです。共に母親なため母性たつぷりの2人の存在はヒュンケルに闇の道など進ませることを許しません。

そんなヒュンケルの存在はバランにとつても良いものとなりました。目の前にいる少年の腕に感心し、相手をしてやれば日々上達が見て取れるというのはとても楽しいものです。今はまだ赤子ながらもいずれば自分の愛する息子にも剣を教えてやりたいと

いう気持ちを持つているバランにとつて、ヒュンケルに稽古を付け剣士として育てるといふのはこういう気持ちか…と、子育てとは違う別の楽しみを見出していました。

そしてそんなバランの気持ちに応えたわけではありませんが、赤子から少年へと成長したディーノくんが剣に興味を持つのは必然だったのかもしれない。子供というものは少し目を離すと消えたようにどこかに行ってしまう。アランが城にいる時はいつも一緒に遊んでいるのですが、この日は不在のため一人でウロウロしていました。探検気分で行っているうちに訓練場まで来ており、そこで剣の特訓をしている己の父親と兄のような存在の人物を見かけたのです。

2人の剣舞はディーノくんの目にはとてもカッコよく映り、自分もやってみたくて考えるのに時間はかかりませんでした。しかし普通に「やってみたくて」と言ってももしかしたら「危ないからダメ」と言われかねないため、ディーノくんが頭を捻って考え出したのは説得してくれる味方を作ることでした。

基本的にディーノくんの周囲にいる人物は怒るような者はいませんが、止められる時は優しく諭されてしまいます。しかし大人の人たちが止めるような事でも「大丈夫大丈夫！（ホイミもザオリクもあるし）やりたい事はやっちゃまえ！」と背中を押してくれる賢者の友人がディーノくんの身近にいたのです。

「ねえアラン、おれも父さんたちみたいに剣を振ってみたい」

「お？ついにやる気になったな。それじゃあ頑張つて強くなって将来大魔王と一緒に倒そうぜ！」

「うん！」

こんな会話があり、父親であるバランも剣に興味を持つてくれた事を聞いて大層喜んでいたらしく、ディーノくんの剣術修行が開始されることになりました。ちなみにディーノくんは今まで自分の事を「ぼく」と言っていたのですが、子守兼友達のアランの影響のせいなのかいつからか「おれ」と呼ぶようになってしまっています。

そしてそんなディーノくんの様子を見て自分も何かをやりたいとシンシア王女が言い出すのもまた更に時間の問題だったのです。

勇者アバンとフローラ女王という攻撃呪文も回復呪文も使用できる2人の子供であるシンシア王女も当然の事ながら呪文の才能は持っていました。そしてシンシア王女の子守兼友人であるアランは大賢者と自ら名乗るほどに様々な呪文を使いこなす人物でもあります。

両親から優しく呪文の手ほどきを受けたり、アランに連れられてモンスターを退治したりと経験を積みまくった王女様はぐんぐんとその腕を上げていきます。もちろんディーノくんも一緒に連れ出して3人でモンスターと戦ったりと真似事のような遊び感覚で実践経験を積んでいく2人の子供にアランも満足気でした。

10歳にも満たない王族の少年少女を勝手に連れ出してモンスターと戦わせていたと周囲にバレた時はさすがに説教の危機だったのですが、楽しそうに「こんな事ができるようになった」や「こんなモンスターを倒せるようになった」と嬉しそうに語る子供たちを見て苦言に留められ事なきを得たりもしました。

もしかしたらディーノくんやシンシア女王もどこかの怪物島で言葉を話せる心優しい鬼面道士的なモンスターと出会ったりしていれば「モンスターは敵ばかりじゃない」という考え方も浮かんだかもしれません。しかし子供たちを率いるのは「モンスターは倒すもの」を地で行くアランのため、遭遇したモンスターは全てなぎ倒されてしまっています。

そんな子供たちの成長を見守ってきたフローラ女王とソアラ姫は相変わらず美しいままです。フローラ女王は国王としての政務が忙しい事もありますが、優秀な夫のアランに助けられ国内外でその手腕を讃えられていました。

もともとカール王国の国内では魔王軍が侵略していた頃から勇敢な姫として人望のあつたフローラ女王ですし、更に近年出回っている『勇者とお姫様の恋物語』という本も人気に拍車をかけていました。そこに追加されるように国外の人気が出たのは魔王討伐後から各国を行き来するようになったアランのせいです。

その立場上他国へ赴けば国賓として迎えられる事の多いアランが大袈裟に吹聴して

いった結果『勇者が魔王を討伐できたのはその裏で献身的な姫の存在があつたからだ』という噂が出回ることになったのです。その噂が尾ひれや背びれを付けて世界中に広まるのに時間はかからず、他国の使者からその話を聞いたフローラ女王が頭を痛めたのは言うまでもありません。

ある日フローラ女王からそんな愚痴を聞かされたソアラ姫は「アラン様らしいですね」と笑っていました。ソアラ姫自身はカール王国に亡命まがいの事をしてからも周囲の尽力で穏やかな日々を家族や友人と共に過ごし、本人はまさに幸せいっぱいといった状況だったのですが：実はそんなソアラ姫の知らない間に祖国であつたアルキード王国は存亡の危機に瀕していたのです。

アランが巡っている国の中には当然アルキード王国も含まれていました。魔王を討伐した後には赴いた際には普通に歓待を受けていたのですが、状況が一変している今ではカール王国の使者など「どの面下げて：」と憎々しく思う相手でしかないのです。アルキード王国からすればカール王国という国は自国の王女であり後継者であつたソアラ姫を奪つた国なのです。

そのため例え使者が魔王を倒し世界に平和を齎した一人である賢者といえど態度を変えざるわけにはいきません。普通の使者ならば王の一人娘であり次期女王を奪われた憎悪に針のむしろと言つても過言ではないほどに萎縮してしまうであろう状況であり

ながら、しかしその場にいるアランにとつては何も気にした様子はありません。

アランにとつてソアラ姫たちを助けたのは良い事をしたと思つてゐるため「ソアラ姫を返せ」というアルキード側の主張など聞く耳も取り付く島もありません。恋の魔法使いとしては騎士と姫の小さな恋を守るためならば他国であろうと戦う事も辞さないほ

どです。

その結果なぜか「どうしてもソアラちゃんが欲しかつたらこの俺を倒してみろ！」という普通なら父親であるアルキード王がバランに言わないといけないセリフをアランが言い、相手が賢者といえども一人だと戦力を見誤つたアルキード側がソアラ姫を取り返す好機とそれを受けてしまつたのでした。

まず『賢者』とは一般的にパプニカ王国が多く輩出している事で有名な魔法戦闘のエキスパートの事を指します。アルキード王国もパプニカの賢者の事はもちろん知っており、後塵を拝するわけにはいかないとアルキード王国の国王も重臣たちも賢者と戦う対策は持つていました。魔法使いを相手にする時も賢者を相手にする時もそれは変わりません。彼らは体力が低く近接戦闘能力はそこまで高くないため、逆にこちらは戦士たちによる近距離戦で挑めば十分に勝機はある……というのがアルキード王国側の作戦でした。

そこでアルキードの重臣たちは「魔王を倒すほどの賢者様なのですから、我々が複数



人で対峙してもきつと簡単に対処してしまわれるのでしょうか」と煽るような事を言い、アランも特に気にせず了承してしまいます。これにはアルキード王含め重臣たちは自分たちの策の通りに物事が進んでいると内心笑みを浮かべていました。

その結果アラン対アルキード兵30人という：『複数人』という言葉で言質を取り、その利点を存分に活かした戦いとなったのでした。これがもしパプニカ王国の賢者含め普通の魔法使いたちであれば即時敗北となっていたでしょうが、残念なことにそこにいるのは武神と大魔道士から教えを叩き込まれた武闘派の賢者です。

アルキード王国の兵士たちは近接戦なら勝てるかと勇んで斬りかかりますが武神流の前にはまったく歯が立たず、まるで風に乗る葉っぱのようにヒラリヒラリと避けながら殴り飛ばされたり投げ飛ばされてしまいました。その間もずっと「ほらほらどうした？その程度でソアラちゃんを返せなんて笑わせてくれるな」と逆に煽られており、アルキード国王も重臣たちも魔王を倒した本物の賢者の強さを見せつけられるだけとなりました。

しかも姫を連れ去り「返してほしければ倒してみろ」というかつての魔王ハドラーのような事を仕出かしておいて、自分が魔王ポジションである事ですっかりテンションが上がってしまったアランはメドロアまで大盤振る舞いしてしまったのです。

これによってアルキード城に大きな風穴が空きました。

このメドロアによる結果はアルキード兵だけでなく国王たちも含め絶大な効果を齎しました。精鋭と呼ばれる兵士たちを子供のように軽く蹴散らし、一部とはいえ城を破壊ではなく消滅させるといふあまりの結果に文句を言う気概もなくなつたのか：この一件以降アルキード王国からカール王国に文句などを言つてくることもなくなり、ソアラ姫たちは暗黙の了解ながら晴れて堂々とカール王国で過ごせるようになるのです。しかしその代わりアランがアルキード王国へ出入り禁止になつたのは当然の結果と言えます。

そこまでやつておいてアランが思つた事は「やつと認める気になつたか」というものでした。アルキード王国の騎士だつたバランと姫であつたソアラ王女の密やかな恋の邪魔をした代償だと勝手に考えているだけに悪いとはまったく思つていません。これが国籍不明の騎士と一国の王女の逢瀬でアルキード側の主張がごもつともだつたとわかつた時にはアランはどうするつもりなのでしょう。

既に子供も生まれていてアランも可愛がつているため何も変わらないのでしょうか。ディーノくんは物心付いた時からカール王国で育つていますし、バランもアルキード王国に対して思い入れはありません。唯一肉親のいるソアラ姫だけは母国の事を気にす

るかもしれませんが、今回アルキード王国に来てちゃんと認めさせたしそれを伝えれば問題ないだろうと判断しました。

各自がそんな平穏な年月を過ごしていましたが…しかし、魔王を倒し15年もの間破られる事のなかった平和はついに破られることとなるのでした。

## アランの冒険4

世界中で大人しかつたはずのモンスターたちが再び暴れ出すようになり、そして世界中の国では魔王が復活したのではという不安の感情が溢れていました。そんな人々の心配は的中しているとばかりにモンスターたちは徒党を組み各地の町や村を襲い出しているのです。

そういった不安はカール王国においても変わりません。国民が不安を口にすれば大臣たちも同じように魔王復活の可能性を示唆していますが、それらの報告を受けてもフローラ女王もアバンも慌てる様子はありません。魔物たちが暴れだしたというのであれば…それはつまり『大魔王を倒す時が来た』だけなのですから…

遂にまた旅に出る時が来たか…とアバンが静かに覚悟を決めている中、カール王国にわざわざ魔王ハドラーが挨拶に来てくれます。

「クツクツクツ、久しいなアバン。貴様がオレを倒し手に入れた平和な時間は満喫できたか？」

「やはり復活していましたか…魔王ハドラー！」

「もはやオレは魔王ではない…偉大なる大魔王バーン様の力で復活し新たに魔王軍を率いる事になった、魔軍司令ハドラーだ！」

魔軍司令となったハドラーは「ラスボスは大魔王バーンだよ。あと各国に自慢の軍団を差し向けたからね！」とアバンに教えに来てくれたのでした。魔王として地上を侵略していた頃は4名の幹部を擁していましたが、今回は6つの軍団とそれを束ねる軍団長を組織しているため負けるはずがないという確信を持っています。ハドラーとしてはそうやって自分よりも上の存在を教える事で絶望させ、その上で自分を一度倒したアバンに復讐するために単身カール王国までやってきたのです。

「ククク…まずは人間どもの希望である貴様を葬ってくれ…」

まだ口上の途中だったにも関わらず、意気揚々とアバンに向かって話していたハドラーに向かって一条の光が放たれてしまいました。まさかそんな不意打ちをしてくるなどと思ってもいない魔軍司令ハドラーはそのまま光に飲み込まれ消え去ってしまいました。

「相変わらず容赦ないですね…アラン」

「話してるからって攻撃しちやいけないって言われてないもん」

アランの不意打ちメドロアによって魔軍司令ハドラーは倒されました。もしかしたらハドラーの体内には魔界の超爆弾的な物が埋め込まれていたかもしれないかもしれませんが、凍

れる時間の秘法すら打ち破る大魔道士の秘奥をもってすれば全て消滅してしまうのは仕方のない事なのです。

更に魔王から大魔王の手先へとグレードダウンしたハドラーなど、アランにとつてはバラモスゾンビと似たようなものとしたか認識していませんでした。復活して瞬殺されにわざわざカール王国までやってきてくれたハドラーに少々の憐憫の情を覚えつつも、アバンはあれだけ苦戦したかつての魔王をここまで容易く倒してしまう仲間を頼もしく感じています。

本当なら大魔王を討伐するために旅立ちたいところではあるのですが、ハドラーによつて齎された情報によれば各国が魔王軍によつて襲われているという事：ならばまずは各国の危機を取り払い安全を確保してから大魔王と対峙するほうが良いとアバンは考えました。

幸いカール王国には勇者アバン、賢者アラン、竜の騎士バラン、そして剣士であるヒュンケルがいます。ちなみにアバンの考える戦力の中にディーノくんやシンシア王女は入っていません。子供たちも十分に戦えるほどに成長しているのは間違いないと認めたと、それでも子供たちには戦わせたくないという気持ちがあるのでしょうか。

「それじゃ大魔王を倒しに行くのでしょうか」

「ええ、しかしまずは魔王軍に襲われている国を助けましょう」

「え？そんなの自分たちで何とかするんじゃないの？」

まずは各国を襲っている魔王軍を何とかしようと考えていたアバンと違い、アランはそれらを見殺しして大魔王を倒しに行くつもりです。更に魔王軍に襲われている国には自分たちで対処しろという無理難題を押し付けようとしていました。アランは魔王が倒された事で平和がやってきたと思っている国と、大魔王と戦うために日々研鑽を積んできたアバンたちでは心構えから違うという事を認識していません。

「それに大魔王がどこにいるのか知っているのは魔王軍の幹部だけじゃないですか？」

「ハドラーは何か言っていなかった？」

「何か言う前にあなたが倒してしまっただでしょう」

わざわざ倒されに来てくれたハドラーから大魔王の居場所を聞く事ができなかったのはアランのせいなのは間違いないでしょう。そんなアランは内心で「報連相をちゃんとしなくて使えないヤツだなー」と自分で瞬殺しておいてハドラーに文句を言っています。これをハドラーが聞いたらきつと鼻水たらして罵詈雑言が飛んでくるでしょう。

そんな話し合いの結果…：以前の魔王ハドラー討伐の旅の時は各地を巡ってレベルアップしつつ情報を集めて本拠地を割り出したので、今回は『各国を攻めてきている魔王軍の幹部を倒して本拠地を聞く』という方針になりました。

地上の危機再びという事態に集まった面々を前にして「各国を同時に侵攻しているのであれば、まずはそれぞれの国を手分けして向かったほうが得策だろう」というアバンの作戦が立てられます。これは一騎当千の戦力が集まっているカール王国だからこそ考えられるものであり、またアバンの頭の中にある戦略の1つでもありました。

それぞれの国にどれほどの戦力が投入されているのかはわかりませんが、過去の魔王軍幹部の強さなども鑑みて少なくともアバンやアラン、そしてバランとヒュンケルに至っては単身でも敵を討ち倒す事は問題ないと考えられています。そこにそれぞれの国の兵士たちなどの戦力を加味すれば、倒しきれなくても少なくとも撃退する事は可能だろうという判断でした。

しかしここで思わぬ「待った」がかかってしまいます。そしてその声を上げたのは軍議という経験を積ませるために同席していたディーノくんとシンシア王女でした。

「おれもみんなを助けるために一緒に行きたい!」

「私も同じくですわ!」

「ダメです」「ダメよ」「ダメだ」「危ないからダメよ」

2人の子供の両親2組からほぼ同時に却下されるディーノくんとシンシア王女。まさかここまで即断で否定されるとは思っていなかったのでしょうか。両親たちから突きつけられた「ダメ」コールに、2人の子供は唯一味方になってくれそうな友人に目を向



け助けを求めました。ちなみに大人4人からはそれに合わせるように「ダメって言葉」という無言の圧力がかけられています。

アランとしては子供たちだけというのは反対しても、一緒に連れてってあげるのはいんじゃないかと思っっているのですが…どうやら子供たちの親はそうは思っていないかたようです。

「別に誰かと一緒に行くのなら良いと思うんだけど…何なら俺が連れてってあげてもいいよ?」

少しだけ考えてみた結局、思った事をそのまま口にするにしましたアラン。大人4人の視線よりも子供2人の期待の視線のほうが重かったのかは定かではありませんが、これを聞いた2人の子供たちはこの援護を受けて改めて両親たちを期待の籠もった目で見つめていました。

これを受けてどうしたものかと詰まってしまったのは父親たちでした。

アバンとバランの父親2人は子供たちの精神的な成長も鑑みて「まだ早い」と思っていたため反対したのです。もしこれが本当に初陣であつたならば何があつても反対を貫いたかもしれません。しかしアランに連れ出され度々モンスターと戦っているという事もあり、それならば恐怖で動けないという事もないだろうし「きちんと自分たちが守ればいい」という軟化した考えに変わりました。これは大局を見た判断であり、決し

て「お父さん嫌い」が怖いわけではありません。

「んじやアバン、ちよつと行つてくるから留守番よろしくねー」

最終的に母親2人の理解も得られ誰がどこに行くかとなった段階で、アランから軽く言い渡された自身は待機という内容に仕方ないながらも口惜しい思いのアバン。しかしこれは当然の事だったのです。戦力たちが全員カール王国を出てしまつてはカール王国を守るのは騎士団たちだけになってしまいます。

ハドラーがこの国にやつてきたように、新生魔王軍でも警戒されているであろう自国を放つて他国を救いに行くわけにもいきません。そうなれば勇者としてではなく女王の伴侶としてアバンがこの国を守るのが一番だというのは自明の理と言えます。

アランは騎士であるアランに「ソアラちゃんをついでに国も守つてね」と留守番を任せるという案も考えましたが、デイーノくんが行くのとだから子供だけを送り出す事を子煩悩なアランが許すはずもないだろうとアバンに任せる事にしました。

そういつたやり取りがあり、アバンは考えていた1つの作戦を皆に伝えたのです。

それによりアランが単身で、アバンとデイーノくんがペアで、ヒュンケルとシンシア王女がペアで行動することが決まりました。ヒュンケルは1人でも大丈夫だと言いつていましたが、回復手段も移動手段もない以上それを有するアランかシンシア王女と組むしかありません。ここでアランと組んでシンシア王女を単身で向かわせるなど

有り得ないということになり、その結果ヒュンケルとシンシア王女が一緒に行動することになったのです。

既にヒュンケルは剣の腕と闘気の扱いはかなりの域に達していると言えます。そこに賢者としての才能を持ち、アランによつてその才能を伸ばされたシンシア王女というのは理想的な組み合わせと言えるでしょう。何よりも勇者と賢者と竜の騎士は遠近戦闘が可能で攻撃も回復もできるため、足りないところを補うというパーティの在り方の逆を行っているような存在たちなのです。

それぞれが向かう先を決め、子供たちも母親たちから激励の言葉を受け取っていました。

「ディーノ、シンシアちゃん。ちゃんとバランスとヒュンケルの言う事を良く聞いて行動しなければいけませんよ?」

「ヒュンケル、この子の事を頼みますね」

「お任せください。シンシア姫には傷一つ付けさせません」

「私の事よりも民草の安全のほうが大事ですわ。お母様もそんなに心配なさらずとも、私だつてアランから戦う術は授かっておりますわ」

フローラ女王からシンシア王女の面倒を頼まれたヒュンケルはともかく、シンシア王女のほうはその言葉に納得していない様子です。このあたりの気性はフローラ女王譲

りなのでしよう。その様子を見てアバンは、かつて魔王ハドラーが侵略してきていた頃の勇敢なフローラ王女を思い出していました。

きつと昔のフローラ王女が目の前にいて同じ立場だったとしても一緒の事を言っただろうと、そしてそんな娘が母親と同じようにまつすぐ育ってくれた事に感慨深い思いをしていました。そこまではとても子供の成長を感じられて良かったのですが、その後続いた言葉には思うところしかありません。

「これでもお父様とお母様の娘です。攻撃呪文だつて回復呪文だつて使えますし、相手が侮つて襲いかかつてきても武神流の前には敵ではありませんわ！」

「ちよつと待つてください。シンシア、あなた武神流を学んでいたんですか…？」

「ええ、剣は触らせてもらえなかつたですし、アランからも『勇者の子たるもの魔王の1匹や2匹倒せなくてどうする』ということで教えられましたけれど…？」

「……アラン…？」

いよいよ出発という時になって、シンシア王女の失言(?)によつて実は武神流まで教えられていた事が周囲に判明してしまいます。アラン本人は悪い事だと思つていないどころか、隠しておいていざという時に開示するほうがカッコいいと思つていたため言つていなかったのです。都合よく新たな力に覚醒してくれればいいのですが、実際にそうなるとも限らないのでしつかりと魔改造と言つても良いくらいにシンシア王女

を強化していたのです。

しかし残念ながら子供というものは自慢したい事は親に話してしまうものです。今まで言っていなかったのは他に言う事がたくさんあったからなだけだったようで、言った本人も「あら？言っていないませんでしたっけ？」といった表情でキョトンとしていました。

アバンとしても別に娘が武神流を学んでいたのは悪いわけではありません。ただ教えているのならそれを言ってくれないというのはどうなのかと思っただけです。ちなみにそれを聞いていたフローラ女王のほうは「アランだし仕方ないわね」と深く考えていませんが、それはつまり既に小さなアランと言っても問題ないくらいにはシンシア王女はレベルアップしていたということでした。

「武神流を少々と、たまに魔導図書館に連れてって呪文の契約したりしたくらいだよ。もうちよつと魔力の扱いがうまくなったらメドロアを教えようかと思っただけだよ。」

「あなたはシンシアをどうしたいんですか…」

我が子の思わぬ予想外の成長に少々驚かされたわけですが、言葉とは裏腹に嬉しい誤算でもありました。やはり一度は魔王軍と戦っていた身としてはまだ少女と言える年齢の娘を危険に晒すような事はしたくないのでしようけれど、世界の危機にそうも言っ

ていられないと考え直しているのかもしれませんが。大体にしてアバンたちだってハドラー討伐の旅をしていたのは十代だったわけですから、ここで年齢を理由に出したところでブーメランでしかないのです。

当初はディーノくんとシンシア王女は戦いに巻き込まないという前提でしたが、ここまできて今更文句を言うような事はありません。それぞれが「十分に気をつけて」というような言葉を子供たちにかけていくため、アランもまた2人の小さな友人に激励の言葉を贈りました。

「ディーノくん、シンシアちゃん。いつも通りにやればいいからね？ 怪我したって死んだって俺が何とかしてやるから心配すんな！」

「うん！」

「オレがいるのにシンシア姫が怪我などするはずがないだろう」

「ディーノもだ。私がいるのだから方に一つも有り得ん」

アランからの激励は保護者役の2人には不評だったようです。子供たちはアランの事をよくわかっているからか元気な返事をしていきますが、ヒュンケルとバランは眉間にシワを寄せ「自分たちが守り切るのだから怪我などしないというのに何を言ってるんだ」と言いたいようでした。

そんな一幕がありました。それぞれが担当する国へと移動していき…アランはひと

まずオーザム王国へ行ってからリンガイア王国へ南下するという順番で向かう事にします。そしてそのままアルキード王国へと向かうという予定になっていました。本来はオーザムとリンガイアという遠方だけを担当するはずだったのですが、現在アルキード王国はカール王国とあまり交流が盛んではないのです。

理由はもちろんソアラ姫を連れて行った上にダメ押しでアランが暴れたためです。

アラン的には『あれだけ威勢がいいんだから自分たちで何とかするだろ』と思つて別に行かなくてもいいんじゃないかね?と考えていたのですが、そこは祖国の心配をするソアラ姫やアルキード王国だけ助けに行かないわけにはいかないというアバンたちの考えもあり、それならばせめて出入り禁止になつていようと自分が行くと手を上げたのです。

さすがに姫と一緒に国を飛び出したバランに行かせるわけにもいきませんし、ヒュンケルとシンシア王女に行かせるのもなあ…という消去法的な考えで自分が行くしかないだろうという判断でした。そのためひとまず北側から巡つていき、最後にアルキードにも顔を出す事にしたのです。助けなんて必要ないと言われればそのまま帰ればいいだけです、出禁を言い渡しておいて助けを求めのなら助けてやればいい…アランはそんな程度の軽い気持ちでまずはオーザム王国へとルーラで移動するのです。

## アランの冒険5

オーザム王国は最北にある雪と氷の地です。

国交の一環としてアランは幾度か訪れた事があるため知っていますが、今そこは魔王軍の侵略によって戦場と化していました。これはカール王国以外のすべての国に言える事なのですが、魔王が討伐され平和が齎された事により危機感が薄れてしまった事が原因でもあります。

そしてカール王国でもアバンやフローラ女王は大魔王の存在を信じていても、当時は影も形もない大魔王の存在を周知しては余計な混乱を生むだけと口外していなかったためでもありました。

しかしそれを教えなかつた事を責めることはできません。

魔王軍のモンスターという脅威からやつと解き放たれたと思っていた矢先に、更に強大な脅威の存在など知ってしまったては普通の人間には耐えられなかつたでしょう。それに十数年の平和は人々から危機感を薄れさせはしても消し去るわけではなかつたのです。



アランがオーザム王国へとやってきた時には魔王軍の影も見当たらない様子でした。ひとまず状況を確認するために王城へと向かい魔王軍の状況などを聞いていったところ、王や大臣たちを含め戸惑いの表情で説明してくれました。

「我々にもどうなっているのか皆目わからないのです。ある日突然魔法生物が群れをなして襲いかかってきたと思っただけ……波が引いたようにモンスターたちがいなくなってしまうのです」

「それじゃあここは大丈夫そうだね。俺はリングイアに行くけどまた出てきたら教えてね。助けに来るから」

オーザム王国では炎や氷の魔法生物たちが襲いかかってきていたようでしたが、襲われていた彼らが言うには突然来なくなったということでした。来ないのは良いことではあるのですが原因がわからず、またいつ襲いかかってくるのかわからないだけに彼らの心配が尽きることはありません。

原因を紐解けばアランにあるのですが、アラン自身も加担した意識が皆無なため誰にも真相のわからない不気味な撤退と見られているのです。もしここでオーザム王国を襲っていたのが魔軍司令ハドラーが生み出した禁呪法による生物だと知っていれば……そして生み出したハドラーがアランによって消滅させられているため生み出された生物も時を同じくして消滅していると知っていれば素直に喜べたのですが、そんな事を知

らないアランとオーザム王国は突然来なくなったとしか認識できていないのでした。

これもきつとハドラーが「オーザム王国には自分が生み出した生物が軍団長をしていて、自分を倒せばその軍団長も一緒にいなくなるよ」と伝えなかったせいなのでしょう。きちんと言っていればこのように疑惑だけが残る事もなく喜べたというのに、やはりいなくなっても恐怖の根を残すあたり流石に元とはいえ魔王なだけあります。

今となつてはこの連鎖した結末を予想できる者などいないため、アランは今の状況に不安を抱えるオーザム王国を出て次の目的地であるリンガイア王国へと移動することになりました。もちろんアランはリンガイア王国へも行ったことがあり、城塞王国と呼ばれる堅固な守りと何者の侵略であろうと跳ね返してみせるという強い意志を持った兵士たちが多かった記憶があります。

アランがリンガイア王国へとルーラで移動した先にいたのはドラゴンの群れでした。地を這うドラゴンや空を自在に飛び交うドラゴンなど、ドラゴンの見本市と言つても良いくらいに多様なドラゴンたちが建物を破壊し人を襲い暴れていたのです。とりあえず駆けつけ全滅とばかりにドラゴンたちを葬り去り、顔見知りを求めて王城へ向かった先にちようど話したことがある將軍に会うことができました。

「おお、アラン殿！」

「お、將軍久しぶりだね。助けに来ただけけど余計なお世話だったかな？」

「いえ、ご助力感謝します。あのドラゴンの群れには我々も手を焼いていたのです」  
どうやらオーザム王国とは違いこちらは魔王軍がきちんと攻めてきているようでした。城塞王国と呼ばれるだけあって王城を中心に今のは抵抗できているようですが、将軍が言うにはこのままだといつまで耐えられるかわからなかったためアランの助勢は非常に助かったとの事です。

リンガイア王国のバウスン将軍の名は他国でも猛将と知られるほどなのですが、それでも終わりの見えないドラゴンの襲撃に対し士気を保つのが精一杯な状況なものでした。ドラゴンという最強の生物を相手に兵士たちを纏め抵抗できている時点で十分な成果と呼べるものなのですが、だからといって勝てなければ待つているのは破滅の未来なのです。

そんな將軍では打破できない状況に光明として現れたのが魔王を倒した賢者なのですから、アランの登場を喜ばないはずがありませんでした。魔王を倒したという肩書を持つ人物の登場は前線で戦う兵士たちに希望を与え、ドラゴンをも倒すその力は噂に偽りなしと問答無用で思わせるのです。

そこに「ドラゴンの群れを倒すほどの力を持っているなんて怖い」などという恐怖を人々に持たれるような事はありません。『魔王を倒した』という肩書は、それくらいでできて当然とでもいう風に受け入れられるほど人々にとって大きなものでしょう。

既にアランはリンガイア王国に来てから見える範囲のドラゴンたちを殲滅しており、それを成したのが『魔王を倒した賢者』という事もあって既に人々の顔から不安と緊張を取り払う効果が出ていました。そしてそれは兵士や人々だけでは収まりません。自分では成せないそれだけの影響を与える人物が助けに来てくれた事が、国防のトップを担うバウスン將軍の肩の力を抜き冷静に考えるだけの余裕を与えることにもなったのでした。

「アラン殿、申し訳ないのですが…北側のほうの助力をお願いできないでしょうか。あちらは私の息子が向かっているのですが、どうにも数が多いらしいのです」  
「了解。それじゃちよつと行つてくるね」

バウスン將軍は現在攻められている場所を考え、一番敵の多い場所へアランに行つてもらう事にしました。通常であれば政治的な要素も絡んでしまうため、他国の援軍に一番危険な場所へ向かわせる事などしません。そこで万が一の事があつた場合に国家間の問題に発展しかねないためです。

しかしそこは魔王を倒した実績を持ち、既にドラゴンたちを容易く打倒した姿を見せているアランだけにいらぬ心配と言えるでしょう。切羽詰まっているというのもあるのですが…ドラゴンの軍団に攻められている状況だというのに焦る様子すら見せず、この程度簡単に打開できると言わんばかりの余裕の様子を見せられて將軍も余計な考

えを捨てたのです。

そこには無謀にも飛び出して行ってしまった自身の息子を案じる気持ちも入っているのかもしれませんが、仮に「私の息子を助けてほしい」と言ったとしてもアランは二つ返事で引き受けて軽く達成してしまうだろうという確信を持っていました。そしてそんな一つの心配事が解決したとばかりに、パウスン将軍は他の場所の指揮を取るべく兵士たちに指示を出すのでした。

…

…

…

「ここが将軍の言っていた場所ではないのかな？」

アランがパウスン将軍に頼まれた場所へ到着した時、そこはまさに戦場と呼ぶに相応しい場所となっていました。倒れ伏す兵士たちや打ち倒されたドラゴンの死体などがそこらに存在しており、今は小康状態なのか無事な兵士たちが治療をしたり忙しく立ち回っている様子が見て取れます。

アランはとりあえずそこらにいる兵士たちに助けに来た事を告げ、それと同時にベホ

マラーを唱えました。今まであまり使う機会のない呪文だったので、パーティじゃない複数の相手に効果があるのか疑問だったため内心では試すにはちょうど良い場面だったのです。

「おお、傷が回復していく…」「賢者殿が来てくださったのか…」「さすが賢者殿だ」

自分たちの負傷が見るからに回復していく様子に感激しており、それがきちんと効果があった事に満足したアラン。再度バウスン將軍からここに救援に行つてほしいと頼まれた事を伝え、兵士たちに明るい表情が戻ってきた中で焦つた表情の伝令がやつてきました。

「報告！新たなドラゴンたちがこちらにやつてきています！その数…およそ先程の数倍はいるとの事です！」

「なんだとっ!?!」「まだいるのか…」「魔王軍め…」

まるで絶望を告げるような伝令の報告に信じられない様子の兵士たち…いくらアランが助けに来てくれたとはいえ、それだけの数が相手では…と、兵士たちの表情は暗いものになっていきます。その様子を見て無理に戦わせても無駄死にするだけだろうと思つたアランは一人で迎撃することを決めます。

しかしそこに一人の青年が現れ、自分が前線に出て撃退してみせると言い出したのでした。

「ボクは…人呼んで『北の勇者』！」

「……え？」

アランは衝撃を受けました。人がそう呼んでるといのは理解できるのですが、それについて自分で言ったらダメなやつじゃね？などと考えています。人が言っているって言いながら自分で名乗っているのならそれはもう自称であって、アランが自分で『大賢者』と名乗っているのと何も変わらないのでは…と、ただの自己紹介のはずがあらぬ方向に思考が飛んで行ってしまいました。

ちなみにアランの場合、人呼んでとなると『大賢者』ではなく様々な呼び名になります。この世界にパルプンテが知られていれば『パルプンテ賢者』になるかもしれないかもしれませんが、現在カール王国の大臣たちなどからはどこで爆発するかわからないという意味でたんに『ぼくだんいわ』と呼ばれていたりします。子連れでふよふよしている時は侍従さんたちからは『子守さん』と呼ばれていたりしますし、他国からの場合は『賢者様』になつていたりと色々な呼ばれ方があります。

「あなたは賢者アラン殿とお見受けします。しかしボクが敵を倒してみせるので助けは必要ありません」

「わかった。勇者なんだったらそれくらい朝飯前だもんね」

「ええ！アバン殿にも負けない力をお見せしましょう！」

自ら北の勇者を名乗ったバウスン將軍の息子であるノヴァくんは「助けはいらない」と言うことなので、アランはそれを承諾し激励の言葉を送って戦いを見守ることにしました。自称であれ他称であれ勇者を名乗っているのならドラゴンたちくらいに負けたりしないだろう…という期待と、本人も自信満々で語る様子から大丈夫だろうと判断したのです。

そこには決して「そういうイベントなのね」という思考があつたわけではないはずで、堅牢な城塞王国の將軍の息子だし、ここまで自身に満ちあふれているのであれば強キヤラ登場イベントなんだろうな…などと思つていたのかは定かではありません。

その結果ノヴァくんは残念ながらドラゴンたちにやられてしまいました。

最初は威勢よく飛び出して獅子奮迅の戦いを見せてくれたのですが、耐久力で勝るドラゴンを前に徐々に失速していき…集中力を欠いてしまいましたが、耐久力で勝るドラゴンが5匹や10匹くらいならきつと勝てたでしょうけれど、数十数百にもなるドラゴンの軍団の前にノヴァくんは力及ばずやられてしまったのです。

巨大な質量でぶつかってこれ吹き飛ばすノヴァくん…炎のプレスで焼かれていくノヴァくん…

ピクリとも身動きせずなすがままとなっているその様子は、兵士たちにまるでこの後



の自分の未来を想像させるのに十分だったのかもしれない。もはや恐慌状態となつてしまつてゐる兵士たちを見ながら「思つていた展開と違うなあ」と首を傾げてゐるアラン。

アランの予想ではノヴァくんが一人でドラゴンたちをなぎ倒して「この世界はボクが守つてみせる！」といった内容だと思つていたのです。自分で「手出し無用」とか「アバンに負けない力を見せてやる」と大言を吐いておいて中ボスでもない雑魚ドラゴンに負けるなど誰が考えるでしょう。

それもそのはず：ノヴァくんはリンガイア王国内であればそれなりの強さを持つていますが、しかしそれは国内での話でしかなかつたのです。勿論本人は努力し剣技を磨き呪文も操れるのですが、如何せん実戦経験というものも不足してゐました。もしノヴァくんがオーザム王国に遠征に行つて戦つたりしていればまた違つたのかもしれないが、今のノヴァくんは『將軍の息子』ということもありお世辞と将来への期待が合わさつたことで『北の勇者』と呼ばれていただけだったので。

やっぱり勇者じゃなかつただけか：と一人納得したアランはアワアワしている兵士の一人にノヴァくんを回収しておくように伝え、襲いかかつてきているドラゴンの軍団を相手にすることにしました。考えてみれば將軍の息子という強キャラっぽい人物が勇んで挑み、そして返り討ちに遭つた敵を倒すというのは王道かもしれません。つまり

ノヴァくんは敵の強さを引き立たせるための役割だったと考えれば辻褃が合うのです。

そんなノヴァくんが聞いたら心が折れそうな事を考えながら、アランは一人でドラゴンの軍団を相手にしていきます。武神流の師匠であるプロキーナは高齢となった為あまり奥義や技を多用することはありませんが、アランは全盛期とも言える力に補助呪文まで駆使しているためある意味打ち放題です。

いかにドラゴンといえど生命を宿す生物である事には変わりありません。そして生きているのであれば武神流最強の奥義はまさしく最強の力を発揮するのです。プロキーナより伝授された閃華裂光拳はホイミを使用する技であり、同じ効果を齎すマホイミと比べると消費する魔法力も微々たるものです。

飛んでいるドラゴンにはトベルーラを使って空中戦闘をしたり、大魔道士マトリフから教えられたベタンという重力呪文を使って地面に叩き落とした後に止めを刺したりとバリエーションに富んだ戦い方で次々とドラゴンを屠っていくアラン。ドラゴンという最強の生物の軍団を相手に一歩も引くことなく戦うその様子はまさしく人々の希望として映っており、兵士たちの恐怖や怯えを取り払ってくれたのです。

「賢者殿に続けえ!」「今こそリンガイアの底力を見せる時だ!」「うおおおおお!」

アランが一人で戦う姿は兵士たちに勇気を与え、遅ればせながら参戦するリンガイアの兵士たち……ここらでもうひと押ししてあげようかと両手に炎と氷のエネルギーを溜

め撃とうとした時にソレはやってきました。

「グルルル……人間共が生意気にも抵抗しよる……だがこの超竜軍団長であ」

「あつ……見よ！これが人の持つ可能性というものだア！」

見た目から他のドラゴンよりも更に大きなドラゴンが羽ばたきながらやってきて、口上を述べている途中でドラゴンの頭が光に飲まれて消え去ってしまいました。ハドラーの時と同じような展開になってしまいました。アランとしても今回は仕方がない事だったのです。

襲い来る数多のドラゴンと戦う兵士たちを鼓舞するためにメドロアの準備をしていたのに、そこでやってきた中ボスつぽいドラゴンによってまた兵士たちの戦う気力を削がれては迷惑でしかありません。そのためさっさと中ボスを消し飛ばして後は有象無象だと思わせることで士気を高めるしかなかったのです。

そして人間の可能性というふわっとした口上が兵士たちに勝鬨の声を上げさせ、文字通り頭を失ったドラゴンたちは散り散りに逃げていつたり討ち取られたりしていきま

## アランの冒険6

「ノヴァ…」

リンガイア王国を襲っていた超竜軍団の軍団長が倒された事でドラゴンたちの脅威が去った王城の一室にて、アランの指示によりいち早く早く兵士によって連れ帰られた物言わぬノヴァくんの遺体と父親であるバウスン将軍が悲しい対面をしていました。

父親1人で育てたせいなのか、それとも戦う力を持ち勇者などと持ち上げられたせいで増長してしまったのか…全身打撲や火傷だらけの姿でもう二度と目を覚まさない息子を見ることになったバウスン将軍の心中は計り知れないものです。

本来は悲しむ暇もなく国を守るため気丈に振る舞わなくてはならない事態です。しかし幸いにもアランがリンガイアを襲っていた敵の親玉を倒してくれたという報告もあり、またすぐに戦わなくてはならない状況ではない事がバウスン将軍に悲しむ時間を与えてくれたのでした。

「あれ？将軍はこんなところで何してるの？」

そこにやってきたのは戦地からルーラで一足先に戻ってきたアランです。アランの

ほうもノヴァくんに用があったのでバウスン將軍がいることに驚いたのです。アランは普通に質問しただけなのですが、悲しみの中にいるバウスン將軍にとつては「將軍ともあるう者が魔王軍の脅威が消え去ったわけでもないのに何を立ち止まっているんだ」と叱咤されているように聞こえています。

息子の死を悲しむ時間すら与えてくれないのか…と口に出したい気持ちではありませんが、アランはカール王国からわざわざ援軍として来てくれてリンガイアを救ってくれた相手のため強くは言えません。そして戻ってきて早々にノヴァくんのもとに来てくれたということは、そうは見えないが少なくとも悼んでくれているのだろうと判断しました。

「アラン殿、この度はリンガイアを救って頂き感謝致します。これで息子も…ノヴァもきつと安心して眠れるでしょう」

「それだけどき、俺からも言うけど將軍からもちゃんとして教えてあげないとダメだよ？できない事を意地張つても良いことないんだからさ」

「それは……一体どういう……？」

バウスン將軍に言いたいことを言つて、ノヴァくんの横に立つアラン。まるでノヴァくんが死んでおらず、今からお説教をするために起こすとも言っているように聞こえます。「有り得ない…」という否定する気持ちと「まさか…」という一筋の希望がバウス

ン將軍の胸にせめぎあう中、アランはノヴァアくんの手をかざし魔法力を込めながら唱えました。

「ザオラル！……失敗か。もいっちょザオラル！まだ起きないのかよ……ザオラル！」

蘇生呪文などバウスン將軍の長い人生でも一度も見つた事がないため黙って見守るしかありませんが、おそらくこんな何度も唱えるようなものではないという事だけはわかります。蘇生という常識を覆すような大呪文を、ホイミなどと同じように連呼して使用するなどアランくらいのものでしょうか。

本来のザオラルとは蘇生の確率は50%以下であり、力及ばず失敗してしまつたのなら「ごめんなさい……あたしの力が足りなくて……」と希望が絶望へと一転するものなのです。しかしアランにとってザオラルとは確率で蘇生するだけの呪文でしかありません。そして1回唱えて失敗したからといって諦めるという常識は持ち合わせていません。

失敗したなら成功するまで何度も使えばそのうち成功するという認識でしかなく、次に失敗したらもうザオリクで生き返らせてやるとバウスン將軍には理解が及ばないような事を考えていました。最初からザオリクを使用しなかったのは、全快で生き返るよりも瀕死で生き返つたほうが説教しやすいだろうという極めて個人的な理由からです。

そんなザオラルは1回目2回目と失敗しましたが、3回目に成功しノヴァアくんは蠟の

ような皮膚に赤みが差し始めました。この奇跡を目の当たりにしたパウスン将軍は信じられないという表情でノヴァくんに近づき…息をして心臓が動いていることを確かめると泣き崩れてしまったのです。戦死した息子との無言の対面から一転し、今は目を覚まさないまでも生きているのは間違いありません。

「ああ…アラン殿…私は貴殿に何とお礼を申し上げればよいのか…」

「お礼はいいからちゃんと子育てしなくちゃダメだよ？ たぶんだけど…過保護なくらいでちょうどいいんだからさ」

子供がいないのになぜか偉そうに子育てを語るアラン。一応身近にディーノくんやシンシア王女がいるので間違つてはいないのでしよう。もし彼らが飛び出していこうものならアバンもバランも間違いないとわかるはずですが。そしてアランだつて止めるか止めないかはその時になつてみないとわかりませんが、止めない場合は一緒に付いていくという自信があります。

ついでにザメハでノヴァくんを起こそうかと思つていたのですが、パウスン将軍から「少しノヴァと2人にしてほしい」と言われてしまったので部屋を後にすることにしました。きつと他人からとやかく言われるよりも親からお説教されたほうがノヴァくんも理解してくれるでしょう。

リンガイアでの仕事も終わり次はアルキード王国に向かおうとしていたアランでし

たが、バウスン將軍をはじめ兵士たちに強く引き止められ一泊することになりました。そして夕食には戦時とは思えぬほどに豪華な食事を提供され、見る人見る人がアランにお礼を言いその偉業を称賛してきました。

その翌日……アランはなぜカリンガイア王国で『神々の遣わした聖者』などと呼ばれるようになっていました。

どうやらノヴァアくんの蘇生は既に多くの者たちに知らされているらしく、戦場に立ち多くの兵士を癒やし、皆が希望としていた北の勇者が敗れた相手であるドラゴンの軍団という最強の生物たちを相手に打ち破っただけでなく……無念の内に倒れた皆の希望を蘇らせるという奇跡の御業まで起こしてしまっただけだから当然かもしれない。

そしてそれは噂レベルの話ではなく……多くの兵士たちが戦地でノヴァアくんの死を目撃しており、更に生き返ったノヴァアくんを見ることになったのですから疑う余地がありませんでした。彼らにとってアランはまさしく救世主のような存在となってしまう、何やら祈られたり拜まれたりまでするようになってしまったのです。

これに困ったのは言うまでもなくアランです。語られている事に何も間違いはないので訂正する事もないのですが、お礼を言われる事はあっても信仰されるとは思っていませんでした。「そりやイベント戦で死んだままだったはずのノヴァアくんを生き返らせたけどさ……」と戸惑いを隠せません。このままだとハーゴンの代わりにアラン教団と



かできるんだろうか……？などと考えてしまうあたりにアランがかなり混乱している事がわかります。そして教主など柄じゃない上に祭り上げられても困ると考えたアランが捻り出した答えは……遠い地にいる友人への丸投げでした。

「みんな！ひとまず魔王軍がいなくなつてノヴァくんが生き返つて嬉しいのはわかる！でもこれは俺だけのおかげじゃないんだ！」

「アラン殿……それはどういう……？」

「俺が……まで出来たのは……カールのお姫様、フローラ女王のおかげなんだよ。アバンが勇者として魔王を倒せたのも、リングアが救われたのも、全部全部フローラ女王のおかげなんだ」

「おお……カール王国の女王様はそれほどまでに……」

「そう！すべてカール王国のフローラ女王のおかげなんだよ！」

アランの言い分だとアバンの力もアランの力も全部フローラ女王が与えたかのような感じになっていますが、当然の事ながらそんな事はまったくありません。しかしこのままだと信仰されそうだし余計な問題になりそうだと悩んだアランが出した答えは『すべてフローラ女王のおかげ』という捉え方によつてはアラン自身がフローラ女王を信仰していきそうな内容でした。

これはアランなりに考えて、他国の女王ならさすがに信仰の対象にしないだろう……と

いう考えと、恩義を感じるならカール王国にしてね？という国の事を考えた結果なので。これなら平和な世の中になったとしてもカールとリングイアは仲良くやっていくだろうと善意で出したのです。

こうしてアランはリングイアの人々に自分を抜いた様々な事を大袈裟に話し、それ聞いた者たちがフローラ女王に畏敬の念を送っている中そそくさとリングイア王国を後にするのでした。

…

…

…

オーザム王国とリングイア王国を巡ってきた次にやってきたのはアルキード王国です。

こちらでもモンスターと激闘を繰り返しているのかと思っていたアランですが、魔王軍はモンスターの手が足りないのかそこまで大規模に侵略してきていない様子でした。そのため今も出入り禁止状態であるアランは門前払いを受けたので、襲われてないならソアラ王女も安心だろうとそのまま引き返すことにしたのです。

「ただいまー」

「お疲れ様です。その様子だと問題はなかったようですね」

アルキード王国を早々に出てカール王国の王城に戻ってきたアランを出迎えてくれたのは留守番という名でカールの守護を担っていたアバンでした。カール王国もアルキード王国のように侵略がなかったら良かったのですが、さすがに魔王を倒したアバンの待ち受ける国だけあってシャドーやゴーストなど暗黒闘気の生命体が多く襲つてきたそうでした。

残念ながらそれらの親玉を倒すことはできなかつたらしく、また言葉を交わすことなく撤退したせいで情報も得られなかつたのだとアバンは悔しげに語りました。そしてアランのほうの話聞き、やはり同じように敵の本拠地などといった情報が得られなかつたという事で残りに期待することになるのです。

その後アランの帰還からそれほどかからず全員が王城へと戻ってきます。まずバランとディーノくんが戻ってきて、その後シンシア王女とヒュンケルがオマケと一緒に戻ってきて事の経緯を説明することになりました。

バランとディーノくんはパプニカ王国へと出向いており、アンデッドモンスターを主体とした軍団が襲っていたのでそれを倒してきたという事でした。その際にパプニカ

王国の王城に招かれ王様や王女様とも話し「ぜひ礼を」と言われたようですが、それはカール王国に言ってくれと伝えたらなぜか害虫を嘔み潰したような表情をしている者もいたそうで面倒事を察したバランが早々に城を出てきたそうです。

なぜそんな表情をしている者がいたのかと言えば、それは当然ながらアランのせいです。

パプニカ王国といえば魔王ハドラーの居城であった地底魔城がある国です。当時敵の本拠地があったのですから国の被害もそれ相応にありました。それは運が悪かったとしか言いようのない事なのですが、それを倒した勇者アバン一行に賢者を名乗る人物がいた事が一因となります。

それまでは世間的には『パプニカ＝賢者の国』と思われるほど数多く賢者を輩出しており、パプニカ王国にも当然その自負があります。そのためパプニカ王国の賢者たちは「自分たちがアバン殿と一緒に戦っていても魔王を打ち倒せた」という考えを持っており、そのプライド故に他国の自称賢者の事はあまり快く思っていませんでした。しかしそれでも魔王討伐後にアランがやってきた時は内心はともかく普通に接していたのです。

ところがその燦る嫉妬の炎に油を注いだのが大魔道士マトリフです。彼は宮廷魔道士となった際に自分たちでも共に戦えたと虚勢を張る者たちを前にして「お前たちじゃ

アランの足元にも及ばねえよ」というパプニカの賢者たちの自尊心を傷つけるような事を普通に言っており、パプニカの重臣たちからどころか周囲の賢者たちからも疎まれていたりしていました。

最終的に色々と面倒になっていたマトリフはアランと賢者たちを立ち合わせる事にしたのです。それでも正々堂々と1対1で手合わせしようとしていたのに「お前たちが1人でアイツに勝てるわけねえだろ。この大魔道士マトリフ様がすべてを叩き込んだ男だぞ」とこれまたマトリフが菌に衣着せぬ物言いで煽るものですから、パプニカの賢者は頭に血が上りきってしまいました。

そしてマトリフによってそんなゴタゴタなど何も知らないアランが呼び出され、他国の賢者との手合わせということで話が広がり国王や王女までもが観戦する大きな催しになっていったのです。賢者の才を持ち『賢者の卵』としてすでに知られている王女様と一緒にいずれ『三賢者』と呼ばれるようになるかもしれない者たちも見ていたのかは定かではありませんが、そんな中でアランは相手を立てるといふ事などせずにすべてを薙ぎ払ってしまいました。

マトリフからの「遠慮なんてせずにやっちまえ」という言葉をそのまま実行したアラン。本人的にはまったく興味の外なのですが、対外的に『カールの賢者のほうがパプニカの賢者よりも上』という事を知らしめたのです。そしてこの出来事を丁度よいキツカ

ケとしてマトリフは宮廷魔道士を辞め、この一連の出来事によりパプニカ王国は大魔道士を手放し賢者の質もカール王国より劣っているという事を認識する苦い思い出になつてしまつたのでした。

マトリフとしては頼まれて引き受けてやったというのに、魔物の危険がなくなつた途端に裏でコソコソと相手を引きずり落とすような陰險な大臣たちに辟易していたのです。そのため仮にアランがいなくても結局のところそう長く王城にいることはなかつたでしょう。

それに悪い話ばかりでもありません。

アランがカール王国の賢者としてその力を見せつけた事で、パプニカ国内で権力闘争をしている者たちの考えにも影響が出ていたのです。それはつまり『あまり強引な策謀で地位を奪つてもカール王国が介入してくるかもしれない』という事です。各国の重臣であっても誰もが王族に忠誠を誓っているわけではありません。中には自分が王に……という野心を秘めている者だつて存在するのは当然です。

普通ならば内乱で済む話なので他国が手を出す事などないのですが、見せつけられた大きな力と行動は大丈夫だろうという楽観的な思考を許しませんでした。通常王族まで観覧するような催し物の場合はそれぞれの国に配慮しつつ立ち回るものです。今回であればパプニカで行われパプニカの王族が見ているのだから、多対一であれカール王

国のほうが負けるのが筋だというのが重臣たちの考えでした。

そして最後に「さすが魔王を倒した賢者殿ですね。これだけの人数を相手に素晴らしき動きでしたよ。こちらも良い経験になりました」「いえいえ、パプニカの賢者さんたちもよく鍛えていらつしやる。さすが賢者の国と呼ばれるだけありますね」とお互いを称え合って終わるものなのです。

ところが大魔道士の連れてきた賢者はそんな茶番に興味ないとばかりに圧倒的な力の差を見せつけてくれたのです。それはパプニカの大臣たちにとってはカール王国がパプニカ王国を下に見ているということに他なりません。つまり内輪で揉めている場合ではないのです。もしかしたら将来『対カールの賢者対策』としてキラーマシンのな物が登場するかもしれませんが、パプニカ王国の大臣たちはひとまず水面下の争いから対アランへとシフトしていったのでした。

しかしそれらは一部の固執した人間の話であり、幼い子供であった王女様や将来を期待されている側近の子供たちにどういった影響を及ぼしたのかはわかりません。自らが持っていた賢者像を壊され、近接格闘もできる賢者を目指すのかは本人たち次第でしょう。マトリフもあえてアランが武神流を使いこなすとは言わなかったのです。このあたりがマトリフの性格が出ているのかもしれませんが。

パプニカ王国とそんな過去があった事など知る由もないバランとディーノくんはパ

プニカ城を出た後「マトリフも心配だから会いに行きたい」という優しいディーノくんのお願いを叶えるためバルジ島のほうまで足を伸ばしてきたという事でした。

アランに連れられてシンシア王女とディーノくんは大魔道士マトリフとも面識がありません。しかしバランとは初対面だったため、マトリフは今まで普通の王族だと思っていたディーノくんの正体をそこで知ることになり驚愕するのです。とはいえ、だからといって何が変わるわけでもないので普通に「頑張れよ」と応援されただけです。

マトリフにとってアバンの子であるシンシア王女とロカとレイラの子であるマアムは孫みたいなものです。そこにもう一人ディーノくんが加わったところで「ヤンチャ坊主が増えたな」程度の男の子の孫ができたようなものなのでした。

パプニカを後にした次はテラン王国へと向かった2人。テラン王国は侵略価値が無さそうではあるのですが、アルキード王国を飛び出した後にバランとソアラ王女が過ごしていた場所なだけあって荒らされたくないという気持ちもあり念のため向かうことにしていたのでした。ディーノくんに自身の生まれた場所を見せてあげたいという事もあったのでしょう。そこでついだとばかりに湖の底にある竜の騎士の神殿に立ち寄り、竜の騎士が子を授かった事を報告したりしてからカール王国に戻ってきたのです。

問題はヒュンケルとシンシア王女のペアのほうでした。



この2人が担当したのはロモス王国とベンガーナ王国です。ロモス王国にはネイル村があり何度も足を運んだ事のあるシンシア王女のルーラで行けるからという理由で選ばれた場所でした。

ベンガーナ王国のほうはカール王国から近いという理由もありましたが、バラント・デイーノくんペアよりも『わかりやすい王族』であるシンシア王女がいたほうがベンガーナの国王には良いだろうという判断もあります。他国に比べ商業に力を入れている国なのですが、商業が栄えれば経済が回り軍事力もそれなりにあります。

自身の国の力に絶対の自信を持っているためなのか、ベンガーナの国王は少々傲慢な性格をしているのです。そのため説明しても信じてもらえない竜の騎士のバラントやアルキード王国でどのような扱いになっているのかわからないデイーノくんよりも、カール王国の王女であるシンシア王女とその護衛のヒュンケルといったペアのほうが話が通りやすいのでした。

カール王国の王女で勇者アバンとフローラ女王の娘であるシンシア王女とヒュンケルはすぐに王城へと招かれ国王と対談したのですが、国王は「魔王軍などベンガーナの最新兵器で蹴散らしてくれろ」と聞く耳を持ちません。現状魔王軍のモンスタースターが襲ってきていても撃退できているため助力は必要ないという判断だったのです。

自国の力にそこまで自信があるのなら別に問題ないかな…という事で無理に力を貸そうとは思わない2人は次のロモス王国に向かうことにしました。お人好しであれば食い下がって「みんなで協力して戦うべき」と説くのですが「戦えるって言うんなら無理に手伝う必要ないよ」というアランの適材適所の教えを受けているため、助けを求めてきたらルーラで行けばいいという判断を下したのです。

そしてこの判断はベンガーナを襲っている妖魔士団モンスターが悪魔族が多く気持ち悪かったため、シンシア王女が拒絶して戦いたがらなかったからではありません。「戦略的判断による合理的な結論なのです…」という事を引きつった顔で述べるシンシア王女をヒュンケルは見逃しませんでした…

そのままヒュンケルを連れてロモス王国へと向かったシンシア王女は百獣魔団と戦うことになりました。ロモスの王城で救援に来た旨を告げればそのまま国王と面会することになり、そしてベンガーナとは違いすぐに助勢の申し出は受け入れられました。シンシア王女の名はロモス国王も『カール女王第一子誕生』の報を受けている事もあり知っていましたが、それ以外にも以前アランがこの国にやってきた時にも聞かされているのです。

しかもなぜかこの国の兵士たちと『うちの子が一番可愛い』論争を繰り広げていたらしく、そこから飛び火してネイル村のマームにまで話が及んでいたりとロモス国王とし

ても微笑ましい戦いに頬が緩んでいた事を昨日の事のように思い出していました。そこにはなぜかカール王国の元騎士団長がいたという話もありますが真実はわかりません。

まさかそんな事を話しているとは思わなかったシンシア王女は赤面していましたが

： そんな穏やかな会談を終え、2人は森の多い国土を手当たり次第に飛び回りモンスタ―退治を始めました。それにより2人を手強いと見たのか軍団長を名乗るリザードマンが現れ、言葉を交わした結果何か通ずるものがあつたのかヒュンケルが1人で戦うという事になります。

戦いの結果ヒュンケルが勝つたのですが、その武人氣質を気に入つたのか何なのか：ヒュンケルはクロコダインと名乗る軍団長に投降を呼びかけました。そんな様子を見ていたシンシア王女はなぜかそこにいたザボエラと呼ばれる魔族に人質にされそうになり、そんな卑怯な手段を講じた魔族に憤りを感じたクロコダインが魔王軍を離反したりと紆余曲折あつたとの事です。

つまりシンシア王女とヒュンケルの2人がカール王城に戻ってきたのではなく：クロコダインも一緒に連れ帰ってきたのでした。

ちなみにクロコダインを見た一同はすぐさま戦闘態勢に入りましたがシンシア王女とヒュンケルがそれを止めたり、またまた通ずるものがあつたのかバランやアバンは一定の理解を示したりと互いを労う前にバタバタしており忙しそうな一行です。アランは「なるほど、これで敵の本拠地を知る事になるのか…」と相変わらずゲーム脳で解釈しており、クロコダインを戦力ではなく情報源として見えています。

そして「それならスライムとかもう少し可愛いモンスターでも良かったんじゃないかな」などと下らない事を考えている間に、アバンがクロコダインから魔王軍の情報を引き出してきてくれました。それによつてクロコダインから齎されたのは6つの軍団が組織されており、リンガイア王国の南側でテラン王国の東側に位置するギルドメイン山脈の奥地に鬼岩城と呼ばれる本拠地があるという貴重な情報でした。

これによりアランたちは敵の本拠地である鬼岩城に乗り込む事を決めたのですが、しかし魔王であつたハドラーから続く伝統なのか、今回はまさか敵の本拠地がやつて来てくれるとは思ひもせませんでした。

## アランの冒険7

かつて勇者アバンに破れ、大魔王バーンの力によつて復活を遂げたハドラー。

ハドラーは魔軍司令として新たに与えられた力と集結したモンスターたちによつて今度こそ地上を侵略するために、そして自分を倒した勇者アバンへ復讐する事を決めていました。6つの軍団とそれを指揮する軍団長たち……かつての魔王軍幹部よりも更に大きな力はハドラーに自信を与え、そしてその己の力を過信しすぎた行動は新生魔王軍を指揮することも、アバンと戦うという事さえ果たされずに消えていくこととなります。

これにより魔王軍が混乱に陥つたのは言うまでもありません。

ハドラーがカール王国を訪れ返り討ちに遭い、それによりハドラーに禁呪法で生み出された軍団長の一角であった氷炎将軍フレイザードが消滅してしまいました。思つてもみない形で司令塔と軍団長を失つた魔王軍……更に各国を侵略していた軍勢も次々と撃破されてしまい、軍団長として残つたのはミストバーンと呼ばれるトンガリローブとザボエラと呼ばれる魔族の老人のみとなつてしまいます。

更にザボエラから百獣魔団を指揮していたクロコダインの裏切りを聞き、鬼岩城の場所も人間たちに知られただろうと判断した大魔王バーン。自身に刃が届き得ると考える竜の騎士やハドラーを倒した人間の勇者などが集まるカール王国を鬼岩城で襲わせる事にしました。

当然ながら大魔王は冥竜王ヴェルザーを倒した竜の騎士の存在を甘く見てはいません。そして本来であればそんな大魔王の策謀によって竜の騎士は自身の配下として動いていたはずだったのです。

当時、冥竜王ヴェルザーを打ち倒した当代竜の騎士バランは瀕死の重傷を負って地上へと戻っていました。その結末を知った大魔王が瀕死とはいえどそのまま放っておくわけもなく、自身の秘める計画の邪魔になるであろう唯一の男を打ち倒して懸念を晴らすとするのは自然な事です。

しかし大魔王が見つけた時、バランは1人の人間に出会いまるで人間のように生活していたのです。

もちろん傷が癒えきっていない今ならすぐに討ち倒すことは可能だったでしょう。しかし大魔王にとって神々の造り出した兵器といえど、冥竜王を倒すほどの力を消してしまうのは惜しくも感じたのでした。

これにより大魔王の中で1つの計画が閃く事になります。それは『人間への失望をもつて神々の兵器に地上を焼き払わせる』というものでした。大魔王にとって地上など魔界の蓋程度にしか考えておらず、その邪魔な蓋を神々の作り上げた兵器である竜の騎士に取り払わせるといふ余興を思いついたのです。

それと同時に自身に届き得る力を持つ男を配下に収めることができるという事にもなり、近い将来眠りから醒めるであろうハドラーと合わせて駒として利用するには十分な価値を持っています。そして当然ながらその計画は順調に進みました。人間の心に不信という種を蒔き、そしてその不和の心が成長すれば周囲へと伝染していくのに時間はかかりませんでした。

竜の騎士が人間たちのもとを離れようとした時は声のかけ時かと考えましたが、その後その国の王女と共に人里離れた森の中でまるで人間の父親の真似事をしている様子は大魔王の目には滑稽な演目には見えません。しかしそれは大魔王の計画を次の段階へと進める仕込みができた事にもなりました。王女を連れ去った国に蒔いた種は勝手に憎悪という花を咲かせ、後は人間の醜さを見せつけるだけで良かったのです。

しかしここで大魔王も予想し得ない事態が起こる事になります。

ある日、たまたま訪れていたという人間が突然竜の騎士たちを連れて行ってしまったのでした。これには竜の騎士を引き入れるためにそれなりに緻密な計画を立て、遂行し

ていた大魔王もビックリの展開です。そして更に困った事に改めて人間たちに不和の種を蒔こうにも、ハドラーを倒したという地上の勇者たちがいる国にそこまでの危険を冒したとしても成功する確率が高くないのはわかりきったことでした

アバンとしては仮に突然大臣が「あの男は魔王軍の生き残りかもしれない」などと言い出してもそれを真に受けるような事はありません。竜の騎士の話も聞いていますし、バランの内に秘める優しさやソアラ王女を大切にする様子を見ればそんな疑いなど出るはずもないのです。

それどころかそんな話がアランの耳に入ってしまったら「メダパニでもかかっているのか？とりあえず頭冷やせ」などと言ってマヒヤドで氷漬けにしてしまいかねません。

これにより大魔王が余興の1つであり神々の兵器を手中に収めるといふ計画は頓挫しました。

神々への痛烈な皮肉として竜の騎士を配下にしておきたかったのは事実ですしその力は決して侮れるものではないとはいえ、大魔王は自分が竜の騎士に敗れるなどと思ってもいません。

そして確実な方法として自身の配下であるミストバーンに指揮権を与え鬼岩城を動かし、更には軍団長が敗れた事で散り散りとなっていた配下のモンスターたちも集め総



攻撃をかけるという判断を下したのです。如何に竜の騎士といえど背後の人間たちを守りながら戦う事は容易ではないでしょう。ヴェルザーとの戦いの時は魔界が戦地であり、ひたすら敵を倒すだけで良かった事も竜の騎士が勝利を収めた一つの要因であると大魔王は考えていました。

事実もしヴェルザーやその配下の魔界のモンスターたちが地上に出てきて暴れていた場合はハドラーなど簡単に飲み込まれてしまっていたでしょう。そしてヴェルザーの軍勢が地上全土を戦場とした場合、竜の騎士はその強大な力を好き勝手に振るうわけにはいきません。人間たちを守り、そして熾烈な戦いに巻き込まぬようにしなければならぬという大きな枷がかかる事になってしまふのです。そうなってしまう場合は竜の騎士であろうとヴェルザーが負けることはなかったであろうというのが大魔王の大凡の見解でした。

翻ってそれならば現在はどうなのか…戯れであれ組織した軍団が半壊の状態になつていようと戦場は魔界ではなく地上であり、気にかけるべき竜の騎士は背中に守るべき者たちが数多く存在している状況です。

そのまま人間たちを守りながら力尽きるも良し、人間の勇者らと共に襲いかかる脅威を跳ね返し自分に挑むも良し…大きな節目となるこの戦いの行く末を、大魔王は遠く離

れた地で楽しみに眺めているのでした。

…

…

…

「報告します！各地でモンスターたちの襲撃が活発化しているとの事です！」

「テランの方向から巨大な物体がこちらに向かってくるという事です！」

「各地より伝令！」「海からもモンスターたちが…」「町が…」「村が…」

クロコダインから敵の本拠地を聞き、かつての地底魔城の時のように乗り込もうとしていたアバンたちへ伝令を受けた兵士たちが次々とやってきてモンスターの侵攻を報告してきました。それらはかつてハドラー率いる魔王軍の襲撃よりも、そして今回のカール王国を襲っていた襲撃よりも範囲も規模も遥かに大きなものだったのです。

海からも山からも、どこからともなく現れ襲いかかる多種多様なモンスターたち。わかりやすいその軍勢を目にした人々は祈るしか術を持たず、その祈りも届かないだろうと思わせるだけの視覚効果を持っていました。

「城下や近隣の人たちを城に集めてください！そして騎士団は城の護衛を！決して深追

いせず防衛に専念してください！」

アバンはすぐに城下町周辺の人々を城へと集める事にし、そして騎士団には城の護衛を通達します。しかし普通に考えれば籠城だと思われるその判断は、決して最後の抵抗などではなく反撃のための準備だったのです。

現在カール王国騎士団はロカの後任としてロカの前の騎士団長だったコバルトの息子のホルキンスが務めています。彼は剣の腕だけであればバランやヒュンケルとも打ち合える剣豪です。知名度で言えばアバンやアランがずば抜けているためそこまで知られているわけではありませんが、ホルキンスもまた騎士団を統率し国を守るという覚悟を持った戦士だったのです。そのためアバンの判断の真意をしっかりと理解しておりながら、それでも尚アバンに言い募る若さも持っていたのでした。

「アバン殿、騎士団各位には王城周辺の守護を言い渡してあります。そして私もお供させてください！」

「いいえ、ホルキンス君には守りの要となってもありません。魔王軍は私たちに任せてください」

「しかし……！」

ホルキンスはロカともアバンとも幼少の頃から面識がありました。ロカの前に騎士団長を務めていたコバルトが幼いホルキンスに訓練をさせていたため会う機会はそこ

そこあったのです。そんな幼少の頃に魔王を倒すために旅に出たアバンとロカ（+アラ  
ン）を羨望の眼差しで見ているのは子供だからなのか男の子だからなのか……

そしてロカの勇退と共に自身が騎士団長となり、更には魔王軍が攻めてきて勇者アバ  
ンは打つて出ると言うのですから共に戦いたいと思うのは仕方ない事なのでしょう。

ホルキンスが知る限りアバンの周りには賢者として共に魔王を倒したアランや、子供  
ながらに光るものを持っておりこの10年で見違えるほどの剣腕を身に着けたヒュン  
ケルがいます。それに何より豪剣だけでなく伝説の雷の呪文まで使いこなす……一体ど  
う修行すれば辿り着く事ができるのかわからないほどの戦闘力を持ったバランもいる  
のです。

ホルキンスも当然バランとは何度も剣を合わせており、バランがどこまで高みにいる  
のかわかりたくなったホルキンスが「本気を見せてほしい」と頼んだこともあったのです。  
その結果バランの実力を自分の身をもって知ることができ、危うく命を落とすところ  
だったという一幕もありました。

ここで言う『本気』とは『全力』とは違うため竜の騎士のマックスバトルフォームま  
で見せたわけではありません。そしてバランも手合わせしているホルキンスを相手に  
殺傷能力の高い技や呪文を使ったりしないため、ホルキンスの希望に完全には沿わない  
と理解しているながらもライデインを纏わせた一撃を見せたのでした。

更にはそんなアバンやバランの子供たちもまた、ホルキンスから見ても有り得ないと思わせるほどの成長を見せています。しかしそれでも絶対数で劣る以上少しでも力になりたい：それもまたホルキンスが秘める本当の気持ちに変わりありませんでした。

「君の気持ちはよくわかっていきます。しかし君まで抜けてしまつては騎士団の皆さんに不安な気持ちが生まれてしまうでしょう。どうかフローラ様やみんなを守つてくれませんか？」

ここまで言われてしまつてはホルキンスも引き下がるしかありません。事実、騎士団長が不在となつてしまえば騎士団たちに影響は少なからず出てしまう事を理解しているのです。とはいえ仮にホルキンスも迎撃に出た場合でもフローラ女王が前に出るだけなので、実はカール王国は土台のしっかりした上に簡単には崩せない強国だったりします。

王女時代から病床の国王に代わり国の柱として支え続けてきたフローラ女王の現役(?)を知る騎士たちもまだまだ在籍していますし、そこに魔王を倒し王女と一緒になつた勇者。更にはその勇者と共に魔王を倒した賢者がいるというのは騎士たちだけでなく国民たちにとつても「まだこの世界は終わりじゃない」と思わせるには十分な希望なのでした。

…

…

…

「さて、みなさん聞いていたと思いますが…どうやら魔王軍はこの国に総攻撃をかけてきたようですね」

「この国に集中するという事は、他の国は手薄になるという事…アバン、あなたの考えていた通りになりましたね」

騎士団のほうは慌ただしく城下の人々を誘導したり城を守るために動き回っている中、アバンたちはこれからの動きを話し合う事にしました。そしてアバンが話を切り出したと同時に、フローラ女王からアバンの予想通りだという旨が告げられます。

そうです。この形勢となることを見越してアバンは作戦を立てていたのでした。

かつてアバンはハドラーが魔王として世界を侵略していた際に、数百年に1度の皆既日食のその時を狙ってハドラーを誘き寄せた事がありました。当時はまだ自身の必殺剣が完成しておらず凍れる時間の秘法を保険としていたための作戦でしたが、その日その時間を指定し魔王ハドラーとの決戦に及ぶ事ができたのはアバンの知謀あつての事です。

今現在世界中の人々が一丸となり魔王軍と渡り合えば良いのですが、現実問題としてそう簡単な事ではありません。そして各国にアバンやアランやバランといった1人で戦局を左右できるような人物など都合良く存在するはずもないのです。信頼できる仲間としてはパプニカにはマトリフが、ロモスにはブロキーナやロカ夫妻などがいますが、彼らがその力を十二分に發揮するためには同等の力を持った仲間がフォローする必要がありました。

そこでアバンは幸運にもカール王国に揃った頼れる仲間たちに賭けることにしたのです。

共に戦った仲間でありその強さは蘇ったハドラーすら瞬殺してしまったアラン、アランが偶然にも連れてきた伝説の竜の騎士バラン、逞しく成長してくれた剣士ヒュンケル、自身の子でありアランによって武神流の賢者という強さを持つシンシア王女、バランの子であり戦闘力と言えば十分な強さを持っているディーノくん：アバンは仲間たちを信じて各国の救援と同時に魔王軍にとってそれだけの脅威が集まっているカール王国を釣り餌としたのでした。

当然魔王軍のほうはそれだけの戦力が集まっているカール王国をただの1軍団でどうこうできるとは思わないでしょう。それなりの戦力か、もしくは大魔王自身を誘き寄せる事ができるだろうとアバンは考えたのです。自国に大魔王やそれだけの数のモン

スターたちを引き込むというのはかなり危険な判断であり、場合によっては自国を滅ぼすつもりだと言われても仕方ないほどの決断でした。

あまりにもハイリスクな事に悩むアバンでしたが、その背中を優しく押したのは伴侶でありカール王国の王でもあるフローラ女王でした。自国のみを守るのであればとても簡単な事かもしれませんが、これは世界の存亡を懸けた戦いです。そこに自分の国さえ良ければというような考えはフローラ女王にはありません。共に戦う仲間を信じているからこそ、夫であるアバンの事を信じているからこそフローラ女王には迷いなどなかったのです。

何よりもその作戦を皆に話した際、誰も反対どころか弱音や心配の声すらも聞こえてきませんでした。「そのほうが余計な心配が減ってちようど良い」「纏めて叩き潰せば良いのだからウロチヨロされるより楽だな」といった具合に誰もが自信の笑みを浮かべているくらいでした。一緒に話を聞いていた子供たちですら心配そうな顔を見せないのは一体誰の影響なのでしょう。

「ところでお父様、先程からアランが見当たらないのですが…」

「アランですか…」

この作戦を考えた時の事を思い出していた中でシンシア女王によってその場にアランがいない事を問われますが、これはアバンの作戦ではありません。アバンが考えた作



戦ではアランとシンシア王女とディーノくんを1つのチームにするつもりだったので。各国を回っていたペアでも良かったのですが、バランもヒュンケルも子供たちを気にしながら戦うよりも単独のほうが力を発揮できるという判断でした。

そしてシンシア王女もディーノくんもアランと一緒にしかけてはモンスターを倒してくるといふ事を繰り返していたため、3人一緒のほうが子供たちも思い切り戦えるだろうという配慮でもありました。アランがよく言っている「怪我しても死んでも大丈夫だから思いっきりやってみな」といふ言葉は子供たちにとつて「何があっても大丈夫」といふ安心を齎し持てる力を存分に発揮できるのでしよう。本当に死なれると困るのですが…と思いつながらもアバンはそれを激励だと考えているので、アランが本当に回復呪文も蘇生呪文もあるから言葉通りに『怪我をしても死んでも大丈夫』だと思つて言っているとは見抜けませんでした。

これはアランが蘇生呪文を使う機会が少なくアバンたちがそれを見ることがなかったのが原因です。基本的にゲーム脳でパーティメンバーくらいしか蘇らせるつもりのないアランは、仮に立ち寄った町や村で死者が出たとしても「モンスターにやられちゃったのか」くらいにしか思いません。「まあ世界征服されそうになつて世界だしね」と割り切つているというよりもそういう世界だと認識している弊害がありました。

アバンや口力などが戦いの中で死ぬ事があればすぐに蘇生呪文で叩き起こしたので

すが、幸運にも魔王ハドラーの時も今回もアランの仲間たちに死者は出ていないため見せるような機会はなかったのです。

そしてだからこそリンガイア王国でノヴァくんを蘇らせた事が大きな影響を及ぼすのですが、占い師でも預言者でもないアバンはそんな事まで知る事はできないのでした。

## アランの冒険8

「ピギイー」「グオオオオオオ……」「ギャツ！」

「……よし、次いこうつと」

アバンがカール王国を餌とした『魔王軍引き寄せ一網打尽作戦』を展開していた中、アランは「だったら俺は西側のいつぱいいるヤツ退治してくるね」と止められる間もなく飛び出して行き、作戦通り集まってきたモンスターたちを片っ端から打ち倒していました。これは独断専行という理由ではなく、アランは自分が今どこまで戦えるのかの確認や試したい事などを行っていたのです。

とはいえアランの頭の中では今回の襲撃で大魔王が直接やって来るとは考えていません。

ラスボスである大魔王が「愚かな人間どもよ……漆黒の闇に消えるがいい」などと言いながらわざわざやって来られても拍子抜けというものです。そんなフットワークの軽い大魔王なんて大魔王じゃない、という様式美的な認識を抱いているアランにとってハドラーは魔王足り得なかったのかもしれない。

過去にハドラーはアバンに向かつて「世界の半分やるから部下になれ」と言った事もありました。言っている事はとても立派な魔王だっただけにそこは良かったのですが、わざわざやってきて自己アピール過剰なのは頂けない：などと思われていたとは、既にこの世にいないハドラーも思いもしないでしよう。

モンスターを打ち倒しつつもそんな他愛も無い事を考えるアラン：現在カール王国に向かつて東側からやってきているという巨大ゴーレムと戦うことも考えたのですが、さすがにここはアバンの出番だろ：という考えの結果、憤ましく辞退することにしたのでした。

カール王国に迫る危機：それを覆すのは魔王を倒した勇者だった。そうなるのがベストで、その期待に応えてこそ勇者なのです。そこに仲間であるとしても賢者が出しゃばってしまっただけはいけません。妻であるフローラ女王だっけと見たことのないアバンの勇姿を見たいはずですし、子供たちだっけ勇者の戦いというものを見たがっているはずです。

かつてアバンは言っていました。大地を斬り、海を斬り、空を斬り、そしてすべてを斬るのがアバンストラッシュだ：つまり今こそアバンストラッシュの出番ということです。アバンストラッシュが襲い来る巨大ゴーレムを斬り裂き、人々の未来を切り開くのです。

まさかアバンも自分を巨大ゴーレムと戦わせるために、アランが西側のモンスターを一掃しているとは思いもしないでしょう。アラン本人的には善意で良いところを譲ってあげているつもりなのですが、このアランの多々発生する丸投げという名の信頼は重くないのでしょうか：

そんな理由で最後の戦いに向けて大量に襲い来るモンスターを相手に戦うことで、アランは自身の大凡のレベルやステータスなどの目安を知ろうとも考えていました。フローラ女王だけでなく、各国を巡るついでに「次のレベルまでの経験値わかる？」と聞いて回っていたアラン：その時には全員から漏れなく「こいつは何を言っているんだ？」という目を向けられることになり、アランはアランで「使えない王様だな：」と失礼極まりない事を感じたことになり、アランはアランで「どっちもどっちかもしれません。」

しかし王様たちの反応は至極当然のものであり、ある意味とてもふわつとした回答ながらもきちんと答えたフローラ女王がすごいのです。

結局どの国でもそういう結果だったため、アランは最終的に自分で大体のレベルを計る事にしたのでした。少なくともイオナズンもザオリクも使用できる事は確認しているのです、アランの考えではレベル38を超えているのは間違いありません。更にヨミカイン遺跡で引きこもって修行していたり、アバンが固まっている間マトリフから地獄の特訓を受けたりしているので魔法力の扱いについては右に出る者はいない熟練度を

持っていました。

そこに拳聖ブロキーナから武神流を余す事なく伝授されており、しかも魔王を倒して平和な世界となつてからもディーノくんやシンシア王女を巻き込んでまでモンスターと戦う機会を作っていたため腕が鈍ることはありません。アバンやヒュンケルも含め自己研鑽では考えられないほどのレベルアップを平和になつても更に行う様子は、事情を知らなければ他国に攻め入るつもりなのかと勘ぐられても仕方ないほどでした。

それもこれもアランの知らない設定がたくさん出てきていたのが原因です。知らない呪文があつたり闘気などの知らない戦い方があつたりしたため『もしかしたら8ピツトの世界では描ききれなかつただけで、実は練に練り込まれた壮大な詳細設定があるのかな?』と明後日の方向に解釈していました。

ちなみにこの世界ではモンスターを倒してもお金を落とすことがないため、魔王討伐の頃から今に至るまで金銭的なものはすべてアバンに寄生していたのは現在進行系なのに良い思い出です。隠居状態のマトリフとブロキーナも合わせて考えると勇者パーティは大半がお金に無頓着な者で構成されているとは誰も思わないでしょう。アバンの仲間たちの中でしつかりしていたのは僧侶のレイラくらいのもんです。

むしろお城で生活している人たちの中で一番情けない生活をしているんじゃないかという不安が頭を過つたアランは、大魔王を倒すことで有耶無耶にしてしまおうという名案

を思いつきながら襲いかかってくるモンスターを返り討ちにしていきました。

「クカカカカツ、たかが人間が調子に乗ってるじゃねえか」

「ん？」

ひたすらモンスターを倒し続けていると、スカイドラゴンに乗った鳥人っぽいモンスターがやってきます。どうやらここらのモンスターを束ねて町を襲っていた小ボスの存在なのでしょう。スカイドラゴンの口には襲われたであろう人間が啞えられており、そのモンスターの秘める残虐性をわかりやすく示していました。

きつと今までは空を飛べない人間を相手に空中から甚振るように攻めていたのでしよう。スカイドラゴンに乗りこちらを見下ろす鳥人の目には明らかに嘲りの色が見取れます。ハドラーなどもそうですが、自分の優位を信じて疑わないあまり油断しすぎているのです。その油断の結末は鳥人もスカイドラゴンも一撃で叩き落された上に瀕死の状態で地面に這い蹲る事になりました。

「グガツ……このオレが……人間なんぞに……」

「まあそういうもんだ。心配しなくても残りのモンスターもちゃんと退治しておくよ。とりあえずあのドラゴンからにするか」

「なっ……頼む！ ルードはオレの兄弟なんだ……だから見逃してくれ！」

もはや勝ち目がないと悟ったのか、それとも油断させるための方便なのか……鳥人は身動きできない状態で突然スカイドラゴンの命乞いを始めました。これがアバンたちであれば効果があったのでしょうか。どれだけ残酷なモンスターであっても、瀕死となり命乞いをしている相手に止めを刺すのは憚られるものです。

しかし鳥人にとって唯一の不幸だったのは、そんな命乞いがまったく効果がない相手が目の前にいたことでした。もしアランに『倒した後には起き上がって仲間になりたそうにこちらを見ている』というモンスターが仲間となるシステムなどの知識があったら違ったかもしれません。しかしそんな知識のないアランにとってモンスターの命乞いなど逃げようとしているモンスターと変わらないのでした。

鳥人もスカイドラゴンもしつかりと息の根を止め、それを見た事で逃げ出そうとしているモンスターすら打ち倒していくアランはモンスター側から見れば魔王っぽく見えるかもしれませんが。

そしてそんなアランの様子を悪魔の目玉が静かに見つめているのですが、元々モンスターの気配なんて読めない上に辺り一面モンスターだらけなので気付く事はできませんでした。

「ほう……人間にしては研究し甲斐のありそうなモルモットがいるな」

「ん？」



見られているとも思わずに暴れまわっていたアランの前に1人の魔族が現れます。その魔族は自らを「妖魔士団長ザボエラの子で妖魔学士ザムザ」と名乗り、超魔生物学という学問を研究しているということです。なぜ研究員がわざわざ出てきたのかと思えば、モンスターと戦えるような強靱な肉体を持った人間を研究材料に欲しいからということでした。そしてこの魔王軍の総攻撃をちようど良い機会だと思い、この戦いで少しでも抵抗できた戦士を集めて素体にしようとしてきたのです。

ここまで説明されればアランとて理解できます。つまりアランの肉体を研究に利用したい：ザムザと名乗った魔族はそう言っているのです。

そこまで言われて納得するはずもなく、また逃してしまえば誘拐事件が多発しそうな気がしたアランはザムザをさっさとこの場で始末することを決めました。ザムザは本人の申告通り研究者らしい戦闘に慣れていない身のこなしなのでボコボコにされたのですが、突然自慢気に語りだしたかと思えばその身を魔獣の姿へと変えていったのです。

「これこそが100種類以上の怪物の長所ばかりを取り入れた究極の魔獣の力だ!!」

ザムザが言うにはこれが超魔生物というものらしく、外傷もすぐに治癒するすごい能力を持っているという事でした。なぜか「変身すると呪文が使えなくなる」というデメリットもわざわざ教えてくれるのは研究者として語らずにはいられない性のようなも

のなのでしょう。

「へえ……それはまた丁度いいヤツが来てくれたもんだ」

しかしザムザは狙う相手を間違えてしまっており、そしてアランにとつてはザムザは都合の良い相手だったのです。相手が魔法を使用できず巨体で外傷を治癒できるということは大きなサンドバッグではないのです。

アランが今回のもう一つの目的である試したいこと……アランが魔道図書館で本を漁っている中に『生命力』に関するものがあつたのです。メガンテは自身の全生命エネルギーを使用し爆発させることという事は以前アバンから聞いた事がありました。そしてそれと同時に生命エネルギーとは闘気であるとも聞いた事があります。つまり魔法力と生命エネルギーは別物という事になります。

現在アランが考えている超必殺技があるのですが、今のところ戦闘で実用するには非常に大きな難点があつたのです。

試行錯誤の末に現在はほんの少し使用できるようになつてはいますが、やはりそれを十全に実現するには並大抵どころではありません。そこで着目したのが生命力だったのです。メガンテのように一度に全てではなく、それでいて生命エネルギーも使用できるよくなれば……そんな思惑もあり、そしてどれだけの威力があるのかを試したりするのに超魔生物のザムザは格好の実験相手なのでした。

…  
…  
…  
…  
…

アランがカール王国の西部で超魔生物ザムザを相手に大暴れしている頃…カール王国の東側、テラン王国の方から巨大なゴーレムが姿を現しました。そしてその姿を見たクロコダインから、そのゴーレムが鬼岩城と呼ばれる敵の本拠地であることを知らされます。

クロコダインからの情報ではこの本拠地はギルドメイン山脈の奥深くに存在していたという事でした。しかしその本拠地が実は移動要塞で、歩いてカール王国までやってきたのだということは…ギルドメイン山脈とカール王国の間にあつたテラン王国も無事では済まないということです。それだけでなくランカークスなどの周囲に存在していた町や村も踏み潰されていると考えるのが妥当かもしれません。

もし仮にこの移動要塞のゴーレムがパプニカを目指していれば…移動は海を渡ることになり、海岸沿いで迎撃したりすることもできたのです。例えばパプニカ王国で各国の首脳を集めてサミットを開いている時に奇襲されたとしても、局所的な戦闘によって

そこまで大きな被害にはならなかったかもしれない。しかし現在この移動要塞は大陸を横断してきているため、その道中の被害は計り知れないのでした。

その大きさはカールの王城を軽く見下ろすほどであり、もしそのゴーレムが襲いかかってきた場合は王城などひとたまりもないでしょう。いくら強固な守りの王城といえど遥かに大きなゴーレムからの攻撃など想定していかないのだから当然です。これには王城を守護する騎士団の面々も恐れ慄き諦めの表情を浮かべる者が出てしまうのも仕方のない事でした。

そしてこの巨大なゴーレムの登場は、魔王軍を引き寄せる作戦を立てたアバンも予想外の事でした。

モンスター軍の軍勢や強力な力を持った敵の登場は考えていましたが、まさかこれほどの巨体を持った本拠地が直接歩いて来るなど想像の超えた事態だったので。自身の考えが甘かった事を悔いながらも何か方法はないか必死に考えるアバン：流石に相手が大きすぎてもアランのメドロアであっても消し飛ばすには時間がかかってしまうだろうという判断でした。

まさかアランからアバンストラッシュで倒すことを期待をされているなどと思いません。迫り来る巨大ゴーレムへ対抗するため何か手はないか、今の状況で何ができるかをその明晰な頭脳で思案していました。

「アバン殿、アレは私に任せておけ」

「…バランさん」

そんなアバンの考えなど関係ないとばかりに巨大なゴーレムを相手に名乗りを上げたのは竜の騎士バランでした。バランからしてみれば目の前に迫る巨大ゴーレムなど、かつて死闘を繰り広げた冥竜王ヴェルザーやその一族たちに比べれば人形も同然という感想です。もちろんここは地上であり自身の後ろには愛する妻を含め人間たちがたくさんいるのですが、だからこそ『守る』という事を強く意識したバランは一步も通さないという覚悟をもって戦う決意をしていました。

竜の騎士はその性質上単独戦闘に秀でており、また人間にどうにかできるようなレベルではない強大な敵を相手取ってきた歴史があります。それらの戦いの中にはもちろん共闘なども無いことはなかったのですが、地上有数の実力者たちが集まり無辜の民を守りながら共に戦うというのは竜の騎士の歴史上でもバランが初めてかもしれない。

「あなた…」

「ソアラ、心配は無用だ」

そして何よりも違うのは自分の妻である女性が見守っているのです。竜の騎士だからとかそういう理由ではなく、1人の男として愛する女性に良いところを見せたいと

いうのは男の性といっても過言ではないでしょう。そして妻の前で、息子の前で格好悪いところなんて見せるわけにはいかなない夫であり父親である男の意地でもあるのです。

それだけではなく、そこには息子と一緒に成長していくところを見てきた：息子と同じくらい可愛がってきた女の子がいたり、直接の弟子というわけではありませんが剣を教え少年の頃から見守ってきた青年もいたりもします。

つまり何が何でも負けられないし、決して情けないところなど見せられないのです。

大魔王が読み違えたとすれば：この『人の心』というものだったのでしょう。森の中で妻と息子と静かに暮らしていれば決して得る事のできなかつたものを、 balan はこの 10 年で数々経験してきています。それは自身の息子の慣れない子育てだけでなく、更に未経験にも程がある小さな女の子の世話や妻のママ友との会話など多岐に渡りました。

2 人の子供にせがまれたことでアランの真似をして細心の注意を払いながらトベルーラで空の散歩をしたり、呪文の練習で失敗して泣き出す女の子を必死に宥めたり、幼いためまだ呪文を使えない息子を慰めたり：そして大きくなっていくに連れて剣を覚え呪文を覚えて立派になっていく姿を見てきているのです。

歴代の竜の騎士たちが誰も得られなかったであろうそういった経験によって『人の心』を十分に育んできた balan にとって、その暖かな場所を守るといふ事に躊躇などあ

りません。仮にこの場で竜の騎士の真の姿をさらけ出したとしても後悔はしないと  
言い切れるほどに balan は仲間たちを信じていました。

そんな『竜』と『魔』と『人』のすべてを十全に兼ね備えた究極の戦士の戦いは、目  
の前にある絶望を振り払い多くの人たちに希望を与えるのでした。

## アランの冒険9

モンスターとの戦いなど見た事のない人々だけでなく、王国を守護する騎士団でさえ竜の騎士の戦いは今まで見たことのないほどのものでした。おとぎ話に謳われてもおかしくないようなその光景は、まさに世界の命運を懸けた戦いと言っても誰も疑問に思わないでしょう。

巨大な岩の巨人から限りなど無いかのように思えるほど大量に湧き出てくるモンスターたち。そしてそのモンスターの大量など鳥合の衆だと言わんばかりに打ち倒していく1人の戦士……剣を振れば敵を斬り裂き、呪文を唱えれば雷の雨で敵を葬っていく様子はまさしく一騎当千と呼ぶに相応しいものでした。

「これほどとは……」

「オレも負けていられん。アバン、オレは北側のモンスターを蹴散らしてくる！」  
「ヒュンケル！」

鬼岩城から無数に現れる不死のモンスターたちでしたが、 balan にとってそんなものは物の数ではありません。神々の造り出したオリハルコンの神剣である真魔剛竜剣を



持ち、竜鬪気という強力な鬪気を纏い戦う今のバランに太刀打ちできる者は地上には数えるほどしかないでしょう。

そんな獅子奮迅の戦いの様子を見てアバンは伝説の騎士の戦いに驚き、ヒュンケルは負けじと剣を片手に飛び出して行つてしまいました。味方に勇気を与え鼓舞するとう意味では良かったのですが、少々効果が高かったのかヒュンケルには靦面だったのか……言葉通りであれば負けられない何かがあるのかヒュンケルの中にあるのかもしれない。

「アバン殿、では南側はこちらで引き受けよう。それでも百獣魔団を率いた元軍団長だ。そう安々と通しはせん」

バランの戦いを見てヒュンケルと同じように何か感じるものでもあったのか……次はクロコダインが残った南側を引き受けてくれるとの事です。まるで最初から味方だったかのように、普通に元仲間だったはずの魔王軍と戦いに行くのは良いのでしょうか。

アバンたちはシンシア王女とヒュンケルの事を信じているので比較的簡単にクロコダインの事を受け入れることができました。ヒュンケルとは直接言葉を交わし刃を合わせた関係ですし、シンシア王女は誰に似たのかそれとも子供ながらの好奇心からなのか敵意がなく言葉を話せるモンスターを珍しく思ったのか気に入つた様子でした。

しかしそうではない普通の人間にとつて突然「元々魔王軍で軍団長をしていて人間を襲つていただけ、改心して仲間になることになったよ。だから一緒に魔王軍と戦おう

ね」と言われても信じられないはずです。魔王軍を裏切ったのだから、いつまた人間を裏切るかわからない…そういう心理が働いてしまっても仕方ないというのが人の心というものでしょう。

残念ながらそういった人間の心の機微を解決する手段をアランは持ち合わせていません。余計な時には鋭くても大事な時にそういう面ではあまり役に立たないのがこの賢者なのです。そしてアランから言わせれば、こういう事態は基本的に勇者アバンの出番なのです。

学者の家系だったということもあり決して昔から勇名として名を馳せていたわけではないので知らない人も多いのですが、アバンは魔王を倒し勇者となる前はカール王国騎士団に所属していました。騎士団に入ったのは、これもまたベタに城を飛び出したお転婆なお姫様がモンスターに襲われ危機に陥った時に助けた事がキツカケという事です。

この話を当時のお茶会でフローラ女王から聞き、後にソアラ女王からもバランとの馴れ初めを聞いたアランは本気で森を探そうかと悩みました。何せ森に行けばお姫様と出会う確率が高いのですからその思考になるのも当然でしょう。だからと言ってお姫様と絶対に恋をしたいというわけではありませんが、アランの中でフローラ女王とソアラ女王という2人のお姫様の物語には足りないものがあるのです。

それは『囚われのお姫様の救出』です。

かつて魔王ハドラーがカール王国にわざわざ出向いてきた時は、てつきりフローラ王女が『囚われのお姫様』になると思っていました。そのために準備をしていたというのに、結果を見ればアバンが追い返したという事だったため違ったのです。そのため現在お姫様部門でアランにとつて足りないエピソードは『連れ去られて助け出されるお姫様』なのでした。

誰も好き好んで誘拐されたいわけでもありませんし、普通に考えればお城で大事に育てられるのがお姫様というものでしょう。一応シンシア王女もお姫様なのですが、いくらアランでも可愛がつているシンシア王女を誘拐させようとは考えていません。むしろアランがしょっちゅう誘拐まがいの連れ去りをしているくらいです。

デイーノくんも血筋としてはアルキード王族の血を引く王子様と言えますし、その彼もしよっちゅうシンシア王女と一緒に連れ去られています。大体2人がいない時は賢者が連れ去っており、アランも気付いていませんが『お姫様の誘拐』というところだけならある意味達成しているのかもしれないかもしれません。しかし『救出』という部分がなかったので本人も気付いていないところがアランなのでした。

姫様がどこにもおりません！という、そんな侍女の慌てようを宥めるのはいつもシンシア王女の父親であるアバンの仕事です。アランについて色々と言われたと思

えば身内に取り込もうとする貴族連中を諫めたりするのもアバンの仕事でした。フローラ女王だけでは目の届かない場所まで見通し折衝するのは基本的にアバンだったので、今回クロコダインを受け入れるに当たり皆がアバンに問うたのは成り行きとして必然だったでしょう。

やはり誰もが国を治める女王陛下に向かって「あのモンスターは信用できない、いつまた裏切るかわかったものではない」などと言えるわけではありません。しかし勇者という肩書はあれど元々騎士団に所属しており旧知のアバンであれば、その人柄も手伝って臣下たちも話をしやすいのです。これもアバンの持つ独特の雰囲気成せるものなのかも知れません。アバンが言うのなら大丈夫だろう…そう結論付けた大臣たちは何か起こっても対処してくれると考え声を上げるのを収めたのでした。

これにより東側で鬼岩城をバランが、北側をヒュンケルが、南側をクロコダインが、西側をアランが抑えるという状況となりました。クロコダインの事はあまり知らないため未知数ではありますが、ヒュンケルとアランはきつと問題なく撃退してくれるでしょう。ならば次に打てる手は…と戦いの天秤をこちらに傾けるため思考を巡らせるアバン。

「先生、おれも父さんを手伝ってくる！」

「お父様、私も露払い程度なら問題ありませんわ」

次々と鬼岩城から湧き出てくる不死のモンスターにバランが苦戦していなくてもキリがないと思つたのか、デイーノくんとシンシア王女がその補助を自ら申し出てきました。実際に敵の本命である鬼岩城を狙おうとすると大量に出現しているモンスターたちが王城のほうへ押し寄せる可能性があつたためジリ貧になりかねなかつたのです。

今はまだ竜の騎士としてその紋章の力を使用する事ができないデイーノくんですが、その身体能力はバラン譲りなのか目を見張るものがあります。そしてデイーノくんがアバンの事を『先生』と呼ぶのは、教養や知識などをシンシア王女と一緒に教えてもらつている様子をソアラ王女が「まるで先生と教え子みたいね」と言い、その呼び方にしつくりきたのか「先生」と呼ぶようになったのでした。

アバンはカールの王城の各地に設置したアイテムなどを利用し、破邪呪文であるマホカトールで城を覆うことで守りを固め自分がバランの補助として参戦するつもりでした。しかし子供たちが頼れる戦力であることは間違いない、バランが先頭に立ち自分が後方で援護できる状況であれば問題ないと判断し任せることにしたのです。

何よりアバンは実際に子供たちが戦っているところを見たことがありません。騎士団の訓練場での様子などは見えています、この将来有望な2人の子供がどこまで出来るのかもまた未知数だったのです。

「デイーノ君、シンシア。私はひとまず王城に結界を張ってから様子を見て balan さんを手伝いに行きます。それまでの間お願いできますか？」

「はいっ！」

元氣良く返事をして飛び出していく子供たちに親の立場として少々の心配もありましたが、2人の戦う様子を見てそれは杞憂であったと考えを改めました。暗黒闘気によつて操られた『さまようよろい』や『シャドー』など以前カール王国を襲ってきたモンスターたちに加え、何やら不気味な雰囲気漂わせる気持ち悪い鎧のモンスターなどもいるのですが子供たちは怯む様子すら見せません。

その戦いの様子から心配は無用と判断し、アバンはマホカトールを王城に施して自身もまたモンスターを撃退する一助となるべく城を飛び出していくのでした。

そんな中シンシア王女は武神流の技と呪文で、デイーノくんは balan に鍛えられた剣腕とアバンに教えられた武技を用いて敵を蹴散らしていきます。アバンはその戦いを感心していましたが、最前線で戦う balan がチラツとその様子を見た時に最初に出てきたのは感心や心配ではなく疑問でした。

デイーノはあそこまで戦えたか……？

普段デイーノくんは剣を教え手合わせしている balan は息子の腕前をよく理解しています。しかし現在戦っているデイーノくんは balan が知っているよりも明らかに強

く速くなっているのです。竜の紋章が力を発揮しているわけではない事は自身の感覚でわかっているのです、その戦いの様子を疑問が先に湧いたのです。

そしてその答えはシンシア王女にあります。

シンシア王女は戦う前に自分とディーノくん、『バイキルト』『スクルト』『ピオリム』をかけており、攻撃力と防御力と素早さを底上げした状態で戦いに挑んでいたのです。ここにその犯人であるアランがいれば答えはすぐに出たのですが、2人の父親はそんな事ができることすら知らないためそれぞれが違った感想になってしまったのでした。

しかしそんな2人の子供の参戦は形勢を大いに傾けることとなります。後顧の憂いがなくなつたバラン：今までの戦いでは守勢に重きを置いていましたが、子供たちに負けていられないとばかりにその本領を發揮し王城へと迫る勢いだった巨大なゴーレムを必殺剣の一太刀で沈めてみせます。

子供たちの戦いに触発されたわけではないでしょうが、子供たちがこれで増長しないよう『上には上がある』という戒めの意味や『そろそろ守つてばかりではなく格好良いところを見せておくか』という意味などいろんな思考が重なつた事がバランに最強の一撃という選択を取らせたのでしよう。

豪雷と表現するに相応しい：それだけでも数多の敵を屠れるであろう稲妻を自身の剣に落とし、更に竜の紋章の力を存分に開放し放たれた一撃は見ている者すべてが言葉

を失うほどに凄まじい威力を誇っていました。

…

…

…

「キイーヒッヒッヒッヒッヒ。人間どもめ、すっかり騙されてしまっておるわい」

アバンは破邪呪文であるマホカトールで王城を覆い、邪悪なモンスターなら入ることすらできないため大丈夫だと城を出てしまっています。しかしその心の際を突くように、魔王軍の妖魔師団長である妖魔司教ザボエラがカール王城内に入り込んでいました。

ザボエラの目的は人間たちの戦意を無くさせる事であり、わざわざ自らが戦って功績を得ようとは考えていません。それらはすべて鬼岩城を動かしているミストバーンにでもやらせておいて、自分は裏から手を引いて勝利のお膳立てをしてやろうというつもりです。現在魔王軍の地上侵略を妨げているのはこのカール王国の勇者たちであることは言うまでもなく、更に次々と軍団長も討ち取られクロコダインにおいては魔王軍を裏切つて人間側につくという有様でした。



残っているのは自分とミストバーンのみという状況は魔王軍としては決して芳しくないものではありませんが、しかしザボエラにとつてこの状況は逆に自身の有能さを大魔王へと示すチャンスでもあつたのです。数々の奸計をめぐらす事を得意とし、自身の息子すら道具として見ているザボエラにとつて人間というのは自分に都合良く動いてくれる駒でしかありません。だからと言つて甘く見ることもないところがザボエラのザボエラたる所以なのでしょう。悪魔の目玉などを通じてこの国の状況なども把握しているザボエラは、現在戦っている連中にとつての急所となり得る人物を既に特定してきます。

手強いであろう勇者アバン、竜の騎士バラン、そしてその2人の子供、賢者アラン、剣士ヒュンケル、これらの戦意を失わせるに足る人物……ザボエラが目をつけたのはフローラ女王とソアラ王女の2人でした。

この2人を手中に収める事ができれば下手な抵抗はできなくなる……そう結論付けたザボエラは目的の人物がいるカール城に潜入し、そして厄介な勇者たちが出払うのを待っていたのです。しかし思慮深いザボエラはこの場で2人を殺して終わりなどとは考えていません。拐つてしまい、魔王軍の手の中にあるという事実を作り出すだけでいいのです。

「誰だ!？」

「ほう…人間のくせによく見つけたと褒めてやろう…ワシは大魔王様の片腕、妖魔司教ザボエラ様である！」

アバンに頼まれた事で王城の守護を固め、自身はフローラ女王とソアラ王女の近くにいた騎士団長ホルキンスが怪しげな気配に気付いた時にはザボエラは既にすぐそこにいました。そして堂々と大魔王の側近を名乗っていますが、本物の側近であるミストバーンがこれを聞いたら怒られるでは済まないかもしれません。

しかしそんな魔王軍側の事情などまったく知らないフローラ女王たちは、これを大魔王の策略だと判断してしまいます。王城の中枢までやってきている相手の目的などそう多くありません。かつて魔王ハドラーも同じ事を考えて直接このカール王国までやってきていたのですから、今回も同じ事を考えていると思うのは自然な流れです。

「なるほど…大魔王もかつてのハドラーと同じく私を連れ去ることで士気を下げたいのですね。しかしたとえ私がいなくとも何も変わらないと言っておきましょう」

「随分と豪胆な事じゃが、このワシがハドラーごときと同じとは思わんことじゃ…デルパー！」

ザボエラのその言葉を合図に魔法の筒から飛び出すモンスターたち。マホカトールの効果によってモンスターたちは力を落としているものもいるようですが危険な相手

には変わりありません。かつての城内での戦いでもアバンが来てくれなかったら、今のフローラ女王はここにいたかもわからないのです。

フローラ女王の中では仮に自分が連れ去られたとしても、今は夫となった勇者アバンや頼もしい仲間たちがおり皆の士気に影響は少ないと考えていました。しかし「ハドラーと同じと思うな」というザボエラの言葉の通り、今の状況はかつての状況と似ていながらもこちらが不利だったのです。

当時のフローラ女王を助けてくれたのはアバンであり、しかしそのアバンは強大な敵を倒すため城を出てしまっています。バランや子供たちも、そしてアランやヒュンケルも城の外で戦っているため助けが来る可能性は低いと考えるしかありません。もちろんここには騎士団長のホルキンスがいてくれますが、相手が大魔王の側近ともなればその力は決して甘く見ることでできないものなのでしょう。

「さて…無駄な抵抗は止めて諦める気になったかの？ワシも余計な手間はかけたくないのでな、大人しくその2人の身を差し出せば帰ってやっても良いぞ？」

「冗談ではありませんね。ソアラ姫を渡すなど有り得ませんし、大人しく捕まるくらいであれば私は死を選びます」

「キイーヒツヒ…ワシお前たちを拐ったという『結果』さえあれば良いのじゃよ。それかたとえ…死んでいようとな」

ここにいる者は諦める事なく抗い、その結果命を落としたりとしても後悔などありません。しかしザボエラにとってはそんな抵抗など余計な手間をかけさせてくれるだけの行為でしかなかったのです。大人しく2人を渡せば『連れ去られた』という結果をアバンたちが知ることになり、ここで皆殺しにしてから死体を2つ持って帰っても同じ結果を齎すことができるのです。

そしてハドラーと違いザボエラは生体研究や人体実験なども平気で行う残酷な性格をしている事もフローラ女王たちの不利に働いていました。死んで終わりではなく、その死を穢して利用するのが妖魔司教ザボエラの真骨頂なのです。既にザボエラの頭の中では『連れ去った2人を取り戻そうと必死に探し、見つけた時には腐った死体として再会する』という筋書きができており、来るべきその時の事を考えると期待で笑みが止まりません。

この2人の女が変わり果てた姿で目の前に現れたら、人間どもはどんな絶望の顔をすめるのか見ものなのだのう…そんな嗜虐心を刺激されながら、ザボエラはこの場にいる全員の息の根を止めるために魔法力を高めるのでした。

## アランの冒険10

「よくも……よくも大魔王様より預かった鬼岩城を破壊してくれたな……」

「襲ってきておいてよく言う……貴様がこの国を襲っていたという軍団長だな」

まさかカール城内でフローラ女王とソアラ女王が危機に陥っているとは想像もしていないアランたちは、破壊した鬼岩城から出てきたミストバーンと呼ばれるトンガリローブと対峙していました。その声は怒りに震えており、表情は伺えないながらも許せないと思っているのは間違いないでしょう。アランの後ろにはデイーノくんとシンシア女王が控えており、顔の見えない薄気味悪い相手を油断する事なく見つめています。

そのミストバーンが手を翳すと、3人は突然見えない力に縛られるように身動きが取れなくなりました。今までに見たこともない攻撃を受けた事で子供たちは戸惑ってしましますが、竜の騎士であるアランにはそれが何なのかなどすぐに理解できました。

「うぐっ……なに……これ……？」「うぐげ……ない……よ」

「小癩な真似を……」

すぐにアランが打ち破ったそれは闘魔傀儡掌という暗黒闘気を用いた技だったので

す。デイーノくんもシンシア王女も当然ながら闘気の使用は教えられています。実際に見せてもらった事もありますが、父親2人が使えるわけですから「2人もいざれ使えるようになる」と言われていたのです。

しかし暗黒闘気というものは名前や存在だけは教えられていても実際に見たことがありませんでした。これは身近に暗黒闘気を使用できる者がいなかったため仕方がない事だったのです。アランもこの『闘気』というものについてはアバンから教えられた知識しかなく、またアランの持つゲーム知識にもなかったもので説明のしようがなかったのでアバンたちに丸投げしていました。

デイーノくんとシンシア王女はアランと共に多くのモンスターと戦ったりはしてきましたが、それでも暗黒闘気を使って戦うようなモンスターとは出会った事がなかったためまったくの未知の攻撃を受けて戸惑ってしまったのでした。

幸いにもアランが竜闘気を放出し打ち破ることで事なきを得ましたが、やはり大魔王に近づいていくに連れて敵も強力になっていくのでしよう。それなりに経験を積んできているとはいえ、やはり百戦錬磨の竜の騎士や魔王を討伐した勇者パーティなどに比べると子供たちはそういった経験面で些か劣ってしまうのは仕方ありません。とはいえアランは「そんな状況でも取り乱したりすることもなかった事は褒められる点だろう」と冷静に評価しているようですが、しかしその内容は少々鼻屑目に偏っているのか

もしれません。

「デイーノ、シンシア。お前たちは少し下がっている」

このミストバーンを相手に子供たちでは荷が重いと判断した balan は、2人を下からせ自分が戦うという判断を下しました。そこには危険だからという意味と、この戦いをしつかり見ておけという意味が含まれています。

デイーノくんもシンシア王女も戦闘力という意味では既に並の戦士を大きく上回っています。

今はまだデイーノくんは竜の紋章の力を発揮したり竜闘気を使用することはできていません。これは竜の騎士も「成人となるまでは普通の人間の子供と変わらない」という事で、balan の見立てではあと数年ほどである程度使えるようになるだろうという事でした。しかし興味から始まった剣術に関しては驚くべき成長を見せており、更に友人の賢者がいるせいもあつてか魔法にもそれなりに適性を見せていました。

balan が一度も見せたことなどなかったはずなのに、ある時息子が攻撃呪文を剣に宿して自分に見せてきた時は親子というものを強く実感したという事もあつたのです。きつとデイーノくんはデイーノくんで強くなる方法を常に模索していたのでしよう。何せ彼の隣には常に幼馴染のシンシア王女がおり、そしてその彼女は両親から受け継いだ才能の芽を早くから咲かせていたのです。

そんなシンシア王女も本来ならばお城で侍女に世話をされ、そして両親の影響を受けてお淑やかな王女様になっていたでしょう。もしかしたら母親に似てお転婆な部分はあるかもしれませんが、お城の外を見てみたいと言って無下にするような両親ではないため勝手に飛び出すという事もありません。

しかしそんな小さな王女様のすぐ近くには行動派の賢者が存在していました。この賢者は王女様を連れて空を散歩したり突然小さな男の子を連れてきたりその子と3人で他国まで散歩したりと、お城の中がすべてだった王女様の世界を次々と広げていったのです。怪我をしたと言えば魔法で傷を治療してくれたり、夜眠れないと言えば魔法で眠らされたり、モンスターって怖いのか？と聞けば直接見ればわかるとばかりに連れて行かれたりと普通の王女様では決して味わうことのできないような経験を積んできました。

更に両親譲りの素晴らしい才能を秘めていた王女様は、ある日賢者に連れられて寂れた遺跡で数々の魔法の儀式を行いました。周囲の大人たちを見て育った王女様は、自分もいつかそんな大人たちのようになりたいと語った事があります。するとそれを聞いた賢者が「とりあえず契約だけでも」と悪質なセールスマンのようなことを言いながら魔道図書館に連れてきて契約させたのでした。

とはいえ魔法だけが使えても戦力になるかと言えばアラン的にはそうは思っていま



せん。世間的にはそれで十分でも『勇者の子供』として考えると、やはりそこは近接戦闘もできなければいけないという固定観念があったりもしました。しかしやはり王女様は女の子ですので、いくらなんでも剣を持って戦うというのは難色を示されてしまうのも当たり前です。

しかしなんということでしょう。そんな悩める王女様には心強い味方がいたのです。剣を使うことに良い顔をされないのであれば使わなければいいじゃないかと、賢者は武術の神様から伝授された流派の技を王女様に授けました。魔法の使い方を教えられ、武神流の技術や技を次々と吸収していった王女様は立派（？）な賢者への道を突き進んでいたのです。

そんなデイノクんとシンシア王女でしたが、やはり実戦経験の不足は否めません。しかしそれを責めることもできません。目の前にいる相手は大魔王の側近中の側近である魔影参謀ミストバーンなのです。大魔王バーンの名を冠しているミストバーンを相手に渡り合うなど、たとえカール王国の騎士団が総出であったとしても不可能でしょう。しかしそんな事を知るはずもない子供たちはバランスの戦いを自分の糧とするために、目の前で繰り広げられる激闘をしっかりと見つめていました。

初見であるはずなのに敵の暗黒闘気の攻撃も伸びる爪の攻撃もすべて避けていくバランスの戦いは今の2人には真似できないものです。まるで過去にも戦った事があるか

のようにミストバーンを追い詰めていく様子は未来でも見えているのかと思えるほどの確なものでした。

しかしそんな戦いの様子を見守っていた2人の耳に、どこからか笛の音が聞こえてきます。

その音色を聞いた途端に2人は頭が痛くなり、耳を塞いでも聞こえる音は徐々に考える力すらも奪っていききました。

「うう…頭が…」「おじさま…」

「ディーノ！シンシアア！」

急いで2人のもとへと駆けつけたバラン…しかしそんなバランにミストバーンが立ち塞がり行く手を阻んできました。自身の最強の一撃でさっさと倒し子供たちを助けるという決意を固めたバランに対し、どこから現れたのか奇妙な男と一つ目ピエロが子供たちに鎌を翳しそれを制止するように声をかけてきます。

「おおつと…余計な真似はしないほうがいいよ。この子たちが可愛いならね」「このままだと2人とも死んじゃうーキャハハハ！」

「くっ…新手か」

「ボクはキルバーン。口の悪い連中からは『死神』なんて呼ばれたりもしてるけどね」

動けば子供たちを殺す…暗にそう語ったのはキルバーンと名乗る大魔王の側近の1

人であり、死神という異名すら持つ魔王軍の中でも異質な存在でした。そんなキルバーンは魔王軍の軍団長として地上を侵略するのではなく、むしろ肅清などの裏側で活動して軍団長にすら恐れられていたという存在だったのです。

しかしなぜこの場にそんな死神が現れたのか：普通ならば一番最初に魔王軍を裏切ったクロコダインのところへ行つてすぐに肅清するべきでしょう。クロコダインは魔王軍内部の情報や本拠地の場所などを人間側に流しており、まず間違いない一番肅清しないといけない存在のほうなのです。

もしアランがこの場においてキルバーンの事を知っていれば迷わずそう言ったでしょう。そしてそれを聞いたクロコダインは驚愕で顎が外れるかもしれません。しかし残念ながらアランはそんな事は知りませんし、キルバーンもわざわざ敵に情報を話すことありません。そしてもし仮に「先にクロコダインのところへ行け」と言われても人質を取り有利なこの状況下で大人しく引き下がるはずありません。

何とかこの窮地を打開したいところですがアランの前にはミストバーンが立ち塞がっており、ディーノくんとシンシア王女は膝をつき頭を抑えた状態でキルバーンの持つ鎌を突きつけられているという状況となってしまうています。そのため仮にアランがミストバーンを倒せたとしても、その間にディーノくんとシンシア王女がキルバーンによってやられてしまうのは明白でした。

「フフツ、これで君たちの負けだね」

キルバーンの勝ち誇った態度も当然のものです。かといってバランにはディーノくとシンシア王女を見捨てるという選択肢は存在しません。もし『バランの命を差し出せば2人の命は助ける』という取引であれば迷わず己の命を捨てるのですが、今の状況では自分がやられた後に子供たちの命も無事では済まないのは間違いないでしょう。よってバランは何とかミストバーンの隙を付いてキルバーンを退かせるという難しい立ち回りを要求されていたのです。

「おや、勝負は最後までわからないものですよ？」

そんな絶体絶命の状況を覆したのは鋭く飛来した1枚の金に輝く羽根でした。

その羽根は子供たちのすぐ側にいたキルバーンに突き刺さり、驚いたのか飛び退った場所へ更に追撃とばかりに鬨気の一撃が次々と襲いかかります。それらを何とか躲しキルバーンが攻撃のあつた場所を睨みつけると、そこには攻撃を放った直後のアバンがいました。

アバンが使用した羽根は『ゴールドフェザー』という鉱石を嵌め込んだ黄金の羽根であり、これは己の更なるレベルアップのために利用していた破邪の洞窟で作成したものです。アバンは忙しい日々の傍らで自分にできる事は何かという事をずっと考え挑戦し続けてきました。いくらアランが補助呪文を使えるとはいえ、基礎となる能力が低ければ上昇したところで大きな効果は見込めません。

剣の腕を磨くのであれば竜の騎士であるバランやヒュンケルにホルキンスと相手に事欠かないのですが、それだけで大魔王を倒せると思うほど樂觀視していません。魔王ハドラーが王城に攻め入って来たときも騎士団が苦戦していたように、魔物と人間の基礎能力に差がある以上は正面から力で戦えばいざ押し負けるのは自明の理です。

そんなアバンにとって都合の良いことにカール王国の国内には『破邪の洞窟』と呼ばれる、神が作ったと伝えられる古のダンジョンが存在していました。アバンも存在自体は知っていましたし家柄的にある程度の知識は備えていたのですが、魔王討伐の旅の頃は悠長にダンジョンに籠っているような余裕はありませんでした。魔王を討伐してからはフローラ女王との結婚や懐妊がわかったり、それによりフローラ女王の出産までの体調なども考え公務で矢面に立つたりと忙しかったのでこれまた挑戦する機会がなかったのです。

シンシア女王はある程度アランが子守をしてくれたりもしたので助かっていました

が、そこは自分の子供なので放任など考えられません。幼い我が娘に間違つてアランが父親と認識されては困るといふ気持ちがあつたかどうかは定かではありませんが、アバンは時には『女王の伴侶』としてだったり『勇者』としてだったりと肩書を使い分けつつ公私共に慌ただしく過ごしていきました。

そうして少し余裕ができた段階で破邪の洞窟について事前に古文書などを調べ、ある程度情報を得てから一人で挑戦することにしたのです。未知のダンジョンということでは幾人かは興味を示していましたが、得られるものがあるかどうかともまったくわからない場所に大勢で詰めかけるわけにもいかなかったため自身の修行を兼ねてアバンが潜るといふことで収まりました。

とはいええずつと潜り続けるような事が許されるわけではないため何度も往復していくことになりました。しかしその甲斐あつてか地下15階では破邪呪文であるマホカツールを習得することができ、魔王軍が襲いかかつてきたこのタイミングで破邪呪文を使用することで王城に邪悪な魔物が入れない結果を張ることができたのです。

残念ながら破邪の洞窟の地下25階にあつたミナカツールという破邪呪文は習得することはできませんでしたが、それでも破邪呪文を使えるようになったのは大きな事でした。地下15階でマホカツールがあり地下25階にはミナカツールがあつた事で、更に地下深くにはもっと強力なものがあるので……と期待して潜り続けたアバンでした

が、進むごとに複雑さを増していく迷宮に時間だけが過ぎていってしまったのです。しかしそれでも破邪呪文と破邪の秘法を身につける事ができたのはアバンにとつてとても大きな戦力アツプでした。

そしてそんなアバンは王城でマホカトールを使用した後にクロコダインのところへと向かっています。アランとヒュンケルという2人の事は信頼していますし、仮にアバンが援護に行つたとしても「ここは大丈夫だから他へ行け」と言われるのがオチだと考えたのです。そこで実力の未知数だったクロコダインのいる王城南側へ行き様子を見て必要な助力してからバランの援護を行おうと判断したのでした。

トベルーラで急ぎ南へと飛んだ先ではクロコダインが多数のモンスターたちと戦っており、しかしアバンが慌てて加勢しようとするも「ここは大丈夫だ」と断られてしまいました。大丈夫だと言うのであればそれを信じるだけです、そのためいくつかのアイテムを渡すだけに留めアバンは本命の戦いを行っている balan や子供たちのところへと急いだのです。

もしここでクロコダインが共闘を承諾していれば間に合わなかったかもしれませんが。もし南側を抑えているのが騎士団だったら、アバンはすぐに引き返す事なく少なくとも共に戦おうとしたでしょう。まさに綱渡りのような、か細い糸を手繰り寄せるように様々な要因が重なった結果アバンは仲間の絶体絶命の危機に間に合うことができたの

でした。

「2人とも、大丈夫ですか？」

「もう大丈夫…かな？」「なんだったのよアレ…」

アランがこれらの展開を見ていたら「さすが勇者だね！」と褒め称えていたかもしれない。きつとそういう事ができるからこそ勇者なのでしょう。そんなアバンが人質となっていたディーノさんとシンシア王女を救い出した事で絶体絶命の窮地を逃れ、そしてそれは同時に身動きの取れなかったアランの枷が無くなったということでもありません。

「おっと、こわーい騎士さまが怒ってるみたいだし、ボクらもそろそろお暇しようかな」

「こわいこわーい」

「逃がすと思うか」

「おや…ボクたちの相手をしていてもいいのかい？手遅れになっても知らないよ」

怒れる竜の騎士に対して余裕綽々の態度を崩さない死神…その言葉の意味など知る由もないアランは逃さないとばかりに追撃の構えを見せますが、そこで王城の方向で爆発が起きました。アバンもアランもここで魔王軍が何かの裏工作を行っていた事を悟りません。

そんな中キルバーンは……



「それではまた会うその時を楽しみにしているよ…フフツ、この後の君たちの表情を見られないのが残念だけどね」

という不吉な言葉を言い残し、ミストバーンと共に去っていくのでした。

## アランの冒険 1 1

死神キルバーンと魔影参謀ミストバーンが撤退したことで決着がつき、今回の魔王軍の大襲撃とも言える攻勢はカール王国側が撃退したという形になりました。そこまでは良かったのですが、これから敵を追い詰めようという時になって突如発生した王城での爆発：そして去り際の死神の不吉な言葉にただならぬ状況を感じ取ったアバンたちは大急ぎで王城へと、そして愛する女性のもとへと文字通り飛んで行ったのです。

ミストバーンが子供たちを人質に取っていたことから考えられるのは、城で待っている自分たちの大切な人を害するか連れ去るという事でしょう。事実王城の壁は爆発によって崩れており、その崩れている場所はフローラ女王とソアラ女王がいる場所だったのです。

もはや不安で押し潰されそうなほどに逸る気持ちを抑え、泣きそうな顔をしている子供たちを宥めながら崩れた場所から室内へと飛び込む4人。そんな4人が目にしたのは……怪我もなく五体満足な、まさに4人が心配していた2人の女性の姿でした。しかしいつもならば優しく微笑んでいるこの2人の女性は少々顔を悪くしているのと、そ

してなぜかその場にいる賢者に対して何かを言っている様子です。

「アラン？」

「お姫様、違うんだ…言い訳を聞いて？」

「アラン様？」

「ソアラちゃん、お願いだから少し落ち着こう？ね？」

ひとまず状況の確認をと周囲を見渡せば屋内にはモンスターの死骸が散らばっており、更になぜか水風船が爆発したかのように真つ青な液体が飛び散っている場所まであったのです。何がどうなったのかまではわかりませんが、アバンたちはこの2人の女性に必死に言い訳しようとしている賢者が解決してくれたのだらうということはわかります。

「皆さん無事のように何よりです。まずは怪我をした方の治療と残骸の片付けをしましょう。ところで…アランは一体どうしたのですか？」

騎士団長や騎士団の面々を含め命からならながらも無事そうな事を確認し一安心なアバンは、改めて今の状況を確認することにしました。何せキルバーンからあれだけ意味深な事を言われ、爆発まで起こっていたのですから気になって然るべきです。

騎士団長ホルキンスが怪我の少ない部下たちに倒れているモンスターの片付けを指

示し、ここでは何だということでも崩壊し外が見えている状態の部屋を移動してから城内で起こった騒動の一連の報告を受けることになりました。そうこうしている間にヒュンケルとクロコダインも戻ってきて姿を見せており、多少の怪我はありながらも元気な様子だったので一緒に各地点の戦いについて情報の共有も行うことにもなったのでした。

「それでは城での状況から説明していきます」

まず話すのは騎士団長ホルキンスです。アバンたちが一番知りたいたいのはここ王城での出来事であり、マホカトールによる結界と騎士団が守っていた……一番多勢の場所であり、戦力的には一番不安のある場所の事でした。しかしいくら不安はあっても、こればかりはいくらカール王国でもどうしようもなかったのです。多方面から一斉に襲い来るモンスターを水際で抑え、敵の本拠地すら投入してくるところには見合った戦力を置き、本丸である王城には魔法の結界と王国騎士団を配置していたというだけでもすごいことなのですから…

ホルキンスの話では、敵の本拠地をバランが討ち倒すあたりまでは何事もなく皆が油断することなく戦況を見つめていたということでした。しかしまるで本拠地の破壊が合図だったのか、それと同時に城内に大魔王の片腕と語る魔族が現れたという事です。その魔族の目的はフローラ女王とソアラ王女であるということで、大人しく引き渡

せば何もせず帰ってやるとまで言ってきたそうでした。

しかしフローラ女王はそれを拒否し、魔族は業を煮やしたのか魔法の筒からモンスターを呼び出し戦闘となったのです。騎士団も勇敢に戦いましたが次々と迫り来るモンスターたちの攻撃に膝をつき始め敵の魔の手はフローラ女王たちの目の前まで迫ってしまつたのでした。

フローラ女王も抵抗しようとはしましたがその魔族のマホトーンによつて呪文を使うことを封じられてしまい、ホルキンスも邪魔だとばかりに敵の攻撃呪文に吹き飛ばされその様子を見ているしかできない状況となつてしまつたのです。

そんな危機的状況を覆したのは西側でモンスターを抑えているはずの賢者アランでした。アランはそのまま立ち上がるモンスターを鎧袖一触とばかりに殲滅し、そのままフローラ女王に手をかけようとしていた魔族までも倒したということでした。何をしたのかはホルキンスにはわかりませんが、ホルキンスは魔族の侵入を許してしまつた事や自分たちで撃退できなかった事を悔いている様子です。

「ホルキンス、あなた達はよく戦つてくれました。敵の策略を見抜けなかつたのは私たちも同じなのです。次は期待していますよ？」

「はっ！必ずや守り抜いてみせます！」

そんな後悔の表情を滲ませながら話すホルキンスに、フローラ女王は優しく労りの言

葉をかけています。敵の本拠地まで動員した大攻勢に対して目が行くのは当然の事であり、更にそこに搦手としてもう一手打たれているとまで見抜けなかった事を悔やむのはフローラ女王やアバンのほうなのです。もし今回の魔王軍の：ザボエラの奸計が成功していた場合の事など考えたくもありません。

「それでは次はアランの話を聞いてもいいですか？」

少々重くなつてしまつた空気を一新するように、アバンはあえてアランに話をしてもらうことにしました。ムードメーカーというほどではありませんが、ある意味マイペースとも取れるアランの言動は深く考えすぎる者たちにとっては力を抜くのに丁度良いのです。

「でも俺は話すような事なんてそんなにないよ？」

「それでも構いませんよ。あなたから見た王城の状況を教えてください」

アランが話したのは本当に簡潔な内容でした。言つたのは「西で敵をぶつ殺して城に戻ったら敵がいたからぶつ殺しただけ」という一息で終わるものです。しかしそれだけでフローラ女王やソアラ女王がああなるでしょうか？フローラ女王たちの絶体絶命の危機を救つたのは間違いないのですが、それ以外に何かやらかしている事も間違いないありません。

「アラン、よく思い出してみてください。他に何かいつもと違う事はありますか？」

たか？」

「他に？何かあったかなあ……なんか命乞いしてきたけど殴ったら破裂しちゃったくらいしか思いつかないよ」

「それですね」

答えはすぐに見つかりました。なるべく詳細に語ってほしいというアバンからの要望を受け、その時の様子を思い出しながら少しずつ語っていきます。

それによるとアランはカール西側でモンスターたちを相手に大立ち回りをした後、その成果に満足しながら次の場所へ行くこうとしていました。ちなみに襲いかかってくるモンスターを全滅させたわけではありません。城下では騎士団が警備しているので、彼らにもお仕事をあげないといけないという善意から適度に倒していたのです。しかしどこに誰がいてどうなっているのかわからないアランはとりあえず実験した生命エネルギーの回復を兼ねて王城に戻って戦況を聞こうと考えたのでした。

そのためルーラで王城へ戻ってみるとなぜか屋内でモンスターが暴れていたため、それらを打ち倒していたら見知らぬ老人がフローラ女王の前にはいたのでとりあえず殴ったということでした。ここでザボエラ側にとつて不幸だったのはアランが西側の戦いの時に自身に補助呪文をかけていたことです。素早さも攻撃力も上がっている状態で突然現れて自分に向かって殴りかかってくるなど思わないザボエラはそれをまともに

食らってしまつたのでした。

あまりのダメージに痛む身体とそれを癒やす間もない状況を瞬時に悟り、ザボエラの脳内を過つた次の考えは『何とかしてこの場を逃れる』というものでした。このザボエラという魔族の恐ろしいところは、武人などと違い『最後の最後に勝てばそれで良い』というそれまでの手段は一切問わないところなのです。そのために今回取つた手は人間の甘さを利用した『命乞い』というものでした。

「ひいひい…ワシは大魔王に命令されただけなんじゃ！これからは大人しくするから命だけは許してくれ！」

頭を床に付けてまで助命を願う姿を見て、ザボエラの思惑通りにフローラ女王たちだけでなく騎士団の面々も戦意は失せてしまつたのです。そこには魔族ではあるものの老人の姿をしているというのも理由の1つとしてあつたのかもしれない。もはやそこにいる全員が見逃すという方向で考えており、きっとアバンたちがいたとしても同じ意見になるでしょう。

「アラン…」

「はいはい、わかつたよ」

しかしいくらフローラ女王たちがそう決めたところでアランがそれに従うとは限りません。まず敵がフローラ女王とソアラ王女を目的として侵入し暴れていたのは確か



な事であり、そしてそれを打ち破り戦況を覆し生殺与奪を握っているのはアランなのです。これが仮に騎士団が返り討ちにしたのであればフローラ女王の判断のみで決定することができたのですが、アランは騎士道精神など持ち合わせていないため説得という形を取ったのです。

そして友人であるフローラ女王がそう決めたのならば、余程でない限りアランがわざわざ文句を言うこともありません。とはいえこのまま何もせず帰すというのもなんとなくモヤモヤしたものが残りそうです。そこで少しだけ考えたアランは、この土下座している魔族を実験とお仕置きのもりで一発だけ思いつきりぶん殴っておくことにしました。

「じゃあこれで……チャラだ！」

アバンたちにとつては周知の事ながら、賢者アランは拳聖ブロキーナから伝授された武神流の使い手でもあります。それは一部の動きだけなどといった断片的なものではなく、奥義である閃華裂光拳まですべてを受け継いでいるのです。そして今まではブロキーナの教え通りに閃華裂光拳はホイミで使用していましたが「別の呪文で試したらどうなるんだろ？」という事はブロキーナから技を伝授された頃から考えていました。そしてそれをハドラーに使うことは終ぞなかつたため、なんとなく「どうせだしコイツに使ってみよう」と軽い気持ちでイオナズンのエネルギーを込めた閃華裂光拳をザボエ

ラに罰として見舞ってしまつたのでした。

もしかしたら普通にイオナズンのエネルギーを込めた一撃であれば身体中の骨が砕ける程度で済んだかもしれません。どこか別の世界では馬面の金属生命体が「ライトニングバスター」などと命名していた大技だったかもしれないのですが、アランにとつては閃華裂光拳の亜種程度の認識です。

そしてその閃華裂光拳はホイミでマホイミの効果を出すほどであり、今回のその拳は普通にイオナズンを使用するエネルギーを凝縮し威力が上がつた状態で繰り出す事ができたのです。つまりザボエラは『魔族に対する実験』として『補助呪文で能力を底上げされた』状態のアランに『結果のどうなるかわからない』イオナズンのエネルギーを込めた閃華裂光拳を罰として与えられたのでした。

「ぐぎやっ……」

こうした数々の不幸が偶然にも重なつた結果……残念ながら閃華裂光拳（イオナズン）を受けたザボエラは水風船の如く破裂し、魔族の証である青い血を撒き散らして死んでしまいました。アランの言つた「これでチャラ」というのは死を以つて許してやるという意味に受け取れないことはありません。アランとしては「やつちやつた」程度にしか思つていませんが、その一連の行動は見る者によつては余計な恐怖を与えてしまうことだつて有り得るのです。

フローラ女王とソアラ王女は生粋の王族の人間ですので、人から向けられる感情の機微についてはよく理解しています。そのためアランが行った行為は相手が敵であったとしても畏怖の感情を向けられかねないものだと危惧したのです。そのことについて暗に苦言を呈し、アランがそれを必死に宥めている場面でアバンたちが帰ってきたのです。

つまりアバンたちが帰ってきた場面でフローラ女王やソアラ王女がアランに言っていたのは「やりすぎ」という内容の事を言っていたのでした。一応フローラ女王のほうには魔王ハドラーの侵攻の際に騎士団の先頭に立ったりもしているので少々くらいなら耐性がありますが、王室で育ち戦場に足を踏み入れたこともないソアラ王女はそうではありません。普通ならば老人が破裂するというあまりの光景に気を失ってもおかしくないところを、顔色が悪いまでもしつかりと意識を保っているのですから大したものでしょう。

そんな女性2名や騎士団の目の前で魔族とはいえ『老人が平身低頭の姿勢で助命を求め、それに応じたはずなのに殺害した』というのは客観的に見てあまりにもひどい光景に見えたのです。ザボエラが実は『フローラ女王とソアラ王女を連れ去った後に人体実験や改造を施して、その惨たらしい有様で再会させ人間と戦わせたりしよう』などと考えていた事を知れば彼女たちの考えは変わるのですが、今はもうそれを知ることはい

ません。

フローラ女王たちだつてアランがやったことについては、今は魔王軍との戦時ということもありますのですべてが綺麗事だけで済むはずがないと理解はしています。魔王ハドラーだつて魔界の神の生贄をするためにフローラ女王を拐おうとしたことがありましたし、今回だつてフローラ女王とソアラ女王を連れ去ろうとしていたのは事実なのです。

そんな危ない状況を助けてもらったことは皆が感謝も理解もしているのですが、それでも少しくらいはお小言を言っておきたい気持ちにもなってしまうのも仕方ありません。あるいはそれが彼女たちが心の平常心を保つために、いつも通りにアランを呼ぶことでいつもと同じ日常の空気になると無意識に出てきたものだったのかもしれない。

少々グロテスクな場面を見ることになってしまいましたが、結果的にフローラ女王もソアラ女王も無事で済み襲ってきた魔王軍を撃退することもできたわけです。

ヒュンケルとクロコダインのほうも数は多かつたけれど……といった内容でした。もちろん数というものを馬鹿にすることはできません。結構な被害が城下町に及んでいたりしていました。それでも騎士団が勇敢に戦ってくれたりしたので王城まで魔の手が届かなかつたのは幸いといえるでしょう。広範囲を殲滅するような技を持っていない2名は騎士団とも協力し次々と襲いかかってくるモンスター群にそれなり

に苦勞したという事でした。

何せ主戦力となつてゐる面々の中で強力な武器を持つてゐるのは竜の騎士であるバランだけなのです。アランとシンシア王女は格闘と呪文が主体なので問題ないのですが、それ以外の者たちにとっては武器が弱いというのは致命的な問題でした。それでもカール王国にある上質な剣を使用してはいるのですが、これからの戦いの事を考えればやはり不足感は否めません。

武器の事も早急な問題であれど考えるのは今回の魔王軍の事です。敵の本拠地を破壊したにもかかわらず、結局大魔王は出てきませんでした。そしてミストバインとキルバインがどこかへ帰つていったということは、その場所こそが大魔王のいる本当の本拠地という事でもあります。今回の戦いで敵の幹部とも言える大魔王の側近が出てきた以上、決戦の日はその遠くないでしょう。

アランが考へてゐるように地下世界に大魔王の居城があるのかどうかはわかりませんが、来たるその日に向けて入念に準備を行つていくのでした。

## アランの冒険 1 2

その日、世界中の人間たちが空に浮かぶそれを見上げることとなりました。

バーンパレスと呼ばれるその空飛ぶ白亜の宮殿は優雅な鳥のようであり、大凡大魔王の居城とは思えぬほどです。本来であればこの宮殿が空を舞う時は魔王軍が地上の人間たちを駆逐し、最後の仕上げとして地上を消滅させる時だったのです。

ならばなぜ今その宮殿が空を飛んでいるのか：それこそが大魔王なりのここまで戦ってきた人間たちへの称賛の証でもあり、そしてこれまでの戦いを見てきて地上に巣食う人間たちの中で倒しておかなくてはならない者を見定めた結果でもありました。

魔王軍の全軍を地上の1つの国に差し向け、更には仮初の本拠地でもあり大魔王が少しだけ思い入れを込めた玩具であった鬼岩城まで持ち出したのです。そこに齎される結末はカール王国の滅亡以外にないと思われていたものを覆したのですから、強者に対しては敬意を払う大魔王としてもこの結果に対し称賛の意を表さずにはいられませんでした。

もちろんそこには竜の騎士がおり、そしてハドラーを倒した地上の勇者がいることは

承知の上で大魔王は人間たちが勝利すると考えていなかったのです。更にザボエラが影で何かの謀をコソコソと行おうとしていたのも当然知っていましたし、好きにさせていたのも勿論大魔王が「人間にどこまで抵抗できるか」と放っておいたからです。それにより中枢から瓦解し飲み込まれるもよし、竜の騎士だけは残るかもしれないが恐るるに足らず…というのが両者の戦力を考え訪れるであろう未来図のはずでした。

しかしそこには魔王軍を裏切ったクロコダインの力も多少はあったのでしようが、それでもそれら全てを跳ね除けカール王国は今もなお存在しているのですから大魔王としても認めないわけにはいきません。そしてそれは大魔王にとって人間という種が真に邪魔な存在であると認識を改める事でもありません。

『力』が何よりも優先される魔界において、力なき者など生きる価値さえ奪われるのです。小賢しい知恵をいくら振り絞ったところでそれすらも踏み潰していくのが魔界の在り方であり、数千年もの時間を過ごしていても尚変わらぬまさに不変の真理なのです。

大魔王にとっては人間などその真理に背き、自分たちの勝手な解釈で自分たちを正当に見せているだけの小賢しい存在でしかありません。今までは魔王軍という無くても困らないものをわざわざ作り、地上という遊技盤の上で駒たちが動くのを観ながら愉しむだけのつもりでした。勿論最後には自分が勝利することをわかった上で、大魔王は自

らが人間たちへ教えてやろうとしているのです。

それこそが自然の摂理に背いた人間たちへの報いでもあり、同時に思った以上に愉しませてくれた事への褒美でもあるとさえ考えていました。

…

…

…

「みなさん、いよいよ決戦が近いようですよ」

カール王国の王城の一室にて、そこには魔王軍の大攻勢を退けた立役者たちが勢ぞろいしていました。音頭を取る勇者アバン、フローラ女王、賢者アラン、剣士ヒュンケル、シンシア王女、竜の騎士バラン、ソアラ王女、ディーノくん、クロコダイン、ホルキンスに城内警備の騎士……フローラ女王やソアラ王女は戦力ではありませんが、愛する夫や子供がそこにいるのに席を外す理由もありません。

大魔王バーンに関しては軍団長であったクロコダインもまったく情報を持っておらず、仮初めの本拠地であった鬼岩城を本拠地だと思っていた事からも空を舞う宮殿について何も知らないのは明白です。そのためアレが大魔王のいる場所ではない可能性も



なくはないのですが、今この時に至っては大魔王以外に考えられず、よって大魔王の居城であると仮定して話していました。

その根拠はいくら魔法を使えたとしても、巨大な城を浮遊させる事など人間に出来るような事ではなく大魔王以外に考えられないからです。では逆に考えて天界の建物なら…と、もし『天空の花嫁』的な知識がアランにあればそう考えたところでしょうが、マスターなドラゴンがいたりというような事を知るはずもなく消去法で大魔王の城に決まりました。

更にその浮遊城がここカール王国にゆっくりと向かってきているのですから、都合の良い援軍ではない事は明らかだったのです。そしてアバンたちの目算では、恐らく明日の朝には浮遊城がカールの上空へと到達するだろうという判断でした。

「さて、全員で行くところらの守りも薄くなってしまうので、ここは戦力を分ける必要があるわけですが…」

「オレは行くぞ。この時のために、父さんの仇を討つために腕を磨いてきたんだからな」「おれも！」「私も行きますわ」

アバンの「大魔王と戦いに行くか、王城で守りを担うか」という話に真っ先に立候補したのはヒュンケルです。養父であった地獄の騎士バルトスを失い、その仇として定めた大魔王を討つためにここにいるという言葉にその意志は固そうです。ディーノくん

とシンシア王女も同じく声を上げ、アランが昔考えた次期勇者パーティーに近いメンバー構成でした。

しかしアランはヒュンケルの言葉を聞き、とても大事な事を思い出しました。

言った当人はすっかりサツパリ記憶の彼方だったのですが、ヒュンケルは今も大魔王を養父の仇だと信じていたのです。原因は勿論アランであり、今まで忘れていて機会がなかったとはいえヒュンケルのそれを正さなかったのもアランなのです。

『お前が大魔王か！父さんの…地獄の騎士バルトスの仇！』

『なんのことだ？ワシがなぜわざわざハドラーの配下を倒さねばならん』

『なんだと…？お前が父さんを殺したんだらう！』

『そんなはずなからう。誰がそんなデタラメを言っていたのだ？』

『なん…だと…？どういうことなんだ…』

『ワシの明晰な頭脳が、犯人は大魔王と言ったヤツが怪しいと言っておる』

『どういうことだアラン!?!』

アランの脳内でやけにリアルに再生されたヒュンケルと想像上の大魔王のやり取りに、もしヒュンケルを連れて行ったら面倒な事になると頭を悩ませることになりました。もしこうなってしまうえばガイコツ剣士を倒したのが誰なのかわからないという『密

室殺モンスター再び』です。アバンもアランも倒しておらず、魔王はアバンが倒している以上犯人はガイコツ剣士自身しか有り得ません。つまり死因は自殺だったということです。しかし今更得た答えがこれではいくらヒュンケルでもきつと納得しないでしょう。

本当の事実が『魔王を倒せば地獄の騎士も消滅することになるからヒュンケルを託しており、その後倒されたはずの魔王によつて直接手を下されていた』などとは考え付きもしません。基本方針が『モンスターは倒すもの』で、モンスターが話すことを真剣に聞こうという気がまったくないアランの性格がこの結果を招いていたのです。これは複雑な要素が多数絡み合ってしまったが故の不幸な事故なのでした。

頭をフル回転させてアランが出した結論は、ヒュンケルと大魔王を会わせない…つまり自分たちでさつさと大魔王を倒してしまおうというものです。そうすれば真実は闇の中…そしてヒュンケルも仇である大魔王がいなくなつた事で復讐を考えることもなくなるでしょう。ならばアランがやることは決まりました。

「ヒュンケル…悪いがお前を連れて行くわけにはいかない」

「ディーノとシンシアもだ。大魔王のところには私が向かう」

アランがヒュンケルを連れて行かないと告げたのに続いて、それに合わせるようにバランがディーノちゃんとシンシア王女にも駄目だと諭すように告げます。そしてその上

でバラン自身が大魔王のもとへと向かうということです。

「アラン……どういうつもりだ?」

子供たち2人は自分たちよりもバランのほうが強い事を理解しているので大人しく引き下がりましたが、ヒュンケルは暗に「仇討ちをさせない」と言ったアランを納得のできないとばかりに睨みつけています。

しかしアランとしてもここは引くわけにはいきません。

これまでの10年以上の付き合いは伊達ではないので大魔王に唆されても敵対することはないと思っていますが、とはいえ当時まだ子供のヒュンケルに適当な事を言っていたなどと今更バレたくもありません。そのため「復讐などという感情で突っ走っても良い事などない」と表向きの大人の態度で言い包めようとしていました。

そしてこういう時だけ準備のいいというわけではありませんが、この時アランは既に手を打っていたのです。

「それに……魔王を倒した勇者パーティを差し置いて大魔王に挑むなんて、そんな順番抜かしはダメに決まってるだろ……マトリフもそう思わない?」

「……既に隠居したジジイに何無茶させようとしてやがる」

「マトリフ?」

そこに現れたのはパプニカ王国の外れで隠居しているはずの大魔道士マトリフでした。しかしアバンたち全員がここにマトリフがいることを疑問に思ったのも当然です。もちろん会話の流れからアランがこの場に呼んだのでしょうか、既に高齢であるマトリフを呼び出す意味がわからなかったのです。

「ワシもいるよん」

「老師まで!？」

更に驚くべきことにプロキーナまでもがマトリフと一緒にやってきました。突然来訪した2人に話を聞いてみると、両者とも「アランに呼ばれたから」だということでした。もちろん2人ともカール王国への魔王軍の大攻勢の情報は知っており心配はしていたので、普段ならば腰が重い2人の老人も今回ばかりは何かあったのかとやってきてくれたのでした。

さすがにもうアランに『アバンがオルテガ役』などという認識はありません。ただアランの中に魔王を共に倒した勇者パーティというものがあり、やはり大魔王を倒すのならこのパーティで…という気持ちがあつたのも確かです。

「んで？まさかこの老いぼれを捕まえて大魔王を倒しに行くなんて言うつもりじゃねえだろうな？」

「話が早くて助かるよ。まあ昔約束したしね」

「はあ？何の話だ？」

冗談めかして聞いてみたマトリフですが、アランから返ってきたのは本当に自分を連れて大魔王を倒しに行くというものです。更にアランはなぜか一緒に大魔王を倒すと約束したとまで言い張っています。まったく心当たりのないマトリフとしては口先だけかとも思いましたが、次に放たれたアランの言葉にどういう意味か理解しました。

「マトリフが言ったんじゃん…『魔王を倒すまで付き合つてやるよ』ってさ」

昔の事を細かく覚えていないとはいえ、流星にアランが言った言葉には覚えがありました。かつてマトリフは魔道図書館で本に閉じ込められ、そこでロカやアバンたちと出会ったのです。その時に確かに「魔王を倒すまでは付き合つてやる」と言った事を覚えていますが、それは確かに言ったのですが、ハドラーは倒したわけなのでもうその約束は果たされているはずなのです。しかしアランの言い分はその言葉尻を捕らえるかのようなものでした。

「おい…ハドラーを倒すまで付き合つたんだからちゃんと守つただろうが」

「マトリフ…魔王も大魔王もどっちにしても『魔王』には変わりないよ。それで魔王を倒すまで付き合つてくれるって言つてたんだから、ちゃんと約束通り最後まで付き合つてもらわないとね」

マトリフもブロキーナも率先して世界の平和のために動くタイプではありません。とはいえ旧知の間柄の人間たちの危機を見過ごして知らぬふりをするほど薄情でもありませんが、ハドラーと戦っていた頃ならまだしも既に老いた自分たちに何ができるのか…と考えると、そんな言葉の揚げ足取りのような事で納得できるはずありませんでした。

もし自分たちが大魔王の居城に乗り込んで、運良く大魔王と戦いになったとしてもどこまで役に立てるのかわかったものではありません。そしてマトリフにとっては一つの懸念がありました。アランにも授けた極大呪文は大魔王にも効果があるだろうという自負があります。しかし大魔王と名乗るだけに、もしその極大呪文を反射された時の事を考えると容易には使えないのです。呪文を反射する呪文も存在していますし、そういった効果を持ったアイテムも存在しているため大魔王がそれらを有していないとは限りません。

マトリフのその懸念は当然のものであり、それを軽々しく使いまくるアランがおかしいのです。しかしアランにとっては呪文は呪文でしかなく、覚えれば使えて当然でありそれを使わないほうがおかしいという認識のためお互いがその考えを理解することはないかもしれません。

仮に反射されたとして自分一人が消える分には納得できますが、万が一にも仲間を巻

き込んでしまつては元も子ありません。そして運良くか悪くか自分1人が消えたとしたらその分の戦力の減少が決して少なくないということもわかっています。それにマトリフは攻撃呪文を放つて反射されて自分に返つてくるという事の恐ろしさも身を以て知っていました。

「大体……こんなジジイよりもよっぽど役に立つのがあるだろうが……」

そして何よりも、ここには伝説に謳われる竜の騎士がいるのです。マトリフはその力を直接目にしたわけではありませんが、それでも自分などよりも余程強力な力を秘めていることくらいは最初に会つた時からわかっていました。

事実として竜の騎士であり真魔剛竜剣を持つ balan は大魔王討伐の筆頭戦力です。古の時代から数々の戦いを制してきた経験は balan の竜の紋章に蓄積されており、長きに渡り幾度もその戦いでその膨大な経験値は歴代の竜の騎士たちの助けになつていました。更にそこに自身の当代竜の騎士としての経験として冥竜王ヴェルザーを倒したというものまで加わっているのですからこれほど頼もしい戦力は他にないでしょう。

それらを正しくすべてを理解できているのは balan 自身しかいませんが、アバンたちも語られた断片くらいは知っています。よつてここで『竜の騎士』というものを未だに知らないのは賢くない賢者1人だけなのです。アランはもともと戦力として連れてきたわけではないので、パラッチのように balan のことを詳しく聞こうなどとは思つて



いません。ソアラ王女と釣り合わないため駆け落ちしたという認識は「あつ…（察し）」ということと余計な気遣いによって躊躇われたのです。

しかしそんなアランの明後日の気遣いなどまったく知らない balan としては自分を外して考えているという事が理解できませんでした。確かにアランと最初に話した時にはそんなような事も言っていたとは記憶していますが、かと言って今のこの状況で自分が戦わないなど考えられません。そこには竜の騎士としての使命も当然ありますが、人間としても大きく成長した balan は既にアバンたちと共に戦う仲間だと認識しています。

「アランよ、あまり無茶を言うものではない。私が代わりに行く」

「んー、balan にはこつちを守ってほしいんだよね。ヒュンケルだけだと不安だからさあ」

balan がマトリフの代わりに行くと言ってはくれますが、アランとしてはできれば城の守りのほうを任せたいという気持ちもあります。そしてヒュンケルもまだ納得してはいないのですが、連れて行けないというところに納得せざるを得ない事情もありました。

それは単純で『武器が弱い』ということとです。

大魔王の居城の出現がもう少しでも後であればその間に強力な武器を探すというこ

ともできませんでした。既に上空を浮いている状態で大魔王が何もせずただ待っていてくれる事など期待できないでしょう。つまりこれはもはや一刻の猶予も許されない状況とも言えるのです。

どこかに伝説の剣が刺さっておりその場所がわかっていたら取りに行くこともできますが、現時点で何も情報がない以上一から探す余裕などありません。それにバランが持っている真魔剛竜剣こそ神々の金属であるオリハルコンで作られた伝説の剣と呼ぶに相応しい剣です。

ならば同じようにオリハルコンで剣を作れば……と思ってもオリハルコン自体を持つておらず、オリハルコンを扱えるだけの技量を持った鍛冶師もそうそういるものはありません。もしかしたらギルドメイン山脈の麓にあるランカークスの村の近くの森の中にそんな事ができる魔族がいたかもしれませんが、鬼岩城がその辺りを歩いてきていたので無事かどうかもわからないところですし誰もそんな情報を持っていません。

そして鬼岩城が攻めてきた時にザボエラが暗躍していたことで改めて理解させられたことですが、相手は力押しだけでなく策を弄し搦手も使用してくるのです。もし大魔王の城へ最大戦力で向かったとして、残された王城が落とされては意味がありません。そのため攻めと同時に守りにも強力な戦力を配置しておく必要があるとアランは説明しました。

このアランの言葉にはバランだけでなくヒュンケルとしても理解はでき、それでいてとても納得し辛いものです。言っている事は非常によくわかるものであり、確かに一度フローラ女王とソアラ女王が狙われているだけに警戒するのは当然の事でしょう。そしてミストバーンとキルバーンという大魔王の側近は決して油断できるような相手ではなく、事実としてバランは子供たちを人質に取られアバンが現れなければどうなっていたかわかりません。

ヒュンケルのほうも強力な武器がないというのは重々理解しており、カール騎士団の上質とはいえ数打ちの剣を使っているので結局消耗品でしかありませんでした。そしてヒュンケルは武神流を学んだり格闘戦に秀でているわけでもないのに、大魔王と戦いに行つて武器がなくなれば戦う手段を失つてしまうのです。もし大魔王の配下になつていれば鎧にもなる魔剣を賜っていたかもしれないし、各国が手を取り合つて大魔王に抵抗しようというのであればロモス王国で覇者の剣があることを知れたかもしれないのですが現状そうなっていないので誰にもわからない事でした。

そしてここで「世界中が一丸となり戦おう」とならないのは、自分たちだけで魔王を倒した勇者パーティや単独で戦ってきた竜の騎士の大きな欠点と言えるかもしれません。仮に地上の国の半分以上が滅んだり壊滅状態であれば、強力な敵を前にサミットを開いて団結していた未来があつたかもしれないでしょう。しかし各国が壊滅状態に

なつてから手を結ぶのは手遅れなのでどちらが良いのかは両方を経験しないとわからない事です。

アランの話した内容に嘘はありません。実際に武器の問題もありますし、後方に頼れる者を置いておくだけで後ろを気にせず戦えるというのは非常にありがたいことです。

しかし勿論ながらそれだけではありません。

アランの言つたこれらは非常に言い回しを変えてはありますが、かつてアバンがロカにやつたことでもあります。ロカの時アバンが物理ラリホーで眠らせたのですが、今ここでそんな事をやつたら怒られるのは目に見えているためバランをカールへ誘つた時と同じように減らず口の真骨頂を發揮したのでした。

アランにとってバランというのはソアラ王女と恋に落ちた騎士でしかありません。それまでは国家に忠誠を誓っていたのですが、今は妻と子を守る事を誓いに生きている騎士という認識です。そしてその妻であるソアラ王女と子供であるディーノくんを置いて大魔王と戦おうとする姿は、かつて子供を宿した僧侶レイラを残して魔王ハドラーと戦おうとした戦士ロカと似ていたのでした。

そんな15年も前の懐かしいと思えるような光景を思い出したためなのか、アランにはどうしてもバランを大魔王との戦いに連れて行く気にはなれなかつたのです。もしこれを知ればロカもバランも「余計な世話だ」と一蹴するでしょう。

「それに俺たちはこのパーティで一度魔王も倒してるしね。最良のメンバーだと思わない？」

「アラン君……もしかして死ぬつもりかい？」

これを問うたのは静かに成り行きを見守っていたブロキーナでした。既に魔王との戦いから15年が経ち、マトリフと同じく自身も決して全盛期とは言えません。勿論アランによる補助魔法はそれらを補ってくれるでしょうが、今回も魔王との決戦の時のようにうまくいく保証も自信ありませんでした。

まさか大魔王相手にメガンテで自爆するという短慮はしないと思いたいですが、それなりに長い付き合いとなっているブロキーナでも「やりそう」と思ってしまうのがアランなのでしょう。

「いやいや、ちゃんと作戦とか考えた上で言ってるんだよ？それでも賢者だからね！賢い者だからね！」

「…ならその作戦とやらを聞いてから決めてやる。あとお前は賢くはねえ」

ここでアランから出てきた作戦というのは非常に危険でありながら、しかし確かに効果があるだろうと断言できるものでした。そしてそれにはこの勇者パーティの仲間たちが絶対に必要だったのです。ロカとレイラが離脱してから魔王ハドラーを倒すまで、アバンとアランはマトリフとブロキーナと共に戦っていました。そこに積み上げられ

た戦いの際の連携は他の者が参加してもうまく回らないのです。

「……いいだろう。お前にしちや悪くない作戦だ」

マトリフは自身の持論として「魔法使いは後方で冷静に判断しなければならぬ」というものがあります。これはパーティの全滅を避けるため、そして戦いの中で仲間たちが興奮して熱くなりすぎないためにも冷静に一步下がった場所から戦いを見るところでした。

そのため冷静にこの場にいる顔ぶれの実力を判断し、自分やブロキーナという昔の仲間を連れて行こうというのが自殺行為に見えていたのです。しかしアランから告げられた作戦というのは自分たちにしかできず、それでいて大魔王をも倒せると思えるだけのものでした。

そのためマトリフもアランの作戦に付き合ってやろうと思ったのです。

「だが……こんなジジイを担ぎ出すんだ。終わったたら美人の姉ちゃんくらい紹介しろよ？」

「そんなの朝飯前だよ！と言いたいけど俺にそんな知り合いいないからさ、悪いんだけどお姫様お願いしていい？」

「……ええ？私？」

マトリフも参戦すると決めてしまえばこれ以上言う事ありません。ただ終わった

後に何も無いのもなあ……という軽い気持ちで軽口を叩いてみただけです。それを朝飯前だ軽くと言ってはみたものの、アランの知っている仲の良い女の子となるとマアムとかシンシア王女とかしか思い当たりません。しかも両者ともマトリフも知っている上に少女なので現実的に有り得ないのです。

そのためアランはいつもの手として、それをこの国の女王でアバンの妻でもあるフローラ女王に丸投げしてしまいました。

いつも通り友人に頼んでいるつもりなのですが、一国の女王に女性の紹介を頼むというのは有り得ない事です。ある意味誰にもできない事を史上初やってのけた人物と言っても過言ではありません。マトリフのほうも女王に頼んだ事よりも、それをアバンの嫁に頼んだという事のほうに驚いていました。

「マトリフ……」

「オレじゃねえ！言うならアランのバカのほうだろ！」

呆れたようなアバンの目に焦るマトリフですが、誰もが大魔王との決戦という舞台の前に緊張していたところには良い効果があったようでした。張り詰めた空気から緩和され誰もが口元を緩め笑いが起きている状況は狙っていたわけではありませんが、こういったところでも無駄に気負って身体を強張らせる事がないのが勇者パーティーというものなのかもしれません。

それは魔王との戦いを経験していないフローラ女王やヒュンケルや子供たち、そして仲間と戦うという事のなかったバランには得られないものでした。

これが勇者たちなのか……その様子を見ていた者たちは知己でありながら、改めて『勇者たち』というものを知ることになったのです。



## アランの冒険13

アランが立てた作戦をベースにしてアバンたちが再度考え、それに合わせできる限りの準備も行ったところで大魔王の居城へは翌日の朝から向かうという事になりました。

決戦前夜ということで全員が王城で休むと決まり、和やかで賑やかな夕食を取りつつもやはり気持ちは明日というものに向かっているのでしょう。それも仕方のない事かもしれません。あとたった数時間も経てば、この地上の平和が保たれるか破壊されるかが決まると言ってもいい状況なのです。いくら決戦に向かうアバンたちが普段通りに振る舞っているように、それを理解し戦地へと赴く仲間を見送るとするのは歯痒い思いに駆られているのかもしれませんが。

特にフローラ女王だけは二度目なのです。

現在いる者たちは基本的にアバンたちが魔王ハドラーを倒した後に知り合ったか、共に倒した者しかいません。騎士団の面々や現騎士団長のホルキンスすら当時からカル王国にいたとは言えどもアバンやアランの旅立ちを見送ったわけではないのです。アバンが魔王を倒す旅にアランと共に出るとなり、ロカが「あいっただけじゃ心配だ」と

騎士団長を辞めて一緒に行くことを許し、必ず魔王を倒して戻ってくると小さな約束を交わしその背中を見送ったのは15年も前の事でした。

そして今もまた大魔王が現れ地上の平和が脅かされることとなり、フローラ女王はまたアバンを見送るのです。フローラ女王がアバンとその仲間たちの力を疑った事はありません。それでも決戦の地に向かう夫と友人たちの事を考えると、信頼と心配が胸の中で同居してしまうのは当然でした。

アランとはもう長い付き合いになります。たまに色々と問題を起こしてこちらに丸投げしてくる事もありますが、戦いという面に一点特化したような非常に優秀で心強い賢者なのです。それに魔王を倒した後にアバンとフローラ女王の結婚に一役買ってくれましたし、生まれてきた娘をとて可愛がって面倒を見てくれていた上に色々と教えてくれていました。

そして旅の途中で仲間になった大魔道士マトリフと拳聖プロキーナ：共に老齢ではありませんが、つまりそれだけの知識と経験を有している人物たちでありフローラ女王も面識がなかったわけではないのです。アランが時折子供たちと共に孫の顔を見せに行くかのように会いに行ったりしている事も聞いていましたし、その逆に突然王城へ連れてきた事もあります。彼らはフローラ女王を国の元首ではなく『仲間の妻』として接してくれ、それが心地よかったという気持ちもありました。

そんな得難い友人たちが夫と共に大魔王との決戦に向かうのです。

それを止める事はフローラ女王にはできません。これは地上の平和を懸けた戦いであり、穏やかに暮らす人々の明日を守るための戦いなのです。せめて今だけはいつもの日常を……そう願う事だけがフローラ女王にできる事なのでした。

…

…

…

そして決戦の朝……皆が見送ろうとした時には既に勇者たちは出発してしまっていました。

これはマトリフやブロキーナだけでなくアランまでもが「そういうのは柄じゃない」とコソコソ城を出ていたためです。寝所をアバンと同じくするフローラ女王だけが、奇しくも15年前と同じくアバンを見送るという形になりました。

「こうしていると何だか昔を思い出しますねえ」

「ええ、あの時も私はあなたの無事を祈りながら背中を見送るだけでした」

「……なるべく早く帰ってきますよ」

「ふふつ、アバン……どうかご武運を」

いつも通りの態度でかつての旅の出発を思い出しながら、当時を振り返る2人……アバンにとってそれは誓いなのか縁起を担いだのか、なるべく早く帰ってくるという言葉は15年前に出発する時にフローラ女王に伝えた言葉なのでした。

そんな2人のやり取りを、声は聞こえないまでも見守っているという名目の野次馬3人がしつかりと見ていました。なんとアランに至っては2度目です。本人的には「なんかこう……旅立ち！ って感じで何度見てもいい場面だねえ」とまったく悪いと思っていないし、そこに便乗しているマトリフとプロキーナも大概なのでしょう。

「で、おれたちは良いとしてもお前は良かったのか？」

「別に今生の別れじゃあるまいし、あんな風に感動的に見送ってくれる相手もいないしね」

「お前もよくわからんヤツだな……」

それにアランは自分で言っていたように、特定の相手がいるわけでもないため感動のシーンを演出することができないのです。もし今アランに意中の相手がいたのであれば「大魔王を倒して帰ってきたら結婚しよう」と言っていたかもしれない。もしくは「お父さんは大魔王を倒した伝説の賢者だったのよ」と後に生まれた子供に誇らしそう

に、それでいて寂しそうに語る残された女性……というのも悪くありません。

この場合どちらにしてもアランは帰らぬ人になっているのですが、残念な事に今のアランにはそういう王道展開になる予定はないのでそんな考えは持っていません。何せアランの周囲に同年代の独身女性などほとんどいないのですからアランだけで解決できる問題でもないでしょう。ちなみにかつて多くあつた縁談は全部権力争いみたいなものの一環でしかないので、アランの中ではお見合い騒動についてはカウントされていません。

そういう意味ではマトリフに女性を紹介してもらう前に、アランがフローラ女王に頼んで紹介してもらったほうが良いというところまで有り得ます。その時は今までアランから色々と丸投げされていたアバンとフローラ女王でも、まさかアラン自身の結婚についてまで丸投げされるとはと驚くことでしょう。

そんな遠い未来の事は考えても意味がないと思考の外に追い出し、そしてフローラ女王の見送りを受けたアバンが合流しました。考えられるだけ作戦を練りできる限り必要なアイテムを揃え、大魔王と戦う準備は万全です。もちろん本命と戦う前にも敵はわんさかと出てくるでしょうが、この4名にとつてそんなものは15年前に地底魔城で経験済みの事のため今更臆する事ありません。

唯一飛べないプロキーナを抱えトベルーラで大魔王の居城へと向かう4人：途中誰かに阻まれることなく空高く浮かぶ城の上空へとやってきました。下から見上げていたときにはわかりませんが、トベルーラで上から全体を見下ろす事でその巨大な全体像を見ることができたのです。

きつと普通であればその先端に降り立ち進んでいくものなのでしょう。それも一つの様式美というものかもしれませんが、しかしここには敵となるとまったく容赦のなくなる賢者がいたのです。

「ねえ、あそこがそれっぽいから一気にあそこに飛んでいこうよ」

アランが指したのは鳥であれば胴体であり心臓部：そこにそびえ立つまさに大魔王の座する場所だったのでした。それっぽいという何の根拠もない指定ではありますが、言われて見てみれば確かにそれっぽくはあります。アランからすれば座して勇者たちを待つ大魔王が、実はコソコソ隠れて違う場所にいましたー！なんてするはずがないとある意味大魔王を信頼していると言っているような考えからの発言でした。

一応魔王であったはずのハドラーがフットワーク軽く度々勇者アバンの前に出てきていましたが、地底魔城ではちゃんと玉座の間にいたのでやはり『それっぽい』というのはどこの世界でも通用する守らなければならぬ何かなのでしょう。

アバンたちもそれっぽいというアランの意見に納得したのか、それとも中枢のような

場所から奇襲したほうが仮に間違っても消耗などを抑えられると判断したのかわかりませんが中心部に直接向かうという案に異論はないようです。

…

…

…

「フフフフフ…ようこそ、大魔王様の居城へ…まさかここまでやってくるなんて思わなかったよ」「わざわざ死にに來るなんてバーカバーカ」「……………」

そこに待ち受けて出迎えてくれたのは死神キルバーンと1つ目ピエロ、そして魔影参謀ミストバーンでした。今となっては魔王軍は壊滅状態となっているためミストバーンは新たな魔軍司令と言ってもいいかもしれませんが、ミストバーンにとってはそのような肩書などあつてないようなものです。

彼らにとつてもまさか人間の勇者たちが直接この大魔王の座する場所までピンポイントで飛んでくるとは思っていませんでした。決して「ちゃんと入り口から順番に攻略してこいよ」などとアランなら言いそうな事を考えたりはしていませんが、軍団長で

あつたクロコダインすら知らないこのバーンパレスで一目散にこの場所に向かつてきたのですから勇者たちを侮れないと考えてしまうのは仕方ありません。

しかしこの場は大魔王の側近2名がいたのは勇者たちの迎撃のためではありませんでした。そしてそれはミストバーンから語られる事になります。

「一同、控えよ……大魔王バーン様がお会いになられる」

その言葉と同時に空間が歪み、そこから魔族の老人が姿を現しました。

その老人から発せられる威圧感とでも言うべき圧力は、同じ魔族の老人であつたザボエラとは比べ物にならないほどです。まさか大魔王も『魔族で老人の姿である』という見た目の共通点だけでザボエラと比較されているなんて夢にも思わないでしょう。もしかしたらそんな事を言えば「あんな愚物と一緒にするな。本当の姿はこれではない」と一緒にされたくないあまりに口を滑らせて情報をくれたかもしれないし、反対に怒りを買っていたかもしれない。

「よくぞここまで来た。地上の勇者たちよ」

そんな事はわからない大魔王サイドは意外でもありませんが即時交戦とはならないようです。魔王ハドラーもアバンに「仲間になれ」とかつて勧誘していたことから、大魔王もやはり前口上は様式美として備えているのでしょうか。老人故の落ち着きなのか、それともやはり大魔王だけに絶対の自信があるのか……間違いなく後者でしょうが、決



戦の前に互いに歩み寄れないという確認は魔族であろうと人間であろうと必要だというのと同じなのかもしれません。

ちなみに大魔王の考えではこの場に現れるのは人間の勇者と共に、竜の騎士バランも一緒に来ているだろうと予測していたのです。それは当然の予想であり、戦力というものを客観視したときにバランが大魔王討伐メンバーに入らないなど考えられません。

そのため本来はこのバランパレスを覆っており外部からは侵入できないようにしている超魔力の障壁をあえて消しておき、地上に存在する中でも選りすぐりの戦士たちを迎え入れたのでした。このバランパレスは大魔王の超魔力によつて外部から誰も侵入できない強固な障壁が張られてはいますが、宮殿としての造形にも拘る大魔王としては入口を作らないというのは考えられません。そのため魔宮の門という入口が先端に用意されているのです。

もし今は亡き魔軍司令ハドラーがオリハルコンに禁呪法を使用することで生まれたかもしれない僧正の駒がいれば「何百年も開いたことのない上に竜の騎士でも破れない」と、なぜ生まれてから日の経っていないオリハルコン生命体がそんな事を知っているんだというような事を教えてくれたかもしれません。ハドラーでさえ大魔王の配下に入つて十数年程度しか経っていないので、無口なミストバランは論外として意外とキルバーンあたりが『大魔王様の歴史』のような教育でも行っているのでしょうか。

大魔王陣営の内部事情などまったくわかりませんが、すべてが大魔王の判断によって決められるため大魔王がアバンたちを迎え入れると判断したのは間違いありません。

大魔王の最終目的を考えた時に、黒の核晶をただ地上で爆発させれば良いというわけではありません。六芒星の星なる部分で爆発させることで六芒魔法陣の魔力によって破壊力が増し、地上そのものを確実に吹き飛ばす必要があったのです。

そしてその仕掛けに気付かれ邪魔をされてはたまつたものではありません。そこを伏せておくために、最後の確実な一手とするために邪魔になるであろうアバンやアランたちを招き入れることにしたのです。もし大魔王の超魔力によって誰もバーンパレスに入つてこられないとしても、この大地を消滅させることができなければ大魔王にとつては何の意味もありません。

ならば……と大魔王の知謀によって齎された策略は『地上の本当の強者への勧誘と誘い込み』と『黒の核晶に気付かせない』という事を同時に果たすことができるとしてバーンパレスへ足を踏み入れることを許したのです。そしてその上で大魔王はかつて頓挫した小さな目的を果たせればと地上に1つの布石を打つていました。

そんな大魔王の思惑によって、そんな事は知る由もないアバンたちは目的の相手と対峙することができていたのです。

「あなたたちにどのような道理があるのかはわかりません。しかし、地上に生きる人々

の平穩を脅かす者を黙って見過ごすわけにはいきません」

アバンとしても大魔王バーンや魔王ハドラーが本当に何の目的もなく、ただ地上で暴れているなんて思っていません。しかしだからといってそれを黙って受け入れるわけにもいかないのです。

「ならば冥土の土産に教えてやろう…」

大魔王バーンの口から語られたのは「今の人間たちの平和は神々の力によって支えられてきたものだ」という神話のような話でした。魔界とはアバンたちが過ごす地上の遙か地底に存在し、太陽の光が届かない不毛の大地だということです。そしてその魔界に魔族や竜を押し込め、人間に地上を与えたという事でした。

アバンたちはその話を聞き、この世界の…人間たちの始まりを知ることになります。いくらアバンが学者の家系とはいえ流石にそんな何千何万年前の事など伝わっているはずもありません。アバンだけは「アレフガルドだろ知ってるよ」と当たらずとも遠からずといった感想を抱きましたが、それでも他のモンスターの時と違いきちんと話を聞いているのは相手が魔王だからでしょう。

「そして地上を消し去り、魔界に太陽の光が降り注ぐのだ！その時、余は真に魔界の神となる」

そして大魔王バーンは遂に己の目的を語って聞かせました。それは地上を征服する

のではなく、地上そのものを消し去り地底にある魔界が地上となるといふものです。大魔王であれば闇を好みそうなものではありませんが、どうやらこの大魔王バーンは光を欲する大魔王のようでした。

「そんな真似を許せるはずがありません！そして何より…力ですべてを解決しようとするのが間違っているのです！」

「力こそがすべてを司る真理だ。人間だけがそこに理屈をつけて目を背けておる…が、最後に行き着くのはやはり力なのだ」

そう大魔王は語り、更に続けて「どれだけ否定しようが最後には力に頼ることになるものだ」と魔王軍と人間たちの戦いについても言及してきました。大魔王バーンは何も昨日今日思いついて地上を滅ぼそうと考えたわけではありません。数千年の時間をかけて力を蓄えるだけでなく、それと同時に地上の事も観察してきたのです。

神々が魔族や竜よりも脆弱だという理由で地上を与えた人間もまた、力という真理には抗えないのでした。地上が人間たちしかいなくなれば、結局人間同士で戦いが起こるのです。そこには魔族も竜も人間も関係なく、やはり力で示すという結末には何も変わりませんでした。

そうと知れば魔族と竜を魔界に押し込めるのなど神々の傲慢な行いでしかありません。そんな身勝手なまでの行動を、神々の力を振りかざして行ったのですから大魔王の

中には神々や人間…そして地上というものに対してまで憎しみが降り積もってしまっているのでしょうか。

人は人を思いやることができる…時には力が必要な事はあれど、優しさや愛といったものもまた人に備わっている…そういつた事をアバンがどれだけ言葉を重ねようときつと大魔王に届く事はないでしょう。憎しみとは怒りとは違い、時間が経てば昇華されるのではなく時間が経つほどに蓄積されていくものなのですから……

「それにお前たちも勇者とまで呼ばれる者たちだ。敵と戦う時、鍛え上げて身につけた力で思うようにあしらう時気持ちよくはないのか？優越感を感じないのか？」

「めっちゃ感じるに決まってるじゃん」

「アラン…？」

アランとしては大魔王の言う事は非常に理解できるものだったのです。もともとアランが『ばふばふ』してレベル99にしようとしていたのも、賢者として修行したり特訓したりヨミカイン遺跡に籠っていたりしたのも全部大魔王の言う通り敵を圧倒して倒すのが楽しいという理由からでした。

とはいえそこは否定するべき場面だったのでしよう。アランとしては別にわざわざ嘘をつく理由もなかったので思った事をそのまま答えたわけですが、まさかの味方からの大魔王への厚い援護射撃がくるとは思ってもみませんでした。

「クッククック…やはりそうか…お前だけは違うと思っておったのだ。賢者アランよ」

「…俺？」

「悪魔の目玉を通して見ておったよ。お前は魔王軍がカールを攻めた時、命乞いをして  
いる相手すら迷いなく殺した…モンスターはすべて敵と定め、そこには一片の慈悲すら  
持たん非情さ…どうもお前は人間よりも我ら魔族の気質に近いと言ったほうが納得で  
きるのだ」

何やら大魔王から目を付けられていたアラン。しかも魔王軍がカール王国を攻めて  
いた時の様子までも悪魔の目玉によって観察されていたようでした。大魔王が言っ  
ているのは鳥人がスカイドラゴンの命乞いをしていた件のようです。

ちなみにアバンたちもそれは初耳でした。

王城に侵入した魔族が命乞いをしたにもかかわらず破裂させていた事は知っていま  
したが、どうやらアランはそれ以外にも命乞いをされた相手を殺していたようです。も  
し仮に命乞いをしていた鳥人が反対の立場になり人間から命乞いをされても嘲笑しな  
がら斃り殺すのでお互い様なのですが、もはやこの世にいないため「実は思慮深い優し  
い魔物だったのに…」と言われても反論できないのでした。

「アラン、その話は聞いたことがありますよ？」

「まあわざわざ言うほどの事でもないからね。てか何があつたとしても結果は変わらな

いし別に問題なくない？」

しかしアランにとつてはそんな事は問題ではありません。大体その命乞いの対象だったスカイドラゴンのほうは人間の死体を啜えてグルグル言っていたので、そこだけは大袈裟に言われても困ってしまいます。もしかしたらこの大魔王の言葉自体が勇者パーティの仲に罅を入れるための策略なのかもしれないが、しかし今更この程度で罅が入るような事はありません。ハドラーが復活してきても話している途中に消し飛ばすアランですし、アバンたちは仲間としてそれなりの時間を一緒に過ごしてきている大人でもあるのでそれこそ今更な話なのでした。

もしこれが年若い少年少女たちのパーティであれば非難されていたかもしれません。実は自分たちが知らないところで『自分の命を守るために土下座して命乞いしている魔族の老人を破裂させた』とか『自分の命を顧みず一緒に育った兄弟のようなモンスターに命乞いしていたのに聞き入れず纏めて殺した』など聞かされたとなれば、割り切るとしてもきつとすぐには心の整理ができなかったでしょう。

「ククッ、やはり余の見立て通りのようだな。時に話は変わるがアランよ、そなた余の部下にならんか？」

「え？」

「先程も言ったがお前のその冷酷さや非情さ、気質は人間よりも我ら魔族に近い……人間

たちがお前を疎み、邪魔に思うのに時間はかからんだろう」

大魔王からの思わぬ勧誘の言葉を聞きアランは考えました。

かつて共に戦った仲間が魔道に堕ち敵となって立ち塞がる展開：そしてかつての仲間たちと何度も死闘を演じ、最後には友情の力によって改心し大魔王を討ち倒す壮大な物語を：

ほんの少しばかり揺れ動いたりもしましたが、考えてみればハドラーも同じ事を言っていたので二番煎じを受ける気にもならないという結論に至ったアラン。大魔王バーンの勧誘は『ハドラーと同じ事を言ったから』というどうしようもない理由で拒否されることになったのです。それに大魔王が言う「人間たちがアランを邪魔に思う」というのもよくわかりません。

「別に人間たちが俺を邪魔だと思ふのなんて関係なくない？ どうしても文句があるのなら受けて立つだけだよ」

地上にある国々の中でアランの事をよく思わない国だつてあるでしょう。事実としてアルキード王国もパプニカ王国もアランの事はよく思っていない。個々人で見ればそうでもないのかもしれませんが、アランは国に嫌われていると言つてもいいくらいの事は仕出かしてきているのです。

アルキード王国では跡継ぎである一人娘のソアラ王女を奪い去り、更に兵士たちとの



戦いで暴れ力づくで黙らせています。 PAP ニカ王国ではマトリフがキツカケとはいえ、国内でも有数のはずだった賢者たちを鎧袖一触とばかりに薙ぎ払い力の差を見せつけています。

そしてアランのこれらの行動によりアルキード王国も PAP ニカ王国も 1 人の人間に国の面目を潰されていた事になるのです。

「まったく惜しい男よ……そこまでわかつていながら余と戦うというのか」

「別に困ったらアバンに丸投げするから問題ないしね。どうしても仲間にしたかったら力づくでやってみなよ」

「クツクツク……それが魔族に近いというのだ」

言葉という意思疎通を以って説得し仲間にしようとする大魔王と、それを蹴り力で示せと答えるアラン。 どうにもお互いの種族が逆のような気もする展開ですが、案外間違ったことを言っているわけでもないため仲間たちは言葉を挟めません。 しかもアバンに至っては問題が起きれば丸投げされる事が決まっているようでした。

アバンにとっては確かに今までもよくある事だったわけですしそれを解決するのに尽力するのは構わないのですが、まさか堂々と大魔王にまでそんな宣言をされるとは思いませんでした。 これにはそこまで頼ってくれている事を喜ぶべきなのか悲しむべきなのかわかりません。

交渉は決裂し、後は力で示すのみ…とはならず、大魔王は揺さぶりをかけるかのよう  
に語りだしました。

「そういえば…お前たちが戦うのに地上の人間どもが見ているだけというのは、些か不  
公平だとは思わんか？」

## アランの冒険14

「フローラ様！南の方向より2つの軍がこちらに向かってきているとの事！掲げている旗印は…アルキードとパプニカのものです！」

「どうしてこんな事に…」

アバンたちが大魔王と対峙している頃…地上では大魔王の言葉通り人間たちが、アルキード王国とパプニカ王国の軍勢がカール王国を目指して進んでいました。

これらもまたかつてアルキード王国で大魔王が行った策略と同じものだったのです。大魔王バーンとその側近であるミストバーンなどは暗黒闘気の使い手であり、そして暗黒闘気とは怒りや憎しみなど負の感情が力の源でもあります。ミストバーンが指揮する魔影軍団も実体のないモンスターが多く、配下であるシャドーなども暗黒闘気を操ることができました。

そのためバランの時はシャドーを使いアルキード王国のソアラ王女を狙う者たちの嫉妬心や猜疑心などといった感情を操り、暗黒闘気で増幅し方向性を示してやるだけで本人たちも気付かぬ内に都合の良いように行動を操られていたのです。そして今回は

アルキードとパプニカに蔓延る憎悪や嫉妬などを、ほんの少しばかり増幅させ発散する方法を示してやったのでした。

当の本人たちに操られているという自覚はなく、アルキードであれば『不当に奪われた王女を取り戻すため』そしてパプニカならば『落ちた国の威信を取り戻すため』と、彼らのその行動の根底は愛国心や正義に根ざすものです。そしてそういった感情を操られ行動を起こしているのが大臣たち国要職につく人間たちだったため、その暴走とも言える行為はたとえ国のためとはいえ他国に攻め入ることを良しとしなかった人間がいても歯止めが利かなかったのです。

大魔王が地上を侵略しているのに何を人間同士で争っているんだというところでもあるのですが、世界中の皆で一致団結して大魔王に抗おうという情勢ではなかった事が魔王軍に付け入る隙を与えてしまっていたのでしよう。

これにはそういういった事情を知らないフローラ女王が嘆くのも当然です。そしてこの2国が行動を起こした原因は負の感情を増幅されているとはいえ、両方ともアランの行動から引き起こされた事だと知ればもっと嘆くかもしれません。

仮にですが：アランがこうなる事をわかっていたとしてもやはりソアラ王女とバランを助けていたでしょう。

もしかしたら両思いのお姫様と騎士を引き裂く国なんぞ滅んでしまえと余計に暴れ

ていたかもしれません。それは魔王ハドラーを倒した後にアバンがフローラ女王との結婚を渋っていた際、フローラ女王が治めるカール王国であろうと滅ぼそうという考えが浮かんた事からもアランには匿うや逃げるといった真つ当な発想は思い浮かばないのかもしれませんが。そしてパプニカ王国のほうはマトリフが原因と言えなくもありませんが、王家の人間たちまで見ている前でたつた一人で国家の面目を叩き潰したのはアランなので結局アランのせいと言えるのでしよう。

もちろんフローラ女王も両国の進軍の報に最初こそ驚きましたが、しかし冷静になって考えればアルキード王国やパプニカ王国が突然攻め入ってくるなど魔王軍の何かしらの策略だろうということくらいわかります。前回の戦いで魔族が直接カールの王城にやってきたにもかかわらず策略が失敗したのだから、次は更に搦手を使って攻めてきたとしても何も不思議ではありません。

そしてそこまで看破していてもこの状況を打破するのは難しいのです。

もし原因がわかっておりここにアバンがいれば破邪呪文で増幅された邪気を祓うという事もできたかもしれませんが。時間に余裕があったのであれば各国にマホカトールを施す事により操られるという事態を防げたかもしれません。しかし破邪呪文を使用できる唯一の勇者は大魔王との決戦に向かっているためその方法を選択することはできなかつたのです。

ならば破邪呪文を使える者を増やせばいいのかというところ、そう簡単にいかない事情もありました。破邪呪文自体がカール王国にある破邪の洞窟にて習得できるものであり、人間の神が残した遺産である破邪の洞窟をある程度踏破できるだけの実力が必要になってしまいうからです。

そしてその破邪の洞窟を地下15階、地下25階と踏破することによって初めて破邪呪文を契約するということに漕ぎ着けることができるのでした。しかしアバンでさえ地下25階で契約できるミナカトールは契約できていません。

ただこれは周囲のモンスターが次々と湧いてくる状況のため、ミナカトールを契約するために集中することができなかったことが原因です。もしかしたら破邪呪文というものとは1種類しか契約することができないという事も考えられますが、そんな制限がないのであればアバンが複数人で破邪の洞窟に挑んでいれば周囲の警戒を仲間に任せてミナカトールを契約できたことでしょう。

何が正解なのかはわかりませんが、やはり破邪の洞窟というのは「人間たちが協力してこれくらい乗り越えることができなければミナカトールは契約してやらん」という神が用意した高きハードルなのでしょう。もしかしたら魔族や竜に対して身体能力が種族的に劣る人間たちに『1人では不可能な事もあるよ。協力して仲間に頼りなさい』という無言の

メッセージなのかもしれません。

アランがこれを知っていれば喜々として一緒に行っていたかもしれませんが、アバンが破邪の洞窟に挑戦していた頃は魔導図書館にいたため同行することは叶わなかったのです。

そのような過酷なダンジョンにカール王国が魔王軍対策として他国に対して破邪の洞窟踏破を勧めたとしても、各国は自国の精鋭や破邪呪文を契約出来得る選りすぐりの人物を派遣しないとイケないという問題もあつたのです。そしてそんな有用な魔法だとそこまで周知されていない現在において破邪呪文を使用することができるのはアバンのみであり、残されたフローラ女王たちカール王国の面々は何とかしてこの状況を打破しないとイケない状態だったのです。

勿論アルキード王国もパプニカ王国もその国が持つ全戦力が投入されているわけではないのですが、賢者アランを良く思っていない人間たちというのは一定数存在していました。そこに負の感情を増幅され伝播していくことでアラン個人への恨みがカール王国への恨みへとすり替わっていったのです。

このままいけばカール王国とアルキード・パプニカの2国との戦いは避けられませんが、フローラ女王たちだつて国家間での人間同士の戦いなど経験した事はありませんし、何よりも「今はそれどころじゃない」というのが本音でした。世界の危機に他国に

対して戦いを仕掛けるなど愚行もいいところなのですが、暗黒闘気に対抗できるような人間たちが国の要職の中になかったため魔王軍にとつては非常に利用し易い状況だったのでしょうか。

「フローラ様！アルキードとパプニカの動きを受け、リングイアにも動きがあったとの事です！」

「リングイアまで……」

更に国境を警備していた兵士から追加で齎された情報は決して良いと思えるものではありませんでした。なんとリングイア王国でも動きがあり、相当数の人間たちがここカール王国に向かって来ているということなのです。

「フローラ殿、それらは私が抑えて来よう」

本来は人間同士の争いなど竜の騎士が関わるものではありません。しかしこの場には愛する妻と子がおり、そこに攻めて来ている者たちがいる以上戦わない選択肢などありませんでした。更にここには長い時間を共に過ごし、大魔王を倒さんと決戦の地に向かっていている仲間たちの大切な者もいるのです。

「バランさん、彼らは恐らく魔王軍によって扇動されているか操られているのでしょうか。この状況で戦うのは相手の思うつぼとなってしまうです」

「心配は無用だ。こういう時にどうすれば良いのかはアランから学んだのでな」



「それは本当に大丈夫なのかしら…?」

フローラ女王の心配を他所に、不敵に笑いしつかりと対策を得ているというバラン。しかしフローラ女王はアランから学んだというその一点において不安を隠せません。そんなフローラ女王の不安は見事に的中することになり、しかし事態はそんな不安とは違ったフローラ女王が考えもしない方向へと向かっていくのでした。

…

…

…

カール王城でバランがこちらに向かってきているパプニカ・アルキード軍のもとへ向かおうとしている頃、リンガイア軍はそのパプニカ・アルキード軍と対峙していたのです。更にそのリンガイア軍の先頭に立つのはなんと猛将として知られているバウスン将軍だったのでした。

「貴殿らは軍を率いてどちらに向かわれるのか?」

「リンガイアが邪魔をしないでほしい!我らはカールに奪われたものを取り返しに行くのだ!」

先頭に立つバウソン將軍の問いかけに答えはするものの、邪魔をするのであれば力づくで押し通るとばかりに戦意を昂ぶらせるパプニカ・アルキードの面々…そこにはなんとキラーマシンと呼ばれる魔王が勇者を殺すために作り上げた殺人機械すらも姿を見せていました。まさに勇者たちが居を構えるカール王国に攻め入るには相応しいと言わんばかりです。

しかし当然の事ながらバウソン將軍はその程度で気後れすることはありません。何しろバウソン將軍含めたリンガイア軍はカール王国の援軍としてこの場に現れたのですから……

元々リンガイア王国は魔王軍に総攻撃を受けていたカール王国の援軍として馳せ参じる予定だったのです。しかし思ったよりも参加したいという者たちが多く、そのため自国の復興や守護か援軍かで人員を振り分けるのに時間がかかってしまったのです。何せリンガイア王国ではアランの起こした行動によってカール王国の評価が今までとは一変してしまっているのです。

魔王軍の超竜軍団によって劣勢に立たされていたリンガイア王国……そこに援軍として現れたのは魔王すら倒した賢者でした。その賢者は襲いかかるドラゴンの軍団を返り討ちにし、更には勇敢に戦った末に無念の死を遂げた將軍の息子を蘇らせてみせたのです。それらは誰にも真似することのできないまさに奇跡の御業でした。

そしてそれらをさも簡単な事だと言わんばかりに行ったその賢者は「すべてはフローラ様の申し召し」であると皆に告げたのです。その上で「みんなもカールと仲良くすると良い事あるよ！」とまるでフローラ教に入れば力が手に入ると誤解を招くような事まで言っていたのです。

それによつて現在リンガイア王国では空前のフローラ様旋風が吹き荒れており、特にそれらの奇跡を目の当たりにした騎士団や兵士たちには顕著だったのです。アランはリンガイアへ行った時にドラゴンたちを倒すところを兵士たちにも普通に見られており、パウスン將軍の息子ノヴァくんが生き返っていることも目撃者である將軍本人から聞かされて、更に生きて動いているノヴァくん本人を見て知っています。

そして更にカール王国が魔王軍の総攻撃を受け、城よりも巨大な質量を持ったゴレムすらもがカール王国を滅ぼさんと向かっていたことを知りました。そんな絶望の戦いと呼べるような激戦すらも跳ね除けたことで「やはりカール王国は奇跡を体現する国だったんだ」と思われているのですが、これは戦果が戦果なので仕方ないのかもしれない。

そういった状況もさることながら、一方で実はフローラ女王にもその原因の一端はあったのです。

現在のフローラ女王はカール王国を滅ぼされていませんし、魔王軍に抗う覚悟の表れ

として腰あたりまでであった髪を切り肩下までの長さにして後ろで纏めてもいません。美しい長い髪のまま女王としてのカリスマを備え、そこに勇者アバンと結婚することで子を得て溢れる母性まで備えてしまったのです。国家間のやり取りの中で使者からその美しさを讃えられたりすることもあり、そこに各国で流れるフローラ女王の噂話に合わせてアランの軽はずみな言動によってリンガイア王国内では聖女フローラ様が誕生していたのでした。

そんな国が魔王軍に攻められたと思つたら逆に返り討ちにしたと聞き更に尊敬を強めていたら、今度はなぜかアルキード王国とパプニカ王国がカール王国へと向かつているという情報が入つたのです。そのため何やらきな臭い思いを感じたパウスン將軍はひとまず事情を聞こうと両国の間に入る事にしたのでした。

「これはどういう状況だ…?」

にらみ合いの様相を呈していた両軍の間に降り立ったのは、策があるからとトベルラでカール王城から現れたバランでした。バランはひとまずカールに背を向ける形でアルキード・パプニカ軍の前に立ち塞がっていたリンガイアのほうへと向かい名乗りを上げ、責任者と話をしようと思いました。

「おお、貴殿が愛の騎士バラン殿ですね。話はアラン殿からお聞きしております」  
「愛…? アランは一体何を言つたのだ…」

バランがカール王国からの使者だと知り、そしてその名を聞いたバウスン將軍は自らも名乗ってバランの事はアランから聞いていると語りました。その内容は『平和を守る騎士がお姫様と恋に落ち、家族のために生きる愛の騎士となった』というものでした。何も間違つた事は言っていないのですが、何か間違つている気がするバラン……ひとまずそれは置いておくとしてまずは現状をどうにかするのが先決だと思ひ直します。

何よりもアルキード王国が攻めてきているという事はソアラ王女も当然知っており、そしてそれを聞いて心を痛めないはずがありません。王女としての、王族としての責務を放り出して国を出てきてしまったのは事実なので、母国に対して申し訳ない気持ちなどは常にソアラ王女の中にありました。そんなソアラ王女の心の安寧のためにもこの件を早期に解決しておきたいという気持ちがバランの中にもあつたのです。以前のカール王国に来る前のバランであれば徒に人間を傷つけるわけにもいかず、もしかしたら降伏して自身の命と引き換えにしても妻と子の助命を請うたかもしれません。

しかし今のバランは違います。

かつてアランがアルキード王国に訪れた際に、どうやってソアラ王女の事を認めさせ諦めさせたのかを本人に聞いていたのです。その時アランは言っていました：「人には何かを譲れない時が必ずある。そういう時は自分の覚悟を、持てる力を見せる事で案外簡単に解決したりするもんさ」と。

ちなみに格好良く言っているようですが、実際にやったのは「ソアラ王女が欲しければ俺を倒してみろ」という力押しのお脅迫です。その助言の場にアバンたちが居合わせていればきつと否定して訂正してくれたでしょうが、しかしバランはカール王国にやってきて既に10年を超える年月を家族や友人たちと過ごしてきています。その中でアバンたちから学ぶことも多かつたのですが、実はアランからも色々バランは学んできました。

デイーノくんがまだ赤ん坊だったころには寝かしつけるといふ行為が難しく妻のソアラ王女から呆れられたりしていた新米パパのバランでしたが、そこを通りかかって助けてくれたのもアランなのです。その方法は「なかなか寝てくれない？ ラリホー使おうといいよ」というお母さんたちにバレたらきつと烈火の如く怒られるであろう手段だったのですが、育児の経験など皆無のバランはそれを実行しソアラ王女から「あら、デイーノもパパの腕の中で安心して寝てるのね」とラリホーによる寝かしつけを決行した結果お褒めの言葉を頂戴してやって良かったと喜んでいたりもしました。

そんな合っているのか間違っているのかわからないまでも少しずつ人の生活について学びながら友人関係を構築していったアランの言葉ですし、アルキード王国にて実際にやった経験談として聞いたのだから大丈夫だろうとバランもそれを信じて真似てみようと思つたのです。

「私も今や安易にソアラを、デイーノを危険に晒すわけにはいかん……ギガデイン!!」  
その結果バランは示してしまつたのです……アルキード・パプニカの両軍の前に立ち塞がり、自身が使う稲妻の上級呪文により豪雷の雨を降らせるといふ事でその覚悟を示してしまつたのです。

これにはアルキード・パプニカの兵士だけではなくリンガイア軍も驚きました。しかしリンガイアは友軍であるため、そして一人で戦況を変える事のできる人物をすでに知っていたためそれ以上の感想はなくむしろ尊敬の念が深まる程度です。

しかしアルキード・パプニカのほうは違います。

元々両国の大臣たちが突然豹変したように「王女を取り返すには今しかない!憎きカールへ攻め入り囚われの王女を救い出すのだ!」「我らの国の面目を傷つけ…更に国王たちが見ている前で、まるでいつでも攻め滅ぼせると言わんばかりの振る舞いには力を持つて見せねばならん!これは我がパプニカの威信を懸けた戦いである!」と暴走したのが原因なのです。

暗黒闘気による負の感情の増幅によって、まさに泥沼の戦いになろうとしていた状況を変えたのは伝説の騎士の呪文でした。嫉妬や妬みといった負の感情によつてここまで行動していましたが、目の前に落とされた稲妻の雨はもう1つの負の感情を大きく増幅させたのです。

それは：『恐怖』でした。

誰にも使用できない伝説の呪文とされるギガデインを間近に見せられ、恐ろしさを自覚してしまえばもう自身の内から溢れ出るのは恐怖しかありません。そしてその恐怖が増幅してしまえば自制することなく、まさに混乱といった状況に陥ってしまったのです。兵士たちは奇声を上げたり逃げ回ったりと先ほどとは人が変わったかのようになってしまう、もはや戦いなど頭がないと思うほどの状況でした。

「ひいひい…行けバロン！そのキラーマシンであやつを倒すのだ！」

しかしその混乱の中でも一人の司祭がキラーマシンに balan 攻撃を命令していました。その司祭はパプニカの司教であり、キラーマシンに乗っているのはパプニカで賢者の地位を持つ男だったのです。そんな人物たちも暗黒闘気の力によって、今となっては大魔王の傀儡としてこの場にいたのでした。

キラーマシンとは地底魔城にてハドラーが対アバンとして用意した強力な機械であり、実はその司教がいずれパプニカ王家に牙を剥き王位を奪い取ろうと思ひ密かに準備していたものでした。しかしアランというパプニカ賢者の敵とも言える人物の登場によって計画は変更され、ひとまずカールの賢者を倒すという方向にシフトしたため計画されていたパプニカ女王様暗殺計画なども先送りになっていたのです。

本来であればキラーマシンというものは呪文も効かずそれなりに強力なものなので



すが、そんなものが今更竜の騎士である balan に通用するはずもありません。真魔剛竜劍の一太刀によって斬り裂かれ、乗っていた賢者は当身で気絶させられてしまいました。

これにより攻め入ろうとしていた人間たちは逃げ帰るようになり、balan のほうも「人間たちを傷つけることなく撤退させることができた」という成果にalan の言葉が間違っていないかつたと改めて納得することができました。これまでの戦いは敵を倒すか倒さないかという二択で物事を考えていたalan にとって『威圧』という第三の方法が穏便に事を収めるのに都合が良いと知識ではなく経験で知ることができたのです。

実際にやっていることはalan と同じく強大な力による脅しでしかありませんが、魔王軍によって扇動された人間たちを無闇に傷つけることなく撤退させたのもまた事実でした。

流星に恐慌状態でこの場を慌てて逃げ出そうとしている者たちがカールに襲いかかって来ることはないだろうと判断し、balan はバウスン將軍へ声をかけてから王城へとトベルーラで戻っていききました。バウスン將軍たちリンガイア軍のほうはフローラ女王に礼を言いたい事もあり追ってカール王国へ向かうということでした。

balan としては満足な結果を得られたのですが、まさかこの行動によってリンガイア軍内のカール王国に対する評価が更に上昇してしまうなどとは知る由もありませんで

した。

## アランの冒険15

「そういえば…お前たちが戦うのに地上の人間どもが見ているだけというのは、些か不公平だとは思わんか？」

「…なに？」

「ククク…人間というのは愚かなものよ。今頃お前たちの国を襲っているのは人間なのだからな」

大魔王バーンによって語られたのは人間たちがカール王国を襲っているというものでした。アバンはそれを信じたくないという気持ちはあれど、それが決して口から出任せではないという事くらいは理解できます。

しかしだからと言って今から引き返すわけにもいきません。それを目の前の大魔王たちが許すとも思えませんし、アバンたちに行き届くことはいち早く大魔王たちを倒す以外に選択肢などないのです。

「私たちは仲間を信じて、後ろを託してこの場にいます。たとえ地上がどうなつていようと、今できるのは残った仲間たちを信じて戦うのみ！」

「ふむ、戦意は衰えんか…それでこそ地上の勇者どもよ。ならばその意志に敬意を表して余が直接相手をしてやろう」

「…なに？」

「余はたとえ人間であつても強者に対しては敬意を持つておる。よつてここまで抗つた地上の勇者たちへの褒美として後ろの者には手を出させず、余が1人で相手をしてやろうというのだ」

突然宣言された大魔王の言葉はアバンたちにとつては破格の条件でした。しかし当然ながらこの条件は大魔王が自分1人だけでも、目の前にいる勇者たちを遊びながらも倒せると判断しているからに他なりません。事実もし大魔王たちがパーティとしても襲いかかつてきたら非常に厄介だったでしょうが、どれだけ強者への敬意は持つていても『人間ごときへ持つてる力を全て使つて戦う』というのは大魔王にとつては敗北に等しいという思いがあるのかもしれない。

それでもその提案をされたアバンたちからすれば大魔王1人か部下を含めた4人か…そう考えればこの条件の間に大魔王を倒すしかないというのも事実なのでした。

「ならばその余裕のうちに倒させてもらうまで！行きますよ！」

「あいよつ！バイキルト！スクルト！ピオリム！」

アバンの開戦の号令を受けてアランは補助呪文を唱え、そしてマトリフを残し3人は

飛び出しました。当然ながらアバンたちの狙いは大魔王バーンなのですが、ここでアランは大魔王の後ろを取るような動きで背後に回ったのかと思っただけならそのまま狙いを交えてしまいました。

「なっ…!!」

「とりあえずこいつからだ!」

アランが狙っていたのは…一つ目ピエロのピロロでした。

大魔王バーンが1人で戦うという中で手出しせずその戦いを見守る立場だったはずのピロロたちだったのですが、まさかアランが自分を狙ってくるとは思っておらずそのまま攻撃を受けてしまったのです。通常ならば反応できたかもしれないその攻撃は、不意を突いた上に補助呪文で能力の引き上げられていた状態だったためまさに会心の一撃として炸裂したのでした。

このアランの行動には敵味方問わず瞠目する事になります。それもそのはず…勇者たちが倒すために目指していたのは大魔王であり、その大魔王が目の前にいて1人で相手をすると知っているのに他に目をくれる余裕などどこにあると思うでしょうか。

しかしアランの言い分は違います。アランからすれば、今の状況をゲーム風に表現するならば…

だいまおうバーン が あらわれた

ミストバーン が あらわれた

キルバーン が あらわれた

1つめピエロ が あらわれた

ミストバーン は ようすをみている

キルバーン は ようすをみている

1つめピエロ は ようすをみている

という状態でした。

そのためアランのゲーム脳の中の常識では「弱いやつから倒しておく」というのは当然のものであり、わざわざ様子を見ている敵を残しておくなどという考えはまったくありません。そしてこのアランの行動には仲間であるはずのアバンたちもビックリです。恐らく戦いの優先順位でいうとアバンたちの場合はこの1つ目ピエロは最後になるのです。

「卑怯な……」

「ミストバーンよ。余は1人で相手をするとはいったが、この者らに余しか狙うなどは言っておらん。つまり油断していたそやつが悪いのだ」

そして何やら今のアランの行動はミストバーンには不評で大魔王バーンには好意的に見られているようです。戦いが始まったばかりだということのあまりにも突然のアラ

ンの奇行は、どうやら魔王軍の中であつても賛否ある行動のようでした。とはいえ大魔王がそれを良しとしている以上ミストバーンとしてもこれ以上文句を言うわけにもいきません。

「弱いヤツから先に倒しておくのは常識だろ？」

「ククツ…アランよ、やはり余のもとへ来ぬか？余が正々堂々一人で戦うと言っているにもかかわらず、お前はお構いなしに他の者を攻撃した。まさに勝者こそがすべてだという好ましい考え方だ」

「いや別に俺だけじゃないって」

恐らくこの世界中の誰に聞いても卑怯だと言うであろう不意打ちをしておいて胸を張るアランと、それを聞いて部下に欲しいと言う大魔王バーン。確かに地上を平和を守るために戦っている以上綺麗事ではやっていけないのかもしれませんが。そういう意味では卑怯とも取れるアランの行動は、クールな大魔道士であるマトリフなどには一定の理解を得られるものなのでしょう。

しかしこのアランの行動はその思惑とは違い、地上の勇者たちにとっては非常に意味のある行動だったのです。

それが正しかったと証明するように、1つ目ピエロが死んだ事で死神キルバーンは沈黙し動かなくなりました。それもそのはず、死神キルバーンとは1つ目ピエロが操る人

形に過ぎなかったのです。これにより死神キルバーンは無力化されたと言ってもよく、残す敵は大魔王バーンとミストバーンだけとなっていたのです。つまりアランは意図せずに敵の幹部を倒していたのです。

そしてこれを大魔王が気にしなかった事にも当然理由があります。

大魔王バーンにとって死神キルバーンとは冥竜王ヴェルザーから送られた刺客であり、最初から完全な味方ではなかったためアランの齎した結果は大魔王サイドにとって何も問題にはならなかったのです。

「まあよい、では仕切り直しといこうか」

大魔王のその言葉で戦闘の空気へと戻り、アバンたちも一番弱そうな敵が1匹滅つただけで本命はまだ目の前だと気を取り直して構え直しました。大魔王はその見た目から考えれば近接格闘でガンガン攻めてくるタイプではないのでしょうか。

そしてその予想が正解しているとしても言うように、大魔王は掌に魔力を溜め始めました。それは炎となっていく様子からメラゾーマであることがわかります。そして大魔王はその力を徐々に開放しながら説明してくれました。

大魔王バーン曰く、そのメラゾーマは想像を絶する威力と優雅な姿をしている事から魔界では『カイザーフェニックス』と呼ばれているということです。メラゾーマなのに違う名前と呼ばれていることに違和感はありませんが、つまりメラゾーマの更に上級



呪文ということなのでしようか。それとも魔界ではメラゾーマがカイザーフェニックスと呼ばれていて、マヒヤドやイオナズンもまた違った呼び方があるということなのでしょうか。

無駄としか思えない複雑な形状である火の鳥が飛んできているという事実とその前の意味がわからなくて混乱しているアランですが、しかし飛んでくる火の鳥を避けるくらい造作ありません。もし自分たちの後ろに傷ついた仲間がいて避けられないのならわかりませんが、ここにいる全員が無傷の状態で大魔王と戦えているので全員が全力戦闘が可能なのです。

補助呪文をかけられた状態のプロキーナとアランは地を這うように素早い動きで躲しており、アバンとマトリフはトベララで空中を高速移動することで大魔王の第2射のカイザーフェニックスを避けてます。

アバンたちに長期戦をする考えは一切ありません。

もしアランがどこかの街で『ぱふぱふ』をして自分がレベル99になったと勘違いしていたら、大魔王相手にあえて攻撃させてそれでも敵わないと思いい知らせるような舐めプをしたでしょう。大魔王を相手にしても尚圧倒するだけの強さを手に入れて、逆に大魔王ムーブをするのが目的だったのでからそのゲーム脳はもう治らないのかもしれない。

しかし幸いなことにアランは『ばふばふ』することも『ひかりのたま』を手に入れることもできていないため、中途半端に余力を残して戦うよりも全力で攻撃することを選んだのでした。

「いくよブロキーナ！」

「もしかしてワシ過労死する？」

「大丈夫だよ！死んだら生き返らせてあげるからさー！」

ブロキーナの持病や寿命は誰にもわかりませんが、残念なことにそんなものはアランには通じません。そしてアバンたちは蘇生呪文を見たことがあるわけではないので、アランの「死んだら生き返らせる」を「死ぬ気で頑張れ」に脳内変換しているということをおアランは未だに知りません。

しかしそんなアランとブロキーナという武神流の使い手2名による近接攻撃は大魔王にとって非常に厄介なものでした。常に至近距離から打撃を雨あられの如く受け続けるのは如何に大魔王といえど軽症ではられません。そして距離を取ろうにも2人が前後左右から怒涛のように攻撃してくるためそのチャンスすらも見当たらないのです。

「マトリフ…今です！」

様子を伺っていたアバンからの号令のもと、アランとブロキーナが攪乱している間に

マトリフが密かにチャンスを待って準備していたメドロアが放たれました。その大魔道士が編み出した極大魔法の一条の光は大魔王にとってはまさに千載一遇の好機となったのです。

その光は大魔王に向かって一直線：ではなく、武神流の動きの予測ができなかったのか少しズレていたのです。もし正面からその魔法が向かってきていたのなら、大魔王は間違いなく呪文返しマホカントによって跳ね返していただしよう。

しかし今向かってきている光は大魔王ではなくアランへと向かっている形になってしまっていました。手元に欲しかった人間が一番最初に脱落するという事に少々の落胆を覚えつつも、余波を受けないように魔法力を噴出し距離を取ろうとする大魔王バーン：しかしおかしな事に自分の近くにいたはずのプロキーナが自分から距離を取っている事に気付き、それがどういう意味なのかすぐに知ることになります。

「…マホカント！」

なんとアランの使ったのは大魔王もこの地上には自分以外に使い手がないと思っていたマホカントだったのです。アランの前に現れた光の壁はそのままメドロアを跳ね返し大魔王へと向かい：大魔王を飲み込んでいきました。

これがアランの考えた大魔王対策の戦い方だったのです。

アランのこの世界での目的でもあったレベル99にしての圧倒：これが叶わなかつ

たということは普通に戦うということになります。しかし倒すか倒されるかのギリギリの戦闘を楽しむような嗜好はアランの頭にはありません。低レベルクリアという縛りプレイではなく最大までステータスを上げるほうに楽しみを覚えるタイプのアランにとつては、きつとチェインソーでもバニシユデスでも使えるものは何でも使うでしょう。

そういつた思考のもとで真正面から攻撃を与えようとして受けて立つてくれる相手などいないと考え、ならばと最大攻撃を確実に当てる方法を考えたのです。そうして大魔王に不意を付き最大のダメージを与えるためにどうすれば良いかと考えたのが『メドロアア反射作戦』だったのでした。

武神流を使うアランとブロキーナが2人がかりで接近戦を行えば他に気を取られているような時間など皆無と言つていいでしょう。そしてそのまま隙があれば閃華裂光拳で攻撃するもよし、それでも手強いようであれば観察眼の優れたアバンが機会を伺い、マトリフがメドロアをアランに向かって撃ちそれを跳ね返す事を思いついたのです。

アランにとつてマホカンタはあつて当然の呪文であり、それをマトリフすら使えない事に疑問を持っていました。そして呪文が魔法陣による契約制というこの世界のシステムを鑑み、きつとその契約のための魔法陣が出回っていないのだと考えたのです。そ

のためヨミカイン遺跡の魔道図書の中を10年近くも調べ上げてようやく見つけることができたのでした。

しかし呪文を反射させるといっても、それは強力な呪文を味方に向かって撃つという事に他なりません。これには即席ではない長年によって培われたチームワークと信頼が必要であり、それは魔王を倒した勇者パーティでしか成し得ないものだったのです。

「バーン様…!!」

ミストバーンが今になって慄くもアランの考えたその作戦は見事に嵌まり、マトリフのメドローアによって大魔王は消滅してしまいました。残っているのはミストバーンと動かないキルバーンのみであり、勇者パーティの緻密な連携攻撃は大魔王を屠ることに成功したと思われたのでした。

「まさかここまでやるとはな…余が強制的にこの身体に戻されるなど思ってもいなかっただぞ」

しかしそんな喜びは束の間とばかりに大魔王の声が聞こえてきたのです。しかし周

囲には大魔王の姿はなく、ミストバーンとキルバーンの姿しか見当たりません。大魔王の声の出先を慎重に伺うと、どうやら大魔王の声はミストバーンから聞こえてきているように思えたのです。

「おお…バーン様、ご無事でしたか」

「うむ、危うくベースの肉体のまま死ぬかと思ったが…ミストよ、今までご苦労だった」「はっ！それではお預かりしていた大魔王様のお身体をお返しします」

なぜかミストバーンが一人二役を演じているようにしか思えない状況ですが、そんなミストバーンのローブが取り払われ出てきたのは…若い魔族の姿をした男だったのです。まさか…とアバンたちが今考えられる最悪の事態を想像し、そしてそれは射た予想でもありません。

その魔族の姿こそ大魔王バーンの真の姿であり、今まで相手をしていた老人の魔族の姿は大魔王にとって仮の姿でしかなかったのです。真の姿となった大魔王は『若さ』と『力』を凍れる時間の秘法で分離し、『叡智』と『魔力』を残した老人の姿をベースとすることで限りなく永遠に近い生命を得ていたのです。

とはいえ大魔王のほうもこの結果については初めての経験でした。今まで誰も自身に迫るほどの戦いを繰り広げた者などおらず、当然の事ながらベースとなる老人の身体であろうと滅ぼされるなど考えたこともありません。そのため大魔王本人ですらメド

ローアの直撃によって死ぬと思ったという言葉が出てきたのですが、この結果は大魔王にとつて新しく知ることができた事実であり九死に一生を得ることになったのです。

そして大魔王が真の姿になったことで、ミストバーンもまた真の姿を現すことになりました。大魔王のすぐ近くに漂っていた黒い霧のようなものが集まって形となり、影のモンスターとでも表現するような物体が現れたのです。それは暗黒闘気の集合体が意志を持っているようなものであり、即ち大魔王が真の姿になった上に物理攻撃の通用しないモンスターまで相手にしなければならぬという事でもありました。

「ミストよ、どうやら人間たちは大事なものを守るために余の想像を超えた行動をしてくるようだ。ならばそれが無くなった時の表情も見てみたい：地上に向かいカールを滅ぼしてくるのだ」

「しかし地上には竜の騎士が…」

「心配いらぬ。ちようどお前のためにお誂え向きの玩具が残っておるではないか」

2対4の戦いとなるのかと思っていたところ、大魔王は暗黒闘気の集合体となったミストと共に戦おうとは思っていません。確かに大魔王バーンは真の姿になったとはいえ、しかし決して万全の大魔王の姿ではありませんでした。本来なら凍結されている若さと力の肉体と、叡智と魔力の肉体が合わさることで真の姿に戻れるのです。しかし叡智と魔力の肉体がメドロアによって消し飛ばされてしまったため、今の魔王には叡智

はそのままでしても魔力が戻っていないのでした。

それでも大魔王の自信は揺るぎません。

真の姿となった以上先程と同じ攻撃など通じない事もわかっていて、ならば目の前で戦っている勇者たちが守ろうとしている国を余興として滅ぼしてみようとしたのでした。ミストが自身の単独ではカールを滅ぼせないと言うも、大魔王の叡智はそのための手段が残っていることを看破していました。

大魔王によつて指された先には未だ動かない死神キルバーンが沈黙を保っており、そしてその死神の頭部にあるのも大魔王はわかっていました。冥竜王ヴェルザーが自分に送り込んできた刺客がただの魔物であるはずがありません。ヴェルザー本人並の実力があるのであれば納得できませんが、そうでない以上機会を伺って大魔王を倒すというのであれば取られる選択など多くないのです。

その大魔王の言う通り、死神キルバーンの頭部にはヴェルザー自身がかつてバランとの戦いで使用し魔界の大陸を消し飛ばした黒の核晶が埋め込まれていました。死神キルバーンは大魔王バーンを爆殺するために冥竜王より遣わされた暗殺者だったのです。

しかしその大魔王を爆殺するための使者であったキルバーンはアランによつて殺され、残された玩具はミストが乗り移ることによつて地上を…カールを滅ぼすための道具となつてしまったのです。



「さすがバーン様！…それでは私はコレをカールで使つて参ります」  
「うむ」

大魔王の指示通りミストがキルバーンの身体へと乗り移り、ミストバーンなのかキルバーンなのかよくわからないミスト（キルバーン）が誕生しました。メラゾーマをカイザーフェニックスと呼んでみたりミストなのかキルなのかわからなかったり、大魔王サイドは呼び方で混乱させることが得意なのかもしれません。

そしてミストはキルバーンに乗り移ることでキルバーンの正体と、その内部にある物に気付くことになったのでした。大魔王はそれを使つて眼下のカールを消し飛ばして来いという事だったのでした。

つまり状況は非常に悪い状態となっており、アバンたちはミスト（キルバーン）を抑えつつ真の姿となった大魔王バーンを倒さないといけなくなつてしまつたのでした。

## アランの冒険 16

「行かせると思いますか…」

暗黒闘気の集合体であるミストが操るキルバーンの身体が大魔王に「カールに向かう」事を告げたのですが、それを黙って見逃すアバンたちではありません。このままミストをカール王国に向かわせてしまえば良い事など何一つない事は明白です。

「お前たちは余の数百年分の不老を、そして超魔力すらも奪ったのだ。よってその分余を精一杯楽しませ、そして償う義務がある」

大魔王バーンはその超魔力をもって数百年に一度の皆既日食の度に自身の若い身体に『凍れる時間の秘法』をかけることで擬似的に不老の状態となっていたのです。しかし地上の勇者たちによってその秘法は強制的に解除されてしまった事で大魔王は不老の時間を奪われてしまったのでした。

そしてその不老を奪った代償として、アバンたちの母国であるカールを滅ぼし大事なものを奪う事で報復としようとしているのかもしれない。その上で真の姿となった大魔王を退屈させないように必死に抵抗しろというのが大魔王の言なのでした。

「フフフ…お前たちはここでカールが吹き飛ぶ様子を眺める事になるのだ」

真の姿となった大魔王がこの場にいる以上、自分に手出しはされないと踏んだのかキルバーンの身体を乗っ取ったミストは余裕の様子です。現在利用しているキルバーンとは数百年ほどの付き合ひがありますが、所詮は仮初めの仲間でありいつかは決別することがわかっていた関係なのです。そのためミストには名残惜しいなどといった感情など持っていないのでした。

しかしそんなミストが飛び立とうとした時、足元から光が噴出しキルバーンの身体を覆ったのです。慌てて足元を確認すると羽根が5枚刺さっており、そしてそれは五芒星を描き光の力を増幅している事がわかりました。

「ぐおお…なんだこれは!？」

「行かせないと言ったはずですよ」

なんとそれはアバンが予めキルバーンに放っておいたフェザーだったのです。アバンは最初、大魔王が1人で相手をすると言った時は大魔王を総攻撃するつもりでいました。しかしアランがそれに反して1つ目ピエロを倒し、その後アランとブロキーナが接近戦を行っていた時に大魔王以外の敵の様子も目敏く伺っていたのです。

流石の大魔王といえど武神流を使う2人の相手に集中しており、ミストバーンはその動きを見ていることはわかりました。しかしキルバーンだけは微動だにせず身体の間

きどころか視線すらも動かなかったのです。そのためアバンはキルバーンが操られていたか自力では動けないのだと仮説を立てました。

もう戦う相手ではないとわかれば放っておいても良いものですが、万が一誰かに操られ動き出す事も考えられないわけではないとアバンは念のため保険を掛けておくことにしたのです。それがフェザーをキルバーンの足元に五芒星の形で差し込んでおくことでした。もし暗黒闘気などにより操られ動き出したとしても聖なる五芒星によって力を増幅させたマホカトルで暗黒闘気を祓うつもりだったのです。

そんなアバンの保険は功を奏し、飛び出そうとしたミストを止める事ができました。しかしいくらフェザーと五芒星で威力が増幅しているとはいえ、それだけではミストを消滅させる事はできません。これは仮にマホカトルよりも上位の破邪呪文であるミナカトルであったとしても影響を与えることはできなかったでしょう。

事実今のミストは突然破邪呪文で包まれてしまったために驚いた程度だったのです。もしこれが攻撃呪文を放たれていたのであれば驚くこともなく対処できたでしょう。しかし人間の不意打ちによって、しかも暗黒闘気の天敵である破邪呪文で脅かされたというのは暗黒闘気の集合体であるミストには我慢できない屈辱だったのです。本来ならばこのまま目の前の人間たちを打ちのめしたいところなのですが、大魔王の言葉はすべてに優先するのがモットーのミストにとってこのままアバンたちと戦うという事は

許されていません。

よつて憤怒の感情に溢れながらも、その目の前の人間たちの守ろうとしている国を吹き飛ばして鬱憤を晴らそうと考えました。自らを律し大魔王の言葉を実行するめ再度動こうとするも…今度は突然の重力によってその行く手を阻まれたのです。

「まあそう急ぐな…少しゆっくりしていけよ」

それはマホカトルでは足止めできなかつた次の手として放たれた、マトリフのオリジナル呪文であるベタンでした。アバンもマトリフもキルバーンの頭部に黒の核晶が埋め込まれている事などももちろん知りません。しかし「カールを滅ぼす」という大魔王の言葉や、ミストがキルバーンの身体で移動し「コレを使う」と言っていた事から何かをしようとしているのは当然ながら推測していました。

「おのれ…人間どもめ…!!」

「カールに…地上に手出しはさせません!」

既にミストが暗黒闘気の集合体であることはアバンたちもわかっています。そんな霧のような存在に物理攻撃が効くとは思えず、そして暗黒闘気に対抗するためには光の闘気の攻撃が有効なのは周知の事実でした。更に光の闘気を利用したアバン流の武技には見えないものを斬るといふ空裂斬という技まで備えていたのです。もちろん空裂斬だけではなく『すべてを斬る』というアバンストラッシュもあるのです。いかに暗黒闘気

の集合体といえど斬ることはできるでしょう。

「そこまで先に死にたいのならカールに勇者の死体を持って行ってやる！」

「生憎ですがそう簡単に死ぬわけにはいかないですよ！」

まさにミストとアバンの一騎打ちの戦いが始まるような雰囲気となり、大魔王も動くことなくその様子止める事なく興味深く見守っていました……が、そんな空気など知らんとばかりに横から一条の光がミストをキルバーンの身体諸共飲み込んでしまったのです。

その光の正体は言うまでもなくアランの放ったメドローアでした。

それはカールでの魔軍司令ハドラーの演説中に始まり、リンガイアでは超竜軍団の名も知らぬ軍団長が名乗ろうとしていたところを消し飛ばしてきたアランの得意な不意打ちメドローアだったのです。その不意打ちメドローアはカールを守るために戦おうとしていたアバンを差し置いて、アバンを倒そうとしていたミストをそんなことは関係ないとばかりに消し飛ばしてしまっただけでした。

「目の前に本命の相手がいるのに何でそっちで勝手に決闘みたいなことやってんのさ」

いくら大魔王が様子を見守ってくれていても、アランとしては大魔王が目の前にいてこれから戦おうというのに雑魚に構っている暇などないと言いたいのでしよう。どう考えてもミスト（キルバーン）対アバンの戦いが始まるはずだっただけに、この横

槍はミスト本人も予想すらできませんでした。

とはいえメドローアで消し飛ばしたのはアランなりに考えがあつての事です。ミストの正体が霧のようなものであるとわかつては以上、武神流で戦つても効果が薄いだらうことはわかつていたのです。そのため乗り移つたキルバーンの身体ごと中身の暗黒闘気も消し飛ばすという選択肢を選んだのでした。

「まさかミストまで倒すとはな…」

その結果…腹心であつたはずのミストを倒され、遂にと言うべきかやつとと言うべきが大魔王がいよいよ動き出すようでした。やはり最後のボスというのは徒党を組む事なく自身の強大な力に絶対の自負を持つて待ち構えないといけないものなのでしょう。このあたりがハドラーとの大きな違いなのかもしれないし、大魔王としてのこの姿勢はアランにとつて好ましいものでした。

しかし大魔王も決してミストが倒されるのを黙つて眺めていたわけではありません。

老人の姿の時とはいえ自分を相手に怒濤の連携を見せ消滅させた相手たちなのですから、人間だと侮ることなく必勝のため観察に回つていたのでした。その上で老人の姿の時の勇者たちの戦い方や必殺技とも言えるものを踏まえ、ミストとの戦いで更にその実力を見極めていたのです。

武闘家と賢者は接近戦で戦つていましたし、魔法使いは必殺の呪文を有していまし

た。更に今回で賢者もまた魔法使いと同じ呪文を使用することが改めてわかったのだ。勇者はハドラーとの戦いで必殺技を放っており、更に破邪呪文や破邪の秘法すら使用するという事がわかりました。これらのすべてを統合し大魔王はその叡智によつて打ち破る算段を立てていたのです。

それはもちろんアバンとミストの戦いによつてキルバートの頭部にある黒の核晶がこの場で爆発するといった可能性も視野に入っています。その場合はアバンたちだけでなく大魔王にまで爆発の影響があるのですが、そうなった場合はそれでも構わないと考えていました。もちろん超魔力を失った状態では無傷とまではいかないでしょうけれど、それでもその身に宿る強大な暗黒闘気が自身に与えるダメージを大きく軽減できるだろうという目算があったからこそです。

しかしその可能性は消滅という形で覆され、大魔王にとって今の状況は決して油断できるときにはなくなっていました。

本来であれば老人の姿と若い姿を合わせることで真の姿となれたものを、老人の身体を消滅させられてしまったことで持っていたはずの膨大な魔法力を失ってしまったのです。これはただ呪文を使用する際に威力が下がるといった単純なデメリットだけではなく、大魔王が数々の敵を打ち倒してきた必殺の奥義すら制限されたようなものでした。



そして老人の身体を失った影響はそれだけではありません。大魔王の魔力の源である第三の眼『鬼眼』をも失うことにより、元より使うつもりはなかった最後の手段すらも使うことができなくなっていたのでした。それでもこれからまた悠久の時間をかければ失った魔力を取り戻すことはできるでしょう。既にこの先数百年は真の姿のままなのですから、大魔王にとっては数千年もの間陥ることのなかった危機といっても過言ではなかったのです。

「まったく見事と言う他ない…余が、この大魔王バーンの策がここまで悉く破られたのなど何時ぶりであろうか…」

「心配しなくても最初で最後になるさ」

「フフツ…お前が言うど真実味があるから不思議なものだな」

アランの軽口にも余裕をもって答えているのはやはり『大魔王』といったところなのかもしれません。もし今の大魔王の置かれた状況に、他の一般的な魔王や中ボスの存在が陥っていたとしたら恐らく怒り狂っているでしょう。自身の力の一部を奪われ不老の時間も奪われ腹心や魔王軍も失ったのです。もうそれらを理由に人間を滅ぼすと言われても仕方ないくらいの状況にあるにもかかわらず、それでもなお大魔王は不気味なくらいに落ち着いています。

やはりそこには『大魔王の矜持』とも言えるものがあるのでしょう。

「ゆくぞ地上の勇者どもよ。余が勝つて地上を滅ぼすか、お前たちが余を倒して地上を守るか……2つに1つだ！」

大魔王のその言葉によつて開戦の火蓋は切つて落とされ、アランたちが大魔王へと飛び出すも……その大魔王はなんとマトリフへと狙いを定めて向かつたのでした。今の肉体的強さを持つ大魔王であればアランとブロキーナを相手に渡り合えるかもしれませんでしたが、そこに意識の外からメドローアを撃たれるのは厄介なものです。そのため必殺の呪文を持ち肉体的に脆い魔法使いであるマトリフをまずは落とすことを決めたのでした。

これは先程「弱いものから倒す」とアランが行つた戦術であり、それでいて数的不利な大魔王からしてみれば合理的な判断だと言えるでしょう。今まで比較的待ち受ける姿勢だった大魔王からの急襲はマトリフに大呪文を使わせるような余裕を与えず、更に高齢であり大魔王を相手に接近戦などできるはずのないため必殺の手刀によつてその身体を貫かれてしまったのです。

「まずは1人……と言いたいところだが、念のため確実に息の根を止めるとしよう」「随分と念入りな事だな……だが、冥土の土産に……片腕くらいは……もらつていくぜ……」

貫いたまま暗黒闘気を込めようとする大魔王に向かつて何かをしようとするマトリフ。今からメドローアを準備するような余裕などない以上、そのマトリフが選んだのは

自身の魔法力を暴走させることで大魔王が接触している腕だけでも奪おうという自爆だったのです。「後は任せた…」という言葉をアバンへと残し、まるでメガンテのようにマトリフは最後の一撃を放ったのでした。

「マトリフ!!」

その生命エネルギーをも利用した爆発は大魔王を包み込み：しかし爆発から姿を現したのは少々のダメージを受けただけの五体満足な大魔王の姿でした。そこにマトリフの姿はなく、不敵な大魔王が悠然と立っているだけというのは魔王ハドラーの時には感じ得なかった強敵というものを改めて思い知らされるといいます。

「どうやら余の腕を持っていくには少々足りなかったようだな」

ダメージを受けたであろう腕の調子を確認し、戦闘に問題がないと判断した大魔王は次の狙いだとはかりにアバンへと向かいました。メドローアという厄介な呪文を使うという意味ではアランもいるのですが、アランは接近戦も熟してしまうためミストの二の舞いにならぬよう自身の見知らぬ手段をまだ持っているかもしれないアバンを先に倒しておくのが最善と判断したのです。

「アバン殿は狙わせんよ……!」

しかしそれを読んでいたとばかりに立ち塞がったのはプロキーナでした。流石にここまできて真の姿の大魔王といえども無策で鎧袖一触できるなどと考えていません。

老人の身体だったとはいえブロキーナとアランによる接近戦は予断を許さないと感じたでしょう。

「ならば…お前たち2人をまずは片付けるとしよう」

そこで大魔王は1つの判断を下しました。

接近戦が厄介な2人を同時に倒すことができず、絶対の奥義を使用することを決断したので。膨大な魔法力を失っている現状では万全の奥義とは言えませんが、強大な力と肉体はあれど格闘の技などに頼ることのなかった大魔王にとってブロキーナとアランは十分に警戒に値する相手となっていた。

マトリフを倒した大魔王の行動が『動』から『静』へと移り、待ち受ける構えとなつたその姿をアバンたちが警戒しないはずがありません。

「アバン殿、どうやらアレは後の先を取る構えのようだ」

「ほう…この構えの恐ろしさがわかるとは流石よ」

その構えの正体をいち早く見極めたのは武術の神様とまで称されるブロキーナでした。どのような技なのか詳細まではわかりませんが、それでもその構えを取つてから大魔王の持つ威圧感が増した事でただの構えではないと看破したのです。

そして大魔王もまた自身の構えがただのポーズではないことを語りました。それは『天地魔闘の構え』と呼んでいる自身の奥義だということです。もちろん詳細までわざ

わざ教えてくれるようなサービスはありませんでしたが、それでもその言葉がただのハツタリではないことは見ればわかるといふものなのでしょう。

「何言ったってやることは変わらないよ」

「アラン!!迂闊に飛び込んではいけません!」

しかし膠着状態は時間だけが無駄に過ぎていくとばかりにアランは大魔王へ攻撃の姿勢を見せたため、アバンはそれを咎めるように制止の声を上げます。もしここにいるのが十代の年若い勇者パーティであれば物は試しとそのまま大魔王へ向かって飛び込む場面ではあるのですが、賢い賢者を自負しているアランは待ち受けている相手にわざわざ自分から飛び込むような愚は犯しません。

「これならどうする……よ!」

そしてアランによって放たれたのは待ち受けている相手からしてみれば最悪の攻撃であるメドローアでした。このメドローアを防ぐのであればマホカンタによる反射か相殺するしか方法がないのですから当然の選択でしょう。そして今回大魔王が取った手段は…自身の手によって弾き返すという大凡考えつく事のできない方法だったので

す。  
「うそっ!?!」

跳ね返されたメドローアを避けたものの、まさか手で弾き返すとは思っていなかった

だけにアランの驚愕は大きなものでした。しかしアバンとブロキーナはその大魔王の行動をしつかりと見極めており、どうやら大魔王は暗黒闘気のエネルギーを凝縮しその手に溜めていたということです。そしてそのエネルギーを込めた掌圧によりメドロアで消滅することなく弾き返すことができたのだらうというのがアバンたちの見解でした。

それだけではありません。ブロキーナが言うには「もう片方の手は手刀の形になっていたということから、恐らくあれは攻防一体の構えなのだろう」という事だったので。「見事な慧眼だ。しかし本来のこの構えはその程度ではないのだがな」

構えの秘密を見破られたからか、大魔王はその構えがただの攻防一体の構えではないと説明してくれました。その説明によると本来の天地魔闘の構えは攻防魔の三位一体の構えであり、攻撃・防御・呪文の3つを同時に放つ奥義ということでした。黙っていれば攻防一体のすごい構えという認識で終わったかもしれないのですが、そこで本来はもつとすごいという事を教えてくれるあたり大魔王にとって「その程度の認識で終わってもらっては困る」という自身の持つ奥義に対する矜持があるのでしよう。

「ならば、万全ではないその奥義を打ち崩すまで！」

しかし相手の奥義がもつとすごいものであるならば、それを使えない今のうちに倒すだけだということです。当然後の先の奥義であるならばその奥義を放った後に大

きな隙ができると思うのが自然でしょう。アランもブロキーナも相手に大ダメージを与える奥義を持っており、この2人のどちらかがその役目を担うというのが大魔王の見解でした。

そんな大魔王の考えを覆すかのように飛び出してきたのはアランとブロキーナだったのです。次から次へと予想を覆してくるなど大魔王にとっては予想外だらけの戦いであり、もはや大魔王の頭の中に人間は弱いなどといった認識は消え去ってしまいました。それほどの強敵だと認めた上で同時に襲いかかってくる相手を迎え撃つたのです。

「閃華裂光拳!!」

「ならば大魔王最強の秘技を食らうが良いわ!」

生きている者ならば例外なく大ダメージを与える攻撃も大魔王の攻防一体の構えによつて逆にダメージを受けるアランとブロキーナ：大魔王はこの瞬間勝利を確信しました。暗黒闘気によるダメージはすぐには回復せず、そしてその手応えは申し分ないものだったのだから当然でしょう。

しかし攻撃後も油断することなく警戒していた大魔王は、その甲斐あつてかアランたちに隠れて飛んでくる物体を見つけたことができたのです。それが何かはわかりませんが、この場でアバンから放たれた何かが無意味なものだなどと考えられ

ません。

本来であればカイザーフェニックスによる迎撃で消し飛ばすところなのですが、今の大魔王に攻防魔の一体攻撃はできないため対応が遅れてしまったのです。飛来する物体程度…と当たってやるような慢心をすることなく、しかし天地魔闘の構え後のため回避のできなかった大魔王は手刀によって叩き落とすという選択を取りました。大魔王の手刀はまさに切れ味抜群の威力を誇っており、本来は切り裂いて無力化されるのが正しい未来だったのでしょうか。

しかしその物体は手刀によって切られたと同時に光を放ち……その光が収まった後には、大魔王は片腕を失っているという結果が待っていました。

「なっ……余の……腕が……」

これこそがアバンの切り札『魔弾銃』だったのです。

アバンは魔王ハドラーとの戦い以降、己の実力の底上げだけではなく様々な分野で役に立つものを調べ上げ作り出していました。そしてフェザーなどと一緒でアバンが作ったのがこの魔弾銃だったのです。これは呪文を込めた弾丸を撃ち出すことで、その魔法を使用できない者でも込められた魔法を使用できるようにした逸品なのでした。

本来はその弾丸に込められた魔法を撃ち出して弾丸は手元に残るのですが、今回はメドロアであると看破される危険性を考慮して弾丸をそのまま撃ち出さずに弾丸だけ



を投げつけていたのです。この魔弾銃の事はアランやマトリフも知っており、そして弾丸に呪文を込めるというのがよくわからなかったアランに代わってマトリフがメドローアを込めていたのです。

こうしてマトリフの最後の言葉通り：弾丸に込められた大魔道士の極大呪文は大魔王の片腕を奪う事に成功したのでした。

## アランの冒険 17

「いかなる武器にも勝るはずの…余の腕が…」

数々の戦いを勝ち抜いてきた大魔王にとつても腕が消滅するなどまさしく初めての経験であり、そのため呆然となつてしまったのは仕方のない事でしょう。しかし今戦っているのは地上の存亡を懸けた戦いであり、そんな大魔王の隙を見逃すような勇者たちではありませんでした。大魔王の奥義を食らつたはずのアランとブロキーナはすぐに体勢を立て直し、呆然自失となつた大魔王へと向かつていったのです。

大魔王の奥義によつて繰り出された手刀と掌圧は当然ながら生半可な威力ではありません。たとえ重装備で身体を覆っていたとしても容易く打ち崩されてしまつていたのでしよう。ならばなぜアランたちはすぐに動けたのか…それはアランが戦闘前に使っていた補助呪文のおかげだったのです。

防御力を上げるスキルトは使用する者など見たことがないというレベルでお目にかかれぬ呪文でした。そのため大魔王の攻撃の威力は高くとも、それを受ける側の防御力が上がっていることで致命を免れていたのです。とはいえダメージが大きいことに

変わりではなく、この機会を逃せば勝機は遠くなるということから気合と根性の行動だったのは間違いありません。

「いくよブロキーナ！」

「閃華裂光拳…!!」

「っ…舐めるなアア!!」

正面と背後から同時に襲いかかる2人に、片腕を失うという形で最強奥義を封じられた大魔王とて黙って見ていません。ただでは食らわぬとばかりに正面から向かって来ているブロキーナに向かって渾身のカラミティウォールを放ち、背後から襲い来るアラシには暗黒闘気を身体から吹き出すことで受けるダメージを弱めようとしたのでした。

そんな暗黒闘気の風に押されつつも、魔法力を放出し勢いを強め繰り出された奥義は大魔王の背中の中央…心臓部へと直撃し大魔王の心臓を破壊することに成功したのです。その衝撃で血を吐き己の3つある心臓のうち1つを破壊された事を悟るも、まだ心臓は2つ残っていると自身を言い聞かせてアラシに向き合うのでした。

それに大魔王にとっては心臓1つと引き換えとなったとはいえ悪い交換ではなかったのです。カラミティウォールの直撃を受けたブロキーナのダメージは非常に重く、もはや立ち上がれないほどの状態となってしまうていました。どれだけ補助呪文によって能力を底上げしていたとしても持っている体力が上がるわけではありません。元々

マトリフと同じく高齢であり、魔王ハドラーとの戦いの時よりも年齢を重ねることによって長時間戦えるだけの体力は持っていなかったのです。

「まだ生き残っていたとはな……だが今すぐ止めを刺してやるわ!」

大魔王は倒れているブロキーナを捨て置くことなく、追撃とばかりにカラミティウォールを放ちました。これは人間というものを鑑み、瀕死の仲間を助けられないわけがないというある意味人間を信じた行動でもあったのです。この状況で倒れているブロキーナを助けようとすればカラミティウォールを耐える他無く、そこから訪れる未来は助けるためにダメージを負うか耐えきれず共倒れになるのかの二択だったのです。

「老師っ!!」

「アバン!今がチャンスだ!」

アバンは当然のように……大魔王の思惑通りにブロキーナを助けようとしたのですが、アランにとっては今こそ大魔王を倒す大きなチャンスだったのです。しかしだからと言つて見捨てるという事を平然と行うことなどアバンにはできません。

ただでさえ仲間を……共に魔王を倒した仲間であるマトリフを失っているだけにこれ以上失いたくないと思うのは人として当然の思いでしょう。ここで仲間の心配よりも敵を倒すことを優先しているあたりも大魔王に魔族っぽいと言われる理由なのでしょうが、本人はそれをあえて選択しているのではなく無意識に行っている行動なので否定

もできないのでした。

そんなアランはともかくとして、アバンの取った選択は：大魔王の思惑通りにプロキーナを庇うというものでした。

「アストロン！」

しかしアバンとて大魔王のカラミティウォールを身を挺して耐えきれると考えるほど甘く見ていません。こんな時を想定していたわけではありませんが、しかし瀕死のプロキーナを生かし自分もこの状況を切り抜けるための呪文を身に着けていたのです。

自身や仲間の身体を鋼鉄へと変えるアストロン：もし大魔王の直接攻撃を受けた場合であれば、たとえ鋼鉄の身体だったとしても砕かれていたでしょう。神々の金属と呼ばれるオリハルコンですら砕く大魔王に鋼鉄など紙と変わらない程度に違いなどありません。

ですが今自身へ向かってきているのは衝撃波なので、これであれば十分に耐えきれるといふ勝算があつての行動だったのです。その凄まじい衝撃に吹き飛ばされ転がるもなんとかカラミティウォールを凌ぐことができたのですが、今の状況は鋼鉄となつたアバンとプロキーナに対して生身のアランが残された状態でした。そのためすかさず大魔王はアランに対して暗黒闘気を圧縮して放ち、分断されたアランは吹き飛ばされてしまいました。

「アバン殿…この老いぼれは放っておきなさい。それよりアラン君を…」

「わかりました…すぐに戻ってきます」

アストロンの解けたアバンはブロキーナの言葉を受けアランと合流することにした。ここでブロキーナを回復させる時間を大魔王が与えてくれるはずもない事はわかっており、それならばアランと協力して少しでも早く大魔王を倒すことが最善だということも理解しているのです。

「アラン、いきますよ」

「いてて…はいはい任せときなつて」

フェザーで魔法力を回復させ駆け出すアランと後ろから援護の姿勢のアバン…勇者と賢者の立ち位置が逆な気がしないでもない行動ですがこれが最適な行動なのです。アバンには無刀陣という大魔王の後の先の奥義に似た技も持っているのですが、これは相手の攻撃を食らってから必殺の一撃を叩き込むという技のため大魔王を相手に使うなど自殺行為でしかありません。

そのため魔弾銃やフェザーといったアイテムを持つアバンがフォローに回りながらも隙を見ては攻撃し、武神流を使うアランが前衛として大魔王と戦うのがベストな戦い方なものでした。大魔王としてもアランに接近戦で纏わりつかれ、そちらに意識を向ければアバンの魔弾銃が飛んで来るとするのは厄介なものです。逆にアバンのほうに注視

しすぎればアランの必殺の一撃を受けてしまうことにもなり、勇者パーティの連携はメンバーが減ってもその脅威は衰えないのでした。

実際にはアバンの持つ切り札であったメドロアの弾丸は一発限りのものであり、既に使ってしまった今のアバンにできるのはサポートが主となるのですが大魔王はそんな事はわかりません。

本来は弾丸を持って呪文を発動することでその呪文効果をその中に封じ込めるといふ魔弾銃の特性上、プラスとマイナスの魔法力を身体の外で合わせるメドロアを封じ込めるのは容易ではありませんでした。弾丸を両手で包むように持ち、そしてその中にプラスとマイナスの魔法力を注入するというのはまさに離れ業と言えるでしょう。それを一発だけとはいえ弾丸に封じられたのは編み出したマトリフだったからであり、まさに大魔道士と呼ぶに相応しいものでした。

アランが攻め立てアバンがフェザーや呪文や闘気技を使いサポートし戦いますが、しかし片腕を失い心臓まで失っているにもかかわらず大魔王は簡単には倒れてくれません。そんな戦いがしばらく続き、お互いに少なくないダメージが蓄積していく中で遂に均衡を崩す存在がその場に現れたのでした。

「お前たちイイ、そこを動くなアア!!」

他に乱入者などいないはずの場にやってきたのは、まるで白銀のような金属の身体を

持った者たちだったのです。その正体は大魔王がオリハルコンに禁呪法を使用し生み出したバーンパレスの護衛役であり、今は亡きミストからは掃除屋と揶揄されていた存在でした。

その中で声を上げていたのは十数体もの汎用駒と女王の駒を従え登場したのはマキシマムと名乗るキングの駒でした。

そんなオリハルコンで構成されている戦力など強力でありもつと早くに呼び出しては良かったと思うところなのですが、大魔王がこのオリハルコンの軍団を使わなかったのは存在すら頭になかっただけの事なのでした。このキングであるマキシマムは自信過剰で姑息であり、その性格はある意味ザボエラに近いものだったのでした。

そして生きた駒であるそれはオリハルコン製ということ、もしかしたらこの世界ではゴールデンメタルスライムの親戚筋なのかもしれません。きつと大魔王に保護されるまでは希少金属のモンスターということで誰からも狙われるメタルキングやはぐれメタル的な『すぐ逃げる』モンスターとして認知されていたのでしょう。きつとその育ちと大魔王の手下になったという事実からザボエラ的な性格に変異していったのかもありません。そしてそんな雑魚としか戦わないマキシマムを大魔王が重用するはずもなく、強者に敬意を持ってても弱者に興味のない性格から大魔王の中ではないものになつていたのでした。



「ガクッハッハッハッハ!! バーン様! この通りこのマキシマムが人質を取った故、人間どもは動けませぬぞ!」

オリハルコン軍団は倒れ伏しているプロキーナを囲んでおり、兵士の1体が軽く殴るだけでも息の根を止めることができるでしょう。マキシマムはまさに自分の手柄で主の危機を救ったつもりですが、その飼い主である大魔王のほうは眉間にシワを寄せ「余計な事を…」と呟いてこの場に現れたことすら不快なようでした。

マキシマムはこの膠着状態に陥った事を自分のおかげだと勘違いし、更に自分は大魔王に重用されているオリハルコンの生命体でありこのバーンパレスの守護神であるとまで自慢気に話しています。しかし力こそ真理な大魔王にとって強者に挑まず弱者を蹴るしかできないにもかかわらず、まるで自身を助けたと言っているその言葉は大魔王にとって気分を害するには十分なものでしょう。それは言葉に出さずとも大魔王の表情がそれを物語っていました。

敵はダメージが大きいといえラスボスである大魔王、そしてその配下のオリハルコン生物とその駒が十数体という数的不利の状況となってしまうています。たとえこの状況で大魔王がまた様子見に回ってくれたとしても、世界一強力な金属であるオリハルコンをそれだけの数討ち倒すのは至難の業でしょう。

「仕方ないか…アバン、後は頼むね」

そのためアランは自身の最強の奥の手を使う事を決意しました。

本当はこれを使うことなく大魔王を倒せば良かったのですが、戦ってみればやはり大魔王と名乗るだけあってその力はまさしく凄まじいものでした。もはやアランの頭の中には「大魔王が仲間を呼んで手下が現れた」というようなゲーム脳的な考えが浮かんでいる余裕すらもなくなっています。

まずアランが大魔王と戦う理由は決して『地上の平和』などといった高尚なものではありません。

もともとこの世界を認識してから『魔王と大魔王を倒す』という理由のない目的のために戦っていたのです。更にそこに子供の頃のヒュンケルに言った適当な言葉を真実とするためや、友人である子供たちに格好良いところを見せたいなどという極めて個人的な理由で戦っていました。

アランとしては世界のためなどといった大層な理由はアバンに任せておけば良いわけですし、自分は自分の目的を果たすために強さを求めていればそれでよかったです。す。

そのため魔王軍がカール王国に襲いかかってきた時にザムザという超魔生物を練習台にし、ようやく形ができてきたものをぶつつけ本番で使用することにしたのです。もちろんそれは諸刃の剣であり、そのためアランはいつものように後の事をアバンに丸投

げしたのです。

アランが声をかけてから行ったのはメドローアを使うための工程：炎と氷のエネルギーを両手に集め、そしてそれを胸の前で合わせるにより消滅のエネルギーとしたのです。本来であればそのまま弓のような姿勢で放つのですが、アランはその合わさった手を消滅エネルギーそのままに再度腰だめに構えオリハルコン軍団に向けて飛び出したのでした。

「ガッハツハツハ！そこまで死に急ぐのならば相手をしてやろう。ゆけ！我が駒たちよ！」

兵士が、騎士が、僧正が、城兵がアランに向かっていき……そしてアランの拳はそのすべての駒をまるで紙切れのように簡単に破壊していきます。たとえ大魔王でも不可能なほどにアランの拳は何の抵抗も受けずにオリハルコンを貫いており、その手刀は空振りかのように相手を切り裂いていました。

「貴様……生まれ！この人質がどうなっても良いのかっ?！」

これに慌てたマキシマムですが、対してアランは聞こえていないかのようにまったく止まるどころか鈍る気配すら伺わせません。今まで大魔王に背く者たちを葬ってきたマキシマムですが、まさかオリハルコンで出来た剣も魔法も効かないはずの兵隊たちが次々と壊されていくなどたちの悪い悪夢のようです。そうしてマキシマムがアワアワ

している間も駒たちを屠り続けており、アバンはその威力の凄まじさに驚き……大魔王はアランの行動をつぶさに観察していました。

マキシマムの行動は何も間違つてはいません。人質を取り相手の動きを牽制し、まさに戦局を大魔王陣営の有利へと導く行為だったのですが……ただただその相手が悪かつただけなのです。マキシマムの目の前で暴れている賢者には「情けや愛の心で敗れるのならば、オレにはむしろ誇らしい」などといった心が備わっていなかった事が唯一にして最大の誤算と言つても良いでしょう。

すべてのオリハルコンの駒を蹴散らし、マキシマムの叫びすらも聞こえていないかのごとく何の感慨も湧かないかのように破壊したアラン……残っていた残骸がすべて爆発しその場にいたプロキーナも巻き添えになっているのですが、それすらも知らぬとばかりに勢いそのままに大魔王へと向かつていました。

まさに仲間を犠牲にした鬼畜のような所業ではあるのですが、この行動にはアランなりの事情があつたのです。

当初アランが開発した武神流とメドロアの合わせ技……消滅エネルギーを拳に留め続けながら戦うという方法はまさに近接戦闘で最強と呼べるものでした。しかしその反動として消費魔力が尋常ではなかったのです。本来であれば一度魔法力を溜めれば放出するだけなのですが、その消滅エネルギーをメドロアとして留め続けることで常

時メドローアを放出し続けているのと同じだけの魔法力を消費してしまうのでした。

そのためアランとしては「10秒程度の短期決戦しか使えないかな」と思っていたのですが、その短い戦闘時間を解消する方法があったのです。それは魔法図書館で得られた『生命力』に関する記述：そこに書かれていた生命力を魔法力へと変換するという方法で、文字通り命を削り魔法力とすることで継続能力を手に入れたのでした。

アバンからの情報やヨミカイン魔法図書館で調べた結果、アランなりのゲーム脳で出した結論は『生命エネルギーを使用するということは、毎ターンHPを消費するようなもの』という考えでした。それなら『メガンテで全生命エネルギーを爆発させる』という事が『HPを全消費する』ことと辻褃が合いますし「もしかしたら『もろはのつるぎ』の反射ダメージを使って攻撃した反動だったりするのかも」という似た効果の武器などを知っていたことでよくわからない答えに行き着いていました。

そこで見つけ出した生命力を魔法力への変換という方法を実行することで『HPをMPに変換する』事ができ、その変換したMPを使用することで常時メドローアという破格の攻撃方法を行うことができるようになったのです。一応通常のメドローア連射も可能になるのですが…消滅エネルギーを作り出すための工程の間が大きな隙になってしまうため、作り出した消滅エネルギーを放出せず留めて武神流と組み合わせた接近戦闘がアランの考える最強の攻撃方法となったのでした。

そしてこのアランの使える最終奥義とも言える技を使用する以上、命を削り続けているためアランとしても最早中途半端に止まるわけにはいかないのです。

そんなアランは大魔王へと接近し、肉体はどれだけ強力でも武など修めているはずもない大魔王を少しずつ追い詰めていきます。大魔王もその身体能力を存分に発揮し必死の形相で抵抗していますが、腕を…足を…腰を…肩を…少し掠るだけでもその場所が消滅していくのですから大魔王からしてみれば反則もいいところでしょう。

フェニックスウイングという暗黒闘気を溜めた掌圧なら弾くことは可能でしょうが、大魔王は片腕の状態のため両手に消滅エネルギーを溜めているアランに手数で勝てるわけがありません。

そんな大魔王にとって精神を多大に削るような行動がいつまでも持つわけがなく…遂にアランの拳は大魔王の胸を貫いたのでした。既にアランは生命エネルギーを出し尽くしまるで痩せこけたかのような様相になっており、大魔王の胸に刺さった腕も枯れ木のようになっています。それでもそのまま横薙ぎに腕を振るえば大魔王にとって致命どころか敗北となるのですが、流石にそれはさせまいと必死の形相で残った片腕を使いアランの腕を掴む大魔王…まさしく大魔王を倒す寸前に、遂にアランにとって寿命を削り続けた代償として生命の限界が訪れたのでした。

「ハア…ハア…どうやら、ここまでの…ようだな…」

「…そう、みたい…だね…でも、まだ…終わってないさ！」

凄まじいまでの攻勢を凌ぎきり、余裕はないまでも笑ってみせる大魔王。しかし既に満身創痍の大魔王に更に追い撃ちをかけるかのように、アランはその身に残る生命力と魔法力を使い爆発させることにしたのです。今のアランにはもう魔法力も体力も生命力も何も残されていません。そのためこのまま瀕死となっても大魔王へダメージを与えることすらできないと瞬時に判断し、ならば最後にすべてを使い切って道連れにしようとしたのです。このあたりはマトリフと同じ行動なだけに、本人たちは否定するかもしれないがやはり似た者同士なのかもしれません。

しかもマトリフの時と違い、今回はアランの腕が大魔王の心臓を貫いた状態なのでダメージは計り知れないものでした。

猛烈な攻撃を加えてきて瀕死に追い込んだ挙げ句に自爆するというまさかの行動ですが、アランとしても決して死にたかったわけではなかったのです。ただ…これで大魔王を倒しきれぬかなという希望とか、このまま死んだらフローラ女王のところに戻されて「あなた何死んでるんですか情けない」って怒られるのかなとか、生き返るってどんな気分なんだろうとか色々な事が浮かんだ結果、このまま犬死にするよりは一矢報いてやるということで勢いのままに暴走してしまったのです。

一応シンシア女王にはヨミカイン魔道図書館でザオリクまで契約させていますし、

きつと生き返らせてくれるだろうという打算もありました。しかしアランはマトリフの前例を見ておいて跡形も残らないという可能性を考えなかったのでしょうか。

きつと考えなかったまま突っ走ってしまったのでしょうか。

しかしここまでの戦いの道筋が自爆する瞬間に走馬灯のように巡っていった事で、アランは今までの旅の意味を理解しました。かつて魔王ハドラーを討伐するためにアバンとロカと共にカール王国を出発したのですが、僧侶レイラが加入して大魔道士マトリフも加入したというのに早々にレイラが妊娠し2人が離脱しているのです。

聞かされた当初は混乱してしまいました。後々考えてみれば騎士団の頃は「生涯結婚しない」的な事を言っていたロカが女の子がパーティに入った途端孕ませてパーティを抜けるなどおかしい話です。最早利敵行為とすら思えるようなこの離脱劇も、しかし今のこの状況を鑑みれば納得できるものでした。

もしロカとレイラが最後まで一緒に戦っていたとしたらブロキーナはこの戦いにいなかったでしょう。マトリフだってハドラーとの戦いはともかく大魔王との戦いまで付き合ってくれなかった可能性が大きいです。しかしロカとレイラが離脱した事で魔王を倒し大魔王との戦いに一緒に臨むことができています。ですから、そう思えばロカとレイラの離脱は必然だったのでしょうか。

ロカとレイラが抜けた結果ハドラーとの皆既日食の日の決戦ではマトリフとブロ



キーナが加入してくれ、そしてアバンが凍った後アランはその2人から教えを受けることができたのです。そして今もこうしてマトリフとプロキーナを失いながらも大魔王と戦い追い詰めることができている以上、すべてが物語のように1本の道になり繋がって行つたのですからなるべくしてなつた事なのかもしれません。

しかしこのアランの思いもよらぬ行動は大魔王だけでなくアバンにとつても信じられないものでした。後を任されたと思つたらオリハルコン軍団に特攻して全滅させ、更にそのまま大魔王を瀕死まで追い詰めたと思つたら自爆したのですから誰も予想などできないでしょう。

まさに一瞬の閃光のような激しい輝きでした。

しかも最後には大輪の花を咲かせるかのごとく自爆して消えていくのですから、まるで人間の生き方が凝縮されたような行動だったのです。もしこれが二代目大魔道士的な武器屋の息子の少年が発した言葉であればきっと「君に出会えて良かった」的な素晴らしい勇者への鼓舞になっていたのでしょうか、残念な事にあまり賢くない賢者であるアランは行動でそれを示しアバンを驚かせたのでした。

「ハア……ハア……ガハツ……」

爆発が晴れた時、マトリフと同じくアランの姿はどこにもなく大魔王はまさしく瀕死の状態でした。地面に膝を付き、血を吐き、片腕を失い、心臓も3つのうち2つを失つ

て残り1つの心臓にもダメージが入っているのです。それでもまだ生きていますから、その生命力は人間などとは比べ物にならないほどに差があるのでしよう。

「アラン…」

勝手に逝った仲間になんか文句の1つも言いたいところですが、仲間たちがここまで追いつめてくれたのですから後は任せられた自分の役目です。アバンも大魔王との戦闘で少なからず暗黒闘気によるダメージを受けており、最悪の場合は仲間たちの後を追う事も視野に入れたつと剣と魔弾銃を構え自身にできる最大の攻撃の準備をしました。

「ハア…ハア…アランめ、凄まじいまでの、執念よな…」

「…ええ、彼らがいなければここまで辿り着く事はできませんでした」

「ならば…余も少しばかり、せめて、人間どもへ意趣返しをしておくでしょう…」

「っ…何をするつもりだ!？」

アバンの問いに答えることなく一方的に告げると同時に大魔王がどこかへと、残された数少ないであろう魔法力を飛ばしたのです。それはバイン・パレスに搭載されているピラア・オブ・バインという名の地上破壊兵器を落とす命令を飛ばしたのです。瀕死の状態に陥っている大魔王にすべてのピラアを落とすだけの余裕はありませんでしたが、それでも1つ落とせば真下にあるカール王国を消し飛ばすくらいの威力は持つていきます。

すると少し後にバーンパレスが空中にあるにもかかわらず地響きが起こり、そしてその振動が収まった事がピラア・オブ・バーンが無事に投下された事を知らせることになったのです。

その後すぐに真下から大爆発の影響による地響きが起こり出し、アバンはその大きさからカールが無事では済まないだろう事は考えるまでもなく理解してしまいました。

…

…

…

「ククツ、これで…カールは、貴様の仲間共は、消し飛んだだろう…」

「何ということをと…」

大魔王によって今行われた行動の意味を聞かされ、守りたい者たちを失った事を理解したアバン…まさか大魔王がそのような行動に出ると思わなかったなど言い訳にもなりません。ならばせめて大魔王だけでも…と、もはや地上の平和のためというお題目が悲しくなるような事態になってしまったのでした。

しかし大魔王は眼下で起こった爆発について、アバンに語ったその言葉とは裏腹に少

しばかり訝しんでいました。

このバーンパレスはその素材と大魔王の魔力によって空中を浮いているのです。しかし魔力の源である鬼眼を失ったことで、バーンパレスの心臓部は大魔王からの魔力の供給を失ってしまっている状態でした。そのため魔力による制御が利いておらず、バーンパレスは実は徐々に高度を上げていたのです。

そんな中で真下のカールに向かってピラア・オブ・バーンを投下し、起こった爆発の衝撃がバーンパレスにまで迫り着いていることに疑問を感じたのでした。もちろんそんな疑問をわざわざアバンに言うような真似はしませんが、微かな違和感が大魔王の中で渦巻いていたのです。

そしてその違和感の答えを持つ人物が現れようとは…瀕死の大魔王は予測できたはずなのに思いつかなかったのです。

「まさか黒の核晶をカールに使おうとするとはな…」

「……バランさん？」

そこに現れたのはボロボロになっている竜の騎士バランでした。

バランはカールに攻めてきていたアルキード・パプニカの両軍を追い払った後…なぜか高度を上げているバーンパレスに疑問に思い、更に大きな力の奔流を感じ取った事から援軍として戦うために空を上がっていたのです。そしてその途中でバーンパレスか

ら巨大な槍が投下されたので、このままでは真下にあるカール王国に：家族たちがいる場所に落ちると判断し急いで迎撃したのでした。

しかしまさかその槍に黒の核晶が搭載されているなど思うはずもなく、迎撃した攻撃に反応した黒の核晶の爆発に巻き込まれてしまったのです。普通の人間であれば間違いないく一緒に巻き込まれて消し飛んでいたほどの威力でしたが、バランには一度黒の核晶の爆発を受けた経験があります。

かつて冥竜王ヴェルザーが自身の支配する巨大な大陸を消し飛ばすほどの超爆弾を使用した時の相手がバランだったのです。そして今回の落下してきた柱に備えられていた黒の核晶はかなりの大きさでしたが、それでもヴェルザーが使用していたほどの大きさはありませんでした。

そんな黒の核晶が爆発する瞬間にその挙動によって爆発が来ることを悟り竜闘気を全開にして身を守ったことでなんとか事なきを得ましたが、その爆発がもし地上付近で起こっていたらカール王国は消し飛んでしまっていたでしょう。今回もその爆発を抑え込むのではなく空中で起こった爆発に対して身を守るだけだったので無事でいられたのです。もし仮にその爆発を後ろに意識のないディーノくんがいる状態で抑えられなれば命懸けとなってしまっていたでしょう。

「……で……で現れるか！神々の玩具めがっ!!」

そんなバランの登場は大魔王にとって看過できないものでした。地上に住む人間の勇者たちが想像すらできないほどの力を発揮しここまで戦いを見せた後に、憎き神々の作り上げた戦闘兵器が良いところを掠め取るかのように現れたのですから最も許せない行為なのでしょう。

魔界を二分した冥竜王ヴェルザーも竜の騎士が倒した後に精霊たちがその魂を封じ込めた事からも、誰かに戦わせておいて最後に出てきて自分たちに都合の良いように勝手をする行動が余程我慢ならない行いとして大魔王には映っているのかもしれない。そんな竜の騎士の登場は、神々を憎む大魔王にとって消えかけた戦意を再び燃え上がらせるものでした。

「バランさん、カールは無事なんですか!？」

「心配は無用だ。落ちてきたアレは私が撃ち落とすことでカール上空で爆発することになった。私はこの通り無傷とはいかなかったが…カールは無事だ」

「…良かった。ならば後は大魔王を倒すだけ…ということですね」

アバンにとって一番の不安材料であったカールの安否がわかり、これで後は目の前の大魔王を倒すのみとなりました。先程までの瀕死の状態から容態は変わらないはずなのに、今の大魔王は怒りの形相で瀕死とは思えないほどの圧力を放っています。しかしどれだけ猛ろうともアバンは刺し違えてでも大魔王を倒す覚悟を決めていました。こ

ここで倒すことができないければ仲間たちに合わせる顔がないという理由からです。

「アバン殿、いくら瀕死とはいえ相手は大魔王だ。貴殿もかなりのダメージを負っている。アランたちの姿が見えないということと、大魔王のあの様子からかなりの無茶をしたのだろうか？」

「ええ、だからこそ……だからこそ私がやらなければ、逝った彼らに申し訳が立ちません」  
「これは私の考えだが……アランたちは間違ひなく貴殿が後を追う事を望んでいいい」

バランに諭されてアバンは思い出しました。

マトリフもアランも「後は任せた」と言っていたことを……それは大魔王を倒す事を託されていたわけではなく、大魔王を倒した先の未来さえも託されていたのです。アランだけは「もし死んだら蘇生よろしく」の意味も入っていたかもしれないですが、包括的なよろしくだったためアバンの都合の良いよろしくとなっていたのでした。

ちなみにもし「死んだら蘇生よろしく」と言っていたとしても、アランの身体がない以上蘇生などできないのでどちらにしても結末は変わらなかったでしょう。

それに戦いにおいてアバンの中に『すべての戦いを勇者のために』という考えはまったくありません。もし地底魔城でハドラーとの決戦の時に口カやレイラたちがいてアバンをハドラーのところにとどり着かせるために死力を振り絞って道を切り開いてくれている、更に次代の小さな勇者が大魔王と戦うというのであればそういった考え方を

持っていたかもしれません。

しかし地底魔城の際にもアバンはアラン、ブロキーナ、マトリフという仲間たちと最後まで戦っているため、今回も仲間と最後まで戦うという意識しかありません。特にアランは不意打ちで相手が話していようと問答無用で消し飛ばしたりもしていたので、そこには勇者の一刀でなくとも敵を倒すことができればそれで良いという考えがありました。

そして今の状況を鑑みれば満身創痍な自分よりも、負傷していても竜の騎士であるバランのほうが大魔王と戦うのに勝率が高いとアバンも判断したのです。

バランの力をもつてすれば今の瀕死の大魔王を倒すなどそう難しいことではありません。いくら怒りを燃やしていようと、身体中を穴だらけで片腕を失い心臓まで失っている大魔王に勝利の目など皆無だったのです。

「まさかここまで大魔王を追い詰めるとは……見事だ」

バランにとってマトリフとブロキーナとは、息子であるディーノくんから話を聞くだけで会ったことのなかった人物でした。ディーノくんがシンシア王女と一緒にアランに連れられて出かけた先で紹介されたまに顔を出していたという事は知っていました。

マトリフとは大魔王が動き出した時にパパニカに救援に行つた際に初めて出会ったのですが、自分たちが竜の騎士と知つても何も変わらずに接してくれたまさしくアラン



の仲間といった人物でした。ブロキーナとはカール王城で少し会っただけですが、こちらもディーノくんと同じくシア王女と親しく話しており可愛がつてくれているのがよくわかったものです。

そして何よりアランとは長い付き合いです。

初めて会ったのはアルキードからテランへと居を移し、そこで3人で静かに暮らそうと思っていたところに突然やってきたのです。なぜかそこからカール王国へと誘われ、そしてそこから3人の生活が一変しました。紹介された女王とその夫は暖かく迎え入れてくれ、そこから安心して暮らせる生活が始まったような気がします。

アランはよく子供2人を連れ出すことが多いのが心配の種でしたが、それとは逆に「ちよつと子守よろしく」と2人の面倒を見る事を急に任された時などは焦ったものでした。妻であるソアラ王女に相談したり、アランと違いちゃんと出かける先を告げた上で町を散歩したりしてウロチョロする男の子と女の子を同時に見ないといけない大変さを実感したりもしました。

大魔王が現れたとしても自分たちが倒すから何もしなくていいとまで言われ、そしてその言葉の通りに大魔王をこのまま放っておいても死ぬのではないかと思うほどに追い詰めていたのですからバランにとつては感嘆しかありません。できれば生きていてほしかったという気持ちはありますが、まずはそんな仲間が残した心残りを晴らして安

心させるべきと感慨に耽ることを止めて大魔王を倒すことにしたのです。

「おのれ……！」

「覚えておけ大魔王……お前を倒したのは、人間の勇者たちだ！」

既に満身創痍の大魔王には竜の騎士と戦えるほどの力など残っていませんでした。本来ならば圧倒的に有利な状況だったはずの魔王軍が敗北しようとしているなど一体誰が予想できたでしょうか。持てる力を十二分に發揮していれば大魔王の勝利は揺るがなかったでしょうが、それでも敗因を上げるとすれば『慢心』というものが大きかったのかもしれない。

地上消滅を目論む大魔王にとって、最も警戒すべきは竜の騎士バランと勇者アバンの2名だけでした。

竜の騎士の力は冥竜王ヴェルザーを打ち倒したことからわかっていた事ですが、しかしそれは戦闘面における力が強大という事ではありません。互いに全力で戦うのであれば大魔王にとつては難敵であったとしても強敵にはならなかったはずなのです。

しかし勇者アバンは単純な戦闘力ではないところに厄介な点がありました。ハドラーとの戦いの際には何と『凍れる時間の秘法』まで使用しており、ハドラーを数百年に1度の皆既日食の日に呼び出して使用しているのですからバランよりも警戒する必要のあった人物だったのです。とはいえ次の皆既日食は数百年後の事なので今後『凍れ

る時間の秘法』を使用される心配はなく、肉体強度で魔族に遥かに劣る人間に負けるなど微塵も考えていませんでした。

そしてその傲慢なまでの自負がこの状況へと導いてしまっていたのです。

大魔王にとつてどれだけ勇者アバンや賢者アランの事を褒めたとしても、それは言葉の頭には常に「人間にしては」という意味が含まれているであろう事は想像に難くありません。所詮は100年足らずで死んでいく烏合の衆の中ではよくやっているほうだという考えが、今の魔王軍の結果へと結びついてしまっていたのでしょう。

もし大魔王が悪魔の目玉などを使い勇者パーティだけでも常に見張っていればこうはならなかったかもしれません。アバンが魔弾銃を持っている事を知り、アランがマホカンタを使う事を知っていれば大魔王ならば簡単に対処できたはずなのです。

ならば何故それを実行しなかったのか……常に動向を注視しているとすれば、それは神々が『魔族や竜より弱い』という理由で地上を与えた人間を冥竜王などと同等に手強いと見ていると認めるといふ事になってしまつたためでした。自分が大魔王であるという矜持や「人間ごとき」という見下した認識……そして数千年を生きてきて魔界を治めるだけの力を手にしていた事が、神々への恨みもあり人間の強さを簡単に認めるといふことができなかった原因かもしれません。

そんなもはや動けぬ大魔王を前にしてギガデインを真魔剛竜剣に落とすトドメこそ

刺すものの、 balan はそれで自分が倒したなどと思うことはありませんでした。地上の平和のためにその生命の一滴までも絞り尽くし、大魔王という強大な相手を倒したのは人間であることを告げて…必殺剣であるギガブレイクで大魔王を消し飛ばしたのでした。

「帰ろう…とはいえその身体ではトベルーラも厳しいか。捕まるといい」

その場で回復させることも考えましたが暗黒闘気の傷はすぐには回復しないため、それよりも早く待っている人たちに勝利を伝えてやったほうがいいだろうと考えた balan。アバンに肩を貸し、浮上を続けるバーンパレスを後にカールへと戻ろうとする 2 人ですが…アバンはせめて仲間たちの形見でもと思いましたがアランとマトリフは自爆しており、ブロキーナもオリハルコン軍団の連鎖爆発に巻き込まれていて全員が遺体どころか何も残されていませんでした。

そのため balan と共に帰りを待つ者たちのもとへと戻るアバンの胸には、大魔王を倒し平和を取り戻したという達成感よりも仲間たちを失った喪失感のほうが強く残っているのです。

## そして伝説へ

大魔王を倒したという報せがアバンの帰還と共にカール王国に齎され、そしてそれは瞬く間に世界中へと広がっていききました。

その朗報に人々は歓喜に湧き上がり、魔王ハドラーを倒した時以上の喜びが世界中で溢れていたのです。これにより勇者たちの名は更に知れ渡るようになりましたが、しかしなぜかそこにアバンの名は連ねていませんでした。

アバンは命を賭して大魔王を倒した3人こそが本当の勇者であると考え、その3人を『伝説の勇者』として…決してその名が忘れられることのないように後世まで伝えることにしたのです。これによって賢者でありながら『勇者アラン』とも歴史に刻まれる事になり、当初の考えである「勇者としても賢者としても語呂が良さそう」という理由で付けた名前が真価を発揮することになりました。

もしこれをアランが聞けば『そして伝説へってこういうことか…』などと意味のわからない事を言い出したかもしれません。

なお本当はアランもそこに名を連ねるはずだったので、本人は「最後に少しだけ

手を出しただけだ」と固辞したため名前が広まるといったことにはなりませんでした。そこには散つていった者たちこそ称えるべきという考えだったのでしようが、アバンの頭の中ではバランが名を上げることアルキードの問題が少しでも良い方向に行けばという考えも少なからず入っていたりします。

しかし本人から必要ないと言われてしまえばそれ以上は余計なお世話でしかありません。既に己を貫くための方法は教えてもらっているのです、これからバランは一人の間として持てるその力を振るいながらアランのように説得していくのでしよう。

世界中が再び取り戻した平和によつて喜びと共にその大切さを噛み締めていた中：しかしそんな喜びに浸ることのできない人々がいました。それはこの戦いで大切な者を失った者たち：魔王軍の攻撃は世界中に少なくない被害を与えており、そんな人たちにとつては喜ばしいことでありながら素直に良かったと笑えない寂しさも合わせ持っていたのでしょうか。

それは大魔王との戦いに行く彼らを見送った仲間たちも例外ではありません。アバンを連れてバランが帰還したことで大魔王を倒し目的を果たしたという報告を受けた面々でしたが、それと同時に戻らなかつた者の勇敢な最後も聞かされたのでした。そんな話を聞いた仲間たちは命を賭して地上の平和を取り戻してくれた者たちへ冥福と感

謝の祈りを捧げつつ、それでもアバンだけでも生きて帰ってきてくれたという事に安堵せずにはいられません。

もちろんアバンだけでも帰ってきてくれたのは良い事なのですが：しかし大魔王との戦いに赴き帰らぬ人となった3人と親しかつた上に、まだまだ子供のシンシア王女とデイーノくんの2人は悲しみを隠すことはできませんでした。アバンからその結末を聞いた2人は最初はもう会えない友人たちを思い大声で泣き出し、そしてそれはどれだけ立ち直ろうとしても王城の至る所に思い出がありすぎて考えようとしなくても自然に思い出してしまおうのです。

それでも周囲の大人たちの協力もあり段々と立ち直っていき、やがていなくなつた友人の意志を継ぐかのように：その言動の節々にかつての賢者の姿が見えるかのようになっていくのです。

：

……

……

大魔王が倒れアバンが帰還した後：カール王国ではすぐに喜びと共に大規模な復興

作業が始まります。これはアバンの作戦によって魔王軍の総攻撃をカール王国のみで迎え撃つという大博打のために、守りの手を分散させないように中心に集めたため周囲の町や村は大きな打撃を受けたためです。ただ人的被害はそこまで大きくなかったのも騎士団なども含め復興に努めたのでした。

散っていった仲間たちと共に大魔王と戦ったアバンにとって、3人のかけがえのない仲間たちが手に入れてくれた平和を維持することこそ『後を任された』自分の役目であることなのだと考えていました。そのためこの取り戻した平和を維持すると同時に、そしていつまた第2の大魔王がやってこないとも限らないと考え各国との協力体制にも力を入れるようにすぐに行動に移していったのです。

特に自分たちが大魔王と戦っている時に暗黒闘気を利用した策略とはいえ人間たちが、アルキード王国とパプニカ王国が攻めてきたというのは看過できないものです。

そこでアバンが考えたのは破邪呪文を各国の王城に施し負の感情を増幅されないように、操られたりしないようにすることでした。しかし友好的な国は問題なくとも、今回攻めてきたアルキード王国とパプニカ王国はそう簡単にはいきません。この2国は大魔王の策略によって誘導されたとはいえ、根底にあるのはアランとカール王国に対する負の感情なのです。



これを解消しようとするには長い時間を必要とすることになるでしょう。

大魔王の策略や暗黒闘気の影響がなくなつたとはいえど、未だアルキード王国とパプニカ王国との関係は断絶までしていないまでも表面上の関係しかありません。パプニカ王国は王族たち：とりわけ王女がカール王国との積極的な国交を希望していましたが、国を滅ぼされ唯一の王族として王女様が生き残っているわけではなく国王も存命の中では年若い王女様に与えられている権限などそう多くありません。

やはりパプニカの権威などというものを気にする連中にとつてネットクになっているのは、かつてあつた自国の賢者たち全員がカールの賢者ことアランに負けているという点でしょう。面子というものを気にする者たちにとつて自国の選りすぐつた戦力が複数人で戦つて、たつた一人に負けるなど許せるものではないのです。「それならばもつと修行して今度こそ勝てるようになればいい」という王女様のご尤もな意見などもありましたが、カールに攻め入つた時にバランによつて更に恐怖を植え付けられている司教たちもおおりの積極的に関交を開くというのはまだまだ時間がかかりそうなのでした。

同じように攻めてきたアルキード王国も同じです。彼らは『奪われたソアラ王女を取り戻す』という大義名分のもと攻めてきており、これは暗黒闘気があつてもなくても大きくは変わらないでしょう。次期女王を奪われたということは国家の未来をカール王

国が奪ったという事なので、国威や名譽だけでなく未来をも懸けた戦いだという事で攻めてきました。

こちらでもパプニカと合わせてバランスが追い払っていますが、国家としては敗走したからといって諦めるというわけにもいきません。穩健派の連中などから「ソアラ王女以外に新しい王族を迎え入れる」という案も出ているのですが、それはつまり『アルキードは、王族を、理不尽に、カールに奪われても、取り返す事すらできずに諦めた』という風聞が付いてきてしまうのです。これを許してしまえば他国に屈したと…すなわち王権の失墜にも繋がってしまうため強硬姿勢を崩せないのです。

この2つの国際問題について最初からアバンが、もしくはフローラ女王が表に出ていればそこまで拗れなかったでしょう。

しかしソアラ王女を連れてきたのはアランですし、アルキード王国に直接話をしにいったのもまたアランです。アラン本人からは「ちゃんと話し合い（物理）をしたら納得してくれたよ」と聞いていましたが、攻めてきたところから見てもまったく納得していないのは明白です。

パプニカにはマトリフからアランが訳も分からず呼ばれて行っていますし、遠慮せずやれと言ったのはマトリフです。つまり大体の国家間の問題の原因はアランとマトリフの自爆コンビということになります。そしてその2人ともが、やらかすだけやらかし

ておいて大魔王との戦いでいなくなっていたのでした。

アバンもこの2人のやらかしを正確に把握しているわけではありませんが、仲間として後を任されている以上やらないわけにはいきません。それに大魔王が世界を侵略すべく人々を危険に陥れていた事を考えれば何と平和な揉め事でしょうか。もちろん各国が仲が良い事には変わりはありませんが、願わくばこんな些事で悩むだけで済んでほしい…と、アバンは解決策を考えながらも未来を憂っていました。

何せ魔王を倒し訪れた平和が大魔王によって破られたということは、いつまた新たな脅威によって平和が脅かされるかわからないのですから…しかしもし新たな脅威がこの地上に現れた時は、その時こそ自分がいなくなつた仲間たちの代わりにすべてを懸けて戦おうという覚悟も秘めていました。ありがたい事にロモス国王などは協力的で各国を一丸とする一助としてある催しなども提案されており、その計画も「大魔王を倒した今だからこそ早急に」ということで既に形にするべく動き出していました。

そんなアバンとはまったく別の方向で、非常に大変な思いをしているのはフローラ女王です。

彼女は大魔王が倒れたことで国内の復興や他国への支援などを行う事を決めていたのですが、ここで一番の協力を申し出てくれたのはリンガイア王国でした。それは通常であればともありませんが、フローラ女王が頭を抱えているのはそこでは

ありません。現在リンガイア王国内で吹き荒れている『聖女フローラ旋風』が悩みの原因だったのです。

アランが將軍の息子を蘇生し、最強の生物種であるドラゴンを殲滅し、何やら大袈裟に持ち上げられそうになったためその功績のすべてをフローラ女王に擦り付けたのです。それだけでなく魔王ハドラーを倒した冒険なども周囲に面白おかしく語って聞かせ、精霊ルビス様ならぬ聖女フローラ様の加護によって平和が訪れたかのように吹聴していたのです。

普通であれば子供の寝物語に最適な、少々大袈裟な冒険譚というレベルの話だったでしょう。

しかし語り手がリンガイア王国の危機を救った賢者であり、魔王を倒した勇者パーティの一員でもある賢者だったのが良くなかったようです。更に言うならば救われたのが猛将として名を馳せるバウスン將軍とその愛息子だったのも問題(?)でした。この大きすぎる恩を、受けた恩は返さずにはいられない武人氣質な將軍が受けてしまったのですから事が大きくなるのは仕方ありません。

そしてアランが語ったまるで嘘のような冒険譚は、兵士たちの目の前でドラゴンを倒しまくりに死者まで蘇らせるという人間離れた行動と現実離れた状況を作り出した本人が語ることで真実味が増してしまっていたのです。更に大魔王をも倒したのです

から、そのアランが言っていたとなれば信憑性が上がってしまうのも当然です。

その結果リングア王国の人たちにとって、アランの語った脚色された内容がすべて真実になってしまったのでした。

現在カール王国のフローラ女王はリングア王国内で国王よりも敬意を集めており、そしてそこにダメ押しとなったのがバランの行動でした。アルキード・パプニカ両国の軍と対峙した時、バランはその力をしつかりと両軍だけでなくバウスン將軍率いるリングア軍にも見せつけたのです。

結果的にアルキードとパプニカは恐怖が伝染し散り散りとなりましたが、リングア軍に齎したのは恐怖ではなく『流石カール王国だ』という尊敬と納得の感情でした。魔王軍の軍団1つをその軍団長ごと1人で殲滅するような賢者がいる国なのですから、他に強力な戦士がいはいはずがないという当然の考えだったのです。そのためバランがギガデインを使って強大な力を見せつけても、カール王国なのだからというだけで恐れることもないのです。

しかし残念なことにそれはフローラ女王が求めているものではありません。

援軍として来てくれた際に対面した將軍でさえ最上級の敬意を持って接してくるどころか「有事の際はぜひとも我らリングアも女王陛下の剣として戦わせて頂きたい」と、いつからリングアはカール王国の所属騎士団になったのかと聞いたような姿勢

だったのです。更になぜかそこには「アラン殿に授けられた教えをどうかボクにもお授けください」と言つて蘇生された当人であり將軍の息子であるノヴァくんまでいたのです。

ノヴァくんはアランによつて蘇生された後しばらくの間激しく落ち込んでおりました。北の勇者と持ち上げられ、リンガイア王国内ではそれなりに剣も使えて魔法も使えるノヴァくんだったので知らぬ間に周囲を見下し天狗になつてしまつていたのだと思ひ知らされたのです。更には魔王軍の軍団長どころか雑魚ドラゴンに蹴散らされ、挙句の果てに命をも落としてしまつたのですから後悔どころではありません。

しかしそんなノヴァくんに奇跡の御業を以つてやり直すチャンスが与えられたのです。

蘇らせたアランの当時の心境は「イベント戦で死んだから放つておいてもいいけど、一応將軍から息子よろしく的な感じで言われてたしなあ……」程度の気持ちで生き返らせたのですが、今となつてはそんな事は誰にもわかりません。そして生き返つたノヴァくんは父親に泣きながら怒られ、自身も未熟を恥じ涙を流しながら謝りました。

そして自分の力が魔王軍に対してまつたく役に立つていなかった事や成す術なく蹂躪され殺されたことなどもあつてすつかり自信喪失に陥つていたノヴァくんですが、それを見た將軍や周囲の兵士たちから恩人である賢者が言つていたという言葉が聞か

れたのです。

『魔王を倒す勇者の奇跡』や『愛に生きる騎士の奇跡』などアランが脚色した以上に尾ひれやら背びれが付着していますが、カール王国という国は世界の危機でなくとも迷人に道を指し示してくれる優しい天女様な女王陛下が治めていることになっていました。精神的に参っていたノヴァくんにとってそれは天啓にも等しく、まさに藁をも縋る思いで無礼と知りながらも父親に懇願し女王陛下に目通りを願ったのでした。

それだけでもフローラ女王にとっては頭の痛い内容だというのに、そこに追い打ちをかけたのがバランの戦いだったのです。アランのリングアイアでの戦いは死んでしまっていたため見ることは叶いませんでしたが、父親であるバウスン將軍と共にカール王国へと向かっていったノヴァくんはバランの放ったギガデインを目の前で見てしまったのです。

剣と魔法を駆使して戦うノヴァくんにとって、まさに自分の理想とする強さが目の前にありました。

豪雷を自在に操り、キラーマシンを一刀で斬り伏せるその強さ……しかもそれだけの強さを持っているにもかかわらずその人物は勇者ではなく騎士だと言うではありませんか。普通ならばバランやアランに「強くなりたい」と師事しようとするのかもしれないが、すっかり自信喪失状態のノヴァくんが思い至ったのはそんな人物たちを擁する女

王陛下に自分も導いて欲しい……というものでした。

フローラ女王としては面会したリングイア王国の将軍が自分に対してやたら尊敬の眼差しで見えてくるのも止めてほしいというのに、その息子はなぜか継るような目で見てくるのです。最初はまったく意味がわからず、そしてリングイア王国での出来事を聞いたことでフローラ女王はやつと理解しました。

『あ、これ全部アランのせいじゃないの』

一部バランの行動も入っているのですが、フローラ女王としてはそうとわかれば「アランが言っていたのは大袈裟に言っているだけ」と説明すれば済むと思っていたのです。しかし誤解を解こうにも、人には成し得ないような奇跡を二度も目の当たりにしている将軍たちには謙遜にしか映らないという悪循環に陥ってしまい誤解は一切解けないのでした。

そしてこれについて文句を言おうにも誇張して噂を流した賢者の友人は大魔王を倒して伝説の大賢者となってしまっているのです。これにより将軍やノヴァくんたちにとってのアランの言葉への信頼度が爆上がりしているのは言うまでもありません。世界を救ってくれた友人を誇らしく思いたいフローラ女王なのですが、その友人が自身に丸投げして残していった問題が問題なだけに素直に誇れないという気持ちがあったのです。



これからもフローラ女王は夫であるアバンと協力して、この友人の丸投げしていった問題を解決しリンガイアを始めとした各国との関係を新しく結び直していくために頭を痛め続けるのではないでしょうか。ものすごく前向きに曲解するのであれば：もしかしたらそれは、きつと自分がいなくなつても悲しまないように寂しくならないようにとの友人の優しい気遣いなのかもしれません。

そしてアランの置き土産というわけではないのですが、もう一つカール王国にとつて残されている問題：それはなんとシンシア王女に関係する事でした。

アバンとフローラ女王の子供はシンシア王女のみであり、つまりシンシア王女が次期女王となるのは間違いありません。そうなると当然の事ではありますが、次期女王の伴侶という点で婚約者の話が出てくるのです。これはシンシア王女が幼少の頃から出ていた話なのですが、それを本人の知らないところで断つていたのは両親ではなくなんと友人であるアランだったのです。

アランはアルキードでも同じ事をやっているのですが、それと同じように自分の身内と婚約させようとする大臣たちに向かつて「シンシアちゃんを婚約したければこの俺を倒してみせろ！」と言い放つという事を仕出かしていました。本来なら何の権利もない部外者が騒いでいるだけなので無視されるのですが、自分は想い人と一緒になれた事からフローラ女王もそれをわざわざ止めなかつた事で黙認されていると思われたのです。

その結果アランの実力を風聞で知っている大臣たちの『婚約者売り込み計画』は頓挫することになり、更に代替案として出されようとしていた『年の近い男の子を今のうちに紹介して仲良くさせて将来は：計画』もアランがディーノくんを連れてきたことで台無しにされてしまいました。そんな事もあり実はアランは知らない間にカール王国の権力狙いな大臣たちからは煙たがられていたのです。

そんなアランが逝去した事はカール王国全体として見れば大きな痛手でもありませんが、しかしシンシア王女の前に立ち塞がっていた厄介な番人がいなくなつたという好機でもあります。そのため「アランがいなくなつてしまつたのは残念だが、次は自分たちがこの世界を守ってみせる。だからシンシア王女の婚約者には自分の用意した強者が相応しい」という完璧な理論によつて『婚約者売り込み計画』が復活したのでした。

しかしそんな大臣たちの計画は、なんとシンシア王女本人によつて打ち砕かれたのです。

年齢的にも国民を安心させるためにも婚約者を：という申し出に對して「私よりも弱い相手と結婚する気などありませんわ」と言い放ち、それでも挑戦してきた身の程知らずなある意味猛者と呼べる者たちを一蹴してしまつたのでした。そんなシンシア王女の言動は確実にアランの影響を受けている事は間違いない、つまり本人の言葉通りならば最低でもシンシア王女よりも強くないと候補にすらなれないのです。

そんな報告を聞いたアバンとフローラ女王ですが、どこかの友人に似た我が子の奔放な言動を咎めることはありませんでした。今の年齢から無理強いする必要もありませんでしたし、もし仮にシンシア王女がそれを絶対条件にしたとしても相手がいまいいうわけではなく、そのうちディーノくんが強くなってくれるだろうという打算的な考えもほんの少しくらいないわけではありません。現在この地上でシンシア王女に純粋な戦闘力という意味で勝っていると言えるのは竜の騎士である balan くらいなので、その息子のディーノくんなら同じくらい強くになれるかもしれないのです。

まさかシンシア王女の婚約者になってくれるかもしれないという若干の期待をされているなどとは思ってもいないディーノくんはというと、友人がいなくなつた事に悲しみながらもこれからは自分がアランたちの代わりに平和を守るんだと考えていました。物心付いた頃からずっと一緒にいる友人が魔王を倒してただけでなく更に強大な大魔王まで倒したのです。その事實は男の子の心に火を付けるのに十分なものであり、自分もそうなりたいと思ってしまうのは止められない事だったのでしよう。とはいえ後数年もすれば竜の紋章の力を操れるようになるだろうとは balan の言であり、そうなれば十分な強さを手に入れてついでとばかりにシンシア王女の問題も解決するかもしれない。

もしシンシア王女とディーノくんが結ばれたとしたら、母親であるソアラ王女として

も喜ばしいことです。ソアラ王女当人が愛に生きるために王族という責務を放り出し国を飛び出している人物ですので、政略結婚などを理解はすれど良く思っははいません。もちろん最後は本人たちの気持ち次第ではありませんが、元々家族同然に過ごしてきた2人が真に家族となるのであれば嬉しいことではないのです。まだまだ先の事とはいえ、ソアラ王女は夫である balan と共に子供たちを見守りつつ気が早いと理解していなながらも平和な未来に期待しているのです。

その balan もまた妻であるソアラ王女と同じく共に子供たちの行く末を見守りつつ、しかし次また地上の危機が訪れた際には今度こそ自分が戦うというアバンと同じ覚悟を既に決めていました。人間という存在と大きく関わったのは幼少期の頃を除けばソアラ王女が最初であり、そこからアルキード王国の面々やアランに誘われカール王国の人間たちと関わってききましたが鬼岩城の時のように戦いとなれば自分がという思いは持っていたのです。

それは冥竜王ヴェルザー率いる魔界の凶悪な軍勢と戦っていたという経験がある以上、そんな魔物たちにか弱い人間が太刀打ちできるとは思えないという根拠からの考えでした。もちろんその考えは正しく、地上に生きる人間たちの大多数は地上のモンスターと戦うのだから命懸けになってしまいます。そんな人間が大魔王率いる魔王軍ならばともかく、大魔王自身と戦えるとは思っていませんでした。

ただの竜の騎士であれば大魔王が地上へ進出してきた時点で単独で戦っていたでしょう。

世界のバランスを崩す者を倒すために生み出された種族なわけですから、魔界の者が地上を手に入れようとしている段階でその使命に従い行動すべきなのです。しかしバランは地上で妻と子を得て友人や仲間を得ました。すべてが順風満帆なわけではありませんでしたが、共に地上の平和を守るという意志を共有し一緒に平和を謳歌できる者たちを得たのです。

そんな仲間たちが地上の平和を守るために大魔王に立ち向かい、そして見事その目的を果たしたのですからもう『人間は弱い種族だ』などと思えません。実際には地上でも片手で数えられるくらいしか存在しないほどに稀な人間たちなのですが、きっと他の国の人間たちもバランの期待に応えて成長してくれることでしょう。

そんな成長した人間の一人にはカール王国で留守番をしていたヒュンケルもいます。大魔王と戦うための武器がなくアランによって半ば強引にメンバーから外されてしまったヒュンケルですが、大魔王が倒れた事によって人生の目標を失ってしまいました。養父であった地獄の騎士バルトスを殺した大魔王……この大魔王を倒すために剣の腕を磨いてきたのにもかかわらず大魔王と顔を合わせることすらなかったのです。

もちろんヒュンケルにだって理解できています。どれだけ腕を磨いてきたとしても

自分は魔王とも戦っておらず、強力な魔物と戦った経験すらほとんどないのです。そんな腕前だけが一丁前の箱入り剣士に大魔王との戦いなど務まるわけがない……だからアランは武器がない事などを理由にして自分に戦わせないようにしたのだろうと、今はいなくなつてしまった賢者の友人の事を考えそう思うようになっていました。

このヒュンケルの考えは全面的に勘違いなのですが、それを正せるのはいなくなつた賢者のみであり当人は正す気がありません。それどころか自分が言つた嘘がバレないように、闇に葬るために大魔王を倒したなどと知つたらどう思うのでしょうか。もはや答えの出ない仮定に意味はありませんが、命を懸けて大魔王を倒したという行動によつて美談としてヒュンケルの中に残つていくのでしょうか。

…

…

…

「アバン、まだ起きていたのですね」

「ええ、彼らの戦いの様子などを今のうちに記しておこうと思ひまして…」

大魔王との戦いから帰還して落ち着きを取り戻し始めたある日の夜…

フローラ女王に声をかけられるまで、アバンは寝室にある机に向かって何かを書いていました。それは大魔王との戦いで命を散らした仲間たちとの冒険の記録なのでしょう。当然ですがアランの書いた脚色入りの冒険譚や恋物語などではなく、事実として彼らが辿った魔王討伐の旅の軌跡や大魔王と戦った一大決戦などを忘れないように残そうとしていたのです。

魔王ハドラーとの戦いの時代からアバンたちは走り続けてきました。しかし運にも恵まれたのか今まで共に戦った仲間を失うことは無かったです。ロカとレイラはネイル村で今も元気に娘と過ごしていますし、大魔王との決戦に挑むまではマトリフもブロキーナもアランも何も変わらずまさにいつも通りでした。

しかし大魔王との戦いによってアバンは仲間を3人も同時に失うことになったのです。

その事実は周囲が思った以上にアバンの心を蝕んでいました。「もつとやれる事があつたのではないか」「自分にもつと力があれば」と考えればキリがありません。もちろん全員ができる事を精一杯やった結果、なんとか大魔王を倒すことができたのは理解しています。誰もそれを責めたりしないでしょうが、共に決戦の地にいたからこそ一人生き残ったアバンには思うところがあるのでしよう。

ブロキーナとは大地斬を会得するためにロモスの山奥で出会ってロカとレイラが離

脱した後から魔王ハドラーを倒すまで付き合ってくれましたし、マトリフはヨミカイン遺跡で出会ってアランと交代するようにパーティに加入し魔王討伐の旅の最後まで付き合ってくれました。一緒に旅をしていた頃から考えれば顔を合わせる機会は減ってしまいました。それでもアランがたまに娘を連れて行ったりしていたので元気にしているという報告は受けていたのです。

そしてアランとはまだ魔王討伐の旅に出る前に出会っています。当時から魔王を倒すために一人で修行をしており、魔王ハドラーの来襲をキツカケに共に旅に出ることになりました。ヨミカイン遺跡では力を高めるために一時的にパーティを抜けましたが、レイラの懐妊によつてロカとレイラが抜けてアランが戻ってきたのです。

その4人で魔王を討伐し世界が平和になったからこそ、当時まだ十代だったフローラ女王に余計な負担をかけないように再度旅に出ようと思っていたところを止めてくれたのもアランでした。今考えればアランの書いた『勇者とお姫様の恋物語』という本も、国民から支持を得るために必要なものだったのでしよう。いくら魔王を倒したと言ってもそれと王配の問題はまったく別物です。だからこそ国民たちからの支持を得て勇者の人気と存在を確かなものにするという隠れた意図があったのかもしれない。

更にお見合いが嫌だと言いながら各国を回っていたのも、魔王を倒した一員として自分の代わりに動いてくれたと考えることもできました。各国で色々と勇者や女王



の話をしていたのであって、聞きやすく理解しやすい言葉と表現で自分たちの為人を教え回ってくれていたと思えば腑に落ちることも多々あります。いろいろと問題を丸投げされた事もありましたが、それらも決して解決不可能なものではないのでもっと頼ることを覚えろと行動で示されていたのかもしれない。

アランがいなくなった事で今までの奇行に意味があつたのではと考えるアバン：命を燃やして大魔王と戦つたという強烈な行動と思ひ出補正によつてヒュンケルと同じく少々美化されすぎていました。そのすべてが勘違いでアバンの思うような意図は決してなく、本当にただの奇行だつたとは今となつては誰にもわからないことです。

そして大魔王との戦いから戻ってきた事でアバンが改めて知つた事もありました。

それは『アランがリンガイア王国で將軍の息子を蘇生していた』ということ。これはリンガイア王国からの援軍がカール王国にやつてきて、その際にバウスン將軍から直接フローラ女王が大袈裟なお札と共に聞いた話のため間違いない情報でした。つまりアランはいつからなのかわからないまでも蘇生呪文を使用することができていたのです。アバンも今まで何度も「死んでも大丈夫」と言われ続けてきましたが、まさか本当だつたとは思ひもありませんでした。

これはアランの言葉を額面通りに受け取らなかつたため起こつてしまつたすれ違ひだつたのですが、モンスター被害で死亡した人たちがいてもアランが今まで一度も蘇

生呪文を使っている場面を見たことがなかった事や性格的に覚えていないだろうという認識が災いしてしまったのです。

しかしそうなるとアバンとしてもどうしても言いたいことがあります。

それは「蘇生呪文が使えるならアランが一番死んではいけないでしょう!」ということでした。蘇生ありきでゾンビアタック戦術を考えるなんてことはしません、力及ばず倒れてしまった時に蘇生できるのであればアランの存在はとも大きいということです。それなのに当のアランが後を任せて特攻するのはどうなのか…と、その部分だけはそう思わずにはいられないアバンでした。

何せアランとマトリフは自爆し、ブロキーナはオリハルコン軍団の爆発に巻き込まれているため全員の死因が（自）爆死なのです。亡骸すら残すことなく散っていったことで、まさに突然いなくなってしまうという現実にはさすがのアバンとしても色々心の整理ができていないのかもしれない。

「アバン、あなたは2度も世界を救ってくれました。逝った彼らも後悔していないはずよ。だからどうか今は自分を労ってあげて」

「ええ…しかし問題はまだ残されているので、そう簡単に休むこともできないのですよ」  
そんなアバンの内心を正確に知ることはできないまでも目に見えて心配しているフローラ女王からの包むような言葉と優しさを感じ、アバンは今ほ少しだけ後悔に浸るこ

とを止めその優しさに感謝するのでした。だからといって何も考えず頭を空っぽにして休めるほどアバンは単純ではありません。

アバンが言ったように大魔王が倒れてもまだ心配の種は残されています。

かつて魔王ハドラーは地上を征服しようとしていました。それはそれで許せることではないのですが、なんと大魔王バーンは地上を消し去ろうとしていたのです。大魔王との戦いによってアバンたちは魔界の成り立ちを知ることになり、そして魔界と地上の関係が決して相容れないものだということになりました。

地底深くに存在し太陽の光が届かない魔界：そんな魔界に太陽を齎そうとするならば地上は邪魔な存在でしかありません。だからといってこの大地が消えることを黙って認めるわけにはいきませんし、魔界の住人がやってきて地上で共存するというのも非常に難しいでしょう。

大魔王の神々への憎悪や地上を消し去るという目的からもそれはわかってしまいません。いくら人間としては博識なアバンといえども、魔界が抱えている問題を解決できるような知識があるわけではありません。大魔王ほどの存在でも太陽を作り出すことはできず地上を消し去ることで魔界に太陽の恩恵を齎そうとしていたのですから、考えようによつては大魔王バーンは魔界にとつての勇者とも言えるのではないのでしょうか。

その大魔王は動き出すための力を蓄えるのに数千年もの時を費やしたと言っています。

した。それほど時間をかけて力を溜め入念に準備していたのですから、アバンたち人間とは視点も感覚も違いすぎるのでしょう。此度の戦いは犠牲はあったものの大魔王が倒れることで地上の平和は守られました。それはつまり魔界の希望が消えたということでもありません。

魔界の現状に同情したというわけではありませんが、大魔王が語った内容はアバンにとつて考えさせられるものでした。アバンはアランのような『モンスターは倒すもの』という考えを持つているわけではなく、地獄の騎士バルトスのように優しさを持った存在やクロコダインのように友誼を結ぶことのできる存在がいることだつて知っているのです。

もしかしたらアランたちが言っていた「後は任せた」というのは大魔王が倒れた後の地上をという意味ではなく、魔界の抱える問題を解決し魔界と地上に恒久的な平和をよろしくという意味だつたようにも思えてきました。大魔王と戦うというのに最大戦力であるはずのバランを外していたのも、当時はそこまで考えていなかったにしても魔界との折衝などを考えると妙手だつたと思わざるを得ません。

竜の騎士が大魔王を倒してしまえば魔界側にとつて竜の騎士は邪魔なだけの敵となるでしょうが、大魔王を人間が倒したことで調停役として竜の騎士が間に入ってくれるのであれば簡単には行かずとも話を聞いてくれるかもしれません。思いつきりバラン

がトドメの一撃を加えているのですが、そんなものは言わなければ誰にもわからないことです。魔王ハドラーが地上を征服しようとしていた時代から大魔王討伐を視野に入れていたアランですので、もしかしたら言葉には出さないまでもそんな考えもあったのではないのでしょうか。

大魔王との会話からの考察や状況などをフローラ女王に話しながら纏めていくアバン：フローラ女王のほうもそんな壮大な話を聞き、アバンを休ませるつもりが2人して頭を悩ませることとなってしまいました。

もちろんすぐに答えが出せるような簡単な問題ではありませんし、今やるべきは魔界の問題を解決することでもありません。地上だけですら人々が手を取り合って協力することに難儀しているのですから、まずは各国との協力体制を確固たるものにしてもしまた地上の平和が脅かされた時に立ち向かえるようにしなければなりません。

大魔王がいなくなったからといって魔界側が太陽を諦めたのかと言えば、それだってアバンにはわからない事です。もしかしたら魔界に第2の大魔王のような、バーンの意思を継ぎ地上消滅を目論む存在がいても不思議ではありません。数千年という尺度で考えていた大魔王のような存在が他にもおり、数百年数千年後に同じような事が起こるかもしれないのです。

その時にはせめて人間たちが、地上全体が手を取り合って戦えるように：結局休むこ

となくカール王国の勇者と女王は遅くまで話し合ってしまったのでした。幸いにもロモス王国から各国との関係を刷新するための提案は受けていますので、まずは目先の問題をどうにかしなくてはならないのです。

国家間…人間同士でも問題は数多く残っています。まだまだ真の平和とは呼べないかもしれません。

それでもきつとアバンたちならば、この地上の人間たちを良い方向へと向かわせてくれるでしょう。

こうして大魔王による地上を消滅させる計画は人間の勇者たちの尊い犠牲によって阻止され、地上は平和を取り戻し魔界からの侵略者たちは倒されました

しかし魔界という地底深くにある世界には、大魔王バーンのようにまだまだ人々が考えられないような強大な者たちがいるかもしれません

そんな脅威が襲いかかっても、その時には地上の人々が団結して戦えるように：

賢者アラン

大魔道士マトリフ

拳聖ブロキーナ

大魔王を倒した語り継がれるべき伝説の勇者たちに『今日も世界は平和だ』と胸を張

れるように…

人々は今日も平穏な日常を過ごしていくことでしょう

ありがとう勇者たち…



## 導かれし者たち

―目覚めるのです…

…誰？

―私は聖母竜マザードラゴン…

聖母竜…聖なる竜？母なる竜？

―あなたはまだ死んではいませんが、魂は生と死の狭間を彷徨っている状態です…本来ならば人間の生死に関わることはないのですが、大魔王の企みを阻止してくれたお礼として…せめて生の道へと送り出してあげましょう…

―それがある邪悪な力によって生命が尽きようとしている今の私にできる精一杯の

事です…

邪悪な力…それつてもしかして地底にある世界と関係ある？

ーええ、知っていましたか…しかしそれはあなたには関係ないこと…それにあなたは  
まだやるべき事があるでしょう…

ーさあ、目覚めるのです…

「……………」

既に空高く浮かび上がっており地上の様子すら見えないほどの高さにある大魔王の  
宮殿…鳥の骨格のように広がっている先端の部分でアランは目を覚ましました。辺り  
を見渡しても誰もおらず、そこはまるで世界に自分一人しかいないのかと思うほどに静  
寂が広がっていました。

大魔王バーンとの戦いで自爆したアランはその先がどうなったのか知りませんが、  
ゲーム脳が稼働し始めたアランの予想ではきつと大魔王を倒して「命と引き換えに大魔

王を倒した英雄」的な感じになっているかもしれないと考えたのです。

もしそれでも倒せていなかったとしても、きつと後を任せたアバンが『すべてを斬る』という必殺のアバンストラッシュで大魔王を倒してくれたんだらうという保険的な考えもあります。仲間を全員失いながらもたった一人残された勇者が愛と勇気と哀しみのアバンストラッシュで大魔王を倒すなんていうのも王道で格好良いものなのでしよう。

実際は必殺のアバンストラッシュではなく竜の騎士の秘剣ギガブレイクなのですが、必殺剣であるという点では同じなので概ね正解と言えるかもしれません。

「そっか…：そういうことだったんだ」

そして次にアランは夢の中に出てきた声について考え…：頭の中で点と点が結ばれていき線となつて答えが出たため納得の声が出たのです。

夢に出てきた声は聖母竜と名乗っていました。聖なる竜であり母なる竜でもある…つまり竜の女王ということです。そしてその竜の女王が、ある邪悪の存在により死の間際にいるということは…：竜の女王を助けるための冒険が始まるということだと考えました。

つまりドラゴンクエストとはドラゴン（を倒す）クエストではなくドラゴン（の女王を助ける）クエストだったのです。

そしてマザードラゴンは地底世界の邪悪と関係があるとも言っていました。まさかここまで壮大だとは思いませんでしたが、つまりこの世界で大魔王とは言ってもアランの考える展開で言うともまだ魔王クラスという事です。バーンⅡバラモスという事で、ハドラーなんて魔族版カンダタくらいでしかなかったという事がわかりました。そしてアランの知識ではバラモスも確か自分の事を大魔王と名乗っていたはずだったので、つまりバーンは自称大魔王でゾーマ的な本当の大魔王じゃなかったのかと納得してしまいました。

そしてこれから地下世界へと向かい、マザードラゴンを救い出す事によって『ひかりのたま』をもらって真の大魔王を倒すことで冒険の終わりを迎えるということなのでしょう。

「まさかまだ折り返しだったとはね…とりあえず戻ろうかな」

よくよく考えてみれば光を求める大魔王など何かがおかしいとアランは思っていたのです。やはり大魔王と言えば世界を闇に陥れてこそ大魔王というイメージがあるため、他に地底世界で虎視眈々と暗黒の世界を作ろうとしている真の大魔王がいると考えれば納得もいきます。

大魔王バーンが語った魔界と地上の関係や太陽を魔界に齎すという目的に嘘はないのでしょうか、やはりアランとしては大魔王の目論見というならば『太陽を消滅させて

世界を闇に包み込む』くらいの事は考えていてほしかったのでしよう。なんだかお日様が当たらないから屋根を壊すみたいな小さな事に思えてしまい大魔王つぼくないと感じていたのです。

しかし大魔王バーンが実はバラモスのな立ち位置だとわかればそれも納得です。この世界の人間がその話を聞けば「スケールが違いすぎる…」と驚愕し戦意を失うほどの衝撃的な内容なのでしょうが、アレフガルドであろう地底世界に真の大魔王がいると考えたアランの中で大魔王バーンは勝手にランクダウンされてしまうことになってしまいました。

そして聖母竜という自身の知識にない存在を竜の女王だと判断したアラン：マザードラゴンは一言も「助けてくれ」などと言っていないのですが、竜の女王の危機なら助けるべき：というより物語的に助けない選択肢なんてないと思っっているアランは自身の持つ知識から明後日への解釈によって次の舞台は魔界だと考えてしまったのです。マザードラゴンが言った言葉に嘘はなく：事実邪悪な存在によって生命の危機に瀕しているのですが、とはいえ人間に「魔界まで来て邪悪を倒しなさい」という無理難題を課すつもりなど毛頭ありません。

マザードラゴンとしては「やるべきことがあるでしょう」と言ったのは「仲間たちのもとへと戻り、平和になった世界で精一杯生きなさい」というつもりで言っており、ま

さか「次は魔界に来て私を助けなさい。そうすればひかりのたまを差し上げるので、それを使って闇の衣を剥がして真の大魔王を倒すのです」と脳内変換されて魔界に乗り込むつもりになっているなどと考えつくことすらできません。

更に普通であればまずは「なぜ自分が生きているのか」を考えるとところなのですが、剣と魔法のファンタジー世界にいるせいでそんな難しい事を考えるアランでもありませんでした。実際はアランが当時のフローラ王女からもらっていた『カールのまもり』というアイテムのおかげなのですが、フローラ王女からそんな説明もなかったのでただのお守りとして首にかけていたのです。

ちなみにこのアイテムはフローラ王女が魔王討伐に出発するアバンに渡した物と同じ物です。カールのまもりは代々国王夫妻の2人が1つずつ身に着けている物であり、フローラ王女は1つを魔王討伐の旅に出るアバンに渡し、その後もう1つを大切な友人であると同時にどうにも心配なアランへと渡していたのでした。

そんな『カールのまもり』が身代わりとなって砕け散ることでアランが自爆した際に身体が粉々になることなく、そして命を落とすことなく助かることができました。しかし意識を失い吹き飛んだアランは運良くバインパレスの先端部分まで飛ばされてしまい、大魔王との戦いで生命力を使い果たして自爆したせいで昏睡状態となっていたのでした。もしかしたらそのまま地上へと落下していたかもしれないので、まさに運の良

さが仕事をしてくれたのでしょうか。

アバンならばすぐにそういった状況を理解できたかもしれませんが、残念な事にアランにそんな知識はないので『アレフガルドへの冒険をするために生きてた』くらいの認識しかありません。

フローラ女王のほうも「これは身代わりアイテムだから自爆しても一度だけ助けられるわよ」と教えてくれていればよかったです。当然ながらフローラ女王自身もそんなアイテムだと認識していなかったのです。それにもし仮にそんな身代わりアイテムだと知っていたとしてもアランには知らせなかったでしょう。

大魔王との戦いからどれくらい時間が経っているのかすらわからず、しかしバーンパレスは地上から見て相当な高さまで上昇していることからそれなりの時間は経過しているようでした。

ひとまず目覚めた場所であるバーンパレスの先端から各所の翼つぼいところを移動して大魔王と戦った場所へと戻ってきたのですが、当然ながらそこには誰もおらず激闘そのままの状態です。もしかしたら吹き飛ばされた自分と同じようにマトリフらもいるのでは…と思つてそれつぼいところを探してみたのですが、やはり仲間の影も形もなく何故か氷漬けにされた黒い球体が見つかるのみでした。

「マトリフ…ブロキーナ…」

自身も自爆して生きていくだけに「もしかしたら…」という考えもありましたが、アランとてメガンテなどの自爆を行えば蘇生できなくなるかもしれないという事は学んでいます。遺体が残れば蘇生させることも可能ですが、下手をすれば身体がバラバラに砕け散る事もあるという事も知っていたので既に高齢で体力の衰えていたマトリフもブロキーナも爆発に耐えることができなかつたのでしよう。

「…後は俺に任せといてよ」

本人たちが最後に何を思ったのかはさておき…散っていった者の意思を曲解して前向きに捉えるのが残された者の務めとばかりに、アランは「これから地底世界を冒険して真の大魔王を倒しておくから」とまるでそれが2人からの遺言かのように勝手に脳内で変換していました。武神流の奥義や大魔道士の秘奥などを受け継ぐ賢者ですが、どうやら魂までは受け継げなかつたようです。

しかしひとまず大魔王を倒したのであれば、カール王国に戻る前にアランがやることは決まっています。

各所に広がっている翼の骨のような先端には何もなかつたので、大魔王と戦つたこの中央の部分が宮殿の心臓部ということなのは間違ひありません。そしてそこでアランがやることといえば『ボスのダンジョンの探検…もとい目ぼしい物の回収』に他なりません。ラスボスではありませんでしたがそれなりのボスのアジトなのだから最強とは



言わずともそれなりに強力な武器防具があると予想し、アランはバーンパレスをウロウロすることにしたのでした。

途中「ムーンムーン」と言っている魔物もいましたが、ダンジョンにいる魔物など話しかける気もないアランはそれをさっさと倒しています。この魔物は大魔王バーンの魔力によつて心臓部の制御を行っていたのですが、大魔王バーンの超魔力が無くなった事によつて人知れず暴走しそうになりました。そんな魔力が枯渇して暴れだしそうな心臓部を抑えていた魔物を倒した事で抑える枷がなくなつたのですが、その心臓部の近くには魔力を発する物がなかったのでそのまま朽ちていくのでしょうか。アランに向かつて触手的なものが伸びてきたりもしていましたが、ダンジョンのトラップの一種だと思つているアランはうまく避けつつ先へと進んでいきました。

誰からもバーンパレスの魔力炉については説明されていなかったためまったく知らないアランはウロウロと進みながら宮殿内をくまなく探し、遂に武器庫的な場所を見つけることができたのでした。そこには大袈裟な鞘の付いた剣や鈍器にしか見えない長柄のものなど様々な物が置かれており、大魔王がわざわざ置いてある以上きつとそれなりの強さを持った物に違いありません。

「あんまり持てないし、とりあえず剣とかだけでいいかな?」

さすがに『どうぐ』コマンドなどといった便利なものは無いので両手で持てる程度し

か運べないため、剣と槍と杖という持ちやすい物だけを持って行くことにしたアラン。盗人猛々しい行為ですが大魔王バーンもこれを知ればきつと「余を倒した褒美としてくれてやろう」と気前良く了承してくれるに違いありません。

ゲーム脳によってはじき出された経験則から出た結論として次の冒険に出る事が決まり、その準備としてバーンパレスの散策も終わったのでルーラでカール王国へと戻ろうと思ったところで今の状況について考えてみました。残っている記憶の最後が大魔王バーンに特攻して自爆したところまでなので、つまりアバンたちに「自分は死んだと思われているのでは？」と、ふと思ったのです。

それならばきつと今頃は魔王ハドラーを倒した時と同じように、大魔王が倒れた事で世界中が喜びと感動に溢れていることでしょう。もしかしたら『大魔王との決戦によって平和のために命を散らした大英雄』にしてくれているかもしれないという当たらずとも遠からずな推測もあります。

ならば自分が帰るのも「実は生きてました……」というようなつまらないものではなく、何か壮大なイベントにして感動的に登場したいと思ってしまうました。

仲間たちが絶体絶命のピンチに陥り「あの世にいるアランたちに胸を張って会いに行こうぜ」と死を悟った中で「そんな所に行っても俺はいないよ？」などと言いながら助け出すという状況が出来れば素晴らしいのですが、残念なことにそんな演出をできるよ

うな敵に心当たりはありません。モシヤスカドラゴラムで自分でカールを襲っても、助けに入るのが自分でなければ意味がないし……と誰かに聞かれたら怒られるような事を平然と考えていました。

しかしアランは「逆にもし怒られるような事でも、感動の再会の衝撃によつて有耶無耶にできるのでは？」という頭のおかしい考えが過つてしまつたのです。

そしてそう考えてしまえばもう怖いものなどありません。

思い立ったが吉日とでも言わんばかりに、アランはカール王国へと向かうことにしたのでした。

…

…

…

大魔王が倒れ人々が平和な日常生活に戻りつつあつたカール王国では、現在一つの大きな催し物が行われていました。

それは各国の王宮に破邪呪文の結界を張るというアバンの提案を受けたロモス国王が、それを是非にと了承した時に「各国の戦士たちが交流を深め、もし次に脅威が現れ

た時に団結できるよう武術交流会を開いてはどうか」という言葉があったのです。そして優勝者にはロモス王国にある『覇者の剣』を贈呈するという事でした。

もちろん各所では「性急すぎる」という声もあったのですが、完全に落ち着いてしまえば手を取り合うのが難しくなってしまうという事から『大魔王の脅威は去っても次に何が起こるかわからないための備え』ということでも少々強引ながら推し進めることになったのです。

実際にはこれとはある2国との交流に苦勞しているアバンにとって必要な事だったのでした。

当初は提案したロモス王国で行うのが良いと話していたのですが「世界各国から人を集めるのならば、地理的に世界各国の中心近くの位置にあり、しかも勇者たちがいる国のほうが人が集まりやすいだろう」という事でカール王国で行われる事になったのです。そしてその武術交流会に各国の首脳をゲストとして呼ぶ事で、参加者同士の交流と首脳同士の交流を深めようという計画となりました。

これにはカール王国を良く思わず不参加を表明しそうなアルキード王国もパプニカ王国も参加しないわけにはいかない理由があったのです。

世界中から腕に自信のある者たちが集まる以上、それはつまりどの国がどれだけの力を持っているかを見定める大会でもあるのです。そしてそこに参加しないということ

は国として自信を持って送り出せる戦士が一人もいないと自ら言うようなものであり、まさに国の威信をかけた戦いとも言えるのでした。

更にこれはパプニカ王国にとつてはとある賢者に叩き折られた国の名誉を回復する機会であり、しかもその賢者がいなくなつた事で『賢者といえばパプニカ』と改めて世界中に知らしめる事ができる機会なのです。そしてアルキード王国にとつては奪われたソアラ王女を見つけ出し連れ戻すチャンスでもあります。そのため2国とも国内でも強いと言えるであろう賢者や戦士たちを選出し参加させることにしたのでした。

ちなみに本当に交流を目的としているのはカール王国とロモス王国、そしてリングアイア王国くらいで残りの国にとつては少なからず国家の面目というものが影響しているのは間違いありません。そのリングアイア王国などヴァくんが出場し「今はまだまだ未熟の身なれど：女王陛下に認めて頂けるように、今のボクにできる事を精一杯お見せしたいと思います」とこれまた困つた方向な出場理由だったりもしました。

雑魚ドラゴンに殺され、ほんの少しだけ力が有る程度の一般人でしかないと悟つたノヴァくん：決してそこまで卑下するほど非力ではないのですが、アランやバランと比較してしまつてはそう思うのも仕方ありません。そしてそんな自分を変えるため、アランも信仰しているという天女様の導きを得ることで変わろうとしていたのでした。

なおテラン王国は不参加です。鬼岩城がテラン王国を通過してしまつたため甚大な

被害が出ており、しかも国王含め国民も行方不明となっていたのでした。もしかしたら進行方向から逸れた場所にいた人々は生き残ったかもしれませんが、魔王軍による被害をきちんと把握するのはもう少し先の事になるでしょう。

そしてこの武術交流会はどの国の人間も参加できるだけでなく、なんと種族も問わず参加できるという事が宣伝されていたのです。

その原因はクロコダインが「自分も武人の一人として戦士たちと交流してみたい」と言った事から決められました。もはやすっかり人間側として馴染んでいます。裏切るにあたって魔王軍に心残りなどはなかったのでしょうか……もしくはこういう部分が種族が違うことによる考え方の違いなのかもしれません。

結果として種族も武器も問わず呪文も使用可能という事になり、各国から大勢の戦士たちが我こそはと参加するようになったのです。

そんな中、カール王城側からはヒュンケルや騎士団の数人が参加することになりました。ホルキンスは騎士団長なので警備のため不参加となり、シンシア王女はアバンやフローラ女王と一緒に各国首脳との顔合わせのために同じく不参加となっています。デイーノくんも参加しなかったようですが、アルキード王国もやってくる事から念のためバランとソアラ王女と一緒にいるという事になり残念がっていました。

大勢の参加者がこの武術交流会に参加することになり、予選から白熱した戦いが繰り広げられ各国から集まった大勢の観客たちもそれを見て自国の戦士を応援したりと湧き上がっています。

予選は問題も起こらずに滞りなく進んでいき、クロコダインが勝ったり空手ねずみが負けたり魔族の青年が勝ったりと人間以外の参加者も健闘していました。そして交流会は大詰めを迎え、残ったのはヒュンケル、魔族の青年、クロコダイン、フード付きロブを目深に被り顔を隠した人物の4人となったのです。

「どうやら魔法使いのようだが、この獣王に生半可な攻撃呪文は効かんぞー！」  
「……………」

準決勝の1試合目選ばれたのはクロコダインと謎の人物でした。この謎の人物は攻撃呪文をメインに戦っており、予選ではその強力な呪文で相手を寄せ付けず勝ち抜いてきていたのです。その戦いぶりをクロコダインも見えており、相手は強敵と認めつつも自身の耐久力と自慢の怪力で押し切れると踏んでいたのです。

「ぐわあああーッ!!!」

しかしそんなクロコダインの算段は間違っているとばかりに、試合が始まったと同時に謎の人物は今まで見せなかった更に強力な呪文を繰り出していきました。メラゾーマに始まりベギラゴン、イオナズンという存在はすれども人間には大凡レベルが足りなくて使用できないような高位の攻撃呪文を連発しクロコダインに攻撃させる余裕すら与えずに押し切って焼きワニにしてしまったのです。

この時点で周囲の予想を遙かに上回っており、顔を隠しているため人間ではないのではないかと…という声もちらほらと上がってきています。もちろん魔族だから参加できないという規定はなく、すでに魔族の青年が参加している事からも問題はないのですが…恐ろしい破壊力の攻撃呪文を連発し相手だけでなく会場をも破壊していく様子は、その人物の正体がわからない事もあって恐怖を抱いてしまっても仕方ありませんでした。

そして次の試合はヒュンケルと魔族の青年であり、その青年の名はラーハルトという名前であるようです。手には槍を持っており、剣を扱うヒュンケルとどちらが武に長けているのか…という注目の一戦でもありました。

ちなみにヒュンケルがこの交流会に参加した目的は…完全に優勝商品である『覇者の剣』です。

ヒュンケルは強力な武器がなかったために大魔王との戦いに参加できなかった事を



悔いており、今となっては手遅れとはいえない。また戦う事になるかわからないため強力な武器を欲していたのです。そこには「自分も一緒に戦っていれば、少しくらい役に立って結果アランたちを死なせなくて済んだかもしれない」という思いが根底にあり、そんな思いやりのある優しさから戦う資格すら持てなかつた過去を乗り越えたかつたのでしよう。

対するラーハルトという魔族の青年は人間に対して複雑な思いを抱えていました。

この青年は魔族の父と人間の母の間に生まれたハーフであり、魔王ハドラーの侵略によつて魔族の印象が悪くなつてしまつたせいで人里を追いやられた過去を持つていたのです。そうして逃げ延びた後に母と山奥で静かに暮らしていましたが、その母も病によつて逝去してしまい自身を生んで愛情を持つて接してくれた母と恐怖からか迫害してきた人間たちという両極端な感情を一度に味わつてしまつたのです。

そこからラーハルトは自身を迫害した人間に復讐をしたりすることはなく、しかし人間に対する複雑な感情は消化されなまま隠遁の日々を過ごしていたのです。そんな中に大魔王率いる魔王軍が再び地上を侵略し始め、ラーハルトの中に再び負の感情が溢れ出してしまいそうになつたあたりで大魔王が倒されたのです。

しかし既にラーハルトの心を蝕んでいる感情は行き場を無くしており、そんな中でカール王国で武術交流会が種族不問で開かれるという事を知つたのです。人間という

種族に失望を覚え、しかし愛情を与えてくれた母もまた人間であった事もありラーハルトは「もしかしたら武人なら通じ合う事ができるのではないか」と仄かな期待を込めこの交流会に参加したのでした。

そんなまったく違う目的を持つヒュンケルとラーハルトの戦いはヒュンケルが優勢に進めており、しかしヒュンケルは相手の槍から葛藤が見えたためそれを確認することを優先しました。

「ラーハルト、お前の腕は称賛に値するものだが、なぜかその太刀筋には何か悩みのようなものが見える。一体何を迷っているんだ？」

「貴様に…人間にわかるようなものではない！」

刃を合わせることでラーハルトの内に秘めた葛藤を見抜いたヒュンケル…一体どうやったら打ち合っただけで初対面の相手のそんな心の機微を感じ取ることができるのか疑問ですが、達人という者たちは往々にしてそういった特殊スキルを持っているものなので不思議ではありません。

ブロキーナやバランでも同じことができるかもしれないし、アバンやマトリフなど洞察力に優れた者たちでも仕草などから予想することはできます。しかしブロキーナと同じ武神流を使うはずのアランは当然ながらそんな事はできません。もし相手が苦渋の表情で「くっ…」などと言い戸惑いながら戦っていたとしても何も気付かないで倒

してしまおうでしょう。

最初はヒュンケルの言葉に耳を貸さない態度だったのですが、初めて出会った打ち合える相手に興味を持ったのか実は話を聞いて欲しかったのか少しづつ自身の話をしていくラーハルト：きつと心のどこかで理解してくれる相手を求めていたのでしょうか。その理解してくれた相手が人間を肯定するのか否定するのかでラーハルトの考え方はまるつきり違うものになるのかもしれませんが。

そんなラーハルトの話はヒュンケルにとつて決して他人事ではありませんでした。多少の違いはあれどヒュンケルも一歩間違えばアバンを、人間を憎んでいたかもしれないのです。そしてそんなヒュンケルだからこそ、この目の前にいる戦士の憂いを晴らしてやりたいという気持ちになっていました。

「この勝負、オレが勝ったらお前に会ってもらいたい人がいる」

「そのような戯言：勝つてから言ってみせろ！」

互いに目の前の相手に勝つべく武器を振るいますが、勝者となったのはヒュンケルのほうでした。

これは独学で：：そして一人で腕を磨いてきたラーハルトと、 balan など凄腕の剣士が周囲にいたヒュンケルとの経験の差でもあります。もちろんラーハルトが鬱憤を晴らすかのような心に対して相手を救ってやりたいというヒュンケルの心が齎したもので

もあるのかもしれませんが、結局最後は技量の差が勝敗を分けたのでした。

そしてヒュンケルが会わせたいと言ったのは、自分の心に暖かさを与えてくれた2人の女性：フローラ女王とソアラ王女の事です。普通に考えれば素性も知れぬ見た目魔族の青年を女王や王女に会わせるなど言語道断な行動なのですが、このあたりはやはりヒュンケルも破天荒な賢者の影響を多分に受けてしまっているのでしょうか。

「これより決勝戦を始める！ 剣士ヒュンケル対魔法使いジャガン！」

王族たちが集まり観覧するために用意された場所から、ロモス国王が決勝戦の戦士の名を上げました。1人はカール王国の剣士ヒュンケル：そして相手は凄腕の魔法使いで登録名はジャガンとなりました。

当然ながらこのジャガンという魔法使いはアランの事です。

カール王国に戻ってきてどういいう登場がいいか考えていたら何やら武術会を開催することになっており、更に誰でも参加できるといふ事だったのでちようど良いとばかりに参加してみました。登録名も自己申告だったので何か別の名前にしようとし、アルスやアレルなどを思い付きましたが思い切って全然違う名前にしようとしてジャガンにしたのでした。これは決して異なる世界の魔神の影響を受けたわけではありません。

そして武神流を使ってしまえば正体がバレてしまう恐れがあるため、主に攻撃呪文をメインで決勝戦まで勝ち上がってきたのです。このまま最後まで魔法戦闘のみで戦っ

ても良いのですがせっかくヒュンケルと戦う機会でもあるため、そして優勝してしまえば結局正体を明かす事になるので決勝戦は接近戦闘で戦うことにしたアラン：目的が腕試しではなく商品の『覇者の剣』であるヒュンケルからしてみれば迷惑極まりない行動を無意識に選択しているのです。

「ジャガンよ、お前の呪文の威力は凄まじい…だが一度見せてもらった以上そう簡単に食らわんぞ」

「……………」

ローブを破り武器を持たず魔法戦闘で戦ってきたジャガンに対してそう告げるヒュンケル：…しかしそんなヒュンケルを嘲笑うかのように、開始の合図と共にジャガンはトベルーラによる高速移動でヒュンケルに接近し殴りかかっていったのでした。

これには攻撃呪文が飛んでくると思っていたヒュンケルもビックリです。

剣で切り払おうとしても巧みな身のこなしは振るう剣をすり抜けるかのように当たらず、そして剣で戦うには近すぎる間合いは振り切ることにすら許してくれません。ヒュンケルの技は闘気技も含め遠近あれど剣を使用する間合い以上の距離がないとその威力を存分に発揮することができません。

そして対戦相手のその動きには覚えがあるものの、しかしその流派の使い手はもう知人の少女しか残っていないはずなのです。もちろん他にも弟子がいたのならわからな

いでもありませんが、今まで攻撃呪文で勝ち上がってきておいてよく知る接近戦の動きまで熟せるとなるとヒュンケルの中では2人しか知りません。

「なぜお前がそれを使えるんだ!？」

「……………」

至近距離で問いかけるも返答はなく…そしてこれが魔王軍との戦いなどであれば自傷覚悟で距離を離すために無理やり放つたりもできるかもしれないませんが、強大な攻撃呪文を操り武神流の動きまで使用しているという驚きが大きな隙になってしまっていました。そしてそんな精細さを欠いたヒュンケルなど敵ではないとばかりにジャガンはヒュンケルを打ち倒してしまつたのです。

これもまた実戦という命を懸けた場で戦う経験が多くなかつたヒュンケルの甘さというもののなのかもしれません。

「勝者…ジャガン!」

そしてロモス国王の勝ち名乗りによってジャガンの優勝が決まりました。

そのまま戦いの熱が冷めやらぬうちに各国の王族たちが揃う表彰の場に行き優勝商品の授与が始まるのですが、ジャガンことアランはここで大事な事に気付いたのです。

それは…『優勝して正体を明かしても驚きこそすれ感動とか別にない?』ということとでした。

今更の話ですが、ここでアランが正体を明かしても怒られるだけで何も感動の再会にはなりません。

絶体絶命のピンチなどに死んだはずの人間が実は生きていて助けに入るなどの状況でもない限り、遅れて戻ってくるのに感動を付与するのは不可能でしょう。こうなってしまうえばそのまま逃げるか正体を隠したまま乗り切るかのどちらかありません。

「優勝おめでどうジャガンよ。まずは顔を見せてくれんかね？」

この時点でアランはそのまま乗り切るといふ選択肢が消滅しました。商品を贈呈するロモス国王がそう言っているのですからこのまま顔を隠しておくわけにはいきません。もちろん決勝戦の様子を見ていたアバンたちだつてジャガンを注意深く見守っています。もはや大魔王バーンとの戦いの時よりも追い詰められているような気がしてきましたアランですが、そこに人間の神の粋な計らいなのかわかりませんが大逆転のチャンスが巡ってきたのです。

「ソアラよ！王族としての責務を思い出せ！そして一緒にアルキードへ戻るのだ！」

「……ん？」

観客たちも静かに見守っていた表彰の場で、響くように一際大きく聞こえる声はアル

キード王のものでした。アルキード側にとつてこの交流会は自国の戦士の強さを知らしめるものでもありましたが、一番の目的はカール王国にいるソアラ王女を連れ戻す事だったので。そして目的の人物が王族たちが観覧している場には姿を見せなかつた事から密かに同行していた近衛に命じて探して探していたのでした。

その後観客席の外れでバランたちと一緒に見ているソアラ王女を見つけたという報告を受け、アルキード王が直接連れ戻すために向かつたのです。表彰するはずの場に突然響いたその声にロモス国王やアバンたちなど一緒にいた王族たちも一斉に目を向け、観客たちも何事かと興味津々の表情でその様子を見守っていました。

「よいかーアルキードはカールに奪われた王女を取り戻すことを諦めたりはせぬ！必ずや我が娘を……この命と引き換えにしても取り戻してみせる！」

まるで芝居のように……自分に酔っているかのような口調で話すアルキード王ですが、これはアルキード王が閃いた千載一遇の好機だったので。現在この場には各国の王族や何も知らぬ民衆たちが数多くおり、そんな中で『カールに奪われた王女を取り戻すアルキード』という構図を明確に示すという計略を立てたのでした。

これによつて正義はアルキードの下にあるという事を世界中に示し、カールは王女を奪つた悪であると声高に叫んでみせたのです。そしてそれを聞いた民衆はアルキードを支持しカールの悪行を知る事になるという算段だったのでした。



更に命と引き換えにしてもというのは、ソアラ王女の前でアルキード王たちに立ち塞がるバランスにも言っているのでしょう。アルキード側は大魔王の策略とはいえ一度カールに攻め入りバランスの力に恐れをなして引き換えしている過去があります。普通に戦えば勝てない事は理解した上で、そんな強力な力を持つていようと屈さぬという姿勢を示してみせたのでした。もちろんそこには「この衆人環視の中で力を振るう事などできない」という小賢しい考えも入っています。

何より厄介だった賢者アランが死に、カール王国の内部に入り込み、そしてソアラ王女を見つけて連れて帰るといふ目的を果たすのに今以上の好機などないのです。

元々アルキード王国からソアラ王女を連れ去ったのはアランです。厳密には駆け落ちして国を飛び出したバランスとソアラ王女をテランで見つけて連れて行ったのですが、もはやアルキードにとつて全部がアランの仕業とすり替わっているでしょう。

たとえ魔王ハドラーを倒した勇者パーティーの一員とはいえ、一国の王女を無断で連れて行ったとなれば本来は重罪です。そしてソアラ王女を連れ去っておきながらのうとうとカールの使者としてアルキードへ来た上に「ソアラ王女を返してほしかったら自分を倒せ」と暴れたアランに対して、アルキード側はカール王国にアランの嚴重な処罰を求めた事もありました。

しかしカール王国からの回答は『アランはカール王国に士官しているわけでもないの

で処罰はできない』というものでしたのです。

これに驚いたのはアルキード王国の面々でした。カールの使者として動いているにもかかわらずカール王国に所属していないなど考えられません。更にその事實は『アランの行動はすべてアランの責任であり、カール王国では止められない』という事だと気付かされたのです。つまり首輪のない狂犬が放し飼いになっているようなものであり、政治の力を利用してソアラ王女を取り戻すということもできないということでした。

これはアルキード王国側がアラン像というものを勝手に作り出してしまっただけで、実際にはアバンやフローラ女王であればアランを止めることは簡単です。頭脳労働はアバンたちに丸投げしているので彼らが「それはダメ」と言えば基本的にはそれに反するような真似はしません。たまにザボエラの時のような事もありますが、本人も意図していない結果についてはどうしようもないだけなのです。

そして本来であればアバンもフローラ女王もそのような事は決して言いません。仲間や友人にすべての責任を被せ保身に走るような真似はしないのですが、アラン本人が「ソアラちゃんが欲しかったら俺を倒せて言つてあるから、ちゃんと俺に挑むようにして欲しくない？」という事でお姫様を拐った魔王役を熱望したためこうなつてしまったのです。

そんな対外的には拐われたお姫様扱いになつているソアラ王女ですが、実際は本人が

希望さえすればすぐにでもアルキード王国へ戻ることは可能なのです。カール王国へ来たのだから誘拐されたわけでもありませんし、アランに無理強いされたわけでもありません。お姫様と（竜の）騎士が駆け落ちしたという事実に興奮したアランから熱心に誘われてそれを受けただけなのです。そして残念なことにカール王国での生活が気に入っているソアラ王女は国に帰ることを望んでいないため、アルキード王国限定魔王が出現するという他では考えられない結果となつてしまいました。

その結果：アルキード王国が王女を取り戻すためには、この魔王のような賢者を倒すしかないということなのです。

しかしなんとその魔王のような憎き賢者は大魔王との戦いで討ち死にしたというのですから、アルキード王国からしてみればこれほど幸運なことはありません。政治力が役に立たず、力で敵わなかった相手が消えてくれたということは自分たちの領分が活かせるということなのです。

これは本来ならばこの状況はアバンやフローラ女王であっても収めるのは非常に難しい状況だったでしょう。下手をすれば噂が噂を呼び王族への信頼の失墜などといった危険性もあるほどの状況とも言えました。バランスが大魔王を倒した一員として名を広めることができなければ変わった結果だったかもしれないませんが、無骨な騎士に弱者の心の機微や駆け引きなどをさせるのは些か荷が重かったのでしょうか。

しかし今の状況は正体を隠していたアランにとってまさに幸運のイベントとなったのです。

王族の責務などを盾に従わさせられようとしている王女様：そして力を振るうわけにもいかず、かといって大人しく最愛の妻を渡すわけにもいかない騎士。たぶんですが、これはまさに絶体絶命と言っても良い状況でしょう。もちろんこれは決してソアラ王女やバランを利用してはならず、彼らの危機を救うために地獄から蘇った賢者の登場の必要がある場面なのです。

こうして完璧な理論で脳内自己弁護を完了させたアランはアルキード王に向かって立ち塞がるバランの前に飛んで行き降り立ったのでした。

「誰だ貴様は!?!アルキード王国の国王様の前だとわかつているのか!」  
「……………」

突然目の前に現れたジャガンという名の謎の人物にアルキード王と一緒にいた近衛兵が憤り声を荒げますが、そんな謎の人物ジャガンことアランがその程度の事で動じるはずもありません。バランたちは様子を見ているようですが、対してアルキード側はさつきまで見ていた武術交流会で圧倒的な力で優勝した人物が割って入ってきたことに警戒を隠せませんでした。

「何せアルキード王国が選りすぐった戦士が勝ち残ることのできなかつた大会を優勝

した人物なのですから当然でしょう。ベギラゴンやイオナズンといった恐ろしい攻撃呪文まで操ってみせ、決勝戦ではそれまで素晴らしい戦いを見せていたヒュンケルを完封しているのです。

「これはアルキードとカールの問題なのだ！余所者は下がっておれ！」

「へえ……これでも関係ないのかな？」

邪魔をされた怒りからか「お前は無関係だ」と言うアルキード王に、遂にアランはそのフードを取り去って顔を見せることにしました。本人的にはまさにヒーロー登場の感動的で衝撃的な場面だと思っています。そしてそれと同時に怒られるか怒られないかの瀬戸際だとも思っています。

「なっ!?!お前は……!!」

「……アラン!!」

豪快にフードをローブごと脱ぎ去り、格好良いっぽい感じに正体を明かすアラン。そしてそのアランの登場はこの賢者を知る者にとってはまさに驚愕の瞬間でした。しかしアランの名を呼ぶそれらは全てが喜びの感情なわけではありません。目の前にいるアルキードとパプニカにとっては死んだはずの憎きと言っても過言ではない人物だったのです。

「お前らに言っただろ？ソアラちゃんが欲しけりや俺を倒してみろってな」

「言っている事とやっている事に正義がまったくないアラン……もしかしたら知らないうちにジャガンという名の悪い影響を受けているのかもしれない。」

そしてアルキード側にとってアランというのはバラン以上に危険人物扱いしている。要注意どころじゃない危険物なのでした。まだバランは当たらないようにギガデインを放って威嚇に留めてくれていましたが、アランの場合は本当に何も気にせず城に大きな風穴を開けたりするので。そのおかげで行方不明者多数だったアルキード王国にとって、アランが死んでくれたことで王女奪還のチャンスだったというのに……なぜその当人が目の前に現れるのか意味がわかりません。

「たとえ誰が相手だろうと……愛し合う者を引き裂くような真似はこの賢者アランが許しはせん！」

そして格好良い登場ができた満足し自分に酔っているアランもアルキード王に倣って芝居口調で反論したのでした。通常であれば王族の言葉の重みに、ただの冒険者の言葉が敵う道理はありません。しかしここにいるのは魔王を倒し、命懸けで大魔王を倒したと世間に伝えられている伝説の大賢者なのです。

なおいくら魔王や大魔王を倒したからといっても、アラン本人だけならそこまで為人などが知られているわけではありません。そこにはアバンたちの存在が多分に影響していたのです。魔王ハドラーを倒しカール王国の女王と結婚したという事実が「フロー

ラ女王が選んだ勇者は立派な人物」という評判となり、そしてそんな勇者と共に魔王を倒した人物は「きつと志を同じくした立派な人物のはず」という評価を生み出していました。

そして命を散らしてまで大魔王を倒したという事が「やっぱり勇者だけでなく仲間たちも平和を愛する素晴らしい人物たちだったんだ」と評判だけが独り歩きしていったのです。実際は世捨て人のように人里から離れた生活をしている老人2名と同じく戦う以外あまり役に立たない賢者なのですが、関わりのない人たちからすればそんな事はわかりようがありませんでした。

そのためこの大賢者の復活劇に観衆たちは大いに沸き立ち、なぜか会場にアランコールが鳴り響くという事態になってしまいました。

そんな衝撃の復活劇によって仲間たちの目の前に現れたアランは：現在王宮の一室に連れて行かれています。

理由はもちろん「説明しろ」の一言に尽きます。

アルキード王国側が状況が悪いと判断し「ぐぬぬ…」となりながら引いた後：シンシア女王やデイノくんは涙の抱擁で生きていた事を喜んでくれたのですが、どうやら他

の仲間たちは喜びこそすれ誤魔化されてはくれなかつたようでした。

「ではアラン、あなたがあの後どうなったのかなるべく詳細に教えてもらえますか？」

仲間が生きていてくれたのはとつてもとつても嬉しいのですが、アランにはきちんと聞いておかないと大事な部分を省略する癖があることを知っているアバンがやけに強調した聞き方をしてきました。しかしアランに説明できる事は本当に多くありません。そのため状況をそのまま説明したところ、流石のアバンがしっかりと『カールのまもり』などを含めた推測という名の詳細な説明をしてくれたのでした。

アランの説明とアバンの推測で大体の状況が判明し、そこで周囲がまず思ったのは「目覚めて最初にするのがアイテム探して何を考えてるの？」というものです。大魔王を倒したんだからそれで終わりだと思っている面々からすれば、この火事場泥棒のようなアランの行動の意味などまったくわからなくて当然です。しかもその武器などを持ってすぐに戻って来ればいいのに、わざわざ宿屋に預けて正体を隠してまで武術交流会に参加しているのだからその奇行を理解できる者などこの世界のどこにもいないでしょう。

しかしそれはそれとして……これらの説明によりアランが生きていられた理由が判明し、改めて喜びと共に実感が湧いてきた仲間たち。しかし「これからはアランも一緒だね」と笑っている子供たちには悪いと思いつつ、アランは地底世界へと行く事を告げま



した。

「俺はこれから竜の女王……マザードラゴンを助けに行かなきゃいけないんだ」

「マザードラゴンだど!?!」

このアランの言葉に強く反応したのはバランでした。

それも当然です。聖母竜マザードラゴンとは竜の騎士の生みの親とも言えるドラゴンであり、竜の騎士がその生涯を終えた時に迎えに来る存在でもあるのです。そんなマザードラゴンをアランが助けに行くというのはとても聞き流せる内容ではありませんでした。

他に何か言っていなかったかと詰め寄られ、アランは思い出しながらもマザードラゴンから聞いた事を答えていきます。邪悪な存在によってマザードラゴンの生命が尽きようとしている事と、その邪悪は地底世界に関係しているという事です。地底世界とはもちろん魔界と呼ばれる世界の事であり、マザードラゴンの生命を脅かす邪悪というのは心当たりはなくてもバランにとっては放っておける内容ではありません。

「アラン、魔界へは私も行くぞ。マザードラゴンの危機であれば私が動かない理由などない」

そしてこのバランの言葉を皮切りにして次々と「自分も行く」と手を上げる仲間たち……彼らは次こそは自分たちも力になりたいと願っていた面々であり、魔界を見てみたい

とかそういうったピクニック気分に参加を表明したわけではありません。

とりあえず今すぐに出発するわけではないということとまずこの話題は後回しとなり、アランは何やら会って欲しい相手がいるという事でアバンに連れられて別の部屋へと移動するのでした。

…

…

…

「はじめまして…ではありませんよね。私の事を覚えていらつしやいますか?」

「ごめん全然わかんない」

アランたちとは別でヒュンケルはラーハルトに会わせたいと言っていたフローラ女王とソアラ女王へ事情を説明し、了承を得られたため女性2人はラーハルトと面会するという事になりました。もちろん女性2人だけで会わせる事は許されないので、護衛代わりとしてヒュンケルとバランが立ち会うということになっています。

ちなみにその時にヒュンケルから「アランは剣を使わないんだから覇者の剣は必要ないだろう」と優勝商品を自分に渡すように暗に伝えてきたりもしましたが、なぜかそこ

にデイーノくんが「自分も欲しい」と言ってきたりしていたのでこれも先送りになっているのです。これはアランが手に入れたお土産の武器などを預けたままにしているのと、先に要人との面会を入れられていたためでした。

そしてフローラ女王たちの面会の際にアランはアバンに連れられて、別室にてパプニカの王女様と顔を合わせていました。その理由はこの王女様がどうしても生きていたアランと話したいという事で、その立ち会いをアバンに頼んだからということらしいのです。

そこにはレオナ姫と共に3人の明らかに「賢者です！」と言わんばかりの格好をした男女もおり、パプニカの将来を担う『三賢者』と呼ばれている者たちだと紹介を受けました。レオナ姫を『賢者の卵』と呼んでいたり『三賢者』という呼称を使ったりとパプニカ王国は何かと『賢者』という名称にこだわりがあることが見て取れます。

現在世界中の人間に「賢者といえば？」と聞けば、間違いなく「大魔王を倒し世界に平和を取り戻した大賢者」という答えが返ってくるでしょう。それくらい『カールの大賢者』の名は知れ渡っており、魔王を倒し大魔王を倒したという偉業は伊達ではありません。しかし昔から賢者の国として繁栄してきたパプニカ王国としてはやはり取り戻したい名称なのかもしれません。

若き日の…と言ったら本人に怒られるかもしれませんが、パプニカ王国のレオナ王女

は髪色こそ違えどかつてのフローラ王女を連想させるような女の子でした。もちろんフローラ女王の子供であるシンシア王女がまさに若き日のフローラ王女そのものなのですが、レオナ姫のほうもなぜか似ていると思ってしまったのです。

そこで「うちのお姫様ってシンシアちゃん他に子供いたの？」などと聞くことはありません。流石に他人の空似だろうとわかっていきますし、それを言ってしまったら怒られるでは済まないことはアランにもわかっていきます。

そんな他人の空似なパプニカ王国のレオナ姫は武術交流会の観覧のためカール王国にやってきていました。

そして自国から出場した三賢者たちが惜しくも敗退していき、せめて攻撃呪文をメインに戦っている魔法使いを応援していれば見事優勝してしまい、その後表彰の時に「どうすればそんなに強力な呪文を使えるのか」と声をかけようと思ったらアルキード王の揉め事が起こり、そこになぜか武術交流会の優勝者である魔法使いが飛び込んでいったと思ったら、実は大魔王と戦って命を落としたはずの大賢者だった…というものすごい驚きの連続な濃い時間を経験したのです。

レオナ姫は今もですが、元々カール王国のフローラ女王に憧れていました。フローラ女王がレオナ姫と同じ年の頃には騎士団を率いて魔王ハドラー率いる魔物の軍勢と

戦っており、更に魔王討伐の旅に出た勇者アバンの勝利を祈り続け…その祈りが天に届いて勇者はその力で魔王を討ち倒す事ができたのです。

これは各国に出回っている『勇者の冒険』という本に記されている事であり、同じく出回っている『勇者とお姫様の恋物語』という本と合わせてレオナ姫の愛読書だったのです。

そんなレオナ姫にとって賢者アランという人物は自身の幼少期に当時いた凄腕と言われていたパプニカの賢者たちを赤子の手をひねるように圧倒した強者であり、かつて世界を侵略していた魔王を倒し、更に復活した魔王や更に強い大魔王をも倒した英雄という認識です。

やはり賢者の卵であるレオナ姫にとって、自身よりも遥か高みにいる大賢者には魔法などを含め色々と学びたかったという気持ちは持っていました。

しかしパプニカの重臣たちや司教など当時を知る賢者たちなどアランの事を良く思わない人間はそこそこおり、その人間たちが王族である自分たちの声を聞かずに魔王軍と戦っているカール王国に攻め入るといふ大問題を起こしてしまったのです。しかもキラーマシンという魔王が対勇者用に用意していた兵器までどこからか持ち出したのですから言い訳のしようもありません。

幸いカール王国の勇者アバンが大魔王の策略による暗黒闘気の影響だということ

説明してくれ仕方がなかったと言ってくれたのですが、そこまでやらかしておいて自分たちから「仕方がなかった」と言つて済ますほどパプニカ国王もレオナ姫も厚顔ではありません。

そして大臣たちの言い分では、その攻め入るキツカケとなったのは目の前にいる大賢者アランがパプニカの賢者たちを1人で薙ぎ払った事が原因だということです。既に問題のあつた頃からそれなりに時間が経つてもそれは変わらなかったため、レオナ姫はアランに敗れた賢者たちや大臣たちに「自分たちのレベルが低かつただけで、それならもつと修練を重ねて実力を上げればいい」と告げてたりしたこともありました。

ちなみにパプニカでアラン1人对多数の賢者という構図で戦う事になったのは王宮の大臣たちに嫌気が差したマトリフが原因です。そしてそのマトリフが王宮魔道士を辞める事になったのはパプニカの重臣たちが原因です。

つまり根本となる原因はパプニカ王国が作つていたのです。

当時レオナ姫は幼かつたため知らなかつたのですが、その当時を知るバダックや他の者たちからも話を聞いた結果自業自得という事を知りました。なのにもかかわらずアランに国家の誇りを傷つけられたなどと被害者のように振る舞つているのですから、この事実を知つた国王やレオナ姫の落胆は非常に大きなものだったのでしよう。

アランはレオナ姫からそういった内容を説明され、アバンと共に「そんな理由だった

のか」と納得したのです。もちろんそんな簡単な感想で終わるのはアバンたちだからこそであり、相手国や場合によってはパプニカ王国は「償いとして姫を寄越せ」などと言われても仕方のないほどの失態であることに変わりはありません。

アバンとしてはこれを理由にとするつもりはありませんが、きちんと誤解が解けて交友を結ぶことができればそれで良い程度です。アランなど国家間の話は専門外なので、相変わらずアバンかフローラ女王に任せておけばいいというスタンスは変わりません。

これが当事者の司教などが謝罪に来ていたのならザボエラの時と同じように一発殴るくらいはしていたかもしれませんが、目の前にいるシンシア王女に似ている女の子に手を出すなどという考え自体思い浮かばないので「大変だったね」と気持ちの籠っていない励ましをするくらいのもんです。もちろん当事者がやってきても、ザボエラで実験したことで威力の程度がわかった今となつてはやりすぎて破裂させるといふ失敗をやらすこともないはずですよ。

とはいえアランの中で当時の事を振り返ると、マトリフに突然呼び出された上に「遠慮せずにやっちまえ」と言われたのでよくわからないままやっちまったというだけなのです。それまでの経緯なんてまったく知りませんでしたし、それが原因で自分がそんなに嫌われているなんて気付いていませんでした。

そんなアランなのでレオナ姫に対してだって「会ったかもしれないけれど……」程度の

記憶しかありません。魔王ハドラーを倒した後にパプニカ王国を訪れた時はレオナ姫は生まれているかどうかくらいですし、マトリフに呼び出された時は見られていたとしても会ってはいませんでした。そして復活した魔王軍が各国を襲っていた時にパプニカ王国の救援に行ったのはバランとディーノくんだったのです。そのためやけに緊張している様子のレオナ姫の事はたぶん初対面と言っても良いくらいで、逆にレオナ姫のほうがアランの事を一方的に知っているのです。

「そんなわけで、私たちはアバン様にもアラン様にも頭を下げるしかできないのです」「わ、我々は気にしていませんのでレオナ姫も気に病まれる事はありませんよ。ねえアラン?」

「そういうのはアバンの役目だから俺に言われてもねえ…どうせ俺たちは地上からいなくなるし勝手にやってくればいいんじゃないの?」

「地上からいなくなる…?」

今はとても緊張して大人しいレオナ姫ですが、普段はそこまでお淑やかな性格ではありません。魔王が倒されて平和になってから生まれた子だからなのか、王家に待望の第一子が生まれて甘やかされたからなのかかわかりませんが少々わがままぶりも見える快活な女の子でした。とはいえきちんと王家としての教育は受けているので状況は理解しており、広い視野をもって物事を考えられる聡明さは持っていました。



そのため猫を被っているのかと思うほどに恐縮しているレオナ姫に対して、反対にアバンもアランもそれらを問題だとも思っていない。アバンにとつてはむしろ出回っているという『勇者の冒険』のほうが問題であり、恋物語のほうは存在を知っていました。『勇者の冒険』という本のほうは初耳だったので。

そしてそんな本を書いた張本人であるアランはレオナ姫の語った内容よりも、マザードラゴンを助けるため魔界へと旅立つ事のほうが大事なのです。何せゾーマ様だと思っていた大魔王バーンが実は折り返し地点のバラモス様だったと判明したのですから、これから更に強いモンスターたちと戦うというのに人間同士の諍いを気にかけているような余裕などありません。

しかしそんな事情を一切知らないレオナ姫たちからしてみれば、アランの「地上からいなくなる」と「勝手にやっていたらいい」という発言は聞き捨てられるものではありませんでした。捉えようによっては「パパニカ含め勝手に争っている人間たちへの失望」とも考えられる内容なだけに不安しかありません。なにせパパニカ王国は過去に一度マトリフに失望され去られているだけにその考えは当然のものでしょう。

もしこの「地上からいなくなる」という言葉をディーノくんに似た小さな勇者が大魔王に向けて言っていたのであれば「人間たちが好きだけど、それでもみんなが望むのならこの地上を去る」的な意味になるのですが、ここでアランがレオナ姫に言っているの

は「次の冒険の舞台はアレフガルドだぜ！」という意味でしかありません。

思いっきりレオナ姫や三賢者たちの勘違いというか思い込みというか、どちらかというところら側の完全な説明不足なのです。しかし目の前にいるシンシア王女と同じくらしい年齢の少女の勘違いな不安を解決するどころか、それに気付くことすらないのが大魔王を倒した賢者アランという人物なのでした。

まずアランの為人を知らず、国家としてもほとんど付き合いないレオナ姫に「聖母竜という竜の騎士の母親的存在を助けるために魔界に冒険に行くことになった」などという荒唐無稽とも思えるような事実を察しろというほうが難しいでしょう。パプニカ王国側は当然竜の騎士というものも知りませんし、アランが生死の境で聖母竜と交信していた事だつて知らないのですからどうやっただつて正解に辿り着けないのです。

言葉が足りないというより説明する気のないアランと確実に誤解しているレオナ姫たち：そんな2人の状況を理解しているアバンはというと「どうしたものでしょうね」と悩んでいたのです。もちろんレオナ姫に事実を伝えれば今抱いている不安は解消されるでしょう。しかし大魔王が倒れ世界に平和が戻ってきて喜んでいる少女に、魔界やマザードラゴンの生命を脅かす邪悪などの事を伝える必要があるのか：という思いがアバンの口を重くしていたのでした。

もしレオナ姫がフローラ女王に見出された最後の正義の使徒的な存在であつたなら

普通に話していたでしょうが、今まで無関係な位置にいた他国の王女な上に自身の娘と同じ年頃の少女なので巻き込むわけにもいきません。これは魔界という恐ろしい場所の事をわざわざ知る必要などないという思いやりなのか、それともやはり勇者パーティーの悪い癖というか「無関係な人を巻き込まない、自分たちで解決する」という姿勢なのかわかりませんが結果として『私たちにはまだやるべき事がある』というふわっとした内容を伝えるという選択を取ってしまったのです。

次に来るかもしれない脅威のために『世界中が団結する』という大きな目標のために世界中の人を集めて武術交流会まで開いたにもかかわらず、結局相手の事を思いすべてを説明しないのですから掲げた目標達成はまだまだ遠い道のみになりそうです。

そして何よりもアバンはレオナ姫という女の子の事をシンシア王女と同じ聞き分けの良い子だと思っていたのです。

しかしそれが間違いだった、と…レオナ姫の行動力を甘く見ていたと思い知るのはすぐ後の事なのでした。

…

…

……

アランがレオナ姫と、そしてフローラ女王とソアラ女王がラーハルトと会ってそれぞれ話をした後に再び魔界へ行く話……とはいかず、珍しくアランはアバンとバランとシンシア王女の3人を騎士団の演習場へと連れてきていました。

それはこれからの冒険の舞台が魔界ということがあり、そして勇者パーティだったマトリフとブロキーナがいなくなってしまうた事によって大魔王バーンに使った必殺の連携が使えなくなったためです。未だに『ぼふぼふ』を……というよりもレベル99になつて大魔王ムーブすることを諦めていないアランですが、それはそれとして勇者パーティ自慢の必殺コンボが使えなくなったのは痛かつたのでした。

アバンと2人だけで連携しようにもメドローア入りの魔弾銃は今のところアランでは作り出せないため、ならばそれに代わる新しい必殺の何かを作り出そうと思つたのです。そのためのアイデアは相変わらず魔導図書館で得ていました。

「アラン、こんなところに連れてきて一体どうしたというのだ？」

「ねえバラン、アバンから前に聞いてただけどギガデインが使えるって本当？」

「ああ、それがどうした？」

「実は1つ試したいことがあつてさ。アバン、ちよつとこれ読んでみてよ」

アランから差し出された1冊の本…そこには魔法力を他人から与えられることで呪文の威力を大きく上昇させるという研究が書かれていたのです。魔法力集束呪文とでも呼ぶであろうそれは、もし生きていけば妖魔司教的なザボエラが使用していたかもしれないメラゾーマを自身に撃たせて自分の力に上乘せして放つものと似ているものでした。大きな違いは攻撃呪文を自身に撃たせるのではなく魔法力自体を受け渡すものであり、もしかしたらザボエラはそこから研究し攻撃呪文を直接撃たせて外部で集束させるという方法に行き着いたのかもしれない。

現在アランが使える最大の攻撃方法は閃華裂光拳とメドロアであり、これらを組み合わせ生命エネルギーまでも使った切り札は相手が大魔王バーンであっても確かな結果を齎しました。もちろん単発で使用してもこれらの奥義は非常に高い威力を誇っているの言うまでもありません。

しかしいくら知識にない世界で知らない名前前の魔王たちがいるとはいえ…それでもドラゴンクエストの世界にいる事は間違いないわけですから、それはそれとしてアランの知る最強の呪文の一角といえればやっぱりギガデインなのです。本当はアバンが使える良かつたのですが、アバンが使えない以上ギガデインを使用できるバランスに白羽の矢が立ったのは必然だったのかもしれない。

アバンが書かれている内容を読み解き、それをアランたちに説明することでアランが

何がやりたいのかを理解した3人はまずは実践とばかりに試してみることになりました。これは仲間3人が魔法力を1人に集めることで、自身の魔法力とその集められた魔法力を使って呪文効果を大きく上乘せさせるというものだったのです。

「ぬう…いくぞー！ギガデイン!!」

アバン、アラン、シンシア王女が魔法力を balan へと受け渡したところ…少々苦しげな声が漏れつつも唱えられた呪文によって、演習場の何もない場所に極太という表現が相応しいほどの豪雷が降り注ぎました。それは人を1人飲み込む程度の普段のギガデインと比較にならないほどに太く、そして見てわかるほどに密度の濃い稲妻だったので

す。  
これにはギガデインを何度も使ってきたいた balan も驚きを隠せません。もちろんそれは鬼岩城が襲いかかってきた時に見ていたシンシア王女と、大魔王バーンへ最後の一撃を放つ時に見ていたアバンもまた同じです。しかしアランだけはギガデインどころか balan がモンスターと戦うところを直接見たことがなかったため「本当に使えたんだ」という違ったところに驚いていました。

「どう？実戦で使えそう？」

「…十分な威力だ。だがこれは鍛えた者にしか使わぬほうが良いな。下手をすれば耐えきれず暴発しかねん」

バランの体感では自身の魔法力のキャパシティ以上の魔法力が注ぎ込まれるようなものであり、気を抜けば内側から肉体が砕け散りかねない…と思わせるものだったということでした。少々の危険は伴うものの、しかしそれは鍛え上げられた肉体を持つバランにとっては耐えられないようなものでもありません。

他の魔法使いなどが同じことをしてもそこまではならないのですが、バランにそこまでの感想を抱かせたのは魔法力を注ぎ込んだ人物たちが並の魔法使いなど足元にも及ばないほどの魔法力を有していたことにも起因しています。アバンとシンシア王女、そしてアランの3人は飛び抜けた魔法力の持ち主と言っても過言ではないのですが、当然そんなことを誰も自覚していません。

しかし放たれたギガデインのそのあまりの威力に「ヴェルザーとの戦いの時にこの仲間たちがいればどれだけ楽に倒せただろうか…」と、ほんの少しかつての戦いを思い出してしまふ程度にはバランも衝撃を受けているようでした。ただバランが持つ必殺剣であるギガブレイクをこの方法で使おうとすると、今のままではその威力を十二分に活かすきれないかもしれないという懸念も同時に出てきたのです。

バランが使える最強の一太刀であるギガブレイクはギガデインのエネルギーを真魔剛竜剣に纏わせ叩き切るまさに必殺という名に相応しい一撃ですが、当然ながらただギガデインを剣に落とせば良いというものではありません。金属である剣にただ雷を落

とすだけでは感電してしまうためそのエネルギーを剣に纏わせる事こそが肝要であり、そして今回使ったギガデインではそのエネルギーを抑え込むほうに力を割かなければいけないほどでした。そのためもし魔法剣として使うのであれば竜の騎士の真の姿とも呼べる竜魔人でなければ使い切れないかもしれません。

もちろん今の地上にそこまでの敵はいないので何も問題はありませんし、むしろ使い所を見極めないと過剰攻撃にしかならないでしょう。元々ギガブレイクやギガデインでも地上で使うには威力の高い攻撃呪文でしたし、更にバランには誰にも見せたことがありませんが竜魔人の状態でのみ使用できる竜闘気を魔法力で圧縮して撃ち出すという恐ろしいほどの破壊力を誇る攻撃方法も持っています。

それでもバランにとってはこれからマザードラゴンを救うという使命を果たすための心強い手段を手に入れたことに変わりありません。

竜の紋章は歴代竜の騎士たちの戦いの経験を蓄積しており、そして真魔剛竜剣はそんな歴代の竜の騎士たちの魂が込められていると言っても過言ではない武器です。それだけでも代々の騎士たちと共に戦っていると表現するに相応しいものでしたが、そこに一緒に戦う仲間たちと力を合わせて技を放つという方法はどの代の竜の騎士も成したことのない偉業であり、それはバランの心を高揚させるに十分すぎるほどでした。

「これはもうギガデインというよりもまったく違う呪文のようですねえ。さしずめ『皆



の魔法力を集めて唱える『ギガデイン』というところからミナデイン……でも呼ぶべきでしょうか」

凄まじい威力の豪雷を目にして、アバンから出た感想によつてこの方法で使われるギガデインは何故かミナデインと命名されました。ミナデインと唱えて呪文が発動するのはわかりませんが、大魔王バーンもカイザーフェニックスと言いながらメラゾーマを使っていたので恐らく発動してくれるのでしょう。

アランはアランでそれを聞き「え？ギガデインより上とかないからギガデインでいいんじゃないの？」などと思つていましたが、ライデインの上位がギガデインなので最上位としてミナデインならそれっぽいか？というメラ・メラミ・メラゾーマの系譜っぽい命名に納得すると同時に、この世界では新しく名前を付けないと気が済まない力でも働いているんだろうかと不思議にも思いました。

…

…

…

balan がミナデインを習得したことでアランの用事も終わり改めて集まった一同…

もちろん議題は魔界へ行くメンバーやタイミングなどと話さないといけない事はたくさんあります。

アランたちが話していたレオナ姫のほうはひとまず今後パプニカ王国とカール王国の国交を密にしていこうという事で話し合いは終わっており、その後は年の近いディーノくんと話をしていたところにシンシア王女も後から合流し更に話の花を咲かせていたそうです。その際シンシア王女の『婚約するにはシンシア王女より強くないといけない』という話はいつの間にかパプニカ王国にも流れていたようで、自身にもそれなりに婚約などの話が出ていたレオナ姫としては羨ましい限りだと言われたそうでした。

もし仮にレオナ姫が同じように「私と結婚するなら私よりも強い人じゃないとダメ」と言ったところで、その条件を満たす人物は国内外にかなりの数が存在するでしょう。いくら賢者の卵としてパプニカでは将来を期待されているとはいえ、下手をすれば「誰でもいい」と言っていると勘繰られても仕方がないくらいです。

しかしシンシア王女の場合はまったく違います。

この2人は同じ王女であり年も近く、そして賢者の才を持っていて次期女王であるところまで似通っています。しかしレオナ姫は王女としては当然の事なのですが、魔物と戦ったこともなく多くの呪文を使えるわけでもありません。対してシンシア王女は幼い頃からモンスターと戦ったり魔道図書館でそこらの賢者たちでも使えないような呪

文を数々契約したりしており、更に接近戦闘用に武神流まで修めているのです。

同じ年の頃の、そして同じく次期女王を担う王女という立場であり、更に見た目も似ていると言える2人の女の子ですが、戦闘力という点に関してだけは天と地ほど離れていると言っても良いくらいでした。

そしてその確かな実力で実際に婚約者に名乗りを上げた者たちを返り討ちにしていくのですから、レオナ姫からしてみればそれを言える強さと実践できる強さを羨んでも当然なのでしょう。魔王を倒した勇者を父親に持ち母親は女王、そして身近に大魔王まで倒した大賢者：レオナ姫は知らないことですが、更にそこに神々の生み出した竜の騎士とその息子などシンシア王女の周囲は本人たちは意識していないにもかかわらず地上有数の強者揃いなのです。

こればかりは環境の違いという以外にないのですが、本当はパプニカにもレオナ姫が成長できる機会はあったのです。もしパプニカ王国がマトリフをずっと重用していたのなら、大魔道士の教えに触れることができたかもしれないかもしれません。更にそこからカールの賢者や拳聖などとも交流を持つことができたはずなのです。そしてカールの賢者と交流を持つことができたということはカールの女王や勇者と交流を持つということでもあるため、レオナ姫は自分の与り知らぬ間に大きな転機を逃していたのです。

この話をシンシア王女から聞いたアランは「つまり俺がレオナちゃんを浚って魔王役

やればいいって事かな？」と未だに達成できていない囚われのお姫様計画が頭に浮かんだりもしましたが、もしこれをやったら挑戦者が現れる前にカール王国の仲間たちがやってきて怒られるだけでしよう。たとえ王女本人が乗り気で計画誘拐だったとしても2人揃って説教される未来しか見えません。

「お姫様とソアラちゃんのはうは何話したの？」

「ほとんど彼の境遇や気持ちを聞いてあげたくらいね」

「ええ、でもあの子も吐き出せてスッキリしたみたいだったから大丈夫じゃないかしら」  
レオナ姫のほうの報告が終わってそっちはどうだったのかと聞いてみると、ラーハルトのほうはフローラ女王とソアラ王女と面会したことによって少なからず積もり積もった気持ちを吐き出せたようでした。

このあたりは一緒に話を聞いていたバランも考えるところはあったようで、たられべの話になってしまいますが少し運命の歯車がズレていれば自分もまたまったく違った結末を迎えていたかもしれないと思わずにはいられません。ヒュンケルもまたバランと同じ事をラーハルトとの初対面の時から感じており、そういった事もあってお節介を焼きたくなったのでしょうか。

さすがに魔界へ行くという話をするこの場に連れてくるような事はしなかったようでしたが、混血によって悩みを抱えていたラーハルトに思うところがあつたのかバラン

たちも色々と話してしまっていたようでした。ラーハルトのほうも自身の話を聞いてもらっただけでなく、大魔王たちとの戦いなどを聞いた事で今の隠れ住んでいる森を出てカールへとやってくるといふことらしいのです。

もしかしたら女性2人の包み込むような母性に触れ自身の母親の事を鮮明に思い出し、そして自身が及ばないほどの力を持つ者たちが多くいるという事から身の振り方を定めたのかもしれない。それ以外にも balan が『竜』と『魔』と『人』の性質を併せ持つ存在であったため、ハーフであるラーハルトにとつては他の人間と違い唯一似通った部分があると直感で感じ取った部分も少なからず影響していたのでしょう。

大魔王が言っていたように、力というものを真理とする魔族の血が戦いを求めたからなのか：その時何を思ったのかは定かではありませんが、ラーハルトにここに来たいと思わせる何かがあったのは確かです。

しかし balan も ヒュンケルも魔界へと旅立つつもりでいるため、ラーハルトがカール王国へやってきても一緒に過ごすことはできません。せつかくカール王国にやってきたのに自分たちは不在など不義理でしかないため黙っておくわけにもいかず、ラーハルトにはそれをちゃんと伝えたのですがラーハルトの答えは「共に魔界に行きたい」というものだったそうです。

balan や ヒュンケル に 続きカールの森にいるクロコダインの次はラーハルトがカー

ル王国に来るということで、キツカケや原因は様々あるにせよカール王国に次々と強者が集まっていると言っても過言ではありません。最初から大魔王を討伐すべく仲間を集めていったわけではなく、色んな偶然などが重なった結果今の仲間たちがここにいるのです。

全員がカール王国という国に仕えているわけでもなく、友人や仲間がいるからカール王国という場所に集まってくる：しかしその中心にいるのは、勇者アバンでも賢者アランでもなくフローラ女王だったのです。フローラ女王が国を治める立場としてカール王国にいるからアバンもカール王国におり、そして仲間や友人がいるからアランもカール王国にいます。そうやって少しずつ増えていった仲間たちがカール王国にいる理由は、もとを辿ればフローラ女王がいるからなのです。

「ルイーダさん……」

「アラン、あなた私の名前も覚えられなくなったの？」

そしてそんな考えからつい思わず、フローラ女王に対して冒険者が集まる酒場の店主さんの名前を言ってしまったアラン：返ってきた言葉がフローラ女王にしては珍しく棘のある物言いですが、これは仕方ないでしょう。既に友人付き合いとしては15年を超えするというのに未だに「お姫様」と呼ばれていますし、それは昔から友人としての愛称的な感じだったから良いとしてもそこに誰かわからない名前を出されてはさすがの

フローラ女王も少々ご立腹になってしまっても仕方ありません。

ただアランは決して名前を間違ったわけではなく「仲間が集まってくるころからルイーダの酒場っぽい」という感じで出てしまっただけなのです。

「とりあえずアラン、あなたちよつとこちらにいらつしやい」

「どうしたの？」

みんなで揃って座っているというのに、わざわざ自身の近くにアランを呼ぶフローラ女王：この時点でもあまり良い気配はしません、そんな空気を読むことのできないアランは言われた通りにフローラ女王の横にやってきました。

「まずあなたリンガイアで何を言ったのかしら？どうして私の話を聞いてくれずにあなたの言葉だけ盲信されてるのか説明してくれる？」

このフローラ女王の言にはアバン含めリンガイア王国の面々と関わった者たちには覚えがありました。アバンとフローラ女王は將軍の息子を蘇生させて何やら大袈裟な物語を吹聴していることを把握していますし、バランは竜の騎士ではなく愛の騎士という名称で呼ばれている事は聞いていました。しかも両方ともアランが言っていたという証言付きです。

一応フローラ女王としてもこれからマザードラゴンという人智の及ばない存在を助けるために魔界に行くという大事な話し合いのため自重していたのです。しかしアラ

ンがそんなつもりはないまでも名前を間違おうというやらかしをしてしまったので抑えるのを止めたのです。それでも最初から怒るような事はせずに、まずは相手の話を聞こうとするのは女王として長いからでしょうか。

「そんな大した事は言っていないはずだよ？ノヴァくん助けてあげてカール王国と仲良くしてねって言ったような気がするけど…」

「ねえアラン：『天に祈りを捧げ勇者に戦う力を与え、人々の平和のために奇跡の力を携えてカール王国に舞い降りた天女』って誰のことか知ってるかしら？」

「なにその話？」

内容のわかっているアランの回答にリングアアで出回っている話を説明するフローラ女王ですが、その内容は伝言ゲームの如く少しずつ変化していったようで最後にはカール王国には天女がいることになっていました。もちろんアランにはこんな話に心当たりはまったくないのでまさか自分が発端だとは思ってもいません。

そして今この場では「リングアア王国の中ではフローラ女王という存在は魔王を倒す力も人々を救う力も、失ってしまった命をも取り戻すような力すらも与えた奇跡の存在となっている」という事を渦中の人物である本人が自分で説明するというおかしな状況になっています。これはこれでフローラ女王としても少々恥ずかしいものなのですが、アランに遠慮する必要はなかったという事で先にこのリングアア王国に蔓延っている



デマを正すことにしたのです。

「とりあえず私にはそんな奇跡の力なんて備わっていないって誤解を解いていらつしやい」

「えー…別にいいじゃんそれくらいさ」

「ダメに決まつてるでしょう。パウスン將軍もそのご子息も大変だったのよ…」

どうやら謁見したときのパウスン將軍の是が非でも恩義に報いようとする姿勢とノヴァくんの懺悔すらも含まれた救いを求める様子に、若くして女王に即位し国家を導いてきたフローラ女王としても対応に困ってしまったようです。もし地上の国々が一つに団結して戦うことになった場合、パウスン將軍たちの熱心な働きかけによってフローラ女王が聖女扱いで旗頭にされるのはまず間違いないでしょう。

とはいえエアランとしてはわざわざリンガイア王国に戻ってまで説明するような手間をかける気もありません。友人であるフローラ女王が他国からも畏敬を集めているのであればそれで良いじゃないかと思っておらず、それを自分が受けるなど真つ平御免というのが正直な感想でした。

「まあまあお姫様も少しは落ち着こうよ。どこかが文句言ってきたんなら俺が何とかするけど、何も無いならこのままでいいじゃん」

「あなたは昔からそういうところがあるわね。あの時も…」

宥めているようでまったく宥められていないアラン。しかももしどこかの国が文句を言ってきた場合に何をするのか不安しかありません。アルキードで恨みを買ひ、パプニカで恨みを買ひ、リンガイアでは良い事をしてきたはずなのに何故か信仰を集めているのです。そんなアランが出ていってきちんとして解決できるなどと誰が期待できるのでしょうか。

「そ、それは後で話してもらおうとして、話の本題に入りましょう！」

「魔界の話？俺とアバンとバランが行くとして、てかみんな行きたいって言ってたよね」  
フローラ女王とアランの話に収集がつかなくなりそうな不穏な空気を感じたアバンが慌てて一番大事な議題の話に入り、アランが続くように魔界に行くパーティメンバーの話振っていきます。そこにはバランだけでなくアバンまでも決められているのですが、これはアランからすれば勇者なのだから行って当然というだけです。

しかしこの話し合いがすぐに解決することはありませんでした。その理由は全員が全員「自分も行く」と譲らなかつたためです。そして更に…予想していない人物たちまで登場し名乗りを上げだしてしまつたのです。

「はいはい！私も行ってみたいです！」

「レオナ？あなたパプニカに帰つたんじゃないやなかつたんですの？」

なんとこの場に現れたのはレオナ姫でした。後ろにはお付きの三賢者も控えており、

立候補するためのタイミングを見計らっていたのは間違いありません。シンシア王女が親しく名を呼んでいるところから友人として仲良くなれたようですが、パプニカ王国へ帰ったと思っていたレオナ姫がこの場に現れるのはシンシア王女としても予想外だったでしょう。

アバンたちもシンシア王女もレオナ姫の行動力を甘く見ていました。

レオナ姫はアバンたちの話を聞いて、地上からいなくなるのは別の何か大事な事があると予想したのです。しかしアバンたちにそれ以上問いただしても教えてはもらえないだろうというところから、都合よく交友を温めておくといいと紹介されたシンシア王女とディーノくんから聞こうとしたのでした。そしてシンシア王女がやって来るまでの間一緒にいたディーノくんが獲物として狙われてしまったのです。

一応レオナ姫とディーノくんは初対面ではありません。話す機会こそありませんでしたが、アバンと一緒にパプニカ王国に救援に行った際にお互い顔は合わせているため改めてお礼を言うのにちょうど良い機会でもありました。しかしそれはそれ、アバンたちとの話で気になっているレオナ姫はこれ幸いと明らかに年下のディーノくんにあバンたちには聞けなかった事をあれこれと質問していったのです。最初は和やかな雰囲気だったのですが、しつこく聞かれたり泣き真似など手段を選ばない方法を使われた結果……ディーノくんは魔界に行くということをつい言ってしまったのでした。

しかしこれについてディーノくんを責めることもできません。幼馴染であるシンシア女王と何処となく似ているレオナ姫だったためディーノくんとしても無下にすることもできず、そして素直な性格が災いしてポロッと零してしまっただけなのです。

「うう…みんなごめん」

「ディーノ、そう気にするな」

魔界に行こうとしている事を話してしまつて萎縮しているディーノくとそれを慰める balan：恐らく balan としても積極的な女性に弱いところがあるため、そんな自分譲りな部分に思うところがあつたのでしょう。レオナ姫に知られる程度なら吹聴さえされなければ問題になるような内容でもなかったのですが、思わぬところで自分に似たところが発見され嬉しいながらも少しだけ息子の将来が心配になつた balan でした。

「まあレオナ姫たちが知つてしまつたのなら仕方ありません。当然ですが他言無用でお願いしますね？しかし魔界に行くことを知つているのなら理解していると思ひますが、あなたを連れて行くことはできませんよ？」

「やつぱりそうですよね…でもせめて私も何か協力したいです！」

レオナ姫も持ち前の性格で明るく表明していますが不安がないわけではありませんでした。

目の前にいるアバンたちは自分が生まれる前から魔王たちと戦い、更に今度は大魔王

さえも倒して地上の平和を守り抜いた本物の英雄たちです。そんな歴戦の戦士たちに比べれば自分はただの小娘でしかないと思われても仕方ないのは理解しつつ、それでもただ黙って平和を享受することを良しとしない心を持っていました。正義の心を持つたレオナ姫であればきつとパプニカを、そして地上を守る一助となってくれらるでしょう。

仮にですが輝聖石で出来た正義の印的な物があれば光っていたかもしれない。

アバンとしても知られたからといって公にさえされなければ問題のない話でもありませんし、レオナ姫ならば勇者たちがいないカール王国を今のうちに…などといった事も考えないだろうとも思ってもいました。もちろん一緒に魔界に連れて行くなどというのは論外ではありますが、自分たちがいない間に地上の平和を任せる事ができる人物がカール王国以外の場所に1人でも多く存在してくれるだけでもありがたい事です。

「ならば…オレを連れて行ってもらえないだろうか」

レオナ姫にダメだと告げながらもその気持ちには感謝していたところ、次に立候補してきたのはこの場に連れてきていけないと言っていたはずのラーハルトだったのです。ラーハルトはバランたちから魔界へ行くという話を聞き、居ても立ってもいられず直談判するためにこの場に現れたのでした。

普通なら王宮の中の女王たちがいる場に簡単に出入りすることができはずがあり

ません。レオナ姫の場合はパプニカの王女という地位があるため…そしてその前までアバンやシンシア王女と接触していたのでまだ可能なのですが、ラーハルトはフローラ女王たちと面会をしたといっても王宮内を気軽に歩ける立場ではありません。

「どうしても直接頼みたいと言つてな…すまん」

しかしラーハルトがこの場に現れることができたのはどうやらバランのおかげのようでした。ラーハルトの生い立ちに思うところがあり、本人から戦う以外に身の立て方を知らないと言われればバランとしても他に助ける方法を知りません。これは一緒にいたヒュンケルも同じでどうすればいいのかわかりませんでした。

たとえカール王国にやってきたとしても、魔族の風貌が色濃いラーハルトが城下町などで普通に暮らすというのは実際問題として難しいでしょう。バランたちと同じく王宮内で暮らすというのは更に反発が起こる可能性が高いのは言うまでもありません。そして本人が強く魔界行きを希望しているため、バランたちもそれを無下にしたくないという気持ちも持っていました。

しかしバランやヒュンケルの一存で連れて行くとも連れて行かないとも決められることではありません。その結果悩んだバランとヒュンケルは「結果がどうなるにせよ、せめて納得できる場を用意してやろう」と考えたのです。その上で機を窺つてラーハルトに登場してもらおうとしたのでした。バランがこうした他人の悩みに寄り添えるよ

うになったのは『人の心』を持つが故のものなのでしょう。

「魔界に行くメンバーは後で決めるとしてさ…大魔王のどこから持って帰ってきた武器を運んできたから、とりあえずそれを見ておかない？」

「ああ、そういうえば一緒に宿屋に取りに行きましたね」

「強力なのかどうかはわからないけど、大魔王の城にあつたんだしそこそこ使えると思うんだ」

大魔王の宮殿で戦利品として持って帰ってきた武器たちをミナデインの実験の後に宿屋に取りに行っていたため、魔界行きのメンバーを決める前にそれを披露したいとばかりに机の上に並べていくアラン。

本来もっと重要なはずのバーンパレスにあつた如何にも怪しげな凍った黒い球体の事など既に忘れてしまっています。きっとこれからもバーンパレスはそのまま天へと浮上していき、もしその先に天界があるのであれば大魔王の居城が天界に登場するとうことになるのでしょう。天界の住人たちも大魔王の宮殿が現れた事に驚きつつも、そして黒の核晶が5つも搭載されていることに更に驚きながらもきちんと処理してくれるはずです。

アランが並べた武器は剣と槍と杖でした。過剰な装飾を施しているように見える剣

と槍に対して、杖は何か絡みついているようなデザインを除けば普通に見えます。しかし大魔王の宮殿にあったのだから当然の事ながらそれらはただの武器たちではありません。

もはやその名を知っている者がこの世にいるのかわかりませんが、それは確かに『鎧の魔剣』『鎧の魔槍』更に大魔王の使用する武器である『光魔の杖』と呼ばれる物たちでした。しかし残念な事にこの場にそれを説明してくれる者がいないため、ただ装飾過剰な武器にしか見えていません。もしここにそんな武器の製作者である魔族でもいれば喜々として教えてくれたかもしれませんが、きつとこのまま本来の機能は使用されず、『鎧化』<sup>アムト</sup>と叫ばれる事もなく使われていく事になるでしょう。

そしてその武器たちと合わせて、更にそこにアランが武術交流会で優勝して手に入れた『覇者の剣』もあるのですから全体で見れば装備の大幅なレベルアップなのは間違いありません。

これで強力な武器も手に入り戦力としては申し分ないまでも、しかしこの場に集まる面々が全員で魔界に乗り込むというわけにもいきません。リンガイアの一件が明るみになる事によってアランが蘇生呪文を使うことができることが判明しました。そしてアランが蘇生呪文を使えるということ、戦闘面ではそのアランによって育てられたと言っても過言ではないシンシア王女もまた蘇生呪文が使えるということがわかったの



です。魔界という人智の及ばない場所に挑むのにはやはり万が一を考えればこの2人は魅力的な戦力でしょう。

とはいえ大魔王との決戦の時のように、守りを担う人員というのは必要になってくるものです。魔界へ行ってマザードラゴンを助け邪悪を滅ぼしたとしても、地上に戻ってきた時にカール王国がなくなっているのは意味がありません。もちろん大魔王による侵略が終わって地上に平和が戻ってきたというのに、それをすぐに乱すような事は起きないと考えたいものですが絶対とは言いい切れません。

そのためそういった要素を加味すれば回復や蘇生まで行えるアランとシンシア王女を分けておいたほうが、地上と魔界どちらがどちらを担当するとしても安心できる材料となります。そしてそうなればどちらが残るかなど選ぶまでもなく決まっていることでした。

「ディーノ、シンシア：お前たちは残って母さんたちを守っていてくれないか」

「父さん：でも、おれたちだって一緒に戦いたいよ！」

「おじさま、私もディーノと同じ気持ちですわ！それに私がいればあの呪文だって使えるんですもの：一緒に行ってもいいでしょう？」

基本的に良い子なので聞き分けの良いディーノくんとシンシア王女ですが、今回ばかりは balan からの言葉に納得していないようでした。balan としては魔界という環境

を知っている唯一の人物のため、そんな危険な場所へ連れて行きたくないという親心もあるのでしょうか。

しかし子供たちにとってもそれを簡単には飲み込めない子供たちなりの気持ちがあつたのです。

確かに自分たちは周囲にいる大人たちに比べれば及ばないことは理解していますが、だからといって何もせずに待っているだけというのは我慢できないのでした。そしてそれは大魔王との決戦によってマトリフとブロキーナを失ったという事が起因しています。アランは奇跡的に舞い戻ってきましたが、ただ待っていて親しい人物がいなくなるというのは子供心に不安を覚えてしまっても仕方のない事なのでした。

そんな子供たちの秘める気持ちを聞かされてしまえば、バランとしても簡単に却下するわけにもいかなくなってしまいます。もちろん魔界へ行つたとしても誰も死なせないという決意はありますし、仮に万が一があつてもアランがいれば蘇生もできるという事はわかつていてもそういう問題ではないのでしよう。

更に交換条件とばかりにシンシア王女が出てきたのは「自分がいればミナデインが使えるよ!」という拙い取り引きでした。果たして魔法力を受け渡すのが3人必要なのかわかりませんが、先程実験的に試した時にシンシア王女も協力しているためそこを突いてきたのです。

「それでも私の力に不安がおりと仰るのなら、この後アランから奥義を教わつて参りますわ！」

「シンシア、そういう問題ではないのです。ここは我々に任せておいてくれませんか？」  
「お父様まで……」

そんな大人の心配を自身の力不足と捉えたシンシア王女が考え出した答えは、まさかの『アランからメドロアや閃華裂光拳などを伝授してもらう』という飛び抜けたものでした。しかしそれを聞いてますます連れて行くわけにはいかなくなつたアバンが宥めるも、シンシア王女のほうは納得できるはずありません。

しかしアバンのほうにも思惑というよりも言い分があるのです。

シンシア王女の言い方ではアランの持つ奥義を教えてもらうということになります。それはつまり閃華裂光拳やメドロアだけでなく『生命エネルギーの使用』についてまで余すところなく教わるという意味にも聞こえます。アバンは大魔王の戦いを直接見た唯一の存在であり、そのあまりにも苛烈な戦いぶりは決して娘にさせたい戦い方ではありません。

命すらも薬草などと変わらぬ消耗品かのように使うアランのあの戦い方を見て、それを真似させたいと思う親はいないでしょう。とはいえあの時は大魔王以外にもオリハルコンの軍団が敵として存在しており、その形勢をひっくり返すためだったので行動自

体は仕方ないと納得できるものでした。

仮にアバンが仲間を守るためや道を切り開くためなどで、それが必要と判断すれば迷いなく自分の命を使うでしょう。後ろにいる者を守るためにアストロンで影響がないようにしてからメガンテを使うことだつてあるかもしれませんが。そんなアバンの血を引く娘であり、実際に生命を振り絞つて大魔王と戦いきつたアランの影響を色濃く受けているシンシア王女が『いのちをだいじに』してくれるとは残念ながら思うことができなかったのです。

こんなことなら冷静に後衛としての立ち回りをしてくれていたマトリフにも教えを授けてもらつていればよかつた……と考えたりもしましたが、よく考えてみればマトリフも最後は大魔王バーンに少しでもダメージを与えるために自爆しているのでやっばり命を大事にしてくれないかもしれません。

客観的に見てみるとアバンもアランも……そして balan さえも結構簡単に命を捨てたり使つたりしそうなところがあるので、全体的に作戦を考えるよりもそれを誰かが指摘して意識を改善することのほうが先決なのかもしれません。何せ当の本人たちにその自覚がないため、自分の事は棚に上げて子供の心配をしまつていたのでした。

ちなみに地上での守りという点だけで見るならアランが残るのが最適です。

仮に地上にいるモンスターたちがなぜか一斉蜂起して大魔王の仇討ちとばかりに

カール王国に襲いかかってきても容赦なく返り討ちにするでしょう。更に仮定の話として万が一アルキード王国が国の存続を懸け総力を以って戦いを挑んできたとしても、きつとアランは「ムーンブルクのな国はあつたほうがいいってシナリオなのかな？」などと曲解しながら滅ぼしてしまうでしょうし、そうなつたとしてもアルキードはカール王国にアランの文句すら言えないという非常に厄介な第三勢力扱いとなつてい

す。  
もちろんアルキード王国はそんな短慮な真似はしないでしよう。

唯一あつたソアラ王女を取り返すチャンスも「このために地獄から舞い戻ってきた」とさえ思われているアランによつて阻止されているのですから、もはやアルキード王国が次期女王であるソアラ王女を取り戻すには今ある事実をすべて認めて家族と共に自主的に帰ってきてもらうしか方法がありません。一般市民や貴族の中でも跡取りでなければ家を飛び出して子供を作つていた娘を迎え入れるのはそう難しいことではないのですが、血筋や面目といった部分が大いに影響する者たちの側である王家としてはなかなか受け入れるのに時間がかかることでもあります。

冷静に竜の騎士という存在をきちんと理解させ事実として認めさせることができれば対応もまったく違ったものになるかもしれませんが、残念なことに竜の騎士の証明ができそうなテラン王国は魔王軍の被害によつてもはや消滅してしまつたと言える状況

となつてしまつています。そしてソアラ王女が国を出た経緯などからもアルキード王家を取り巻く環境は決してバランたちに良いものと思えないこともあり、アバンやフローラ女王でさえも他国の王宮問題に口を出すわけにもいかないという事もあるため積極的に間を取り持つということはできていなかったのです。

ソアラ王女たちがカール王国へやってきて10年以上の月日が経つても未だにその状態であり、そして今回の魔王軍の策略や武術交流会での出来事によつてアルキード王国に燻る恨みの火種がまだ根強く残つてることがわかつたのです。そういった事もデイーノちゃんとシンシア王女にカールに残つて「母さんたちを守つてほしい」とバランが言つた一因でもあつたのでしよう。

パプニカ王国は今回レオナ姫と話すことができ色々事情もわかつたので、これから良い方向に向かつてくれることを願うばかりです。パプニカ国王ももしかしたらレオナ姫たちの話を聞いて改めて王宮の内部改革に乗り出すかもしれないかもしれません。少なくとも暗黒闘気によつて負の感情を増幅されていたとはいえ、大臣たちの身勝手な暴走を許すような真似はしないでしよう。

魔界へ行くことを自身で強く決めているのはアランとバランのみなのですが、他の仲間たちもその席を譲る気配はありません。そのため魔界へ赴いても戦えるだけの実力を有しているかをテストしてみるとという脳筋的な結論へと至りました。

今ここに魔界行きの手ケットを懸けた戦いが始まるうとしており、その様子は大魔王が言っていた「力こそ真理」という言葉に何も反論できない状況です。やはり人間であろうと魔族であろうと最後は力が物を言うのでしょうか。

…

…

…

「大魔王を倒したその力…ぜひ拝見させていたいただきたい」

「ふむ…ヒュンケルとの対戦は見てたけど、俺でいいなら相手になるよ」

少し準備や休憩のため時間を置いて…なぜかお母さん2名やレオナ姫たちも含めた全員でまだミナデインの跡が残ったままの騎士団の演習場へと移動した面々。もちろんフローラ女王とソアラ王女…そしてレオナ姫は戦うわけではありませんが、もしかしたら子供たちや友人が魔界へ行く事になるかもしれないわけですし心配でもあり気になるのでしょうか。

そこで最初に名乗りを上げたのは部外者と言ってもいいラーハルトでした。何せバランたちの温情で参加させてもらっている立場であり、戦いでしか身の立て方を知らな

いという本人の言葉通りに戦って己を示す事しかできないのです。

槍を得手としているのはラーハルトしかいなかったため、そのラーハルトはアランの持つて帰ってきたお土産である鎧の魔槍を使って実力を測るための最初の模擬戦をすることになりました。相手はヒュンケルでもバランでもなくアランを指名しており、その言葉通りどうやら大魔王を倒した実力に興味があるようです。

アランのほうも武術交流会の様子は当然見ており、ラーハルトの俊敏さや槍を使った攻撃などはなかなかだと評価できるものでした。

しかし始まってしまえばそんなラーハルトの攻撃を紙一重で避けつつ攻撃を当てていくアラン：あくまで実力を知るための模擬戦であるため殺傷能力の高い技は使わず立ち回っているのですが、それはラーハルトにとつて遊ばれているに等しい屈辱的な行為でした。そしてムキになればなるほど攻撃は荒くなっていき、あくまでも1人で森の中で訓練していた程度の実力と他人と関わることの少なかつた精神性が顕著に現れていったのです。

「ハア：：ハア：：まさかここまで差があるとは：：」

「まだまだ修行が足りないみたいだね」

「最後に1つ頼みたいことがある。大魔王を倒したその本当の実力を見せてもらえないだろうか」



この結果アランの中でラーハルトは留守番に決定しており、それは明言せずとも本人も力不足を理解しているようでした。しかしだからといってそれで納得して終わり：とはならず、ラーハルトはせめて大魔王を倒したアランの本気を見てみたいということです。

これはかつて騎士団長ホルキンスがバランに頼んだ事と同じ事でした。だからといってバランは本気を出したわけではありませんし、アランだつてここでメドロアを放つたり閃華裂光拳を撃ち込んだりするほど考えなしではありません。

「わかった。覚悟はいいね？」

「ああ…オレはまだまだ強くなつてみせる…」

「ならその身で味わうといいよ。武神流のもう一つの奥義…」

…

…

…

「アラン……」

「いやほんと予想外の事って起こるもんだよね」

いつもの光景とばかりにフローラ女王に叱られるアラン：演習場ではバランがデイーノくんと模擬戦を行っており、アランは残念なことにお役御免になってしまいました。

アランが放った武神流奥義の1つ：猛虎破砕拳は大魔王戦では使われる事がなかったものの、物理的破壊力が一番大きい技です。ブロキーナからもその事は伝えられていたはずなのですが、アランの頭の中にはそんな事は抜け落ちていました。

もちろんラーハルトから頼まれた事でその実力を見せるところまでは良かったのですが、しかしまさか奥義の一撃でラーハルトが心臓を貫かれて即死するとは思っていませんでした。

それも当然の事であり、猛虎破砕拳はオリハルコン生命体であろうと貫くだけの破壊力を有した奥義です。それを半分は魔族といっても生身であるラーハルトに使い、ラーハルトもまたアランの本気の一撃を受ける姿勢でいたためこの結果は必然のものなものでした。

とはいえアラン本人的には「あ、やっちゃった」程度のものであり、そして意図せずアバンたちも初めて見るようになった蘇生呪文のお披露目の場にもなったのです。死者が蘇るといふ奇跡の光景であるにもかかわらず、それが自分の失敗の挽回のためという状況のためか当然ながら感動ありません。

しかし蘇生呪文を直接目にしたことでフローラ女王もアバンも「あ、これはリンガイアもああなるのは仕方ない」と思ってしまったのです。確かに魔王軍と戦って命を失ったのにこの光景を見せられれば、助けられた当事者らは多大な感謝が発生しても仕方ないと思えるものでした。仮に自分たちの大切な者が死んでしまったとして、他国からやってきた僧侶や賢者がこの光景を作り出したのなら確かに黙ってその恩を受けたままにする事などないでしょう。

そんな感想が出てくるほどに奇跡的な光景ではあったのですが、その前段階でやりすぎな事には違いありません。その結果アランはフローラ女王とソアラ女王と共に見学へと回され、フローラ女王からお叱りを受けつつ観戦することになったのです。

アランの被害者と言ってもいいラーハルトはというと、蘇生され治療されまさに元通りの状態になっています。本人も何が起こったのかを聞いて理解しており、死んだ事よりあまりにも手も足も出なかつた事のほうがショックのようでした。しかしそんな達人たちがいることをその身を以って実感し、ますます上を目指すという意欲に駆られて

いるようなので魔族の血はしっかりと流れているようです。

「あなたがやりすぎな事は間違いないけれど、それでも皆にとつては一步間違えばあなるという事を意識させるとという意味では良かったのかもしれないわね」

「…というところ？」

「直接死というものを見たり感じる機会のなかつたあの子たちにとつて、目の前で死というものを見たのは悪くないという事よ」

フローラ女王は魔王ハドラーの時代からカール王国を率いて戦っていた一人でもあります。そのため当然ながら騎士たちの死というものは経験していました。そのためかラーハルトに悪いと思いつつも、人の死というものを直接見る事になったのは悪い事ではないとも感じていたのです。今回はアランが自分で殺して自分で生き返らせるというふざけた事をやっていますが、蘇生呪文がなければ死というものは絶対の別れということを覚えさせる良い機会であるとも考えたのです。

やはり女王として国を治める以上は客観的に見る目も必要なのでしょう。母親としては子供にそんな思いをしてほしくないという気持ちはありつつも、魔界という自分たちでは想像もできないような過酷な場所へと赴かんとするのであればこれも必要な事という考えも持つていました。

「フローラ様がそう仰るなら私からは何も言いませんが…子供というのは意外と周りをよく見ているものなのですから、アラン様はもう少し配慮を覚えるべきですよ？」

「頑張つて努力してみます…」

フローラ女王の意見を聞いたことでザボエラの時と違いソアラ王女も理解を示してくれましたが、それはそれとしてアランには足りないものが多いという事は言われてしまいました。戦いの結果でありリカバリーできているので良かったものの、これが衆人環視の中であれば新しい問題が起こつていたかもしれないのです。このあたりはゲーム脳の弊害なのか…冒険に主軸を置き次は魔界で戦う事しか考えていないため出てきってしまう問題なのでしょう。

なおレオナ姫たちパプニカ組は目の前で繰り広げられる光景に言葉が出ません。

幼少の頃にパプニカでアラン対パプニカ賢者たちという戦いを観戦したことはありましたが、賢者として多少なりとも成長したと思つていた自分たちとのあまりの差に何も言えませんでした。ラーハルトはレオナ姫から見ても槍の達人と呼べるもので、とてもじやありませんが対戦したとしても太刀打ちできそうにありません。それを子ども扱いと言えるほどに翻弄し、更に息の根を止めたという普通なら大問題を起こしておいて何事もなかったように蘇生させているのです。

これがラーハルトが言つていたように大魔王を倒した英雄の實力…と、あまりの出来

事に呆然とするしかできませんでした。

「いくよ父さん！ライデイン!!」

「ほう…いつの間にライデインを覚えたんだ？」

そんなアランたちとは違い、演習場内ではディーノくんがバランを相手に自身の持つ力を見せていました。その手には覇者の剣が握られており、ディーノくんがこの模擬戦のために使わせてほしいとアランに頼んで貸してもらったのです。しかし当然の事ながら普通にライデインを放つても、バランに感心されることはあれど認められるわけがありません。

ところがバラン含む全員がディーノくんに驚かされるのはここからだっただけです。

ディーノくんはヒュンケルと同じくアバンから闘気の技を教えられています。大地斬から始まり空裂斬まで体得し、もちろんアバンストラッシュも放つことができますようになっていました。そしてあるかわからないアバンの書などという書物ではなく本人から直接アバンストラッシュも遠近あることを教わっており、そしてアランの戦いを聞

いたことで一つの閃きを得ることになったのです。

メドローアと武神流を組み合わせるといふ……遠距離の攻撃方法と近距離の攻撃方法を組み合わせるといふアランの戦闘をそのまま真似することはできずとも、遠近のアバストラツシユを合わせるといふ発想を得るヒントとなっていたのでした。

「まだまだ！うおおおおお!!」

それでもまだ終わらないとばかりに気合を入れるデイーノくん……するとその額に竜の紋章が輝き出したではありませんか。当然行き当たりばったりで賭けに出たわけではなく、デイーノくんは紋章が発現する事がわかつていたのです。

大魔王との戦いでアバンが帰還し、アランたち3人が帰らぬ人となった事はデイーノくんにとって大きな哀しみと自身の不甲斐なさへの怒りを齎しました。自身が物心付いた時からシンシア王女と共に3人で過ごす事が多く、大人ながら友人と言えるアランには多くの事を教えてもらいました。

そんな友人が大魔王と戦いなくなってしまうたというのはデイーノくんにとって大きな事だったので。もちろん自分がいれば助けられたなどという傲慢な考えは持っていませんが、何も役に立てなかつたという事実など様々な要素がデイーノくんを目覚めさせる切っ掛けとなつたのかもしれない。

「いくよーライデイン……ストラツシユ!!」

「そこまで使えるようになったか…だがまだだ！」

バランのようにライデインを覇者の剣に落とす、通常のアロータイプと呼ばれているアバンストラッシュをライデイン込みの魔法剣で放ったディーノくん。バランもその成長に喜びを感じつつ、しかしその程度では認めてやれんと迎撃のため構えていました。

それでも十分な威力を持っているのですが、ディーノくんがアランの戦いから得たのはここまでではありません。

「ここちもまだ終わってないよ！ライデイン!!」

アロータイプのライデインストラッシュに追従するように自身も飛び出し、再度ライデインを纏った剣を構えたディーノくんはそのままブレイクタイプと呼ばれるアバンストラッシュを重ねて放ったのです。

「これが…おれの想いのすべてだあ!!!」

「うおおお!!」

これには見ていた者たちも、そして相手になつていたバランも驚きました。竜の紋章を発現させ、魔法剣を使って見せ、更に闘気技を放つただけでなく重ね合わせるという事までやってみせたのですから子供の成長は早いなどと感心している場合でもありません。



その威力は危険を感じるどころではない程のものであり、 balan は瞬時に竜鬪気を全開にして防御の姿勢を取りました……が、それでも balan の竜鬪気を貫くほどの威力を持つており演習場が爆発で包まれるほどでした。

これがデイナーノクンの覚悟を現した決意の一撃であり、形は違えどアランの戦いとどこか似ている戦い方でもあったのです。遠距離と近距離を、魔法と鬪気を組み合わせた発想は確かにアランの戦い方を思わせるものでした。

そして何よりも父親の魔法剣を、勇者の鬪気技を、そして賢者の戦い方をすべて融合させたそれは見ている全員が驚くのも無理のない事です。それを悩みながらも自身で編み出し土壇場とはいえ完成させて放つてみせたのですから、それだけの思いが込められている一撃だったのでしょうか。

「……見事な一撃だ」

爆発が晴れたそこには……ダメージを負った balan が立っていました。ところどころから血を流してはいますが、それでも balan は息子の想いを受けきったのでした。とはいえライデインストラッシュシユクロスとでも呼ぶべきそれにより、 balan がかなりのダメージを負ったのは間違いありません。竜鬪気を全開にして防御に回ったというのに、

それでもその防御を貫いてきたのですからその威力は相手を選ばなければいけないほどのものを持つていたのです。

ちなみにこれはただの模擬戦です。

覚悟を示す一撃は良いのですが：アランがやりすぎて叱られていたというのに、デイーノくんも相手が balan でなければアランの二の舞いになっていたかもしれない。もちろんその場合は再度アランが蘇生呪文を唱えるだけなのですが、その後母親たちからお説教を受けるのは間違いないでしょう。

「……………」

「デイーノよ、お前の想いの程は確かに見せてもらった。もう私から反対することはあるまい」

「つ…やったあ!!」

不安そうに balan を見つめていたデイーノくんですが、どこか嬉しそうな balan からの答えを聞き嬉しさを抑えることができませんでした。それでもダメだと言われてしまえば諦めるしかなかったという事もあります。今までは守られるだけだっただけに認められたという思いもあったのでしょうか。

そしてそんなディーノくんの戦いぶりを見て周囲も驚きを隠せませんでした。

アバンやヒュンケルだけでなく、シンシア王女や生き返ったラーハルトもその凄まじいまでの攻撃に：そして今までは子供だと思っていたディーノくんの成長にです。それは決して竜の紋章が発現したからという理由だけではないことは明白であり、それだけの思いを抱えていたということでもありました。

そしてそんな子供の成長を驚きと共に見守っていたアランたちですが、当然ながら成長しているのはディーノくんだけではありません。ディーノくんもアランとは10年以上一緒に過ごしていますが、同じだけの時間を一緒に過ごしている女の子がそこにはいたのです。

「お父様、次は私の番ですわ」

「では次はシンシアの力を見せてもらいましょう」

息子の成長を直に見せられその予想以上の結果に満足気なアランたちは治療のために下がり、次はアバンがシンシア王女の相手をするということになりました。シンシア王女の相手であればまったく同じ攻撃手段を持つアランのほうが適任なのかもしれないのですが、やはりそこは自分が魔界へ行くことに反対している父親を認めさせたいというディーノくんと同じ気持ちがあつたのでしよう。

「バイキルト！ スクルト！ ピオリム！」

そしてシンシア王女の戦い方といえば当然アランと同じものです。補助魔法を自身に施し武神流を以って接近戦を行ったり、上級攻撃呪文で一方的に遠距離からダメージを与えたりと武闘家と賢者の両方を組み合わせた敵に回すと非常に厄介な戦い方なのです。

その戦いぶりにアバンは防戦一方になりながらも、それでも15年以上共に戦ってきたアランの戦い方を近くで見ているだけにその程度でやられるはずありません。そして何よりも奥義を伝授されていない事実はシンシア王女にとって決定打がないということでもありました。

これが普通の人間や魔物が相手なのであればすぐに決着はついていたでしょう。それでも倒せないのはこの場にいる面々の戦闘力がおかしいだけなのですが、そんな中で認められようとするならば普通ではやっていけないのかもしれないかもしれません。そしてシンシア王女もまたそのためならば手段を選ばないアランの教えを受け継いだ女の子だったのです。

「シンシア、強くなりましたね」

「まだ…私の番はまだ終わっていませんわ!」

アランやバランの時と違い、アバンはこれがシンシア王女の実力を測るための模擬戦であることをしつかり理解しています。そしてシンシア王女は十分に成果を出し、アバ

ンとしては認めても良いという考えになっていました。ラーハルトの時やディーノくんの時と比べれば甘い判定と言われるかもしれませんが、アバンくらいが正常であり他が異常なだけなのです。

最終的に誰が魔界へと行くことになるかはまだわかりませんが、十分に実力と覚悟を見せたのならばこれ以上反対するのは親のエゴでしかないと認める姿勢だったアバン：しかし当のシンシア王女本人はまったく納得しておらず次の攻撃を行うべくアバンに接近していました。

「これが…今の私の全力ですわ!!」

まさに流水のように：そしてアランの猛虎破碎拳を思わせる動きで繰り出されたシンシア王女の拳が当たると同時に、シンシア王女の叫びと同時に身体から稲妻が吹き出すように出てきたのです。ついにシンシア王女はギガデインを習得したのかとも思いましたが、その手には何と魔弾銃の弾丸が握られておりアバンは稲妻を纏った一撃の理由を瞬時に悟りました。

実はシンシア王女は準備の時間の間にアバンの部屋に1人でこっそり忍び込んで魔弾銃の弾丸を持ち出しており、更にバランに頼んでその中にギガデインを入れてもらっていたのです。そしてそれをただ放つだけでは当たらないと思い、そしてディーノくんと同じくシンシア王女もまたアランの戦い方を参考にしていたのでした。

当然ギガデインはシンシア王女にもダメージを与えており、バランのギガブレイクのような完成された技ではありません。それでもメドロアも閃華裂光拳も教えてもらっていないシンシア王女が精一杯に考え出した答えがこれだったのでしよう。生命エネルギーを使っていないとはいえ、自傷ダメージ付きで相手の不意を付いて特大ダメージを与えるのなどソツクリな行動でした。

アバンとしては『それ』をやってほしくないから奥義の伝授などを反対していたというのに、まさか他から手段を持ってきて実現するなど想像もしていません。もしかしたら認めようと思っていたのに今の行動で逆効果になってしまいかもしれない自爆行為なのです。

とはいえ自分に足りないものがあれば他から持つてくるというのはアバンが行う方法でもあるため、ある意味自分に似たとも言えるその行動自体は責められるものではありません。自分で一生懸命考えて皆に置いていかれないようにと行った事は悪いことではないのですから…

もしかしたらアバンだつて弟子を守るために自爆して奇跡的に生き残つたとしても、力不足を実感しすぐには合流せず新しい力を求めて修行していたということがあつたかもしれません。そして手に入れた力を引つ提げて再度現れていたかもしれないのでシンシア王女の行動など可愛いものなのです。

「シンシア、あなたもよくがんばりましたね」

「お父様、それでは…」

「ええ、結果がどうなるにせよ私もあまりうるさく言う事はしません。ただあんまり無茶してはいけませんよ？」

優しい表情のアバンからの言葉を聞き、シンシア王女も焦げてプスプスしながらも認められた事でそんな痛みなどよりも喜びのほうが勝ってしまいました。とはいえやったことはギガデインを直接その身に浴びたのと同じことであり、アバンとシンシア王女も治療のためにひとまず休憩することになったのです。

「アラン、あの子がああなったのはあなたのせいよ？」

「いやアバンとお姫様にソックリじゃん」

シンシア王女の戦いを見てフローラ女王は呆れながらアランの影響を受けていると言い、アランは両親にソックリだと感想を言っています。少々アランの影響が濃くありませんが、それは戦闘でというだけでやはりアバンとフローラ女王の子供だと思わせる部分も多々あったのです。

アバンもフローラ女王も決して「女の子だから」という理由で戦わせないなどといった事はしません、しかし言いたいのはその戦い方のほうなので原因はやはりアランなのでしよう。アバンとシンシア女王の激しい戦いを見ておいてそんな感想が出るあたり、フローラ女王にとってはもはや今更な事なのかもしれません。

「アラン様…お願いがあるんです」

「どうしたの？」

「私にも魔法の使い方方を教えてくれませんか？」

そんな和気あいあい(?)とした会話を聞きつつ、しかしレオナ姫は何かを決意したようにアランにお願いがあると弟子入りを頼み込みだしました。これはもともと武術交流会で優勝した魔法使いに聞こうとしていたことではあったのです。そしてその正体がアランであることがわかり、今この機会を逃せば何時になるかわからないと思いつつて声をかけたのでした。

何せ今までのラーハルトやディーノくんの戦いは自分には何の参考にもならないほどのものでしたが、シンシア女王の戦いはすぐには難しいまでも自分にも得られるかもしれない強さだと思つたのです。一般的にアランは賢者と呼ばれており、戦闘面ではそんなアランに育てられたと言えるシンシア女王も当然賢者と呼ばれることもあります。



その他の賢者に比べて遙か高みにいる賢者ですが、それでも賢者であることに違いありません。そしてレオナ姫はまだまだ駆け出しなれど『賢者の卵』と呼ばれているのですから、遠い道のりであつたとしてもレオナ姫にだってできないはずはないのです。

もちろん現時点でレオナ姫とシンシア王女の差は非常に大きなものです。今からレオナ姫がシンシア王女に追いつき同じ強さを得ようとするのであれば、武神流を学び数々の呪文を契約しそれらを使いこなすだけの技量を身に着けないといけないという過酷な道程が待っています。それでもライデインやギガデインといった伝説の呪文を覚えろと言われるよりは遙かにマシであり、何もせずに見ているだけではないといふ気持ちでレオナ姫を動かしたのでしよう。

「レオナ姫、悪いことは言わないからやめておきなさい」

「そうよ、強くなりたいたいならアバン様に…なんだつたらバランにお願いしてあげるから」  
しかしレオナ姫の願いは頼まれたはずのアラン本人ではなく、横で聞いていたフローラ女王とソアラ王女によって断られてしまいました。これは決して嫌がらせなどではなく、レオナ姫の事を思つての事なのはどうもありません。

ソアラ王女などアバンに頼むほうが良いと助言するどころか、更にバランまで紹介するよという聞く人が聞けば破格のような条件まで提示しています。それはアランの特訓が厳しいから…という理由だつたら良かったのですが、単純にアランが何をしだすの

かわからないからという理由からのアドバイスだったのでした。もし仮にパプニカの王女が特訓中に命を落として蘇生させられていたなどとなったら、いくら大魔王を倒した賢者の修行とはいえきつとパプニカ国王だつて黙っていないでしょう。

「うーん、教えるのは別にいいんだけどさ……今のレオナちゃんの強さがわからないから、とりあえずヒュンケルと戦つて見せてよ」

「……え？」

アランとしては魔界への冒険を遅らせてまでレオナ姫を鍛える意味はありません。一朝一夕で強くなれるのならそれでも良いかもしれませんが、わざわざ低レベルの足手まといをパーティに入れるような縛りプレイをするタイプではないのです。そのためまず今の強さを確認しようと思ひ、そして現在まだ戦っていないヒュンケルと戦わせることでどれくらい動けるのか見てみようと思つたのでした。

「待てアラン。なぜオレがその姫と戦わねばならん」

「だつてバランとアバンは休憩してるし、俺はダメつて言われてるなら相手するのヒュンケルしかないじゃない」

もちろんこれを聞いたヒュンケルとしては不満しかありません。デイーノくんの：そしてシンシア王女の思ひをぶつける熱い戦いを見せられて、次は自分の番だと意気込んでいたら明らかに弱そうな姫が相手だと言われたのですから文句の1つも出てしま

うのも仕方ない事です。

普通ならアバンやバランが止めるところなのですが、そんな2人はなぜか状況を見守っておりアランを止める様子が見えません。そのため「とりあえずやってみなつて」というアランに背中を押されてヒュンケルとレオナ姫は演習場の中央へと歩いていったのです。

明らかに話が違えばかりにオドオドしているレオナ姫を見て、小動物への庇護欲的なものが湧くことはあつても戦闘欲が湧くことなどないヒュンケルはどうしたものかと困ってしまいました。どれだけ好意的に見ても戦いの経験があるようには見え、見た目は似ていてもシンシア王女とは大違いです。

もしシンシア王女が相手であつたならばヒュンケルは迷うことなく戦っていたでしょう。何度も手合わせしていますし、離れていれば遠距離からの攻撃呪文を撃つてきて距離を詰めても武神流で戦ってくるのですから相手としては申し分ないのです。では目の前の相手はどうか：と足運びなどからも明らかに素人なのがわかりますし、その表情は予期せぬ展開に戸惑っているのがよくわかります。

「本当にいいのか？下手をすれば怪我ではすまないぞ」

「そうよね！いきなりこんなか弱い女の子と戦えつて言われても困るわよね！」

「ヒュンケル、別に遠慮しなくていいよ。もし死んだら生き返らせてあげるしさ」

攻撃してもいいのかを問うヒュンケルとそれに乗っかるレオナ姫：しかしその逃げ場を塞ぐように出てきたアランの言葉に2人は驚くばかりです。確かにアランはラーハルトに遠慮なく奥義を放って殺しておいて生き返らせています。しかしそれはラーハルトもアランの実力を知りたいと望んだ結果であって、戦う気のない相手に技を放つのはわけが違います。

そしてレオナ姫にとってアランの言葉はただの死刑宣告でしかありません。

逃げることもできず戦って勝てるわけもなく、更に死んでも生き返らせるということは降参すら許されないといいことでした。勇者パーティーに憧れ少しでも近づけるようにと思っていたのですが、どうやらこの場はレオナ姫にとって『魔王たちが満足するまで弱者が翻られる様子を見せて楽しませる遊技場』のようにも思えてきました。

そんなレオナ姫が勝手に追い詰められている事など知らないヒュンケルにとってこの場は魔界へ行くだけの意思と力を持っている事を示す場所であり、既にディーノくんもシンシア王女は確かな実力でそれを示し認めさせていました。もちろんヒュンケルも魔界へと行く気は十分持っておりそれを示す事に躊躇するつもりはありませんが、一方的に翻るような事をするつもりもないのです。

「止めだ…オレにはできん」

もはや涙ぐんでいるレオナ姫を見て、ヒュンケルは力を見せることはしませんでし

た。もしこれで魔界へ行く事ができなかつたとしても後悔しないと思う事ができ、むしろ無抵抗の女の子をただただ傷つけるほうが恥だと思えたのです。

「ヒュンケル、よく思い留まってくれましたね」

「フツ…やはり試されていたのか」

どうやらアバンとバランが止めなかつたのはヒュンケルを試していたという理由からだったようです。魔界という力こそすべてな場所へ行くという事は、同時に力に飲まれない心の強さが必要なのでした。特にヒュンケルは養父の仇討ちという理由で力を磨いてきた経緯があつたため、レオナ姫というただの女の子と戦えという場でどういった行動をするのかを見定められていたのです。

それは獅子の檻にウサギを放り込んで好きにしたいと言っているようなものであり、更にそのウサギが死んでも蘇生させるから問題ないという極上の条件を出されているようなものでした。起こるかもしれない万が一が万が一でなくなるのであれば、相手を傷つけることを厭わずに己の力を示す者だつて出てくるでしょう。

しかしそんな中でも相手を慈しむ心を持つているのかをアバンたちは見ていたので

す。  
まるで出来レースだったとでも言うように「そうだったのか」と周囲が納得している中、なぜか片棒を担いでいた事になっているアランは思っていた展開と違うことを不思

議に思っていました。ヒュンケルとレオナ姫を組み合わせたのは人数の関係でしかなく、そして今から起こるのは、ディーノくんたちと同じような思いをぶつけあう熱い戦いになると予想していたのです。

レオナ姫は自分から「魔界に戦いに行きたい」と立候補していましたので、最低限力ンダタ役であるハドラーと戦えるくらいの力は持つてしていると認識していました。大魔王バーンを倒した後に仲間になるのなら、どれだけ弱くてもそれくらいの強さは持つているのが当然だとも考えています。そして自分に弟子入りしようとしたことから、今よりももっと強くなりたいという気持ちを持つて言ってきたのだと思ったのです。

そんな出汁にされた立場だとも言えるレオナ姫はといえば、それを怒ることなくむしろ真意を知り安堵していました。いくら強くなりたいと言って自分から望んだとはいえ、戦いなど経験したことがないのに突然放り出されてもできるはずがないのです。そして当然ながら相手に一方的に切り刻まれて折れないような心を持つているわけでもありません。

しかしそんな自分だったからこそ、アランはヒュンケルの相手に自分を選んだんだろう：とレオナ姫は精神の安定のためかまったく見当違いの方向に考えていました。まさかヒュンケルといい勝負をすることを望まれていたなどは夢にも思わないでしょう。むしろレオナ姫の立場で言えばそんなアランではなくフローラ女王に弟子入りす

るのが一番正しい道なのです。

「ならもう一度オレにその男と戦わせてもらえないだろうか」

そう言ってきたのはラーハルトでした。アランによつて命を失い蘇生されるという結果を受けてもその闘志は失われていないようです。そして武技を見せるのではなく心の強さを試されていたヒュンケルの相手を望んだのでした。もちろん武術交流会で戦っているのでヒュンケルに及ばない事は理解しているのですが、それでも負けたままではいたくないのか再戦を希望したのです。

本来ならアバンか balan が相手をするのが正しいのですが、その熱意を受けてラーハルトとヒュンケルが戦うという事になりました。

「それじゃあ改めてレオナちゃんの手は俺がしようか」

「アラン様と…ですか？」

ラーハルトとヒュンケルが戦う様子は balan とディーノくんが見ており、もはや状況は各々が腕を上げる場となつてしまつていました。ラーハルトの今よりもつと上を目指すという闘争心には balan も感心しており、時折助言などを送りながら2人の戦いを見守っています。 balan としても剣を教え成長を見てきたヒュンケルと良い戦いをし

ているラーハルトをも育てたいという欲にでも駆られているのでしょうか。

そのためヒュンケルとの茶番試合で戦うことのなかったレオナ姫の相手としてアラシが立候補したのです。もともとどれだけ戦えるのかをヒュンケルの相手をする事で確認しようとしたというのに、何もすることなく終わってしまったため自分で試してみることにはしたのです。

一応本人から「鍛えてくれ」と言ってきましたし、これからそんな時間も取れないだろうから今のうちに少しくらい手伝ってあげようという善意の提案だと本人は思っています。もしかしたらレオナ姫のほうは少しだけ先の発言を後悔しているのかもしれませんが。

アランからの言葉を聞いたレオナ姫は少々戸惑っています。それも当然の事です。

レオナ姫が言った「魔法の使い方を教えて欲しい」というのは、どうやったらそんなに強力な呪文を使いこなせるのかという意味であり座学で教わる事などを意味していたのです。パプニカでの勉強も実戦経験などなく手本を見せてもらって実践したりという、まさに『魔法教室』のような教育のされ方で育ってきたレオナ姫にとって「いきなり戦え」というのはまったく予想していなかったものでした。

「マトリフもブロキーナもまずはやってみるって感じだったからね。それでも俺のほうがマシだと思うよ？」



もちろんカール王国がこの方針なんだと言われたら何も言い返すことなどできないのですが、当然カール王国でもそんなことはなくアランの方針なのはどういうまでもないことです。とはいえブロキーナやマトリフが同じような感じだったため、教育者の素養のあるアバン以外は言葉で教えるよりも行動で示すタイプが多かった弊害でもあるのでしよう。

死人に口無しとばかりにマトリフたちのほうが厳しかったと言っていますが、いくらマトリフたちであつても戦いを知らずに育ってきた王女にいきなり厳しい修行を課するような事はありません。しかし大魔道士と拳聖の教えを受けた唯一の存在であるアランが言っているのです、レオナ姫も「そうなんだ…」と信じるしかありませんでした。

「アラン殿、もし良ければ我々にも教えを授けて頂けないでしょうか」

レオナ姫が何やら躊躇しているような様子の中で自分もと手を上げたのは三賢者たちでした。彼らもまた若いながらも賢者と呼ばれる者たちであり、幼少期にアランがパプニカで行った戦いを見ていた者たちでもあつたのです。一部の周囲からは「カールの賢者を超えるのだ」と余計な期待をかけられたりしながら日々上を目指して特訓の日々を過ごしてきていました。

もちろん彼らも武術交流会の様子やラーハルトとの戦いを見ているので、もしかしたら勝てるかもなどという妄想を抱いてはいません。あの日見た光景に自分たちがどこ

まで迫れているのか…それを知る良い機会だと見て手を上げたのです。

「それじゃあ4人とも相手しようか。なんだか楽しくなってきたな、俺を魔王だと思つて本気でかかってきなよ」

賢者4人のパーティなどバランスも何もありませんが「もしかしたらそんなパーティだからこそでできる戦い方があるのかもしれない」と楽しみになってしまったアランは自ら魔王役を買ってしまったのです。もちろん魔王役なので武神流で接近戦をするような事はせず、悠然と待ち受けるというアランのやりたかった大魔王ムーブをここでやってみることにしたのでした。

…

…

…

魔界へ行きたいなら力を示せという模擬戦も終わり治療も終わった後、まずは誰が行くよりも先にどこにあつてどうやって行くのかという話になりました。なにせアランの知っている地底世界へ行く方法は『ギアガの大穴に飛び込む』というもので、そんな穴が地上のどこかにないことには行き方がわからないのです。

「ねえアバン、どこかに魔界に続いてる大穴とかないの?」

「そんな便利なものがあればいいんですけどねえ」

バランが魔界へと赴いた時は神々の力による助力もあったのですが、今回はその時と同じように神々の力に頼ることもできません。バランが魔界へ行くことができたのは、当代竜の騎士の使命として冥竜王ヴェルザーの野望を挫く必要があったと神々が判断したため行くことができたのです。

アランも自身の知っている知識から確認してみますが、博識なアバンでも知らないということはこの世界には地底世界まで続いている大穴など存在しないのでしょうか。そしてそれっぽい場所と言われても思いつく場所などそう多くないのです。

神々の遺産である破邪の洞窟を踏破した先に魔界へと通じる道があるのか…それともどこか別の場所に道があるのかわかりませんが、それらも踏まえて悠長にしているような時間がないことだけは間違いありません。

そして何よりもマザードラゴンの生命を脅かしている邪悪な存在について、どのような相手なのか何もわからないのです。大魔王については多少ながらもバランが知っていましたし、アランもその存在を倒す前提で動いていました。魔界は冥竜王ヴェルザーと大魔王バーンが支配する場所ということで、その二大統治者であった冥竜王も大魔王も倒れているのです。

しかし大魔王が数千年もの時間を雌伏に費やしたように、それ以上に憎しみを糧にして潜んでいる存在がいけないとは限りません。人間にとって一生と言える100年もの時間でさえ魔族や竜にとってはほんの短い時間に過ぎないのですから、魔界という場所はまさに人智の及ばない存在たちの蔓延る巢窟なのでしょう。

そのためそれぞれが自分に出来る事をしっかりと果たしながら、まずは魔界への道を探すところから冒険は始まる事になりました。

武芸百般で武器を選ばず闘気技や各種呪文を使用でき、魔弾銃やフェザーなどのサポートアイテムまで使いこなす勇者アバン。

攻撃呪文に回復呪文に補助呪文まで使うことができ、大魔道士と拳聖に奥義まで授けられ更には生命エネルギーまで使い出した接近戦もできる賢者アラン。

神々が世界のバランスを保つために生み出し、古くから数々の戦いを制してきた戦いの遺伝子を持つ竜の騎士であるアラン。

子供の頃から打倒大魔王に向けて、その剣の腕と教えられた光の闘気技を磨き続けてきた剣士ヒュンケル。

アランによって各種呪文と武神流を授けられ、ある意味英才教育によって幼少期からモンスターと戦って経験を積んできたシンシア王女。

幼い頃から父親の背中を見て剣を持ち、竜の紋章を自在に操れないまでも発現させ類稀なる才能を開花しシンシア女王と同じくアランによって経験を積み続けてきたデイーノくん。

まだまだ賢者の卵ながら正義の心で勇者たちのサポートを志願してきたレオナ姫。

魔族と人間のハーフとして、自己鍛錬と生まれ持った強靱な身体能力で高速戦闘を行う槍術の戦士ラーハルト。

まるで何かに導かれたかのように集まってきた8人の勇敢な者たち…もしかしたらそれこそが運命というものなのかもしれません。

彼らはアランから齎されたマザードラゴンの危機、そしてそこに存在するであろう邪悪な存在の事も理解しています。

マザードラゴンの生命を奪おうとしているその邪悪とは、もしかしたら大魔王バーンよりも強大な存在かもしれません。

しかしマザードラゴンの生命を救うため、そしてその原因である邪悪を討ち倒すために…勇者たちは次の冒険の舞台として魔界に行くことを決めたのです。

こうして無事にカール王国で開催された武術交流会の幕開けから始まり、賢者アランは奇跡の復活を果たしました

しかしそれによって勇者たちは新たななる邪悪の存在と聖母竜の危機を知ることになります

聖母竜の生命を脅かす邪悪とはどれほどの相手なのか、そして魔界という広大な場所には一体何が待ち受けているのか…

まだまだアランたちの冒険は終わらないでしょう

## 天地魔界の冒険（案）

「へえ、魔界ってこんな感じなんだね」

アランたちは今までの冒険で得た情報やバランからの意見などを集め、遂に魔界へとやってくる事ができました。魔界へは結局アバン、バラン、ディーノくん、シンシア王女、アランの5人で行っており、理由は子供2人が一歩も引かなかったことから父親2人も自分が一緒に行くという事を条件として認めためです。

現在の魔界は冥竜王ヴェルザーとその勢力がいなくなつた事で大魔王バーンが支配力を強めていましたが、かといつて大魔王に与する者ばかりというわけではなく大きな勢力は他にもあつたのです。魔界というだけあつて魔族だけでなく多種多様な魔物たちが生息しており、もしこの魔界で生きているモンスターたちが地上に溢れば人間たちなど一方的に追いやられてしまうでしょう。

当然ながら魔界の中で強さというのには自らを示す一番の手段であり、その中でも冥竜王や大魔王といった名を冠する者たちは多くの者にその名を知られ恐れられていたのです。しかし強者がいるということは反対に弱者ももちろん存在しており、そんな弱き

者たちは肩身が狭い中、身を寄せ合って生きていました。

広大な魔界でどうやって情報を集めようかと悩んでいた矢先に見つけた小さな集落……警戒している相手の懐へするっと入り込むアバンやディーノくんの人柄を利用して、そんな者たちから邪悪な存在について情報を集めていく一行。その中で冥竜王と大魔王と同じく通り名を持つ存在が明らかになったのです。その存在は『魔人』と呼ばれており、その姿は表に出てくることなく名前だけが知れ渡っているということでした。

しかし魔人の存在は確かなもので、アバンたちが立ち寄った集落も魔人の領域であるが故に外部から侵される事のない安全な場所ということも同時に知ることになりました。そんな弱き者を庇護するような存在ならば協力してもらうことも同時に知ることになりました。そんな期待を得られただけでも大きな収穫なのです。

そして何より魔界においても言葉で以って意思疎通を行うことで友誼を結ぶことができるかと確信していたアバンたちでしたが、そんな安らぎは瞬く間に崩れ去ってしまったのです。

「魔人様……なぜ……？」

少しの間とはいえ共に過ごしていた魔物たちが突然苦しみだし、そして次には正気を失ったかのようにこちらへと襲いかかってきました。まるで平和な島で過ごしていたのに魔王の瘴気によって自我を失ったかのように襲いかかってくる魔物たち……先程ま



で笑顔で接していた相手の突然の豹変に戸惑うも、襲いかかってくる魔物を倒さない理由のない賢者によって殲滅されてしまうのでした。

「アラン……このひとたち生き返らせてあげられないかな？」

「んー、結局また倒すことになるから無駄手間じゃないかな」

生き返らせればまた元通りになってくれると期待したいディーノくんでしたが、まるで確信を持っているようにまた倒す事になると言われてしまえば返す言葉はありません。そして魔物たちの最後の言葉を鑑みるに魔人と呼ばれている、弱い者を庇護していたはずの者の仕業であることは間違いないでしょう。

これがアバンたちを狙って行われた『弱者を無理やり戦わせる』という作戦だったのであれば確かに効果は大きかったでしょう。言葉を交わし互いの意思を確かめ合ってしまったえば……安易に魔物だからと倒すような事はできません。もしそこにアランがいなければ、最悪の場合の事も考えられたかもしれませんでした。

そんな魔人の悪辣な行動に怒りを覚えた勇者たちは、魔人のいる場所を探すために誰もいなくなつた集落を後にするのでした。

…

…

……

「竜の騎士よ……よく私を止めてくれた……しかしそれだけではない……天界に危機が迫っているのだ……」

魔界にいたもう一つの勢力……魔人と呼ばれる者を倒したアランたち。魔人の勢力の多くの魔族たちがアランによって命を落とし、ようやく辿り着いた先に魔人は待ち受けていました。しかしその魔人の正体は何と『人間の神が変異した存在』だったのです。

なぜ人間の神であったはずの存在が魔人となったのか……正気に戻った人間の神が語ったのは、かつて人間の神が「竜や魔族に比べ非力な人間にもせめて対抗できるように」と地上に破邪の洞窟と呼ばれる正しき意思を持つ者に邪を退ける力を与える場を残すことにした時の事だったそうでした。

その際に魔族の神が協力を申し出てきたため、人間の神は共に正しき者に正しき力を与えるためだと思つて助力を頼んだのですが……それこそ魔族の神の企みだったということです。皮肉にも破邪の力を残した洞窟で人間の神は呪いを受けてしまい、更には魔族の神の力によって破邪の洞窟は魔物の蔓延る場所となつてしまい力を得るために力が必要というダンジョンに成り果ててしまったということでした。

こうして人間の神は魔族の神の企みによってその在り方が大きく変様してしまい、天

界から魔界へと墮とされ魔人として操られていたということだったのです。それをすべてではなくとも知ることとなった冥竜王や大魔王は、神々の力が衰え消えたと判断し『竜の騎士』や『神の涙』といったものを『遺産』と考えていたのかもしれない。

かつては竜と魔族と人間が争っていたことを良しとしなかった神々でしたが、どこかで少しずつ歯車が狂い始めてしまったのでしよう。神々の意思も決して一枚岩というわけではなく、それぞれが何かしらの思惑を持っていた事は間違いないと思います。

人間には地上で、そして魔族と竜には魔界で生きることを決めた神々でしたが…人間の神は人間たちが生きる地上に魔族や竜が出て行かないようにとの考えから、そして竜の神は生命力が他よりも強い竜種が驕ることなく他種族を認められるように…そんな考えからの行動だったのです。

そして神々は話し合い、互いを排除しようとする行為を諫めるための存在を作り出すことにしたのでした。何よりもそれぞれを諫めるという使命の中には神々も含まれていたのです。それは神々が互いを牽制する意味も含まれており、しかし表向きには天地魔界のバランスを整えるという名目でそれぞれの神の力を分け与えた新しい種族を生み出すということになったのです。

それこそが『竜の騎士』と呼ばれる種族だったのです。

「どうか…ヤツを止めてくれ…頼んだぞ…」

息絶え光の中に消えていく人間の神の最後を見送り、そしてそんな悲しい戦いの最後に竜の騎士の真実を知り天界へと向かう事を決意した5人。そこに救い出す予定だったはずのマザードラゴンが姿を表しました。マザードラゴンは魔人となった人間の神によって呪いを受けた事で力を奪われており、しかしその魔人が倒れた事で呪いが解けた事を感じ取ったのでした。

しかしその蝕まれた身体は生命エネルギーをほとんど奪い取られており、更にマザードラゴンにとって親でもある竜の神もまた魔族の神によって生命の危機に瀕しているためその身に力はほとんど残されていませんでした。それでも竜の神の危機を救うため、そして魔族の神の悲しき企みを阻止するためにこの場へとやってきたのです。

ー我が子よ…遂にこの時が来てしまいました。今こそ竜の騎士の真の使命を果たす時です

「マザー…私が必ず悲しき企みを阻止してみせます」

ーできれば我が子にも、人間たちにもこのような事を任せたくありませんでした…しかし事態はそうも言っていられないところまで差し迫っているのです

そんなマザードラゴンに導かれ天界へと向かっている最中に更に齎された言葉によつて『竜の騎士』という名を付けたのは人間の神だった事を知り、竜の騎士とは元来竜と人が魔に対抗するための存在であった事を知らされました。更に戦いの遺伝子と

も呼ばれる経験を蓄積させたのは『神々が対立したとしても御せるように』と長い時間をかけて、しかし短いサイクルで様々な経験を積ませるために考案されたものということです。

　バランだけでなく歴代の騎士たちの誰も知らなかった事実がマザードラゴンによって明らかになっていき、そして真の使命を知ったことでバランたちは天界へと…真の邪悪と対峙するために天界へと向かう事になりました。そこに反対する者などなく、当然のように戦う事を決めていきます。

…

…

…

　そしてマザードラゴンの助力を得て天界へと辿り着きました…が、そこは天界という名とはまったく違う瘴気の蔓延る暗黒の世界だったので。もはやバーンパレスが素敵な宮殿だっただと思えるほどに禍々しい空気の中、天界へ辿り着いた時にはマザードラゴンは既に死力を絞り尽くしてしまっていました。

　―我が子よ、どうか世界を…

瘴気に蝕まれていたマザードラゴンから最後の力を託されたバランは天界を救うことを固く誓い、天界にある大宮殿……その中で神々の間と呼ばれる場所へと進んでいったのです。すると奥のほうから咆哮にも似た断末魔の叫びが聞こえてきました。急いでその場所へ向かうも一足遅く、そこには竜の神の力を食らった魔族の神がおり竜の神が伏していた状態でした。

現れた竜の騎士の姿を見て、厭らしい笑みを浮かべながら語ったそれは大魔王よりも更に深謀遠慮と呼べるほどに綿密で長い時間をかけた企みであり、冥竜王などと名乗る小竜を竜の騎士に始末させ、その魂を封印して身動きを取らせない事も含まれていたということでした。そしてたかが数千年しか生きていないにもかかわらず神に成り代わろうとする痴れ者の大魔王が倒れた事が引き金となって動き出したということだったのです。

更に語られるのは竜の騎士という種族もまた、魔族の神にとって実験動物と呼べるものだということでした。竜魔人と呼ばれる竜の騎士の戦闘形態は竜の力と魔の力が大きく作用しています。そしてそれが問題なく利用できているということは、魔族の神が竜の神の力を得れば竜魔神とでも呼ぶ更に上位の存在となることができると考えたのです。

それらの企みはすべて成功し、今のこのすべての状況が魔族の神の予定通りだったこ

とが判明したのです。

そんな魔族の神が目の前にいる竜の騎士や人間たちを放っておくはずもなく……もはやこれ以上語る言葉など持たないとばかりに戦闘へと突入したのでした。

「なら……とりあえず挨拶代わりだ！」

「魔の王を倒して増長しておるようだが……我は魔を司る神也！その魔神に魔の法による力が効くとも思うたか！」

一度は大魔王をも消滅させたアランのメドロアすら霧散させられ、魔法が通用しないという魔神の言葉通りに攻撃呪文では一切ダメージを与えないと瞬時に理解し……ならばと闘気で戦うも、人間の持つ生命エネルギーでは微量すぎて効果が薄く形勢は不利な方向へと向かっていました。

「魔の王との戦いは見ていた……我はあのような無様な真似はせん。このまま飲まれるが  
良い！」

「なめんな……ベホマラー！」

大魔王バーンとの戦いすら見ており自分には油断はないと豪語する魔神……アランも傷つき倒れた仲間たちを回復させますが、魔神の放つ瘴気によるダメージと竜神の力を食らった事で得た闘気は強力で戦況は悪くなる一方だったのです。

魔神にとって竜の闘気と魔の力を持つ竜の騎士は試作品でありながらも警戒すべきものだったのですが、ならばと自身も竜神の力を手に入れることでそれ以上の竜神の闘気を手に入れた以上もはや恐れるような存在ではありません。そんな竜神の力を取り込んだ魔神の力は凄まじく防戦一方の5人。あわや全滅かと思われたその時：バランの身体が光を放ち魔神の持つ竜神の力が抑え込まれました。

その光の正体…それはマザードラゴンに託された魂の力だったのです。

―魔の神よ…あなたに我ら竜の力を使わせはしません…！

「マザー…感謝する。そしてどうか見守っていてほしい。この竜の騎士バランの戦いを…！」

竜神の力が抑えられた事を勝機と見たことで竜魔人となり戦うバラン。その姿に仲間たちは驚くも事態はそんな余裕を与えてはくれません。しかし竜魔人の力で戦うも魔神の力はまさに神の名に恥じないほどに凄まじいものでした。

「みなさん、あの魔神の瘴気と力は生半可な力では打ち破ることすらできません。バランさんに我々の力を集めますよ！」

このままではジリ貧になる事を懸念したアバンの提案でミナデインを使わせるため魔法力を送り込む仲間たち。持てる力をすべて竜魔人となったバランへと送り、竜魔人となったバランですら身体から溢れ出るのではないかと思われるほどの力が注ぎ込ま



れました。

その絶大な力で見事魔神を討ち果たし、天地魔界をも巻き込んだ神の陰謀は破られました。

その後バランは天界の精霊たちに請われ、神々の消えた天界にて三界の守護を担うことになりました。それも竜魔人の姿で……これは竜と魔の力が強く表に出ている状態のため生命力の強い竜と同じように長い寿命を得るために必要な事だということです。

そしてその姿と力から『竜魔神』という名で呼ばれ、しかし事情を聞きバランを一人天界に残す事を是としなかったソアラ王女とディーノくんが共に天界で過ごすことになったのでした。

とはいえバランたちとの永遠の別れということではなく、天地魔界の門戸は開いたことでも会える状況となり引越したようなものとなりました。もしかしたら何時の日か誰もが自由に行き来できる時代がやってくるのかもしれない。

魔界と天界での冒険を終えたアバンたちはカール王国へと戻り、世界は遂に平和な日

常を取り戻したのです。

アバンはカール王国に腰を据えシンシア王女と共にフローラ女王を支え、レオナ姫はパプニカ王国で奮闘しているようです。

バランはソアラ王女とディーノくんと共に天界で精霊たちと共に過ごし：たまにソアラ王女に請われて人間の姿に戻ったりしながら穏やかに、しかしまた世界を混乱に陥れるような存在が現れないように注意深く見守っていました。

アランは平和になった世界でそれを享受することを良しとせず、更に戦いの中でしか生きる事のできないラーハルトやヒュンケルもいたため2人を連れ魔界へと旅立つて行ったのでした。

## ドラクエ4へ行ってみる

「アラン兄さん！今日も稽古を付けてよ！」

山奥にひっそりとたたずむ小さな村で少年の声が聞こえてきました。

呼ばれているのはかつて地上の勇者たちと共に大魔王や魔神と戦った賢者アランです。アランは天界での戦いの後しばらくして魔界に行ったはずなのですが、気がついたらどこかの山奥にいたのです。

意味がわからないと魔界に再度向かおうとしても移動することができず、一旦ルーラでよく知るカール王国に戻ろうとしても呪文がうまく発動しないのか戻ることもできませんでした。しかしルーラこそ使えないまでもメラなどの呪文はきちんと発動していたため、アランはひとまずトペルーラで周辺を飛んで情報を集めようと思ったのです。

上空から見ればあまり見た記憶のない山の景色が広がっており、そんな森の中に集落のような村を見つけたアラン：そういえば小さい頃に世話になった村の人たちは元気かな？などと考えながらその村に行ってみることにしたのでした。

そして村の中央へと降り立ったところで：ソロと呼ばれる少年とシンシアと呼ばれる少女と出会ったのです。

突然空から人が舞い降りてきた事に驚きつつも子供ながらの好奇心で近寄ってきたソロとシンシア：そんな2人の子供の、特にシンシアの名前に驚きつつもアランは持ち前の子守りスキルで仲良くなっていたのでした。そして子供の心を掴んでしまえば後はそう難しいことはありません。

ソロくんの両親に迎えられ軽く自己紹介しながらカール王国などの事を聞いてみるところ、誰もカール王国やパプニカ王国などを知りませんでした。それどころかハドラーやバーンなどといった魔王軍の事も知らないと言うではありませんか。

どうやら山奥にまではその名前を轟かせることのできなかつたのか：と自称魔王や自称大魔王を少々不憫に思いながら、それはそれとしてアランはカール王国などの地理すら知らない村人たちの学の無さも同時に不憫に思っていました。別世界に来たなどという荒唐無稽な考えなど当然思いつくはずもなく、そしてメラやトブルーラが使えているのですからそんな事になっていいるなどとまったく考えつくことすらできません。

聞けばソロくんは小さい頃から剣術などの特訓をしているらしく、その様子はまるでかつての自分を見ているようです。そこでアランは「急いで帰らなくても怒られないだろ」という何の確証もない理由で少しだけソロくんを手伝ってあげようと決めてしま

ました。もしかしたら今頃突然いなくなった事を知ったヒュンケルやラーハルトが探しているかもしれませんが、2人の性格からして慌てて騒ぐこともないだろうとも思っていたのです。

それにアランにとってシンシアという名の少女は、別人と分かっているも身近にいた少女の名前と同じなためどこか引き寄せられるものがあつたのかもしれない。見た目は全然違いこつちのシンシアちゃんは耳が尖つていたりしていますが、そんなものはアランにとって何も問題ではありません。

これによってその日からアランによるソロくとシンシアちゃんの子守り兼魔改造計画が始まつてしまいました。

ソロくんもなぜこんな村に地下室が…と思うような場所で特訓を付けてもらつていたようですが、そんな事をしていても腕前だけで経験を積むことができないと言われてしまつては言い返せません。そしてまるでソロくんの存在を隠したいかのように外へ連れ出すことを反対する村人に得意の説得（物理）を行ったアランは、渋々ながらの了承を得て2人の子供を立派に育てる事にしたのでした。

「ソロくんは剣を使うならまずは闘気を使えるようになるうね」  
「シンシアちゃんには俺のとつておきを教えるようになるよ」

確実にディーノくとシンシア王女と同じように育てようとしているのですが、アラ

ンはその事に気付いていません。まずは契約だけでも…とお馴染みの魔導図書館に向かおうとしたのですが、ルーラが発動しなかったため仕方なく武神流だけとりあえず教えるということになりました。

…

…

…

そんな村での生活も数年を数え、ソロくんが17歳となり村でも一人前だと認められるようになったところに遂に魔物たちが動き出したのです。

「ソロを地下室に隠せー」「はやくー！」

なぜか魔物たちがこの村に襲いかかってきたらしいのですが、村人たちはソロくんを匿いたいようで地下室に連れて行ってしまいました。ソロくんも抵抗していたのですが、自分を気遣ってくれている村人を振り払うわけにもいかず…村人たちの一体感満載の連携によってすぐに姿が見えなくなってしまうのです。

「アラン兄さん…」

「別に心配する必要とかないよ。シンシアちゃんもいつも通りやればいいだけだから

ね」

ソロくんだだけが匿われたことで不安になったのかシンシアちゃんが呼んできませんが、アランにとって魔物が襲ってきた程度で動じるような精神など持ち合わせていません。それどころか匿うならシンシアちゃんも一緒に連れて行ってやれよと、気の利かない村人に内心で愚痴っていたりもしました。

「勇者をどこに隠したアア!!」「勇者はどこだアア!!」

村へと襲いかかってきた魔物たちは何故か勇者を探しているらしく、勇者勇者と叫びながら暴れているようです。アバンならカール王国にいるはずなんだけど…と、返事でもしてみようかと思つたのですが、アランはここで大切な事を思い出しました。

ハドラーもバーンもトドメを刺したのはアバンではなかったのです。

つまり魔物の中では『ハドラーやバーンを倒した存在＝勇者』という事になっており、人間の中での呼び名と魔物の中での呼び名は違うという事かもしれません。そうなるともしかしたら魔物たちが狙っている勇者というのは自称魔王のハドラーを消し飛ばしたアランの事かもしれないのです。

そして大魔王バーンとの戦いは誰にも見られていないはずであり、その後バーンを倒

した勇者として名を馳せたのもアランたちでした。その3人の勇者のうち2人は他界しているため、残されたアランが勇者として仇討ちの対象になっていると考えれば納得のできるものです。

わざわざこんな山奥の村に勇者を探しに来るといふことは、アランの居場所がわかったから復讐の牙を向けてきたと思えばこの襲撃の目的も判明したという事でもありません。

「なんか俺を狙って来ているみたいだし、さっさと片付けてくるね」

「え…？どうして兄さんを…？」

シンシアちゃんが困惑するのも仕方ないことでしょう。この村は勇者を隠し育てる事を目的とした村であり、その勇者とはソロクんの事です。魔物たちが探している勇者というのは間違ってもアランではありません。なのにアランはどうしてそんな答えに行き着いたのか自分を狙っていると言っています。

シンシアちゃんにとってアランは色々と言文を使用でき武術まで修めている人物ではありませんが、時折意味のわからない事を言ったり行ったりする人物でもありました。確かに「俺は大魔王とか魔神とかと戦った事もある」などと言っていました。まさかそれが事実で別世界の事などと思ってもみません。

「魔物ども!!勇者アランはここにいますぞ!!」



しかし止める間もなくアランは大勢の魔物たちの前に躍り出て、更に名乗りまで上げてしまいました。もちろんただ名乗りを上げただけではなく、毎度お馴染み不意打ちメドローアで魔物の群れを消し飛ばすことも忘れません。

突然の攻撃を受けた魔物たちが一斉にアランへと視線を向け、思っていたよりも大人だったことに戸惑っている中……一人の魔族がアランの前に出てきました。

「ほう……お前が勇者か、それとも身代わりか知らんが皆殺しにすることに変わりはない」「確かにそれもそうか……」

アランの前にいる魔族……デスピサロはアランのこの言葉を諦めと捉えましたが、当然ながらアランにそんな殊勝な心など備わっていません。そしてアランが同意したのは「皆殺しにすることに変わりない」という部分だったのは言うまでもありません。

余裕綽々で人間ごとき……と侮っているのは魔族全員に備えられている標準スキルなのかわかりませんが、その結果デスピサロは武神流の拳によって身体を貫かれてしまいました。それでも死には至らず致命傷ながらどこかへと逃げていったので生命力はやはり人間を大きく超えているようです。

親玉であったデスピサロが返り討ちに遭い逃げ出したことで魔物たちの統率も乱れてしまい、そしてそんな暇などアランが与えるはずもなく言葉通りに魔物たちは殲滅されてしまうのでした。

「思ったより呆気なかったなあ」

「兄さん……」

「シンシアちゃん何かあった？」

最初はソコを庇っているのかと悲壮な表情をしていたはずのシンシアちゃんでしたが、アランが魔族を倒したあたりで思い出したのです。アランはこの数年で空を飛び回ったり森を焼いたり凍らせたり……そして何を怒られようと最後は話し合い（物理）によつて解決する人物だった……

更に驚いたことに、アランは魔物に襲われて命を落としてしまった人の蘇生までやってのけてしまったのです。確かにこの世界には蘇生呪文というものが存在しています。まさかこの破天荒を絵に描いたような大人がそんなものを使えるなどと誰が予想できるとしようか。

しかしそれでも勇者を狙った魔物たちの群れを人的被害無く乗り切ったことは事実なのです。シンシアちゃんももしこれでアランがいなかったら……と考えれば、常識外れの行動など些細な事だと考えを改めました。実際アランがいなかったら匿ったソコ以外はデスピサロの言う通りに皆殺しに遭っていた可能性は非常に高かったでしょう。

シンシアちゃんもモシヤスなどを覚えていましたが、これは決してイタズラなどで使うために覚えたわけではありません。万が一の時に勇者であるソコを死んだと見せか

ける事ができるかもしれないという覚悟の上で覚えていたのです。

それも自分を勇者だと名乗り魔物を返り討ちにしたことで、アランがある意味身代わりの囹となりソロの事は知られる事なくやり過ぎすことができました。しかも誰も死なず…死んでも生き返るといふ望外の展開によつてです。

もしかしたら天空に住まう神が遣わした使者だったのかも…と思うくらいにはシンシアちゃんはアランについて誤解と混乱していました。悪い人だとは思つていませんでしたが、出会つた時から「おじさんじゃない。お兄さんと呼びなさい」などどこだわりを見せていたアランがまさかここまでだとは誰にもわからなかつたでしょう。

とはいえ村人やシンシアちゃんにとつて勇者とはソロの事であることは間違いなく、そして今回の魔物の襲撃によつてソロは自分が伝説の勇者であることを知らされることになりました。この世界の危機を救えるのは伝説の勇者であるソロ以外におらず、ソロはこれから世界を救うために旅に出る必要があるというのです。

「兄さん、オレが伝説の勇者だつて…もしかして兄さんも知つてたの?」

「ソロくんが勇者? でもあいつら俺を狙つてきてたし俺が勇者だと思ふんだけど…?」

「…え?」

もしかしたらある日突然現れて自分を鍛えてくれた兄と呼ぶこの人物も自分が「勇者だから」鍛えてくれていたのかと思つていたソロくんだったので、本人から返つて

きた答えは予想外のものでした。アランのこの返事を聞いてちよつとばかり自信がなくなってきたソロくんですが、なぜかシンシアちゃんはじめ周囲が強調するように勇者だと言ってくるのでひとまず飲み込むことにしておきました。

アランは小さい頃から「ソロくん」「シンシアちゃん」と子供扱いのように呼んでおり、それは今でも何も変わっていません。つまりアランにとつてソロくとシンシアちゃんは今も守るべき子供として扱っていると思つたのです。もちろん後ろで見守つてくれていて「何があつても大丈夫」と言ってくれるのはとても頼もしいのですが、それはそれとしてやはり対等に…そして隣に並び立ちたいという気持ちもまたソロくんの中にはありました。

ただ並び立ちたいとは言つても今のソロくんはアランの足元にも及ばないことも事実なので、旅に出るとなつてもやはり不安な思いは隠せません。これから1人で大丈夫なのかな…と、実力が足りない事を自覚しながら1人旅に出るとするのは周囲の期待も合わさつて心細さを齎していました。

「そんな心配しなくていいよ。俺がいるんだから怪我したつて死んだつて大丈夫!」

「…一緒に来てくれるの?」

「俺とソロくんとシンシアちゃんがいればどうにでもなるさ。あんな魔族程度だつたら俺1人で十分だつたしね」

しかしソロくんの「一人で旅に出ないといけない」という不安は余計な心配だったようです。アランは当然一緒に出かける気でいますし、更にアランの中でシンシアちゃんを置いて行くという選択肢も持っていません。シンシアちゃん本人が「行きたくない」と言えば無理強いされることはないでしょうが、シンシアちゃんもソロくんを見守りたい思いは持つていたためアランの提案はとてもありがたいものでした。

村人たちもまるでアランにソロくんを託すように…そして最後にアランの強さを確認するように見送りという名目の大乱闘になったりしていましたが、アランはそれをしつかりと返り討ちにして頼もしさと強さを皆に刻み込んでから村を出ていくのでした。

…

…

…

ルーラが使えないため2人を抱えてトベルルーラで移動していたアランたち…とりあえず人の多いところに行こうという事でエンドール城という場所へとやってきました。

このあたりはカール王国やパプニカ王国などと変わらず、城下町にも人が行き交って

いるようです。今までアランに連れ去られる以外村から出る事のなかったソロくんたちには珍しいものも多くあるようで、シンシアちゃんと2人してキヨロキヨロと周りを見渡していました。

そんな観光気分の中歩いていると、1人の女性が目に入ることになります。その女性は占い師だということ、更に遠方からも人がやってくるほどによく当たると評判ということでした。占いというものに興味のなかったアランとソロくんでしたが、シンシアちゃんの好奇心によって1度占ってもらってみようということになります。

「やっぱり女の子ってこういうの好きなんだね」

「そうじゃないわ。もしかしたらソロがこれから向かうべき先を知ることができるかもしれないじゃない」

「えー…別に占わなくてもそれっぽいやツ捕まえて本拠地聞けばいいじゃん」

アバンたちと共に旅をしていたときも占いなどに頼った事がなかったため、アランにとっては占いなど天気予報と変わりません。もしテラン王国で占い師と出会ってればまた違った態度になっていたかもしれないませんが、残念ながら今のアランにとっては価値ある情報源とは言えないのでした。

「あなたの周りには7つの光が連なっており、更に脇に小さくも輝く星も見えます」

シンシアちゃんの薦めで占い師の女性にお金を渡して占ってもらったところ、ソロく

んの周りには7つの星があるということでした。連なった7つの星とその脇に光る星があるというところに良い予感はずつとくしない占いなのですが、この世界に死兆星など存在しないのできつと別の意味なのでしょう。

そんな占い結果を知り占い師の女性は「あなたが伝説の勇者さま……？」などと言っています。アランにしてみれば「これが勇者さま詐欺……？」と本人が聞いていたら怒られるかもしれない事を考えていました。その眩きはシンシアちゃんには聞こえており、どうやらシンシアちゃんの尖った耳は形だけでなく性能も良かったようでした。

占い師の女性はミネアというようで、姉で踊り子であるマーニヤと共に伝説の勇者を探していたというのです。本来なら1人で旅をしていた中で心強い仲間が加わるのかもしれませんが、現在アランたちは3人で旅をしていました。更にミネアとマーニヤを仲間にして旅することにアランが乗り気ではなかったのです。

理由は2人が占い師と踊り子：アランの知識で言えば両方とも『遊び人』と似たようなものだからでした。

どう考えても戦闘で役に立つとは思えません。アランに『特技』という知識はないので、仮に戦っている中で踊られても困るだけなのです。それどころか邪魔にしかありません。占い師のほうも必要であれば要所で占ってもらえば良いだけであって仲間にする意味はまったくありません。

「とりあえず気持ちだけ受け取っておくね……」

ふんわりやんわり断ってさっさと次へ行こうとするアラン……しかしミネアのほうにも譲れない思いがあったのか必死に食い下がってきます。最後はどうしてもと頭を下げるミネアを見かねてソロくんとシンシアちゃんまで敵となつてしまい連れて行くことになつたのですが、踊り子の姉のほうはカジノにいるということをやっぱり連れていくの止めようかと考えだしたりしていました。

しかしアランの苦悩はこれだけでは終わりませんでした。

なぜか次に仲間になりたいと言い出したのは太った商人であり、自分を仲間にしてくれれば船をくれるというのです。しかしこの世界で唯一であろうトベルーラを使えるアランにとってそんなものは必要ではなく、なんなら遊び人枠2名を置いて飛んで移動すればいいだけでした。

当然そんな案は却下されてしまい、一体何の役に立つのかまったくわからない商人トルネコを加えた一行……反対にもういつそ1人で魔物殲滅して回ろうかと考え出しているアラン。そんなアランが我慢しているのはソロくんとたちから「一緒にいてほしい」と言われていたからであり、それがなかったらとつくに飛び出していたかもしれない。

今更ながらアバンたちとのパーティーつてすぐく恵まれていたんだな……と有難みを噛みしめるアランですが、やはり大切なものというのは失ってから気付くものなのでしょ



う。むしろアランの行動をフォローしてくれていたアバンたちからしてみれば言葉は違えど「やつとわかったか」と返されてしまうでしょう。

その後訪れた先ではなぜか寝込んでいる僧侶の病を治すためのアイテムを取りに行ったお姫様を助けてほしいと言われ、アイテムとお姫様を探して行った洞窟では別のパーティを組んだ目的の人物を探し出すことに成功しました。アリーナ姫と呼ばれるお姫様は勝ち気な性格の口よりも先に手が出そうなタイプのお姫様のようで、今までフローラ女王やソアラ女王といったお淑やかなお姫様としか出会って来なかったアランにとつてはお転婆娘にしか見えません。ある意味レオナ姫に近いと言えるかもしれません。これを聞いたらレオナ姫は必死に否定するでしょう。

そして口を揃えて言うはずです。どちらかというのアランに似ている、と…

無事パデキアというアイテムを手に入れ僧侶も回復したのですが、次はこのお姫様一行が目的が同じだから一緒に旅をすると言い出しました。いくらなんでもお守りの必要なお姫様一行なんて必要ないと断ったのですが、やはりというかアリーナ姫はそんな事を認めないようでした。

最終的に「戦って認めさせる」という相変わらずの魔族的思考によってアランとアリーナ姫が戦うということになり、しかしそこで途中で加入した旅の仲間たちはアランの実力を間近で見せつけられることにもなったのです。

アリーナ姫は決して弱いわけではありません。武術界でも確かな結果を残していますし、魔物たちとの戦いでも先んじて活路を切り開くとても勇敢なお姫様です。しかし相手のアランは大魔王や魔神とも渡り合ってきた上で生き残っている賢者であり、その戦いの経験値は比喩にならないほどの差がありました。

「これでわかったかい？ デスピサロはどうせ俺が倒すんだし、アリーナちゃんは留守番しててよ」

「……………ほっ…まだ…よ…」

アリーナ姫のお供である神官クリフトと魔法使いブライにとってはそれは信じられない光景でした。今まで襲い来る魔物であろうと打ち倒して来たアリーナ姫が為す術もなく倒れ伏しているのですから、もはやそれは驚愕を通り越して幻覚を見せられていると疑ってしまうほどのものなかもしれません。

しかもアランは補助呪文を用いておらず、奥義も使っていない手抜き状態だと知れば更に驚くことでしょう。ソロくんやシンシアちゃんもアランの全力はまだ見たことがあります。人間一人にどうにかできるような人物だと思っていけないのでこうなるのは理解しています。

それでも諦めることなく立ち上がり、アランに向かっていくアリーナ姫…何やら魔王に戦いを挑む勇者的な構図に見えなくもありませんが、これはお互いに引かなかったた

め最後に力で相手を認めさせる議論（物理）なだけです。

お姫様であるとか女の子であるという事を考慮しないアランの無慈悲な攻撃はアリーナ姫に立ち上がれないほどのダメージを与えるもの、それでも折れない心を持っているアリーナ姫を認めないわけにはいきません：ソロクんとシンシアちゃんが。

「兄さん、彼女の決意はよくわかったよ。もういいでしょ？」

「どうか兄さんやりすぎよ。女の子に対してやることじゃないわよ」

なぜかアランが宥められる事になっていますが、これ以上やるとアリーナ姫が死ぬ未来しか見えない以上止めないわけにもいかないのです。アランの場合「治療も蘇生もあるんだよ」という意識があるためとは思いたくありませんが、山奥の村の時もよく「最後は勝ったほうの意見を聞く」ということをやらかしていました。

ちなみにこれは天地魔界を渡り歩いてきたアランだから言えることではありませんが、決して人里でやって良いことはありません。

ソロクんたちが育った村でそれが許容されていたのはアランが強かったからという事もあります。それ以上にソロクんを強く逞しくしてくれていたからというのが大きかったです。そしてすぐに暴力に訴える粗暴者というわけでもなく、ソロクんを外に連れ出す出さないなどといった時に起こるのと最後には治療してくれたりもしていたため受け入れられていたのです。

ソロくんとシンシアちゃんに止められ、それと同時に意識を失ったアリーナ姫をベホマで治療したアラン。

ここに来てミネアの占いの意味を理解しました。つまりソロくんの周囲の7つの星とはソロくんに課される苦難の数ということだったのです。占い師、踊り子、商人、お姫様とのお供2名：アバンやバランなど、単体でも攻撃回復など様々な事をこなし高い戦闘力を持っていた仲間たちを思えば今の仲間など足を引つ張る存在としか思えない職業ばかりでした。

しかしそれらはソロくんが成長するために置かれたハードルだと思えば理解できないことありません。仲間に対して思う感想としては最低の事を考えながら、アランは「とりあえず最後のハードルがそのうち出て来るだろ：」と、これについてはもう考えないことにしました。

宿を出て旅を続けようとしたところでまた何故か吟遊詩人が突然話しかけてきて、勇者を探す戦士が1人でキンググレオという魔物の城へと向かったということを告げます。ここまで来ればアランとてこれが最後の星だろうということとは理解できます。更にキンググレオというのはミネアとマーニヤにとつて因縁の相手とも言える相手ということでした。

もしかして勇者の仲間になったのは仇討ちがしたかったからか：？と、戦士ライアン

を仲間に加えキングレオとバルザックを倒したアランの頭にそんな考えが浮かんだりしましたが、本人たちが良ければまあ良いのでしょう。というよりも今までなら大体魔物のほうが「ボスはこいつだよ！」や「本拠地はここだよ！」と教えてくれるのですが、なぜか断片的な情報しかなく親玉のところ突き込むという手が取れなかったのです。

道中立ち寄ったロザリーヒルという場所でエルフのロザリーから黒幕がデスピサロという名であることを知らされ、それぞれがデスピサロを倒すために決意を固めていました。アランだけはロザリーからの「デスピサロの野望を打ち砕いて」という頼みに対して「何を今更」などと考えたりしています。アランにとっては『やつとボス情報きたか』くらいにしか思っておらず「むしろもつと早く教えてくれたらさっさと倒しに行つたのに…」とすら考える始末です。

デスパレスという魔物たちの城の場所を特定し、しかし突入しようにもその数はかなりのものだとすることがわかりました。魔物の城を前にしどうやって攻略するかを考える一同：当然そこには真正面から打ち破る系の賢者がいるので出される案は決まっています。

「よしそれじゃあ乗り込んで片っ端から片付けていこう」

「兄さん…それは危険すぎるよ」

「とりあえず外からメドロア連発したら大体倒せると思うからいけるって」

アランの中に潜入という文字は存在しないため、出された提案はメドローアで外壁ごと貫いて消滅させるという案です。そして残ったモンスターとデスピサロを殲滅してしまおうというものでした。これがうまく機能すればデスパレスを攻略しデスピサロも倒せるかもしれませんが、どれだけの魔物がいるのかもわからず危険が大きいのも確かです。

そこで陽動組と潜入組に分かれて魔物が混乱している内にデスパレスへと潜り込み情報を集めるといふ作戦が立てられることになりました。

大人しく潜入するはずのないアランが陽動組に回ったのは当然の結果であり、そしてそこから齎される結果もまた必然のものだったのでしよう。

「なんだ今のは!?! 敵の攻撃か!!」

「わかりません! 光に飲み込まれてかなりの数のモンスターたちがやられました!」

「すぐにデスピサロ様に報告しろ! アツテムトに誰か向かわせるんだ!!」

「地獄の帝王エスターク様の復活前に無様な様子は見せてはなら…」

アランによって無差別に放たれたメドローアによって、デスパレスに穴が空き無数の魔物たちが飲み込まれていってしまいました。しかしこれによって混乱した魔物たち

は指示を出し、それによってデスピサロは地獄の帝王を復活させるためにアツテムトという場所へと向かった事がわかりました。混乱しながらも一生懸命に士気を保とうとしていた魔物もメドロアで飲み込まれて消えてしまっていますが、かつて山奥の村に突然襲いかかってきたのと似たようなもので順番が変わって魔物側が襲われただけなのです。

しかし貴重な情報を手に入れたソロくんたちは巻き添えにならないようにすぐに城の外に引き返し、情報の共有と…ありったけの文句を言うためにアランたちを探すことにしました。

「兄さん…あれ何なの？てつきりベギラゴンとかイオナズンとかで城の壁を壊したりするもんだと思ってたんだけど…」

「あんたには仲間を大事にするって気持ちとかないわけ!？」

「もしかして7つの星の傍にあったのは不吉な星…?」

潜入していたソロくんたちからは少々評判は悪かったものの、アランとしてはこの結果に満足していました。かつて魔神と戦った時には魔法が通用しないという事もあったため、もし今回もそんな相手だったらという確認も込めたメドロアだったのです。もちろん親玉であるデスピサロがいなかったり地獄の帝王というポストはいやつの存在を知ることになったということもありますが、もし今回も魔法が効かない相手だった

場合は今の仲間たちを置いて行くという選択も考えていました。

とはいえどんな理由があるかと仲間が潜入しているのに無差別メドローアなどやって良い事ではありません。仲間からの当たってはいけない攻撃を避けつつも情報をしっかりと持って帰ってきたソロくんたちは仲間から労われつつアツテムトを目指すことにしました。

…

…

…

寝起きの地獄の帝王をサクツと倒し、そこに現れたデスピサロはアランの顔を見て苦虫を噛み潰したような表情をしつつも「やはり天空の勇者だったか…」と意味のわからないことを言っています。アランは自称賢者ですが大魔王バーンを倒したあたりで「伝説の勇者」扱いにもなっており、そこまでは自分の事だと理解できるのですが「天空の勇者」という言葉は初耳でした。

一応 balan が天界に住んでいるので「もしかしたら balan の事なのかな？」などとも考えたりしていましたが、いくら考えてもその答えが出るはずがありません。勇者と呼



ばれているのは自分の事ではなく、実はソロくんが天空人と人間のハーフで伝説の勇者であるという考えなど思いつくはずもないのです。

しかしデスピサロが何を言おうと倒してしまえば問題にはならないだろ…という脳筋思考で戦おうとするアランは、まずはこいつとばかりに乱入してきた魔物を閃華裂光拳で早々に倒しました。そしてそのままデスピサロへと高速で近づいていき接近戦を繰り広げだしたのです。

ちなみに乱入してきた魔物は「エルフのロザリー様が人間の手に…」という報告を持って来ていたのですが、この言葉はデスピサロに伝わることはありませんでした。もし伝わっていたらデスピサロは早々にこの場を移動して魔界へと行って進化の秘法を使用していたかもしれませんが、魔族のデスピサロは占い師でも何でもないのです。そんなことはわかりません。

更にデスピサロの前にいるのは「伝説の勇者」を自ら名乗り、かつて自分を致命傷に追い込んだ存在なのです。本当にこいつが伝説の勇者なのかどうかわかりませんが、デスピサロにとってはそんな事はどうでもよく…屈辱を受けたやり返さずにはいられない相手なのでした。

「貴様さえ邪魔しなければ…!!」

「そうだな、勇者にいられると困るもんな」

怒りの表情を浮かべるデスピサロに対し、アランのほうは何も思うことはありません。今のアランの頭の中ではデスピサロはハドラー梓扱いとなっており、一度倒してまた現れただけという認識です。状況はアランとデスピサロの1対1の戦いとなっており何故か仲間たちは手を出さずに見守っているのですが、アランからしてみれば「少しくらい手伝えよ」と言いたい気持ちでした。

「んじや終わらせようか：バイキルト、ピオリム、スクルト！」

そして仕方ないので補助呪文を自らにかけ、掠っただけで肉体に大ダメージとなる閃華裂光拳の連打によってデスピサロは倒されたのでした。

親玉であるデスピサロが死んだ事によって魔物たちの軍勢は散り散りとなったのですが、きつとこの世界もまだまだ問題は残されているのでしよう。

天空の名を冠する装備たちは勇者に装備されるどころか手に入れられることすらなく、天空の城で見守っていたマスターなドラゴンとも見えることもありませんでした。

魔界の存在やデスピサロの側近の存在も知らない仲間たちはそれぞれの居場所へと

戻っていき、ソロくとシンシアちゃんもまた山奥の村へと戻っていきました。

そしてソロくんは今回の旅を通して理解しました。

勇者といっても強くなければ何もできないということをしる……

きつとアランが『勇者』というものを目の前で見せてくれたのでしよう。

まさか本人が本気で自分を勇者だと思っているとも知らずに……

## ドラクエ5に行ってみた1

「ぬわーっ!!」

「ほっほっほっほっ、子を思う親の気持ちはいつ見ても良いものですな」

「…リユ…カ…」

古代の遺跡…そこで魔物の策略によって1つの悲劇が繰り広げられていました。

王子が拐われてしまったことで助けに向かったある親子は、拐われた王子を取り戻したものの遺跡を出る前に魔物に見つかってしまいます。立ち塞がった魔物を何とか倒したと思ったのも束の間…なんと卑劣な魔物は子供と王子を人質に取ってしまいました。

とても強く勇敢だった父親も子供を人質に取られてしまつてはどうすることもできません。そして最後には反撃することもできず魔物たちによって倒されてしまったのです。それだけでは飽き足らず、魔物は子供の前で父親の身体を炎で焼いて見せたので

した。

そして命だけは助かったであろう幼い子供と王子は魔物によって奴隷として連れ去られてしまいました…

…

…

…

「つ…きさまっ！何者だ!？」

「なんで気付いたら知らない場所にいるんだろ…?」

そんな悲劇など知る由もない賢者アラン…本人の認識では先程まで「強くなりたい」と願うアリーナ姫にシンシアちゃんと一緒に武神流の特訓をさせていたはずなのに、いつの間にやら知らない場所にいるのですから当然の思いでしょう。そしてもはや自分は夢遊病なのかもしれないとまで思ってしまうほどに状況がわかりません。

これはもしかしたらデスピサロを倒した事で下剋上を目論んでいたエビルプリースト的な魔物がアランを危険視してどこかへ飛ばしたのでしょうか。デスピサロの大切にしていたエルフを人間の仕業に見せかけて殺したまでは良かったのですが、まさか当

のデスピサロが人間の勇者に容易く負けるとは思っていないませんでした。そこから地獄の帝王やデスピサロを倒した立役者とも言えるアランを排除すべく何か魔界の秘宝的なもので追いやつたという事も考えられます。

それともアリーナ姫にこれ以上強くなると困るかもしれないどこかの神官の呪いなのでしょうか。デスピサロを倒した後、自国に戻ったアリーナ姫はそれ以降も強くなるための特訓を欠かさず、更にアランの使う武術まで欲し学ぶことにしたのです。そして良くも悪くも何かあれば「アランだったら…」「アランなら…」とその名をよく口に出すようになったため、嫉妬的な感情からアリーナ姫に淡い想いを寄せる神官が闇落ちした可能性も否定できません。

当然のことながらアランもアリーナ姫もお互いにそんな感情は一切持っていないのですが、姫に恋する若い男でもある神官にそんな事を言ったところできつと信じてもらえないでしょう。お転婆で破天荒なお姫様と、そんな手のつけられないお姫様よりも強くてモンスターに対しても常に最前線で戦う勇者というのは神官から見れば自分よりも相応しいと思ってしまうても仕方ない事かもしれません。

まずアランにとってはアリーナ姫のお転婆など少しヤンチャなだけで可愛いものではないかもしれませんが、城を抜け出したり武闘会で優勝する程度などお転婆のうちにも入りません。仮にサントハイムの城にいる従者たちを叩き伏せて城を飛び出し、エンドール

の武闘会で優勝した挙げ句に景品としてエンドールの姫を攫ったとしても他愛無いと思うでしょう。そんなアランのため神官は何でも受け入れる度量のある男と勘違いして焦ってしまったということも考えられます。

それとも実は神官の呪いではなく一緒に旅をした商人に「武器なんてなくても敵は倒せる」と言いながら徒手空拳で戦い続けた事が悪かったのでしょうか。ちよつとした悪戯気分でもドロアアの消滅エネルギーを手に溜めて「種も仕掛けもありません」などと言いながら、その商人が必死に集めてきた武器を手のひらに刺すように見せて消したりなんてこともしていました。もしかしたらそういった行為が目により呪いのアイテム的なもので飛ばされたなんて可能性も捨てきれません。

それだけでは飽き足らず占い師と踊り子の姉妹に「占い師とか踊り子って遊び人とは違うの?」と聞いてしまった事もありました。仲間になった以上は何ができるかを確認しておくのは当然なのですが、占いや踊りと言われても戦闘に直結するとは考えられなかったため思わず言ってしまったのです。

少なくとも神官と姉妹と商人からは負の感情を向けられていそうなアランですが、そんな事は心当たりもありませんので突然の出来事に驚いてしまいました。しかしいくら驚いてしまったとはいえ歴戦の戦士でもあるアランにとってその原因を予想することなど造作もありません。

アランはソロくんたちと共にデスパレスにて地獄の帝王を倒し、その後に見れたデスピサロも倒しています。とはいえずすべての魔物を駆逐したわけでもなく、当然ながら残党だつてまだいるはずでしょう。そしてそんな残党たちが勇者であるアランに対して報復しようとするのは当然の事だと考えていました。

しかし勇者パーティを相手にするには分が悪いと考えた魔物たちは勇者であるアランだけを何かしらの方法で飛ばして、そこで待ち受けることによつて倒そうと考えただと想像したのです。

どうやらアランがいる場所は何かの祈祷の場のようにであり、そして目の前にはワニっぽい魔物がなぜか驚いた様子でこちらを凝視していました。自分で呼び出しておいて何を戸惑っているんだ…というアランの考えはさておき、その魔物は魔界の王がこの地上へと現れた後に人間界を支配する神として君臨してもらおうつもりのために人知れず暗躍しながら神を崇める一大勢力を作り上げようとしていたのです。

そんな中で日課のような祈りの途中に突然一人の人間がどこからともなく目の前に現れたのですから驚くのも当然でしょう。

「とりあえず…さっさとお前を倒してアリーナちゃんたちとの特訓を再開しないとね。勝手にいなくなつたら怒られちゃうよ」

アランにとって魔物が目の前にいて倒さないという選択肢はない上にデスピサロを



倒した仕返しだと思つたため、魔物側からすれば「勝手に現れておいて……」と言いたくなるある意味被害者なのにも関わらず呆気なく倒されてしまいました。実はこの被害者とも言えるワニのような魔物はイブールという名であり、人間たちを裏から利用して操るために『光の教団』という団体の教祖を務める魔物だったのです。

もちろんアランはそんな事は知りませんし、仮に知っていても魔物である以上倒さない理由もありません。そのため先手必勝とばかりに閃華裂光拳を叩きつけられた魔物は何も事情も理由も知らないアランによつてその企みを阻止されることになってしまいました。更にその魔物が倒れた後に、魔物が持つていたであろう指輪のようなものが床に零れ落ちたのです。

「お、何か落としていったのかな？」

そんなイブールを倒し戦利品を手に入れた後になって周りを見渡してみると、どうやらアランがいるのは地下室のようでした。アランは知らない事ですがここはセントベレス山の山頂にある大神殿の建設予定地であり、今はまだ大神殿も建設できていないため予定地だったのです。そしてこれから大勢の奴隷たちによつて大神殿が完成していくはず……だったところにアランが現れてしまい、そして教祖という立場であつたイブールは特筆する理由もなく倒されてしまったのでした。

地下室から外に出てみると確かに建設途中といった感じの建物があり、そして大勢の

人間たちが老若男女関係なく石材などを運びながら働いています。そしてそんな人間たちを魔物が使役して、罵声を浴びせたり鞭を振るったりしながら無理やり働かせていました。

「なんだ貴様は!?!どこから現れた!!」

地下室から出てきたアランを目敏く見つけた魔物が鞭を片手に叫びながらこつちにやってきましたが、状況のまったくわからないアランにとつてただの敵でしかありません。見ている人間たちからすれば鞭を振るうその魔物によって死んでいった仲間たちも大勢いたので、見覚えのない人物が現れてそんな憎き相手を倒すのを胸のすくような思いで見えています。

「俺は…伝説の勇者アラン!!」

ソロくんたちと一緒にそれなりに旅をしていたため、最近はずっかり賢者と名乗ることがなくなっていたアランは躊躇することなく『勇者』と名乗りました。シンシアちゃんなどは「ソロが伝説の勇者なの!」と張り合ったりしていました。ソロくん自身は「別に兄さんが勇者でも良くない?」と肩書に固執していない上にアランが進んで使用していることを気にしていなかったりします。

そんな『伝説の勇者』という名乗りは魔物たちにとつても、そして奴隷として働かされている人間たちにとつても驚くべきものでした。魔物にとつては『勇者』とは生まれ

させてはならない存在であり、人間にとつてはまさに希望と呼べるものだったので。  
「貴様が勇者だというのなら……今ここで貴様を倒せば問題ないな！」

「状況がよくわからんけど……とりあえず死ぬ！」

『勇者を倒そうとする』魔物と『魔物だから倒そうとする』アラン……どつちがちゃんとした目的を持つて行動しているのかというと魔物側だったりしますが、普通の人間には敵わないようなモンスターを相手にする事が多いどころかそれしかしていないアランに雑魚モンスターたちは薙ぎ倒されてしまいました。

「「勇者様が助けに来てくれたんだ!!!」」

「「勇者様バンザーイ!!!」」

今まで奴隷として働いていたはずの人間たちは魔物が駆逐されていく様子を見て喜びを爆発させ、そんな人間たちの様子を見てアランは「もしかしてソロくんたちと行っていない場所がまだあったのかな？」とまったく違うことを考えています。一応デスピサロは倒したもののもちろん魔物が全滅したわけではないので、自分たちが行っていない場所なら魔物がまだ猛威を振るっている場所があつても不思議ではないという考えからの予想でした。

アランはそのゲーム脳によってレベルやステータスなどはカンストを目指している

のですが、しかしそのゲーム脳は世界をくまなく探して旅をするほうには働いていないことによる誤解だったのです。

そんな喜びに溢れる奴隷たちの歓喜の声は、1匹の魔族が現れたことによつて急激に萎んでいってしまいました。

「ほっほっほっほっ、ずいぶんと賑やかなようですね」

そこに現れた魔族：ゲマの登場によつて再び奴隷たちは口を噤み、そして浮かべた表情は恐怖のそれではありません。もちろん一緒に現れた馬つぼいのと豚つぼいのへの恐怖も大きいのですが、その2匹の魔物に命令を下す：紫つぼいローブを身に着けた口調だけは丁寧な魔物への恐ろしさのほうに勝っていたのでした。

豚つぼい魔物であるゴンズの両脇には小さな子供が2人抱えられており、奴隷たちは「また連れ去られて来た子か：」とすぐにそれを察しています。アランはそんな事情などは一切わかりませんが、魔物が子供を抱えているのを見て攫ってきていないはずがなれと思つているので奇跡的に奴隷たちの認識と一致していました。

「神聖な大神殿の建設を邪魔したおバカさんにはお仕置きが必要なようですね…ジャミ、ゴンズ。この不屈き者をやっつけておしまいなさい」

ゲマの号令を受けジャミとゴンズが襲いかかったのですが、2対1という数的不利など無関係なアランによって返り討ちという結果になってしまいました。ジャミとゴンズも決して雑魚モンスターというほど弱いわけではありません…しかし大魔王どころか最近には地獄の帝王なども倒しているアランを相手にするには実力が足りなかったのも事実です。

アランがゴンズとジャミを倒したことで手強いと見たのか、ゲマが次に取った行動は奴隷たちを人質に取るという方法でした。これは先程連れてきた子供の親を殺した時にも有効な戦法であり、アランがわざわざこの場に現れ部下たちを倒した人間ということは人間たちを救出しに来たというのは明白だからです。

「ジャミ、ゴンズ。今のうちにやっておしまいなさい」

このゲマの卑劣な策略によって命を落とした父親…パスと同じ結末を辿るだろうと下卑た笑いを浮かべていたゲマだったのですが、そこからアランは躊躇するどころか余計に強くなったかのように再度立ち上がったジャミとゴンズを倒してしまいました。

そして奴隷たちの首に死神の鎌を当てているゲマにまで高速で近づいて殴りかかっ

てきたのです。

労働力である奴隷をわざわざ減らさないとでも思っているのか…と、迷いなく攻撃してくるアランに「これは脅してではない」という事を知らしめるために奴隷の首を掻き切って見せるゲマ。奴隷たちに大きな悲鳴が上がり「これで少しは動揺するでしょう」と内心シメシメなゲマだったのですが、目の前にいる存在はそんな事で動揺するよ  
うな人物ではなかった事がゲマの敗因でした。

「……………」

「もう聞こえてないだろうけどさ、伝説の勇者を甘くみないほうがいいよ」

アランにとって目の前にいる人質など人質足り得ないとも言うかのように…まったく動揺どころか目もくれない戦いに、精神的優位に立ったと思っていたゲマのほうが反対に押されてしまったのです。そしてゲマはそのまま武神流の奥義によつて破壊され、その場にいた魔物たちは1匹残らず倒されてしまいました。

アランの捨て台詞のような言葉を聞き…奴隷だった人間たちは喜びよりも先に恐怖が湧いているのですが、下手な事をすれば何をされるかわからないため動くに動かせ

ん。この場に伝説の勇者が来てくれたのは自分たちを助けるためだと思っていたのに、人質を見殺しにされてしまったてはそう思うのも仕方ないことでしょう。

「んじゃ殺された人を生き返らせとこうか」

一応「人質として殺されたのは可哀想かな」ということで、見殺しどころか巻き込んでおいて後から蘇生させるアラン。巻き込んだのはゲマなのですが、アランに対する人質だったのでアランが巻き込んだと言えなくもないからです。

しかしアランの考えとは裏腹に、人間たちはそこで奇跡を目にしました。

奴隸として魔物に使役され、恐怖によつて支配された毎日：それが伝説の勇者によつて解き放たれたのです。そして人質として命を落とした者には再び生を与えられ、奴隸にされていた人間たちはまさに自由を取り戻したのでした。

更に魔物によつて殺され、捨てられる予定だった仲間たちの蘇生を頼んでみれば：勇者の奇跡によつて二度と会えないと思っていた仲間が蘇つたではありませんか。先程までの恐怖は一体どこへ行ってしまったのか：人々は歓喜に涙し、そしてアランが現れた奇跡を神に感謝するのです。

なおアランが人質以外の死者まで蘇らせたのは慈悲でも何でもありません。

奇跡の熱によって浮かされた奴隷たちの頼み込んでくる目が血走っていて怖かったので「ま、まあそれくらいなら別にいいかな」と、珍しく押され気味だっただけでした。あとポロポロの死体を抱きかかえて近づいて来られるのがちよつとだけ怖かったという理由もあつたりします。

きつとこの光景を見たらアバンやバランたちだって一步引いてしまふに違いありません。フローラ女王やソアラ王女などが見たら卒倒してしまうのではないでしょうか。

「とこころでさ、こつこつてどこなの？」

ようやく落ち着きを見せてきた奴隷たちに現在の場所を聞き、セントベレス山の頂上ということがわかりました。しかし地名がわかってもアランの知識にそんな地名は存在せず、光の教団という名も聞いたことがありません。更に奴隷たちが言うには「光の教団は世界中に信者がおり、今も真実を知らず信じている者たちが大勢いる」ということでした。

アランにとってはよくわからないしどうでも良い事だったので、この場にいる人間たちは自分たちを解放してくれたアランの手助けをしようと言い出し：光の教団は名を改め『奇跡の教団』として新しく生まれ変わり勇者を支援するということになつて



しまったのです。そしてもちろんそのトップに立つのは勇者であるアランなのですが、かつてリンガイア王国でも似たようなことになって面倒だったアランがそれを受けるわけがありません。

「みんな聞いてくれ！これらの事は俺だけの力じゃないんだ！実は天女フロローラ様のおかげだったんだよ！」

リンガイア王国でやらかして、フロローラ女王から小言まで言われているのに同じ事を繰り返すアラン。よくわからない土地だしバレないだろうというアランの浅はかな考えによって、偶像の聖女フロローラ様がここに誕生したのです。

これにより奇跡の教団は聖女フロローラ様を祀り、そして勇者アランがその声を届けるという意味のわからない教団として再スタートを切ることになりました。奴隷から解放された人間たちはそれぞれ自分たちにできることを考え、建設予定だった大神殿をそのまま建設する者や奇跡の御業を布教するという者など細かく役割を決めて動くことにしていたのでした。

「これできつとソロくんたちにも俺のいる場所がわかるだろ」

なぜか盛り上がっている人間たちと自分との温度差を感じながらも、我ながら名案を

思いついたものだ」と自画自賛のアラン。旗頭にされるのは何となく嫌だけど、自分の名前が広がればそれを聞いたソロくんたちがやってきてくれるだろうと考えたのです。そしてそれはそれとして当然のようにフローラ女王の名前を使用しているのです。

フローラ女王がこれを知ったらどうなるのかはわかりませんが、確実に説教だけでは済まないでしょう。とはいえフローラ女王に見つかる可能性は低いと思っており、それがなんとなくわかつているからこそ出た言葉なのかもしれません。

そんな中、1人の子供がアランに近づいてきました。青紫っぽいターバンとマントを身に着けた小さな子なのですが、その目には強い光を宿しており何かを決意しているのは間違いありません。

「勇者様、どうかボクを強くしてくれませんか」

「…よくわからないけど、魔物に拐われてきたのならお家に帰してあげるよ?」

その子供…リユカくんというまだ小さな子は拐われる前、ゲマの手によって父親を殺されてしまったということでした。そして父の仇であったゲマをアランが倒した強さに感動を覚え、しかもそれが伝説の勇者だと名乗っているということで「この人に鍛えてもらえば父さんのように強くなれるかも」という希望を持ったのです。

父親の最後の言葉…父さんの代わりに自分が母さんを探し出すために…

本来ならさっさと家に帰するのが正しいのでしよう……しかしアランはリュカくんの目にディーノくんと同じ輝きを見ました。純粹でありながら力強い光を宿す目に懐かしい思いを感じたアランは、ひとまず「勇者様」という呼び名を訂正しつつ了承するのでした。

ソロくんたちがどこにいるのかわかりませんが、アランにとつてはリュカくんのお母さん探しのイベントを進めていったらそのうち何かわかるだろう……というとても薄っぺらい理由でしかありません。

…

…

…

場所がセントベレス山の山頂という不便な場所ということもあり、また奴隷から解放された人間たちから「もしかしたら魔物たちがまた襲ってくるかもしれない」という不安からの頼みで1年と少しほど逗留していたアラン……ある日リュカくんから「1度サンタローズに戻りたい」と言われたアランは奇跡の教団の連中に後を任せ、そしてどうし

でも同行したいと言いだしたヘンリーという少年も一緒に連れて行くことにしました。リユカくんにとつてはゲマに敗れたことで二度と戻ることができないかもしれないと思っていた故郷だけに喜びは一入のようで、しかしそれを見るヘンリーのほうは悔恨の思いを抱かずにはいられませんでした。

ヘンリーにもヘンリーなりの思いがあつたにせよ、パパスが死んだ原因は自分の行動にあつたという後悔がずっと消えなかつたのです。ラインハットの王子であるヘンリーにとつて王城での生活に複雑な思いがあつたのは確かだったので、だからといって自分を助けるために来てくれたパパスとリユカがこんな状況になつてしまった事を思えば申し訳無さしかありません。

それでもアランがゲマたち魔物を倒してくれたことで奴隷として無為な時間を過ごすような事がなくなつたのは幸運な事でしょう。子供である今の自分たちの力を考えれば最低でも10年くらいは奴隷として働かされていてもおかしくなかつたのですから……

そんな後悔などを滲ませている表情のヘンリーにまったく気付かないアランはとうとうと、どうやってサンタローズという場所に行こうかと悩んでいました。相変わらずルーラが不調でカール王国を思い浮かべても発動せず、ならばとソロくんたちの村やエ

ンドールなどを思い浮かべてもやっぱり発動してくれないのです。

仕方なくいつも通り飛んでいくことにしたアランはその旨を告げ、リュカくとヘンリーを抱えて山頂から飛び立つ構えを見せたところで2人の子供は気づきました。これはマズイやつでは……と。

「勇者様……まさかここから飛び降りるんじゃないですよね……」

「飛び降りるなんてするわけじゃないじゃん。ただ飛ぶだけだよ。あと俺はアラン兄さんね」

「アラン兄さん、それなにもかわらないんじゃない？」

ここセントベレス山は人間の足で辿り着けるような高さではなく、そしてその山頂ともなれば世界を一望できると言っても過言ではないほどの高さを誇っています。本来ならばそんな場所を行き来するのであれば、例えばドラゴンの背中に乗るなどの常識では考えられないような手段を講じなければならないほどの場所なのです。

ここから飛び降りれば待っているのは死であり、そんな事は子供であろうと簡単に想像することができました。そして自分たちを抱えている恩人は背中に翼があるわけでもなく、見た感じ普通の人間にしか見えません。

そんな不安や落ちる事への恐怖でいっぱいだった2人ですが、その次には感動と興奮の表情へと変わっていました。

「ふわあくすびい…」

「え…？空飛んでる…？」

力の限りアランにしがみついていた子供たちも遙か上空から見渡す景色に心奪われたのか、不安などが消え去り今まで見たことのない光景に感動しているようでした。素直に感動しているリュカくんと違って空を飛んでいることに疑問を感じているヘンリーもいますが、こちらは景色よりも飛べることに驚いているのでしよう。

強力な魔物たちを1人で倒し、死んだ人を生き返らせ、空まで飛べるという事実は2人の子供の頭に『伝説の勇者』の凄さをしつかりと刻み込んでいるようです。アランにとつては日常の移動手段ではないトベルーラなのですが、当然ながらソロくんたちだけでなくこの世界でも使い手など存在しません。

しかしアランはこの『飛んでいる事を驚いている』のは子供だから高いところが好きという認識でしかありませんでした。何せ自身の子供がいなくても子育て経験の豊富なアランなので、デイーノくんやシンシア王女たちを筆頭にトベルーラによる散歩はいつもの事だったのです。そして高いところが好きな子供たちだったのでよくせがまれていたりもしました。

そのため今回も似たようなものと微笑ましく見ており、事実今だけは2人の子供も悲しい出来事を忘れ目の前に広がる壮大な景色に心奪われていたのです。

そんな感動の一幕が終われば、次にやってくるのは悲劇だとも言わんばかりにアラたちを迎えてくれたのは歓迎ではなく戦いでした。サンタローズの村へと向かっていたアラたちですが近くまで来てみれば明らかにその村は攻め込まれており、しかも襲っているのは魔物ではなく人間の兵士にしか見えません。更にその兵士たちはラインハットの兵士であり、理由はわからないまでもヘンリーにとって自国の兵士がリユカの故郷を襲っているのは間違いありませんでした。

「どうしよう……このままじゃ村が……」

「おいーやめるんだー!」

今にも泣きそうなりユカくと兵士たちを必死に制止しようとするヘンリー。しかし村を襲っている混乱はそんな小さな声などかき消すかのように届くことはありませんでした。この兵士たちもまたラインハット太后の命令によつて苦渋ながら攻め込んでいたのです。彼らにも家族があり、兵士たちは国よりもまず家族を守りたいという思いを持っている以上命令に反逆するような真似はできませんでした。

「2人ともよく見ておくといいよ。相手が話を聞いてくれないときにどうすればいいかを……ね」

何もできない2人に対してまったく焦ることなく対話の仕方を見ておけというアラに多少の苛立ちを感じるも、リユカくんにもヘンリーにもこの場をどうにかする方法

など思いつかない以上アランに頼むしかないのです。アランのほうも言葉でどうにかできる状態でない以上、やれることはそんなに多くありません。

2人をその場に残してトベルーラで村の中心へと移動し、右手にプラスの魔法力を集めていけば…それは炎となり、そしてその炎は鳥の形へと姿を変えていきました。まるで神の御使いとでもいうような…神々しい火の鳥の鳥の顕現に兵士たちも言葉もなく見つめることしかできず、さきほどまで木霊していた悲鳴や騒音が一転し静寂が辺りを包み込んでいます。

本当はアランとしてはギガデインを放って登場したかったのですが、残念なことにアランはギガデインもライデインも使用することができません。そしてそれ以外に強力な呪文となるとメドロアになるのですが、これは殺傷力が高すぎて『村人たちや兵士たちを含め皆殺しにすることで争いを止める』というどこかの汚染された聖杯に平和を願った時のような結果になりかねなかったのです。

そこでアランの脳内に出てきたのはかつて戦ったバラモス梓こと大魔王バーンでした。

大魔王バーンはメラゾーマを火の鳥の形にして見た目にも拘っており、相手を倒すことしか考えないアランにはない発想だったのは確かだったのです。バーンと戦っていた時は意味がわからず混乱してしまいました。後になって振り返ってみれば巨大な火



の鳥は視覚効果は抜群なため、そして何より「火の鳥ってカッコいいかも」という理由でアランもこっそり魔界などで練習していたのでした。

「その想像を絶する威力と優雅なる姿から、太古より魔界ではこう呼ばれる：カイザーフェニックス！」

兵士たちにとつては攻め込んでいる村の中心に突然飛び込んできて、巨大な火の鳥を作り出したと思つたら「魔界では：」などと語りだす人物に戸惑いしかありません。しかしその巨大な火の鳥が危険なものであることは一目瞭然であり、アランの乱入で争いが一時的に収まったのは確かでした。

「お前たち！一体何をしているんだ!？」

その静寂を破るようにヘンリーの叫びが兵士たちに届き、そしてヘンリーの存在を認めることでやっとラインハット太后の命令によつて攻撃していたという事を知ることができました。その理由も『ヘンリーが行方不明になったのはパパスのせい』というものであり、原因はすべてラインハット太后であるという事を知ったのです。更に追い打ちをかけるようにラインハット王は少し前に亡くなつてしまったという事で、現在は異母弟であるデールが王に即位したものの、まだまだ幼少の子供には荷が重いと実際の実権は太后が握つているということでした。

ヘンリーはリュカくんへの償いも含め一緒に旅をするつもりでいたのでラインハッ

トに戻らないつもりでしたが、そんな話を聞いてしまつては自分の勝手な都合で何もしないというわけにもいきません。もし仮にヘンリーが行かなくてもアランが行くので何も結果は変わらないかもしれませんが、それでもヘンリーの有無はラインハットの被害のほうに大きな影響を及ぼすでしょう。

…

…

…

本来ならば兵士たちで固められた城内に簡単に入ることができないため抜け道を通つて潜入するつもりだったヘンリーでしたが、アランの「王子だったら堂々と自分の城に戻つてみせろ！」という言葉を受け自分のあるべき立場と役目を思い出しました。正面から堂々と…そして力尽くで突破する様子は敵襲でしかありませんが、自分の家に戻るのに許可などいらん！とでも言うような佇まいに兵士たちは手を出すことができません。

「そなたたち、一体どこから…ぎやつ！」

そしてそのまま玉座へと突き進み、自分たちを見て驚き慌てる太后をアランは問答無

用の会心の一撃でぶっ飛ばしてしまつたのです。

これにはヘンリーやリユカくんだけでなく、その場にいた兵士や大臣たちの誰もが驚きました。

行方不明の王子が無事に帰還したことでラインハット太后の行いを諫めてくれるものだと思つていたところに、まさか何も言わずに鉄拳制裁とばかりにいきなりぶん殴るなど考えるはずありません。ヘンリーのほうもいくら自分を疎ましく思つていた相手であろうと命まで奪うつもりはなく、轟音を響かせて勢いよく壁までぶっ飛ばすというアランの突然の暴走とも言えるような行動をただ見ている事しかできませんでした。

アランとしては今までに聞いていたヘンリーの境遇やサンタローズで兵士たちから聞かされていた太后の評判の悪さなどを考え、とりあえず思い切りとは言わずともぶん殴つておこうというつもりでした。とはいえ当然殺すつもりなど皆無ですし、ヘンリーの義弟であるデールという幼い子供もいるということでは会心の一撃ならぬ改心の一撃のつもりだつたのです。

しかし今まで魔王ハドラーや大魔王バーン、天界では竜の神の力を吸収した魔の神に地獄の帝王エスタークという数々の強敵と戦つてきたアランの一撃は並の魔物や人間には重すぎるということを自覚していませんでした。ラーハルトと模擬戦を行つてその身を貫いているというのに、まったくその経験を活かせていなかったのです。

壁にぶつかつた後に音もなく崩れ去りピクリとも動かず横たわる太后を全員が見ている事しかできませんでしたが、後妻とはいえ王族の殺害など即処刑になつても不思議ではないほどに重罪なのは間違いないありません。何よりもまずは即刻捕まえるべきなのでしょうが、しかしこれによつてアランたちが牢屋に入れられるような事にはなりませんでした。

理由はたつた一つ：アランが殺したと思われた太后の死体が人間ではなく醜い魔物の姿へと変わつていったからです。今まで誰も気付けなかつたのですが、実はラインハット太后は魔物が姿を変えたものだつたのでした。更に太后を殺したと思つていたアランが実は『伝説の勇者』であり、自分たちも魔物の手から助けられたのだとヘンリーから知らされたことで疑念が一転し讃えられることとなりました。

勇者の眼は真実を見抜く：魔物による策略を打ち破つたアランの行動は後の世にそう吟遊詩人たちに謳われることになり、更に魔物に取つて代わられた本物の太后を見つけることもできたためラインハットには明るい空気が流れています。

城下の人々は知らないことなのですが：実は本物の太后は牢屋に幽閉されており、しかし本物の太后なのかを見定めることのできなかつたラインハットの面々は偽物の太后を見破つたアランに本物かどうかの判断を頼んだのです。何せ城の大臣などから言わせると「魔物の側から考えれば本物の太后を生かしておく必要などまったくなく、牢

屋に入れておいて見つかる可能性を考えればむしろさつきと始末しておくほうが普通だろう」という事からでした。そう考えれば万が一表に立っているニセ太后が見破られた場合の保険として、更にニセ太后を牢屋に入れて二段構えで準備しておくと言われたほうが魔物らしいとも思えたのです。

とはいえそんな事を言われてもアランだつて見るだけで本物か偽物かをわかるはずもありませんが、それはそれとしてそこまで複雑な策略を魔物たちが行うとも思えませんでした。

この場でヘンリーの異母弟であるデール幼王が「不思議な鏡の伝説を読んだことがある」と言ってくればよかったのかもしれないが、まだまだ幼い年齢のデール王にそんな事を言えるはずもありませんでした。母親が突然殺されたと思つたら実は魔物だったという衝撃だけでもかなりのものなのに、そこに自分は本物だという母親が現れたなど幼い少年にとっては状況を頭で整理するだけでもいっばいいいでしょう。

もしここにアバンがいれば何か良いアイデアを出してくれたかもしれないませんが、真実を映し出すラーの鏡の存在をすっかり忘れているアランが出した答えは「殴つたらもとの姿が戻ったのなら同じ事すればいいんだ」という短絡的なものでした。つまり本物の太后は一度アランの手にかかつていたのです。とはいえ魔物のように命を落としたわけではなく、ただ偽物と同じように殴られたというだけです……

やっと助けが来たと思つたら偽物を疑われ、そして本物が確認するという理由でアランの拳を受けた太后：ほっぺを引っ張る的方法で平和的に確認する方法など誰も思いつくはずもなく、アランの拳は太后の鳩尾に突き刺さることになってしまいました。そこにはヘンリーの件を聞いていたが故にお仕置き的な意味も込められていることを太后自身は知る由もありません。

今まで暴力に晒される事もなく生きてきたはずの女性がアランの一撃に耐えられるはずもなく、地獄のような苦しみに様々な液体を撒き散らしながら蹲つて自らの行いを後悔する羽目になってしまったのでした。一応偽物じゃないだろうというアランの憶測があつたので十分に手加減はされているのですが、それでも心を折るのには十分すぎる一撃によつて本物の太后であると認められることとなつたのでした。

こうしてラインハットの乱は勇者の手によつて解決し、ヘンリーはラインハットに残りデール王の補佐をしながら協力して国を良くしていくという事になりました。まだまだ子供である2人ですが特に蟠りなどはないようで、むしろ今のこの状況を乗り越えるためにも兄弟で力を合わせていけないと感じたのかもしれない。それだけでなく魔物が太后に成り代わっていたり、父親が知らない間に亡くなっていたことなど思うところがあつたのでしよう。決して「自分程度ではアランについていけない」などと諦

めたわけではないはずだ。

アランにとつては『よくある展開』であろうと当事者たちにとつては他人事ではありません。何せラインハットが水面下で魔物によつて支配されていたという事実は「他の国でも魔物の手が及んでいるかもしれない」という懸念事項にもなつたのです。更にこのラインハットは王が死去し太后が魔物だつたことで、残された王族は幼い王と義兄である少年だけとなつてしまいました。

本物の太后は生きていますが、アランの中の太后像は「自分の実子を王にするためにヘンリーを行方不明にするような外道」となつているため信用などあるはずもありません。本物の太后と魔物がどこですり替わつたのかわかりませんが、いつまた太后が変心しヘンリーを疎ましく思い排除しようとするかだつてわかつたものではないのです。そのためアランはしばらくリユカさんと一緒にラインハットでヘンリー兄弟の子守りしてあげることにし、そして「君たちもこんな風になれよ」という意味も込めて自分の中でよく知る立派な王族たちの話を聞かせてあげるのです。

今回加害者でもあり被害者でもあつた太后本人はアランの行動によつて既に心が折られており、自らの行いによつて国を危機に陥れたという事以上に地獄の苦しみを味わつたというのが大きいようでした。そのため国政に口を出すどころか、アランの前に現れることはなくなつてしまつたのです。

しばらくはラインハットで逗留しつつ子供たちにアラン式の教育をしていたのですが、ラインハットの問題を解決したその顛末を「サンタローズの村人たちにも知らせたい」というリユカくんの希望で報告に戻り「もう問題ないよ」という事を伝えました。するとその際に村人たちからパパスはよく川沿いにある洞窟へと向かっていたことを聞かされたのです。

そしてその言葉に従い洞窟へと入ってみると、そこには一本の剣が刺さっており隣には手紙も置かれていました。

その手紙はパパスからリユカくんへと宛てられた手紙であり、中身は『自身の妻でありリユカの母であるマーサが魔界へと連れ去られた』ということだったのです。そして『魔界へ行くためには天空の武具を身に着けた勇者が必要』ということも合わせて書かれています。

アランはパパスの事をまったく知りませんでした。リユカくんが幼少期からパパスと一緒に旅をしていたのはリユカくんのお母さんを探すための旅だったということだったのです。残念ながらパパスはゲマの卑劣な策により最後は炎に焼かれて他界してしまいましたが、パパスが探していた伝説の勇者が自分を助けてくれて一緒にいてくれる事にリユカくんは父の導きではないかと物思いに耽っていました。

確かに光の教団での出来事やラインハットでの出来事を考えれば、アランはまるで不



思議な力でもあるかのように向かう先向かう先で人心を集め得ていると言っても過言ではありません。リュカくんの中で圧倒的なまでの力で魔物を倒し、人々を慈しむ心によつて失った命すらも取り戻してみせるアランの光景はまさしく伝説の勇者に相応しいものに見えているのです。

しかし残念ながらそれらはリュカくんの勝手な思い込みに過ぎません。

アランは手紙の内容を聞き「魔界に行くのにそんなのいらなかつたけどなあ……」と、天空の武具が必要という部分に関して疑問に思っていました。これが『ロトの剣』などであれば「そんな設定なんだ」と持つて行ったかもしませんが、見た感じ明らかに戦闘に向いてなさそうな儀式用っぽいやつなど欲しいとも思いません。

しかしその戦闘に向いてなさそうという部分がアランにヒントを与えてくれたのです。この天空の剣というのは戦うためにあるのではなく、一種のイベントアイテムなのではないかと閃いたのでした。つまりこれはラーミアを復活させるためのオーブと同じような位置にあると思えば、パパスの言う『魔界に行くために必要』というのは非常に理解できるものです。

とはいえアランは剣を使わないため「この剣はリュカくんが持っているといいよ。きつとお父さんもこの剣を通して見守ってくれてるはずさ」という……リュカくんにとつて伝説の勇者だと思っているアランがある意味剣を自分に託すような事を言い出した

のです。

アラン兄さんが持っていたほうがいいんじゃないかと内心思うものの、リュカくんのほうもアランがそう言っているのなら強く反対することはありません。アランが武器を使っているところすら見たことがないため「伝説の勇者ともなると強すぎて魔物と戦うのに剣すら必要ないってことかな」と明後日の方向で納得していたのです。

ひとまず刺さった状態の天空の剣にパパスの冥福の祈りを捧げ、ルーラで行けない魔界に行くために天空の装備というものを探すことにしたアランたち。情報を集めようにもどこに行けばいいのかわからなかつたため、ひとまず奇跡の教団と名を改めたセントベレス山の山頂へと戻ってみることにしました。そこならば協力的な人間しかいないため、何かしらの情報を得られるかもしれないと思っただけです。

「勇者様、おかえりなさいませ!!」

「「「おかえりなさいませ!!」」」

ほんの少しばかり留守にしていただけだというのに、戻ってみれば大神殿の建設は着々と進んでいる上に盛大な出迎えを受けてしまいました。確かにラインハットでもそれなりに時間を過ごしていましたが周囲を見渡してみれば明らかに人が増えており、

歩いてではやってこれないだろうというこの場所にどうやって人が集まったのか疑問しかありません。

そして更にラインハットでの出来事はもう彼らの耳に届いているらしく、アランが太後の正体を見破って打ち倒したという事も知っていました。しかしやはり魔界への道などについては何か知っている者など当然おらず、ならば『天空の防具』について聞いてみれば「この神殿の横に不思議な鎧がありましたよ」との事で何もせずに天空の鎧を手に入れることができました。

その後「世界中から情報を集めるので少しだけお待ちを」ということでリュカくんを鍛えつつ待つてみることにしたアラン。その姿に今まで育ててきた子供たちの事を思い出し、きつと今頃変わりなく元気にやっているだろうと少しの寂しさを感じつつも日々を過ごすことにしました。

しかしアランは知らない事だったので、この『奇跡の教団』は現在進行形でものすごく勢力を伸ばしていました。その活動内容は『勇者の支援』であるため平和な教団なのは間違いないのですが、勇者に助けられ奇跡を目の当たりにした人たちの熱心さは狂信と呼べるほどのものだったのです。

そこにラインハット事変が起こり、魔物に支配されていた国を救ったという英雄譚は人々に大きな希望を与えることになったのでした。そして魔物によって失ってしまっ

た命すら蘇らせるという奇跡の御業を求めてセントベレス山に登る者たちも多く存在したのです。

彼らは蘇らせたい者を死体を背負い、過酷な道のりを進む事を試練だとすら思っていました。そしてそれらを乗り越えた先に神の慈悲があるのだと思えば、もう二度と会えない者との逢瀬が叶うのだと思えば道なき道などどうということはありません。

現在アランの前に列を作り、死体を抱きながら必死に懇願する者たちはそうやってセントベレス山に登ってきたのでした。

「勇者様！何卒我らにお慈悲をお与えください！」

それを聞いたアランは「生き返らせて欲しいのなら教会へ行けばいいのに……」などと思っていました。それが同時に「勇者パーティでもなければ生き返らせてもらえないのかも……」ということも考えに浮かびました。

マトリフやブロキーナが死んでも王様の前で蘇ることはなく、リングイア王国でヴァアくんを生き返らせたただけであそこまで騒動になったくらいです。ソロくんやシンシアちゃんの村でも村人たちが魔物にやられて生き返らせた時も確かに同じような反応でした。そう考えればここにわざわざ蘇生を頼みにやってくるのも納得というものです。

勇者たちを蘇生させたりしているのが神なのか精霊ルビス様なのかわかりませんが、

少なくとも誰でもというわけではなく選り好みしているのは間違いありません。

とはいえ少々大袈裟ではありますが歓迎してくれますわけですし、更に自分たちが求めている情報も世界各地から集めてくれるというのであれば手間賃代わりに動くことに否やはありませんでした。アランの蘇生呪文によつて涙ながらに生き返つた家族や友人などに縋り、そして喜びの表情でお礼を言つていく様子を見ていたリュカくんは「これこそ勇者様」と歪んだ勇者像を作り上げています。

そしてアランどころかリュカくんも知らない事なのですが……こうして慈悲を受けた者たちが更に各地に広がっていき、奇跡の教団の名が広まっていくという悪循環を作り出していたのです。

## ドラクエ5に行ってみた2

「勇者様、天空の兜なる物の在り処がわかりました」

「現在それを勇者様に献上するよう伝えておりますので、今しばらくお待ちくださいませ」

「思ったより早かったね」

大神殿も順調に建設が進んでおり、まるで玉座のような椅子に座りながら報告を聞いているアラン。決して本人の意思ではないのですが「伝説の勇者様たるものそれに相応しくいてもらわねば…」というありがた迷惑な主張によってここに座っているのだ。

そして臣下のように傅きながら話をしているその中身も『魔王とその手下』のような内容であり、もはや「勇者どこいった？」と言われても仕方ないような状況になっています。恐らく魔物たちもこういった感じに「天空の鎧を手に入れました」などと言っていたのでしよう。

客観的に見れば悪の組織以外の何者でもないと言えるくらいな状況なのですが、アランも報告している人間もそんなつもりはまったくなくただの状況報告でしかありません。奇跡の教団は自分たちを助けてくれた伝説の勇者アランを支援するために動いています。アランにとつては奴隷から解放してあげたとはいえ基本的に善意でやっつけているだけだと思っています。

もともと『光の教団』というのは「教団の教えに従えば光の国へ辿り着ける」というのが謳い文句であり、つまり魔物の脅威を筆頭に様々な苦境から逃れたい人たちの寄り辺として作られたものでした。その中身は魔物が作り出した自作自演のようなものではなく、現在は魔物は排除され今となつては伝説の勇者の下という…そこにいれば安心できる場所というものへと変貌しています。

そしてそこで勇者のために神殿を建設したり、祀っているフローラ様に感謝の祈りを捧げたりとよくわからない活動をしていました。

そこにアランから「天空の防具知らない？」と聞かれれば、それは遂に自分たちが勇者様の役に立つ時が来たのだと思ひ至るのも仕方ありません。まさに「今こそ我らの出番！」だとしても言いたいかのようにあれよあれよと話が伝わっていき、世界各地で天空の防具探しが始まってしまったのです。

そして人の口に戸は建てられないとでもいうように着々と様々な情報が奇跡の教団

へと集まっていき、ポートセルミという港町からそれらしい兜の情報の流れってきたということでした。そしてそれがアランたちの探している天空の兜であると確信を得たため報告してきたのです。そこまでの情報網なので、もし天空の剣の場所を探してもらったら「サンタローズに流れる川の上流に洞窟がありそこにそれらしい剣があるそうです」という答えが返ってきていたかもしれません。

報告してきた人間が言うには天空の兜の在り処というのはテルパドルという大神殿のある場所から南のほうにある国の事らしく、更にその王家は勇者が現れるまで天空の兜を保管しているらしいということでした。そしてそれを勇者に捧げるべく伝えたいのですが、どうやら先方は「勇者に直接渡す」ということで譲渡を拒否しているらしく難航しているようです。

この対応は至極当然のものであり、突然見知らぬ人間がやってきて「あなたの所にある宝物の持ち主が見つかったから渡せ」と言われて渡す者はいないでしょう。

このテルパドルは現在女王アイシスが治めており、代々に渡って不思議な力を継承する王家の予知能力によって天空の兜を保管し来るべき伝説の勇者へ渡すことを使命とすら思っているのですから簡単に手放せるはずありません。過去に伝説の勇者が天空の兜を装備していたのかはわかりませんが、その予知能力で見たということもあり疑いなど持っていないということでした。そしてそんな予知能力を信じているからこ



そ本物の伝説の勇者ならば使命を果たすために渡すことはあっても、どう見ても勇者ではないただの人間が「勇者に渡すため」と言っているだけの状況では「はいどうぞ」とはいかないのです。

「それなら俺が行ったほうが早いね」

「いえいえ、このような事は勇者様が動くまでもありません」

「いや勇者に直接渡すって言ってるんなら俺が行ったほうが早いでしょ」

事情を聞いたアランは「このまま待ってても仕方ない」ということで、周囲が止めるのも聞かずにリュカくんを連れてテルパドールへと向かうことにしました。向かう先は砂漠の国ということで船で移動する必要がありますのですが、今までまともに陸上すら移動していないアランたちは相変わらず身軽な空の旅を楽しむかのようにセントベレス山から飛び出すのでした。

「アラン兄さん、ボクも空を飛べるようになるかな?」

「ルーラを使えば似たようなものだって言ってたから、リュカくんもそのうち使えるようになるんじゃない?」

アランに背負われながら移動しているリュカくんはどうやら自分でも飛んでみたいと思っているようで、眼下の広大な景色を眺めつつそんな質問をしています。もともとパパスに幼少期から連れ回されていたリュカくんは博識なほうではなく、アランが当た

り前のように空を飛んでいるのでそう思うのも仕方ないことでしよう。

しかしこの世界ではルーラは一般的な呪文ではありません。もはや失われた古代呪文としてその名が一部に残っているのみであり：もしかしたらどこかにそんな古代呪文を研究している人物もいるのかもしれませんが、リュカくんが覚えたいからと簡単に覚えられるものではありませんでした。

更にこの世界にトペルーラという呪文は存在しないためただの移動手段として空を飛んでいるという事が既に非常識な事なのですが、パパスを失い魔物に拐われた立場であるリュカくんはそれを知ることができなかつたのです。

「お、あれじゃないかな？」

本来砂漠の上を移動するというのは危険を伴うはずが、空を飛んで探すという事で簡単に見つけることができました。周囲が砂しかない中で小さな湖とでも言うべきオアシスっぽい場所があり、それに隣接するように石造りの宮殿っぽい感じの建物があるので恐らく間違いないでしょう。

このテルパドルという国の女王であるアイシスは不思議な力を持っているとの事で、現在は「伝説の勇者が現れる」という言葉が伝えられているということです。そして女王は現在城の地下にある庭園にいるということ、アランたちはひとまず女王に会ってみることにしました。

「ようこそいらつしやいました旅の人、私がこの国の女王アイシスです」

「伝説の勇者アランです」

「リユカです」

堂々と伝説の勇者を語るアラン：この場にシンシアちゃんがいればきつとまた『ソロクんとどつちが伝説の勇者か』議論が勃発していたことでしょう。アランのその発言を受けてアイシス女王もじつとアランの顔を見ているますが、その表情は疑いというよりも見定めるかのような目をしていました。

「あなたには何か：不思議な感じがしますね。そちらの子供のほうもですが：」

どうやらアランだけではなくリユカくんまで不思議対象になつていようで、アイシス女王にとって普通の人間とは違う気がする2人ならばどこかに案内してくれるという事です。そして宮殿の離れの地下へと入つていき、そこには墓石のような石版とサークレットっぽいものが置かれていました。

「ここは勇者様を祀っている場所：お墓ではありませんが、いずれ現れるであろう伝説の勇者様が天空の兜を探し求めた時にと建てたのです」

そんな説明の後に「かぶつてみてください」と言われたので兜という名のサークレットっぽい天空の兜を装備してみたアランでしたが、鉛のような重さの天空の兜はアランを伝説の勇者とは認めていないようでした。本来であればその重さに満足に動くこと

すらできないのでしよう。そして「やはりダメでしたか……」となり天空の兜とアイシス女王は伝説の勇者を待つはずだったのです。

しかし腐つても歴戦の賢者であるアランにとつて普通の人間が動けない程度の重さの装備など「使い勝手の悪い装備だなあ」程度のものでしかありませんでした。アバんだつて生身で大きな岩を抱えて歩いたりできるくらいの膂力を持つていましたし、そして何よりアランは今までもとにも鎧や兜などを装備したことがなく天空の兜の重さも「こういうもの」として認識してしまつたのです。

「装備できて……いるのかしら？」  
「ちよつと重いくらいでモンスターと戦うのに支障はなさそうだね」

装備の重量で落ちた素早さはピオリムで補えば良いとでも言うように、その場でいくつかの動作をしながら感覚を確かめているアランを見てアイシス女王は悩んでしまいました。今まで自分を含め天空の兜をかぶつてみた時には非常に重くて、とてもではありませんがこれを装備して戦う事などできないと思わせるものでした。

しかしアランは天空の兜を装備しながらも自分たちよりも遥かに身軽に動いているところから天空の兜に認められたと考えられないこともありません。何せアイシス女王だつて伝説の勇者に会つたことがあるわけでもありませんし、その伝説の勇者が装備したら天空の兜がどんな感じになるのかだつて知らないのです。

「……すべての装備を集めてここにいらつしやい。その時はこの天空の兜をお渡しいたします」

そのためののか悩みに悩んで最終的にアイシス女王が出した結論は「天空の装備全部集めてきたら渡すよ」というものでした。アランとリュカくんには何か感じるものがあつたのは事実ですが、果たしてこれで正解なのかという疑問な部分も残つていたため折衷案として出されたものだったのです。何せ最近では「勇者様に天空の兜を献上せよ」というような人たちはテルパドルにやってきており、勇者の出現という予言を利用して勇者の名を騙つた何者かがいるのではという疑念がアイシス女王の中にありました。

そこに間を置かずにアランたちが現れたのですから、アイシス女王としても慎重な姿勢になつてしまつても仕方ありません。つまり良かれと思つて行動してくれている奇跡の教団の活動が裏目に出てしまつていたのです。

「剣と鎧は持つてるし、あとは盾だけだから別にいいかな」

現在アランたちの手元にはないのは兜と盾だけであり、盾を手に入れれば兜ももらえるというのであればわざわざ文句を言うこともありません。更にアランは「場所もわかつたし、何なら勝手に持つていけばいいや」というゲーム思考で考えてすらいました。一応この離れに入るためには鍵のかかった扉を開ける必要があるのですが「鍵がかかつているなら扉のほうを壊せばいい」という事がかつて魔界で学んでいたのです。

とはいえそれは天空の盾まで揃えて見せても兜を渡さなかった時の事であり、オーブ集め感覚で天空の装備を集めているアランとしては急ぐようなものでもありません。もともと装備するためではなく魔界に行く道が開けるはずという、ただのキーアイテム感覚で集めているので強力な武具という認識もなかったのでした。

そのままセントベレス山へと戻ってもよかったです。セントベレス山から見て北側と南側へ行ったのだから道草ついでに西側でも見てみようというアランの思いつきで寄り道することになります。西側の大陸にはサラボナという大きな町があり、そして町の人が言うには何やらこの町の大富豪であるルドマンが何かイベントを開催するということでした。

「すいませーん、ここんルドマンて人の家で合ってますかー？」

「ああ、希望者の方ですね。もうすぐ説明が始まりますのでこちらでお待ちください」  
イベントがあるなら参加しなくては…というアランによってサラボナでも一際大きな屋敷へと向かい、丁度そこにいたメイドさんに話かけたところこれから説明が始まるということでした。

何をするのかすら知らないままアランが案内され入った一室には現在大勢の男たちが集まっており、そこに現れた非常に特徴的な髪型(?)をしたおじさんの説明を聞いて

てみると「娘の婚約者を決めるために希望者を募っている」というのです。そして条件を満たし婚約者選ばれた者は婿として迎え入れ、家宝の盾も譲るということでした。

この特徴的な髪型のおじさんがサラボナの町の大富豪ルドマンであり、ルドマンは娘の婚約者は娘が成人してから決めるつもりで本来ならばもう幾年か後になる予定でした。しかしそう悠長にしていられない事情が、ルドマンに今すぐにも…という気持ちにさせていたのです。

ルドマンの娘であるフローラという名の少女は本当ならば今頃は修道院で様々な事を学んでいるはずでした。そして時期を見てサラボナへと戻ってくる予定だったので

す。  
しかしルドマンは最近町中に流れている『奇跡の教団』の話や、その教団が『フローラ』という名を崇めていることを知ったことで急いで修道院から呼び戻したのです。そして愛する娘を守るため、この先も守っていくために少々早いと思いつながらも婚約者を探すことにしたのです。

その娘であるフローラはまだ10歳を過ぎた程度に見える少女であり、そんな少女に群がる男たちを見ても本人が良く思うはずありません。ここで「私って人気者ね」と思えるような前向きな思考をしていれば受け入れられたでしょうけれど、修道院でシスターとしての修行もしており清く正しい精神を育んできた少女には少々性急すぎる話

でもありません。

そして何より集まっている男たちの目的も『フローラとの結婚』ではなく『大富豪であるルドマンの資産』であることを理解しています。そうでなければ大の大人が少女と結婚したいがために集まったという事になってしまいます。

本音で言うならば「嫌だ」と言いたいところなのでしょうが、ルドマンとフローラの間には血の繋がりが無いという事実がフローラにその言葉を言わせることを躊躇させていたのです。娘のためを思つての行動ということもわかっているため、そして今まで大事にしてくれた家族の事を思えばこそ黙つて受け入れるしかないとさえ考えていました。

そんな俯いたまま何か言いたいことを言えないといった感じに表情を曇らせているフローラに誰も気付かず話は進んでいきました。

「娘の婚約者になる条件として、炎のリングと水のリングを持つてくるのだ」

ルドマンの説明では世界のどこかにある2つのリングを持つてくればフローラの婚約者として認めるという事でした。集まっていた男たちはそれを聞いて我先にと屋敷を飛び出していき、残されたのはリングを集める気のないアランとリュカくんだけとなつていきます。

「お主たちは探しに行かなくて良いのか？」



「んー、そういうのあんまり好きじゃないんだよねえ…」

カール王国にいた頃からお見合い騒ぎやらで後ろ向きになっていくアランにとって、今回のイベントはあまり興味が唆られるようなものではありませんでした。武術大会のようなものであれば喜んで参加していたかもしれないませんが、10歳かそこの少女の婚約者になれると言われてもまったくやる気が出ません。

「もしやお主がフローラを狙っている輩か?!」

そこまではルドマンも普通に対応していたのですが、しかしアランたちの話を聞いて豹変したように態度が変わってしまいました。セントベレス山で魔物を倒した伝説の勇者であり今は天空の盾を探していると聞いただけなのですが、どうやらルドマンの頭の中ではセントベレス山にある奇跡の教団は娘のフローラを狙う悪の組織のように思われていたようです。

「俺の知ってるお姫様とそっちのフローラちゃんはまったく違うから落ち着いてよ」

「何を戯言を！貴様のせいだ！フローラが怪しげな男どもに狙われているのではないか！」

アランとしてはカール王国にいるフローラ女王に責任を擦り付けたつもりだったのですが、偶然なのか同名の少女が存在したせいで…目の前にいるフローラちゃんのほうに何かしらの被害が及んでいたということでした。とは言っても揉まれたり讃えられ

たりするだけで実害はなく、ただただ意味がわからないため困惑していたということです。

奇跡の教団において祀られている聖女フローラ様ですが：アラン以外誰も見たことのない存在であり、果たしてこの世界に実在しているのかすら曖昧な人物です。そこに同名の少女がいるということが教団内で噂となり「もしかしたらフローラ様の生まれ変わりなのかも」という早合点した考えによって及んだ勘違いだったのです。

しかし経緯も事情も知らないルドマンからすれば娘に何が起こるかわからないような状況を捨て置けるはずありません。そのため婚約者を決めて娘を守らせようとしたところに張本人が現れたのですから頭に血が上ってしまったてもしよがない状況でもありました。

「リユカくん、とりあえず説明しといて」

「えっ…?」

「フローラちゃんはやっつとこっちでお話聞かせてよ」

「えっ?」

「待て!フローラを連れて行くでない!」

今まで下ばかり見て顔を上げていなかったフローラちゃんの手を引き屋敷を出るアランは間違いなく誘拐犯でしょう。そして外に出たと同時にトベルーラで空高くへと

上がつて行つてしまい、ルドマンが何を叫んでも聞こえないどころか姿すら小さすぎて見えないほどの高さへとやつてきてしまいました。

「ふわあ〜！」

「なかなかいい眺めでしょ？ずつと下ばつかり見てたけどさ、どうせ下を見るならこれくらい高いところから見たほうが良くない？」

アランにとって初対面であるフローラという少女の事は何も知りませんが、それでもルドマンが説明している間ずつと下を向いていたことくらいは見ていました。そして何を悩んでいるのかも察することはできなくても、今までに培ってきた子守りの経験から大好評だった高いところへ連れて行つて喜ばせてあげることにしたのです。

きつと今頃はルドマンがものすごい形相でリュカくんに詰め寄っているかもしれないませんが、いくらなんでも子供を相手に怒鳴り散らすような事はしないでしよう。むしろ頭を冷やして物事を冷静に考えるためにちやうどいい良策とさえ思えます。

ディーノくんやシンシア王女に始まりソロくんやシンシアちゃんにもやつてあげていた胡座トペルーラで上空をふわふわと散歩しつつそんな打算的な事を考えているアランとは反対に、アランによつて空の上に誘拐されてきたフローラちゃんのほうはかつてのリュカくんと同じく眼下に広がる光景に目を奪われているようでした。

つい先程まで自分の足元の床しか見えていなかったというのに、今は広大な海や大地

が広がっています。おとぎ話にでも出てくるような…空想の中でしか見られないような景色は今までの悩みなど吹き飛ばすほどの衝撃であり、この光景の前では自分の考えがいかに小さなものであつたか思い知らされたような気さえしてきました。

「アランさん、私はどうしたらいいんでしょうか」

そんなフローラちゃんから語られるのは自分はルドマンの義理の娘であることや、大切にしてくれているけれど少しだけ距離を感じることもあるといった事でした。そして今回の婚約者の話も自分のためだと理解しているけれど、それでもあまり前向きにはなれないということなのです。

空からの景色に少しは落ち着いたのか…フローラちゃんがそんな悩みを打ち明けている時、地上のサラボナではリュカくんがルドマンに必死に説明していたのでした。

…

…

…

「…で？結局あの者は何者なんだね？」

「えーと…」

アランがフローラちゃんを連れて空の彼方へと飛び去ってしまい、後を任されたリユカくんはメイドさんたちと一緒にルドマンを宥めていました。アランの読み通りルドマンも子供であるリユカくんに強く詰問するような事はせず、深呼吸をして落ちついてから問いかけることにしたのです。

ルドマンが現在知っている情報は『奇跡の教団という伝説の勇者のための集まり』が存在し、そこではフローラという名の人物を祀っているということ。そしてその集団の一部が自分の娘のフローラに近づいていることでした。そこに自ら伝説の勇者を語るアランが現れ娘のフローラを連れ去ってしまったということです。

もはや魔物の策略かと思うような話なのですが、一緒にやってきたリユカくんから魔物の感じは見受けられず…更にアランの事を信じているようだったので正直な子供からの意見として話を聞いてみることにしたのでした。

しかしリユカくんからの詳細な説明を聞き、そのすべてが大袈裟ではなく真実であれば確かに勇者のために活動するだろうと納得できるものでした。リユカくんの主観からの話にはなりますが…それでも父を殺され拐われたというリユカくんが連れ去られた先で、そこにいた魔物も自分を連れ去った魔物も全部倒してくれたというのですからそれだけでも俄には信じられないものです。更に魔物に殺された人たちを生き返らせたいという特大のおまけまで付いており、それらを聞いたルドマンでさえ少しばかり伝説

の勇者かもしれないと思わせるものでした。

そんなアランの事だけでなく、リユカくんがアランと一緒にいる理由なども聞かされたルドマンはリユカくんに同情してしまったのです。父の遺言で母が魔界に連れ去られ助けるために鍵となるアイテムを探していると言われれば、同じ子を持つ親としても協力したいと思ってしまうのは当然の事なのかもしれません。

「よいか少年よ、私は世界中から文献などを集め『伝説の勇者』について調べたことがあるのだ」

リユカくんの事を気に入ったのか：友好的になったルドマンから語られるのは『遙か昔に存在したという伝説の勇者』のことでした。

ルドマンは今も封印されている巨大な魔獣ブオーンを封じたルドルフという人物の血を引く人物であり、その封印を代々見守り続けるという役目を負っていました。この封印がいつまでも続いてくれれば良いのですが、そんな危険な魔獣がいつ蘇るかもわからない事から戦い方を模索するために存在するかもわからない遙か昔の伝説の勇者についても調べることにしたのです。

しかしそんな大昔の出来事や人物の事が都合よく残っているはずもなく、断片的な情報から少しだけ伝説の勇者の力というものを知ることができたのでした。

「かつてこの世界を救った伝説の勇者はな…なんとホイミで強大な敵を倒していたらし

いのだ」

「ホイミで？」

「そうだ…どうやってかはわからぬが、もしかしたらそれこそが伝説の勇者の証やもしれぬ」

ホイミで敵を倒す…ルドマンが語った内容はリユカくんにはまったく理解できません。ホイミというのは傷を癒やすものであり、敵に使ったとしても敵の傷を回復させるだけになるでしょう。ルドマンの言う伝説の勇者の戦い方がどんなものなのかまったく想像もできない事ですし、いくらアランが勇者であってもホイミで敵を倒すというのは不可能だとは思えませんでした。

「それって…ホイミで回復しながら敵を倒したってことじゃなくてですか？」

「いや、今ある文献などで考えると敵にホイミを使っていた…らしいのだ」

リユカくんの疑問も当然の事で、それを語ったルドマンのほうもそれが絶対に正しいとは思っていません。リユカくんと同じくホイミで敵を倒せるとは考えていませんし、ホイミで回復しながら敵を倒したと取れないこともないのです。何せ残された断片的な情報なので、どこかで解釈の間違いがあつた可能性のほうが高いのも確かでした。

ここでまさかルドマンの言う解釈が正しいとは誰も思わないでしょう。

武神流という武術の神様と呼ばれる老人が編み出した流派に、回復力を極限まで高め

る事によって生物に限って高い破壊力を生み出す奥義があるなどとわかるはずもありません。更にそんな奥義を武術の神様から受け継いだ賢者がいて、その賢者が勇者の幼馴染やどこかのお転婆なお姫様などに伝授して回っていたなんて想像することもできないはずです。

そんな流派の技や奥義が子々孫々と受け継がれ、そして文献や伝承として残されていったなど吟遊詩人であっても思いつかない事でしょう。そのためルドマンが文献などから得た解釈が正しかったとしても、それを信じることなどできなかったのです。

しかしリュカくんに言われた程度で考え直すルドマンではありません。アランが自分の事を伝説の勇者だと言うのであればホイミで敵を倒せたら認めてやるということなのです。そこには色々と心労や迷惑をかけられたことや娘であるフローラを連れ去ったことなどに対する意趣返しが入っていないわけではないでしょう。

できるはずがないという大前提の上でリュカくんに対し「文献の通りホイミで敵を倒せたら伝説の勇者と認めてやる」という結論になり、それを聞いたリュカくんのほうも「どうしよう…」という状況になってしまいました。

母を助けるためには魔界に行く必要があります、魔界に行くためには天空の武具を揃えた伝説の勇者が必要なのです。しかしまさか「ホイミで敵を倒せたら伝説の勇者と認める」と言われるとはサラボナにやってくるまでは思いもしませんでした。そんな文献を



残したであろう人に恨み節の1つも言いたいリユカくんですが、それ以上にこの条件をクリアする方法がわからず途方に暮れてしまうのでした。

ちなみに恨み節を言いたい場合は適任がリユカくんのすぐ横にいたりするのですが、その適任な存在は『伝説の勇者つていうのはホイミで敵を倒していたらしい』と書き残した側ではなく『本当にホイミを拳に込めてモンスターを殴り倒していた存在』であるため文句を言われてもまったく通じません。

「ただいまー」

「ただいま戻りました!」

リユカくんが難題を出され悩んでいた後、能天気なアランの声と何やら元気な様子のフローラちゃんの声が聞こえてきます。リユカくんもやつてもらった事があるからわかるのですが、あの空の散歩は気分転換するには最適と呼べるほどのものでした。父を失い連れ去られたと思ったら仇の魔物を倒されたりと驚天動地な心境だったリユカくんですらそんなすべてを忘れてしまうほどだったのですから、彼女が何を悩んでいたのかわかりませんがきっと自分と同じ体験をしたんだらうと理解しました。

一緒に旅をするわけではないのでフローラちゃんはきつとわからないままでしょう

けれど「実は移動手段の大半が空を飛んでいると知れば何と云うかな…」と、そんな空の旅に同行している事にほんのちよっぴり優越感を感じたりしているリユカくん。もはや慣れたと言えるほどにルーラとトベルルーラで移動しているのですが、それでも未だに空を飛んでいるという事は楽しいものなのでしょう。

そんな事を考えているリユカくんを置いておくように、現在ルドマンとフローラちゃんによるお互いの本音をぶつける親子の話し合いが行われていました。アランに連れ去られて戻ってきたら何やら吹っ切れたような表情をしており、ハッキリと「婚約者は自分にはまだ早い」と告げる姿は下を向いて黙っていた彼女と同じ人物とは思えません。

しかし前向きになったような明るさを取り戻したようなフローラちゃんの変わりようは、ルドマンにとつて嬉しいという思いよりも前に怪訝さのほうが先に出てしまえます。アランに連れて行かれて戻ってきたら人が変わったかのようになっているのですからそれも当然でしょう。どう考えても洗脳などの意識の操作でもなければ説明のできないような事なのですから、もしかしたらアランは勇者である証明よりも魔物ではないという証明のほうを先にしないといけないのかもしれないかもしれません。

「ぬう…そこまで言うのなら婚約者の話は無かったことにしようではないか」

このフローラちゃんとのやり取りによりルドマンも婚約者探しを一旦棚上げにする

ことにしました。いくら娘のためと言っても本人が望んでいないのにも関わらず勝手に決めて、その結果幸せになれなかったのでは意味がないと考えたのです。

「アランさん、私がんばりました!」

「そうだね。やっぱり悩んだ時は空に上がるといいみたいだねえ」

「待て、なぜお前たちがそこまで仲良くなっておるのだ」

笑顔で自分の頑張りを伝えるフローラちゃんとトベルラによる高い高いの効果に満足気なアランですが、ルドマンからしてみれば何故この短時間でそこまで仲良くなっているのか意味がわかりません。確かに自分もリユカくんの壮絶な半生を聞き同情してしまい好意的になってるのは事実ですが、それはそれとして娘が見知らぬ男にここまで簡単に心を開くとは思わなかったのです。

ルドマンのその考えは正し局的を射たもので、フローラちゃんは初対面の男とすぐに仲良くなれるほど社交的な性格をしているわけではありません。とはいえまだ10歳を過ぎた程度の子供であり、そして空に浮かぶという現実離れた体験をしたことがアランとの距離を縮めた何かになったのは間違いないでしょう。

「言っておくが、貴様にフローラはやらんぞ!」

そして何を勘違いしたのか：ルドマンは何故かアランに向かって「娘はやらん」という事を言い出し、更に勢いづいたのか「それはそれとして封印された古の魔物を退治で

できれば伝説の勇者と認めてやる」とまで言ってきました。ルドマン曰くその怪物は山のように大きな身体を持っていてこの大陸を荒らし回り誰も退治できなかったほどに強力な魔物であり、自身の先祖も倒すことはできなかったが何とか封印することができたということでした。

そしてその封印は150年ほど解けてしまうということだったのですが、果たして150年ピツタリで解けるのか前後があるのかなど誰にもわからないのです。しかし多少の前後はあれど数年ほどで150年あたりになるらしく、いつその魔獣が復活してもおかしくない状況だとも教えてくれました。そういつた経緯もあつた中で奇跡の教団騒動まで起こったため、ルドマンは娘を守るために早急に婚約者を探そうとしたのだということでした。

ひとまず婚約者探しは棚上げするにしても近い将来そんな危険な事態が起こる事は間違いないであろうということで、娘を守るために…そしてこの大陸の人間たちを守るために…そして世界を守るためにもその魔獣は倒さなければならぬ相手なのだと言説するルドマン。

しかしこれを聞いてビックリしたのはアランでもフローラちゃんでもなくリュカくんです。婚約者云々は置いておいて先程まで自分と話して「ホイミで敵を倒せたら認めてやる」と言っていたはずなのに、何故か今は「誰も倒せないほどに大きく強い古

の魔物を倒せたら認めてやる」となっているのですから驚くのも仕方ありません。ホイミで敵を倒すというのも難題ではあったのですが、それどころか山のように大きい魔物を倒すなど想像もできないでしょう。

ルドマンのほうも勢い余った発言ではありませんでしたが、考えてみればそれはあながち悪い案とも思えませんでした。リュカくんからセントベレス山での話を聞いてアランが強力な魔物を倒してきた事はわかっていますし、自身を伝説の勇者と言うのであればこれくらいやってのけて当然とすら思えてきたのです。そこには「娘に迷惑かけやがって」「余計な心配させやがって」「なんでそんなすぐに仲良くなれるんだ」「羨ましい」といった感情が入っていないわけではありません……たぶん。

その結果サラボナの北に封印された壺が安置されたほこらがあるらしく「まだ大丈夫だと思うが、北のほこらに向かい壺の色を見てくるように」ということで話は纏まりました。この流れの早い展開にはアランのほうも困惑を隠せません。何せ『サラボナに来てフローラちゃんのお悩みを聞いてたら封印された魔物を倒すことになっていた』のです。とはいえ出会ってすぐの頃よりは態度が軟化しているようにも見えますし、そして態度が軟化した理由など一つしか思い当たりません。

それはきつとリュカくんがアバンばりの巧みな話術でルドマンの心を開いてくれたのだと思えば納得です。実際は巧みな話術ではなく事実を話したら同情して好意的に

なってくれたのですが、リュカくんがルドマンを…そしてアランがフローラちゃんの心を開いたという事実は結果的に綺麗な役割分担ができていたのです。

ルドマンに言われた通りサラボナから北に向かい、見つけた小さなほこらに入っていると確かに壺が置いてありました。その壺は青色の光を放っており、特に何か危なそうな気配はしません。

「青色に光ってる…」

リュカくんも壺が光っているのが珍しいのかじつと見つめており、そしてアランは今の状況について自身に搭載されたゲーム脳で考察していました。アランにとっては封印というのには『破られるもの』という認識があるため、封印されればなしというのは余り考えられません。ついでに『封じる』という言葉からの連想で昔アバンが凍れる時間の秘宝を使っていたことなどを思い出していました。

「アラン兄さん、壺も見たし戻ろうよ」

少々ノスタルジックな気持ちになりつつ、リュカくんに促されほこらを出ようかと思つたアランはそこで気付いたのです。ルドマンは「壺の色を見てこい」と言っていました。それは良いとしてルドマンはずっとアランの事をあまりよく思っておらず、それは態度や言葉の節々に出ていてアランだつてわかつています。

つまりこのまま「壺は青色だった」と言っても信じない可能性だってあるのです。もしかしたら今までもそうやって壺の色を確かめさせて、本当は青色なのに「いいや壺の色は黄色のはずだ！」などと言っていた可能性も否定できません。そして逆に「壺の色は緑でした」と全然違う色を報告するやつだっていないとは限らないのです。

きつとこんなアランの考えを知ればソロくんたちなら「アラン兄さん、これ持ってた」と言つて『しんじるころろ』的な宝玉を渡してくれるかもしれません。特に誰かに裏切られたわけではありませんが、曲解ばかりして周囲の予想をいろんな意味で裏切り続けるアランには必要なアイテムと言えます。

「リュカくん、戻るから背中に乗ってくれる?」

「…うん?」

そこでアランは閃いたのです。本当かどうかわからない壺の色を報告させるのではなく、自分の目で確かめさせればいいんだ…と。

リュカくんを背中に背負い、壺を抱えたアランはほこらを出てそのままサラボナへとルーラで戻っていきます。リュカくんは言われるままにアランの背中に乗っています。既に彼の頭の中は疑問でいっぱいになっていました。ルドマンは「ホイミで敵を倒せたら勇者」と言っていたのに「古の魔物を倒せたら勇者」と違う事を言っていたり、アランはアランで「壺の色を見てこい」と言われたのになぜか『壺を持って帰る』という

行動を取っていたりで意味のわからない事が重なりすぎているせいです。

小さい頃から父パパスと一緒に旅をしてきてそれなりの経験をしてきたリユカくんでしたが、アランと出会ってからはそれらが穏やかな日常だったとさえ思えるほどの日々を過ごしていました。そんなリユカくんでも思考が止まってしまふほどにアランの行動は理解できなかつたのです。

しかしそんなリユカくんでも1つだけわかつたことがあります。それは…これからもこんな事が続くのだろうかという事です。

「ただいまー」

北にあるほこらからサラボナへと戻ってきたアランたちは報せは早いほうが良いとばかりにルドマンの屋敷へと直行し、勝手知つたるとばかりにルドマンの待つ部屋へと向かいました。アランたちの帰還を待つていたルドマンとしては報告内容は決まつていて「青色だった」という答えを聞くだけだと思つており、そして万が一にも「赤色だった」となつていない事を祈るだけのはずだったのでした。

しかしルドマンの予想は遙か明後日の方向で覆されてしまいました。

部屋へと入ってきたアランとリユカくん…そこまでは良かったのですが、アランが抱えている物が問題でした。



どう見ても壺です。しかも青く光る壺です。

「なっ……なぜ壺をここに持つてきておるのだ!？」

「いや、やっぱり自分の目で確認したほうが良い事つてあると思うんだよね」

ルドマンの先祖であるルドルフは魔獣を壺へと封印した後、代々その壺を見張るために町に隣接する形で見はらしの塔を建てていたのです。そこからほこら周辺の状況を一望することができ、万が一魔獣が復活した場合にいち早く行動に移せるようにとの考えからでした。そしてなぜそんな離れたほこらに壺を安置していたかと言えば、封印が解けた際に山ほどの大きさの魔獣が町で暴れてしまつては壊滅してしまうことが容易に考えられるからでもあります。

しかしそんな代々見張り続けてきた封印の壺がルドマンの目の前にあります。壺は確かに青く光つており、禍々しい雰囲気など感じない綺麗な壺にしか見えません。ですがルドマンとて本物を見たことがないわけではなく、これがほこらに安置されていた封印の壺であることは理解できていました。

「はっ、早く壺をもとの場所に戻してこい!!」

きつと静かなほこらで置かれていれば魔獣が目覚めるか封印の壺の効力が切れるまで安全だったかもしれません。しかしこのルドマンの声を聞いたからなのか何か気配を感じたからなのかわかりませんが、青色に光っていた壺はだんだんとその色を変えて

いき完全な赤色へと変化していったのです。

「早く逃げるのだ！」

赤色の壺を見たルドマンはすぐに逃げることを指示しますが、禍々しいほどの赤い光を放つ壺に少しずつ罅が入っていき…そしてサラボナの町の一角に突如として巨大な魔獣が現れることとなりました。この事態に当然ながら町の人たちは何の前触れもなく現れた魔物によって大騒ぎになっていました。

ルドマンの屋敷よりも大きく…そして隣接する見はらしの塔よりも大きい姿の魔獣はわかりやすく脅威であり、町にいた力自慢のならず者も酒場で豪気な事を言っていた荒くれ者も全員が血の気が引いたような顔でその魔獣を見上げるしかできませんでした。町の人たちは自分たちでは到底敵わない相手を前に絶望の中で逃げることにできず、いつか封印が解ける日が来ると覚悟していたルドマンでさえ今の状況には打つ手がなくどうすれば良いのかすらわかりません。

そしてそれはアランと一緒に旅をしていたリュカくんも同じ思いでした。

リュカくんから見てもジャミヤゴンズを倒し、そして卑劣な手段を使っていたゲマすらも倒したアランであろうと見上げるほどに巨大な魔獣を相手に勝てるとは思えなかつたのです。この古の魔獣…ブオーンと比較すれば人間など簡単に踏みつぶせるほどに体格差があり、そして同時にこれほどの魔獣ならば倒せず封印するしかなかつた

という事にも納得できるものでした。

ルドマンの号令により屋敷から飛び出したものの、その大きさにメイドたちやフロラちゃんまでもがどうする事もできず青い顔をしながら震えているしかできません。リユカくんだって何かできるならしたいものの、目の前の巨大な魔物を相手に自分ができるかどうかと考えるほど向こう見ずではないのです。

「こういう展開だったのか……とりあえずアレ倒すからみんなは離れてなよ」

しかしそんな巨大な魔物による脅威などアランにとっては初めての経験でも何でもありませんでした。かつてカール王国に鬼岩城がやってきた事もありましたし、ソロクんたちと戦った地獄の帝王だつて結構な大きさだったので。もちろんその事を知っている人物など誰もいないため、当たり前のように目の前に聳える巨獣を倒すと言っているアランを信じられないような目で見るしかできません。

壺の封印が解かれブオーンが現れたことで、アランは今回のイベントについてようやく理解することができました。ルドマンから「壺の色を調べてこい」と言われて、結果を調べるだけでなく直接確認させるために持ってきたわけですが……これが正解の選択だったわけです。

つまりこれは『封印の解けた魔物を倒してキーアイテムを手に入れる』というものであり、もし言われた通りに壺の色を確認するだけだったなら何も起きなかつたでしょう。

最初はルドマンの言葉への疑いから直接見せるという手段を取ったアランでしたが、それは正解の選択肢だったということでした。

実際は封印の効力はあと数年は保つはずで、もし封印が解けたとしてもサラボナから少し離れたほこらでブオーンは目覚めるはずだったのです。しかしアランが壺を持ち帰ってきて：そしてルドルフの子孫であるルドマンの声を聞いたことで眠っていたはずのブオーンが起きたのですが、アランたちだけでなくルドマンだってそれを予測することも結果を見て推測することもできません。

この一連の流れを敵を倒すイベントだと思っているアランはまったく臆する様子を見せずにブオーンの前へと出ていき、そして両手に魔法力を溜めているその光景は後ろから見ればまさに世界の平和を守る勇者といった感じなのでしょう。ルドマンでさえその光景に飲まれているようで、サラボナの町を窮地に陥れたのが誰だったのかなど考える余裕はないようです。

そしてその日、サラボナの人たちは奇跡の光景を目にすることになったのでした。

「ふいふ、よく寝たわい…ところでさつきルドルフの声が聞こえてきたが、あいつはどこにいたの？」

「次は永眠させてやるよ……これでも食らってろ!!」

相変わらずモンスターと会話する気のないアランは、ルドマンの先祖であるルドルフを探すブオーンに挨拶代わりの不意打ちメドローアを放ち……そしてその光はブオーンの腹を突き抜けていったのでした。

メドローアがブオーンの腹を消滅させながら突き抜けていった事で、もしかしたらブオーンの腹の中にあつた『さいごのかぎ』的なものが一緒に消え去ってしまったかもしれませんが。しかしそんな事はルドマンすら知らないことなので、これによって世界中で開くことのない扉が生まれてしまったかもしれない事など誰にもわからない事なのです。

これには後ろから見えていたルドマンたちだけでなく、逃げ惑っていた町の人たちも驚くしかできません。倒したのか……?と微かな希望を持って見ている人たちが、しかし腹に穴が空いた程度では倒し切ることはできずブオーンは苦しみとも怒りとも取れる叫びを上げながら暴れ始めたのでした。

「アラン兄さん……」

リユカくんとしても巨大な魔物と戦い始めたアランをサポートしたいところなのですが、今までこんな巨大な相手と戦ったこともないためどうしたらいいのかわかりませ

ん。もちろん少しはアランに鍛えられておりモンスターと戦って経験を積んではいませんが、あまりにも勝手が違いすぎて混乱してしまっているのでしょう。

ブオーンを相手にひらひらと舞うように攻撃を避けて打撃を与えたりしている様子は自分に教えてくれている武術の動きなのは理解できましたが、では自分にそれをやれと言われてもリュカくんは今のアランのようにできる自信などありません。

「リュカくん、どうせだからまだ教えてない奥義の手本を見せてあげるよ。これはホイミを覚えてれば使えるからリュカくんでも使えるだろうからね」

「え……？」

そしてアランの動きを追っていたリュカくんにはアランから信じられない言葉がかけられてしまいました。ホイミを使う奥義……どこかで聞いたことがあるような話でしたが、それはまさにルドマンが言っていた伝説の勇者が使っていたという戦い方ではありませんか。

「武神流奥義……閃華裂光拳!!」

どこにホイミ成分が入っているのかリュカくんにはわかりませんが、アランが奥義の名を叫んで行った事は高速でブオーンの顔面を殴りつけただけです。しかしその拳が

当たった事によつてブオーンの顔は崩壊していき、遂にはそのまま大きな地響きと共に地面に倒れ伏してしまいました。

ブオーンが倒れた事で辺りを静寂が包み、そして幾ばくかの時を経てから魔獣が倒れた事を理解した人たちは喜びに湧き上がりました。誰もが突然現れた巨獣を倒してくれた事に礼を言いながらその功績を讃えており、何も知らない人でさえ「こういう人を勇者つて言うんだろうな」とそのあまりの光景にそう思わずにはいられませんでした。

まさか町の人たちもそんな魔獣が封印されていた壺をわざわざ持つてきたのがアランだとは誰も思わないでしょう。ルドマンの一族は町に被害が出ないように離れた場所に封印した壺を安置しており、そして魔獣が復活してもすぐにわかるように塔まで建てていたというのにそれを持ち帰つてきたなどと考えるはずありません。

何も知らない町の人たちだけでなく、事情を知るルドマンですらブオーンが復活した衝撃とそれをアランが倒した衝撃によつて頭から抜け落ちていました。しかしその事を思い出したとしても、先祖が封印し代々監視していたブオーンを倒すことができたのですから些細なことでしょう。もうこれで古の魔獣に怯えることもなく、そして自分の後の代に何も不安を残すことがなくなつたのですからルドマンもある意味解放されたと言えるかもしれません。

「まさかあのブオーンを倒すとは…伝説の勇者というのは事実だったということか…」  
「だから最初からそう言ってたじゃん」

ブオーンを倒したという事実が未だに信じられない中、ルドマンは自身の屋敷に戻りそんな事を言っていました。アランの自分を勇者だと疑っていない堂々とした振る舞いと、古の魔獣を倒した力を見せられた事によって遂にルドマンも認めざるを得ないのかもしれない。というよりもルドマンは自分から「魔獣を倒せたら認めてやる」と言っており、アランはそれを倒して見せたのでちゃんと出された条件を満たしただけです。

ブオーンが復活したのがルドマンの屋敷の中だったせいでサラボナで一番大きな建物は見る影もなく崩壊してしまっていますし、他にも周囲などに被害は出ているのですがそこは割り切って考えているのでしょう。今もメイドや執事たちがボロボロになった屋敷をせっせと片付けたりしており、空の見えるある意味見通しの良い屋敷へと変わってしまったルドマン邸ではみんな大忙しで働いていました。

「それじゃここにあるはずの盾を見せてほしいんだけど」

「見せるのは良いがやらんぞ?」

「なんでよ」



「私は魔獣を倒せたら伝説の勇者と認めると言っただけで家宝の盾をやるとは言ったらん。アレはフローラの婿に譲ると言っただけはさずだ」

魔獣を倒した事でサラボナに来た目的である天空の盾をもらおうと思ったのですが、ルドマンの返答は見せるだけで譲る気はないというものでした。それもそのはず…ルドマンは確かに「古の魔獣を倒せたら認める」と言っており「魔獣を倒せたら家宝の盾を譲る」などとは一言も発していません。

アランとしては「さすが勇者様！さき、この盾をお持ちくださいませ！」的な感じで手に入るものだと思っていました。ところが、ルドマンは最初から「フローラの婿となった者には家宝の盾を譲る」と言っていたためただの勘違いで行動していたのでした。予想外の展開にどうしたものかと考えつつ、しかしアバンのような知識も話術も人柄も持っていないアランにはどうすればいいのか見当もつきません。

いくらなんでもアイテム目的でフローラちゃんと婚約するわけにもいきませんし、盾だけでもらったら婚約を解消してしまえばいいというのもアランの中では『無し』なのです。天空の花嫁的な知識があれば幼馴染の金髪の女の子も連れてきてリユカくんを選ばせたかもしれませんが、そんな知識のないアランが父を失い遺言により母を助けることを目的としている少年ではないリユカくんを利用しようとするはずありません。

もしかしたらどこかには『青年となったリユカくんが天空の盾が欲しいがためにフ

ローラちゃんの結婚相手に立候補する』という展開もあつたのかもしれないが、現在アランに連れられているリユカくんはまだまだ少年であり自身の隣には伝説の勇者（自称）がいてくれているのでそんな事は考えもしていません。

そしてアランの中で現実的な案として考えているのは『フローラちゃんを人質にして盾を奪う』というものであり、これなら仮初の婚約者になるなどでフローラちゃんを気持ち悪く傷つけたりすることもなく穏便に済むのではとすら考えていました。確かにまだ少女であるフローラちゃんにアイテム目的で婚約しておいて、盾をもらったら頃合いを見て解消するというのはひどい行為に見えるでしょう。

そんな女の子の気持ちや弄ぶような外道な真似はできないと思っているアランですが、代替案が人として問題がある事に気付いているのでしょうか。もし行動に起こせばルドマンは確実に家宝の盾を差し出すでしょうが、盾を手に入れる代わりにもっと大切なものを失ってしまうでしょう。

「じゃあ後で返すから貸してよ」

「むむ…しかし…」

しかし次にアランが提案したのは『もらう』のではなく『借りる』というものでした。

考えてみればアランたちは別に装備して戦うために天空の武器を集めているわけではないのです。魔界に行くためのキーアイテムとして探しているだけであり、魔界への道が開いたらお役御免になるアイテムなのですから使うだけ使ったら返せばいいと考えたのでした。

ルドマンのほうも軽々と家宝の盾を渡すわけにはいかないとはいえ、リュカくんから話を聞き事情もある程度把握しています。母を助けるために少年が必死に旅をしているというのに手を差し伸べないというのも後味の悪いものですし、リュカくんが母親と再会できない一因に自分になるなど考えられません。

「わかった！私も親だ！あの盾は持って行くが良い！」

悩みはしたものの：最後は了承し潔く家宝の盾を渡すことにしたルドマンは執事に持つてくるように伝え、そして持つている様子からいかにも重そうな盾がアランたちに差し出されました。それをアランが受け取りますが確かに重量のある盾であり、戦えないことはありませんが邪魔になるほうが多いのは間違いないでしょう。

普通ならば「こんな重いものを装備して戦うなんてすごい」などと考えたり、あるいは「伝説の装備に認められていないからだ」と考えるのがこの世界では一般的なのかもしれない。しかし6つのオーブの類似アイテム扱いをしているアランはというと、多少重かろうが装備して戦うわけではないので気にしてすらいませんでした。

もし天空の武具たちが『自分たちが認めた相手以外には持ち上げることすらできない』というような重さであればまた違ったかもしれないませんが、普通に移動させたりできる程度の重さではアランの勘違いを正すことはできなかったのです。

「それじゃ俺たちは行くよ。お節介かもだけど、フローラちゃんに迷惑かけちゃダメだよ」

「わかつとるわ！おまこそその子に迷惑をかけるでないぞ」

大人たちは大人たちで別れの挨拶を交わし、そしてリユカさんとフローラちゃんの間も笑顔で言葉を交わしているようでした。これによってリユカくんの中でフローラちゃんの事はブオーンの件もあり『少年期に忘れられない出会いをした女の子』となることで、もしかしたらいざれ出会うかもしれない『幼少期の幼馴染』という金髪の女の子の優位性が消されてしまう事になるかもしれない……が、そんな事は誰にもわかりません。

## ドラクエ5に行ってみた3

サラボナを後にしたアランたちはそのままテルパドールへと向かい、天空の兜以外の全部を集めたことでアイシス女王から約束通りに天空の兜を譲り受けることができました。これは決してアイシス女王が不思議な予知能力で『アランが壁を突き破って天空の兜を持つていく映像』を見たからではないはずです。

こうしてすべての天空の武具を揃えてみたものの：特に変わった様子はなく魔界への道が開きそうな気配もありません。もしかしたらと思いきちんと身に着けてみたりもしたのですが武具たちは何も応えてはくれませんでした。天空の武具が魔界への道を開く鍵ではないので何も起こらないのは当然の事なのですが、そうは思っていないアランとリユカくんにそんな事がわかるはずありません。

そしてパパスの言葉を疑うわけではありませんが、リユカくんが大事に持っていたパパスの手紙をもう1度読み返せば『魔界に入り邪悪な手から妻を取りもどせるのは天空の武器と防具を身につけた勇者だけ』と書かれていることから魔界に入るのは別の話な

のではと気が付いたのです。まるで天空の装備を身に着けた勇者がいれば魔界へ行けて母を取り戻せるかのように読めたため思い違いをしてしまいました。改めて読み返したことで魔界へ行くためには何か違う方法で行かないといけない事は理解できました。

「なら……とりあえずまだ行ったことのない場所に行ってみようか。そしたら何か情報を得られるかもしれないしね」

「うん、わかった」

天空の武具を集める旅は目的を果たしたものの、魔界に行くという目的を果たすためのアイテムではなかった事はわかりました。しかしだからと言ってそこで諦めるわけでも冒険が終わるわけでもありません。

しかし魔王ハドラーを倒すアバンとの旅の時も、マザードラゴンを助ける魔界の旅の時も、ソロくんたちと行ったよくわからない仲間たちとの旅の時も、アランはいつだって敵を倒すだけで頭脳労働は基本的に仲間たちがやってくれていました。もしそんな事実を知っていればリュカくんはきつと不安しかないのでしようが、どうやっても知る事などできない上に例えばアラン本人からそれらを聞かされたとしても信じられないような話ばかりなので問題ないのかもしれない。

「勇者様お気をつけて！」

「それじゃ後よろしくねー」

もともと『光の教団』の頃から衛兵としてセントベレス山にいたヨシユアという青年からの見送りを受けながら毎度のように空へと飛び出していくアランたち。生身で空を飛ぶという時点で既に人間離れしており、それによって奇跡の教団にいる人たちの勇者への人物像がかなり偏っているのですがそんなことはアランにはわかりません。

更に天空の武具を世界中から集めたアランはそれを装備したままにしており、他の人間であれば動くことすらままならないような重さを身に着けながら平然としているのも偏見を加速させる要因となりました。もともと集めるだけのつもりだった天空の装備たちでしたが、もしこれが伝説の勇者の証明となるのであれば天空の装備とは『勇者育成装備』だと理解したのです。

これらを装備して行動することで常にベタンによって超重力下にいるような効果を得られることができ、その結果レベルアップも早くなる…そういった効果を持つ装備なのではないかと、現実とゲームの折衷案のような設定を思いついてしまったのです。それでも普通に行動できるだけの力があつたせいで、これらの装備の重さを知る者たちから尊敬の眼差しで見られてしまっていたのです。

そんなアランのせいで偏見になりつつある勇者像を持っているこのヨシユアという青年…彼は人間が奴隷として働かされていた事など何も知らずに衛兵として働いてい

たのですが、アランの登場によつて教団を牛耳る魔物の存在や奴隷の存在などを知ったのです。そして魔物の手から解放された後はここにいる人たちを守るための衛兵として志願し、妹のマリアと共に奇跡の教団の中で日々を過ごしていました。

彼らにとつてアランは伝説の勇者である前に自分たちを解放してくれた恩人であり、そしてその恩人が伝説の勇者だったと言うほうが正しいのかもしれませんが、どちらが先でもあまり変わりませんが、アランのやった事がやった事なので「伝説の勇者つてすごいんだな」という勇者のハードルを上げていつているのは確かでしょう。

そんな伝説の勇者の人物像を偏見まみれにしているアランとリュカくんはというと、セントベレス山を飛び出した後大神殿の東側へとまっすぐ進んでみることにしたので、北側にはサンタローズやラインハットがあり、このあたりはリュカくんも幼い頃から行った事のある場所でした。南側にはテルパドールのある砂漠が広がっており、そして西側にはサラボナがある大陸がありました。

もちろん北も西も南も風潰しに行つたわけではないため情報を聞き逃している可能性もあるかもしれませんが、ひとまずまだ行つたことのない東側へと向かうことにしたのでした。途中に山と海の間にある建物が気になり立ち寄つてみたのですが、そこは修道院のようで各地からやってきた女性たちが神の教えを学んでいるということです。ここで神というのが一体誰の事を指しているのかアランは知りたかったので



が「神は神です」という答えしか聞くことはできませんでした。

「まあ……本人たちがそれで良いなら別にいいか」

人間の神や竜の神……そして魔族の神の存在を知っているだけに、もし魔族の神を信仰しているなら止めさせようという善意からだったのですが……しかしアランに信仰を鞍替えさせるような話術スキルなど持っているはずもないため、そして神がどこの神なのかわからなかったため話は曖昧に終わってしまい役に立つ話を聞くことすらなく出ていくのでした。

修道院を出て更に東へと空の旅を続けていくと、今度は山に囲まれた中にやけに窪んだ場所があり……更にその窪んだ場所に生い茂る森に囲まれた中にちよつとした山のよな塔のような作りの集落のようなものを見つけることができたのです。この明らか『人がやつてこれぞ外界と交流のなきそんな場所』にある村を怪しく思ったアランはそのまま村へ向かっていくのでした。

アランもリユカくんも知らないことですが、ここはエルヘブンと呼ばれる不思議な力を受け継ぐ民族の暮らす場所だったので。そして何よりもリユカくんの母親の故郷でもありました。その集落へ降り立って見てみれば宿屋などのお店もあり、もしかしたらアランの偏見だけで実はちゃんと商売などをして生計を立てているのかもしれない。

すぐ近くにいた修道女つばい人に話を聞いてみると「ここはエルヘブンという場所である」ということと「忘れられた民族の住む村」であることを知る事ができました。そしてここには4人の長老がいるらしく、そしてその長老たちは不思議な力を持っているということも教えてくれました。テルパドールのアイシス女王も不思議な力を持っているということでしたし、不思議な力は世界中のいろんなところに溢れているのかもしれない。

そして聞いた情報の通りに長老たちがいるという建物を上がっていき、そこにいたのは長老という名のイメージに合わない4人の女性たちでした。アランはてつきりかなのりの老人をイメージしていただけに少々驚いてしまいました。反対に長老たちはアランたちが来ることがわかっていたようだったのです。正確にはアランではなくリュカくんが来ることをわかっていたようであり、どうやら長老たちにはリュカくんが何者なのかわかっていたようでした。

そしてそこで語られたのは「世界が天地魔界の3つに分けられており行き来するためには門を通る必要があること」や「リュカくんの母であるマーサがこの里の者であり世界を隔てる門を開けるだけの力を持っていたため連れ去られた」ことなどでした。しかしそんなリュカくんの来ることや正体などを知っていた長老たちでもアランの事はわからなかつたらしく、とはいえリュカくんから恩人であり一緒に母を探す旅をしてくれ

ていると聞いたからか警戒されたりはしないようでした。

「そなたから何か不思議な物の気配を感じる…」

「え？何か持ってたっけな…」

長老の1人がアランへ向かいあやふやな事を言ってきましたがアランに心当たりなどあるはずありません。天空の武具は装備しているもの手ぶらと言っても良いほどに身軽な旅をしていたのですから当然でしょう。

この時アランはすっかり忘れていたのですが…実はこの世界に現れた時に目の前にいた魔物を「とりあえず」という条件反射のようなレベルで倒し、そしてその魔物が落とした物を手に入れていたのです。ガサゴソと自分の持ち物を確認し、そしてそこで出てきたリングを見てやつと思ひ出したアランですが当然それが何かなどわかりません。

しかしそれを見た長老たちの顔色が変わり、なんとそれは『いのちのリング』と呼ばれる魔界へと続く門を開けるための鍵ということでした。そしてそれが日の目を見たことでののか理由はわかりませんが、どこから女の人の声が聞こえてきたのです。

その声はリユカくんを呼んでおり、そしてリユカくんが返事をするとその声はマーサと名乗りリユカくんの母親であることがわかりました。もしかしたらずっと呼びかけていたのかもしれませんが、このリングを持っていたのがアランだったため声が届かなかったのかもしれませんが。母の声をもっと早くに聞く機会があったはずなのに、それが

叶わなかったのは不幸な出来事と言うしかありませんでした。

『魔界に来てはなりません。伝説の勇者といえども、魔界にいる大魔王にはとても敵わないでしょう』

「母さん……!!」

マーサとしては母親としてリユカくんの姿を見れない事に哀しみながらも、それでもリユカくんの幸せを願い大魔王を命に代えても食い止めるということでした。この声にリユカくんは姿の見えない母親へ必死に呼びかけ、長老たちもまたそんな様子を悲しそうな目で見つめています。

アランにとつてはパパスとマーサというのは見たこともない人物たちではありませんが、リユカくんとは一緒に旅をしてきた間柄です。最初に「兄さん」と呼ばれているのは兄弟の間柄という意味ではなく、ただ「おじさん」と呼ばれる前に牽制していた程度でした。何せソロくんやシンシアちゃんがおじさん呼ばわりして訂正させるのに苦労したという経験があったからです。

そして偶然なのか運命なのか：アランと出会ったリユカくんが一緒に行くことを望み、その理由を聞けば母を助けるために力を求めたという事でした。アランにとつてはお母さん探しいイベント程度の認識ではありませんでしたが、しかし決め手となったのは何よりその時のリユカくんの瞳がディーノくんを思い起こさせたからです。

もし：仮にバランスが亡くなり、ソアラ王女が拐われたとなればディーノくんは間違いなく助け出すために動くでしょう。それだけでなくアバンたちや自分も含めて、立ちほだかる者は誰であろうとなぎ倒してでもソアラ王女を救い出すはずです。

それに何よりもマーサの言葉によって魔界に大魔王がいるという事がわかりました。

かつて大魔王バーンは死闘の末に倒しましたが、考えてみれば魔界へ行つてから大魔王を倒してはいません。アバンたちとの魔界の旅では大魔王を通り越して神々をも巻き込んだ戦いでしたし、ソロくんたちとの旅では地獄の帝王と呼ばれる寝起きの魔物とは戦ったもののデスピサロという魔族は小物でしかありませんでした。

そこに今回のマーサの言葉を聞いたことでアランは理解したのです。ヒュンケルやラーハルトと一緒にいたはずがどこかへ飛ばされ、ソロくんたちと一緒にいたと思つたらまた違うところに飛ばされてリユカくんと出会うことになったのです。そしてリユカくと旅をしたことでリユカくんの母であるマーサによって魔界に大魔王がいることが告げられたのですから、これらの出来事はすべて繋がっており：つまりアランにとってある意味本来の目的である『魔界の大魔王を倒せ』という事なのでしよう。

ずいぶん遠回りをしたような気もしますが、やはり何か大魔王を倒すための理由付けとして必要だったんだと思えばそれも納得でした。そんな事をしなくても大魔王の居場所さえ教えてくれたら倒しに行くのに：というのがアランの気持ちなのですがやは

り何の理由もないというのは王道から外れた行為なのだと言っているのかも少しありません。

しかしそこに魔物によって母を魔界に連れて行かれ、更に自分が人質にされた事で父親を犠牲にしてしまったという悲しい過去を持つ幼い男の子がいるのです。それは『お姫様を救い出すために大魔王と戦う勇者』というアランの好きな構図ではありませんが、そんな少年の悲劇は大魔王を倒す理由としては十分なものでしょう。

「マーサちゃん、大魔王は俺が倒すから心配いらないよ」

『いえ…私ではなくリュカをどうかお願いします…』

きつとリュカくんだけがマーサの声を聞いても大人しく母の事を諦めることはないでしょうが、既に大魔王と戦う事を決めてしまったアランがいる以上魔界に母を迎えに行かない選択肢など有り得ません。そして現状は仮にリュカくんが母の言葉に従ったとしても、それなら…とアランが単身で勝手に魔界に行く事になるだけなのでした。

そしてそんな頼もしいアランの姿を見ればリュカくんにも何も不安などありません。

パパスの仇であるゲマたちを倒しセントベレス山の奴隷たちを解放したり、サラボナではどうやって倒せばいいのかわからない山のような大きさの魔獣ブオーンを倒すところをリュカくんはすべて見てきています。伝説の勇者でも敵わない大魔王と母は

言っていました、リュカくんにとって相手が誰であろうとアランが負けるはずがないと信じていたのです。

そんなマーサとの交信が終わり、その場において話を聞いていた長老たちは「北東の方向にある海の神殿の中の石像に3つのリングをはめると魔界へ行くことができる」ということも教えてくれました。その内の1つは『いのちのリング』であり、そしてあと2つは『ほのおのリング』と『みずのリング』ということでした。

まさかここでその名を耳にするとは思いませんでしたが、その2つのリングはサラボナにてルドマンがフローラちゃんとの婚約者になるための条件として持って来いと言ったアイテムでした。その話と一緒に天空城が云々という事も言っていました、アランにとっては天空城など興味がないためまずはリングを探すということになったのです。

…

…

…

魔界へと通じる門を開けるために必要と言われた残り2つのリングのうち『炎のリング』を手に入れることができ、これで2つのリングがアランの手に揃いました。残すり

ングはあと一つということで順調だったものの、最後の一つを手に入れるために向かった先でそれとは別の問題が発生してしまったのです。

「さすがに連れて行くわけにはいかないからさ、大人しくお留守番していようよ。ね？」  
「イヤよ！私も一緒に行くわ！」

アランが説得しているのは金髪の少女であり、その女の子はビアンカという名でした。炎のリングを火山の中にいた魔物を倒したことで手に入れ、アランたちは次に水のリングを求めて情報を集め旅を続けていました。しかしそこから何やら滝の裏側に洞窟があるということを聞き、とりあえず行ってみようと思っていたところでリュカくんが熱を出してしまったのです。

そのため情報にあった滝の場所へと向かい、途中何やら水門があったものの関係ないと飛び越えて進んでいたアランも一旦引き返して休ませるしかありません。そしてルーラで比較的近い場所にあったサラボナに戻ろうと移動していた途中に村を見つけたのです。そのままサラボナに戻ってもよかったです。「リュカくんの体調が良くなったらすぐに洞窟に行くんだし…」というアランの考えから見つけた村で休ませることにしました。

この村は温泉が湧いているという事から山奥にありながらお客さんもそれなりに来るといふことで宿屋などの店舗も存在しており、そのおかげで宿屋で部屋を取ることが



でき思ったより早くリュカくんを休ませることができたのです。そしてリュカくんを寝かせ自分は温泉を満喫し、村を回っていたところで1人の少女と出会ったのでした。

その女の子は金髪の活発そうな女の子で、村に来たお客さんであろう人たちとも明るく話していたのです。年の頃はリュカくんやフローラちゃんと同じくらいであり、現在熱でダウンしているリュカくんが同世代と話すことで気分転換になればいいなど話しかけた事が始まりでした。そこには「これから向かう事になる滝の洞窟の事を少しでも知ることができればいいな」という下心などまったくありません。

「ちよつといいかな?」

「はい!どうしましたか?」

話しかけてみるとその少女は外部の人間が来ることに慣れていいのか笑顔で対応してくれ、どうやら仲良くなるのに空中散歩をしたフローラちゃんとは反対の性格をしているようです。そのためアランも「ちよつとうちのリュカくんが熱出しちやつたから休むためにここに来たんだけど、暇な時にでも話し相手になってあげてね」と軽い気持ちで頼んでしまいました。

「リュカですつて!?!」

「あれ?なんでリュカくんの名前でそんな驚いてるの?」

アランが話しかけた少女:ピアンカちゃんが言うには「小さい頃に一緒に遊んだりし

たことがある」ということで、世間は狭いというべきカリユカくんの知り合いだということでした。そして宿屋で寝込んでいるという事を聞いていたことから、アランの事を忘れたようにそのまますごい勢いで宿屋へと走って行ってしまったのです。

まさか2人が知り合いだとは思いませんでしたが、それならそれでリュカくんもきつと喜んでくれるでしょう。サラボナに戻っていればフローラちゃんが見病してくれたかもしれないませんが、こんな山奥にある村でリュカくんの知り合いを見つけたことができるなんて…とアランは自分の選択した行動が間違っていないかつたと内心で自画自賛していました。

アランが宿屋に戻ってみるとピアンカちゃんは甲斐甲斐しくリュカくんの世話をしてくれているようで、いつもアランが見ているリュカくんとは違う…年相応の少年のリュカくんがそこにはいたのです。きつとリュカくんのほうもアランについていくために無理をしていたのでしよう。どれだけ怪我をしても回復呪文で治療することができず、やはり病気となってしまうえばホイミなどではどうしようもないのです。

そしてピアンカちゃんの看病の甲斐あつてなのか…リュカくんもすつかり良くなつて今度こそ滝の洞窟へ行こうとしたときにそれは起こりました。リュカくんがパパスと一緒にいない事などを不思議に思つて聞き出した内容は簡略化されていたものですがピアンカちゃんにとっては衝撃的なものであり、そしてそんな話を聞いて「気をつ

けてね」と送り出すような女の子でもなかったのです。

「水門を開けないと滝のあるほうへ行けないわよ」「飛んで行くから大丈夫」「リュカが怪我するかもしれない」「回復も蘇生もできるから問題なし」という問答によつてピアンカちゃんの心配をアランの力技とも言える答えて悉く粉碎していき、最後の手段として「私も一緒に行く」となつてしまつたのでした。

しかし「まあ冒険してみたい年頃なのかな…」と、何も考えずにいつも通りに軽く了承してしまつたのがアランの失敗だつたのです。

滝の洞窟には特に変つたトラップがあるわけでも強力なモンスターがいるわけでもなく、拍子抜けと思えるくらい簡単に最後の『水のリング』を手に入れることができました。そして村へと戻つてピアンカちゃんと別れて魔界への門を開きに行こうとしたときに問題は起きたのでした。

なぜかピアンカちゃんはその後も「一緒に行く」と言つて聞かず、つまりそのままアランたちについて行くと言ひ出してしまつたのです。当然ながらアランたちがこれから行くのは魔界なので、いくらアランでもそれを了承するわけにはいきません。

こうしてアランが説得しピアンカちゃんがそれを受け入れないという状況に陥つていたのです。

ピアンカちゃんがリュカくんを心配しているのはよく理解しているのですが、いくら

なんでも魔界に知り合ったばかりの女の子を連れて行くわけにもいきません。アランは自分では良識と常識を兼ね備えた人間だと自負しているだけに、何が起こるかかわからない危険な場所など連れて行けるわけがないのです。

そしてそんなアランの考えを理解しているリュカくんもピアンカちゃんに思い留まるように言つたものですから：状況はますますヒートアップしてしまつたのでした。

リュカくんとしては自分の母親を救う旅に手を貸してくれているため、ただでさえ熱を出して迷惑をかけているのにこれ以上アランに迷惑をかけるわけにはいかないとさえ思っていました。ゲマの時は当然の事ながらブオーンの時だつて役に立つ事ができていなかつただけに、常に心苦しい気持ちは持つていたのです。そこにいくら自分の幼馴染と言える女の子とはいえ、これ以上アランの負担を増やすわけにはいきません。

ピアンカちゃんはそんなリュカくんの思いを察しているわけではありませんが、持ち前の優しさからリュカくんの事情を聞き協力したいと申し出てくれているのでしよう。リュカくんからすべての事情を聞いたわけではありませんが、それでも放つておけないと思つてくれているのは間違いなく思いやりの心からのものでした。リュカくんと一緒にレヌール城で冒険をしたこともありましたが、腕に自信がある：などとは言えないまでも、どこか「私だつて役に立てる」という気持ちは持つているのかもしれない。普段の冒険や旅であればアランも止めることなく了承していたでしょうし、子供2人

連れて行く程度かどうかということもなかったでしょう。行き先が魔界でなければ「ちゃんと親の了解を得たなら別にいいよ」と物わがりの良い大人のような事を言っていたかも知れません。

しかし今から戦う相手は魔界の大魔王なのです。

かつて戦った大魔王バーンと比べてどれくらいの強さなのかわかりませんが、大魔王バーンとも命がけの戦いをしていたアランとしては足手まといな女の子を連れて行くつもりはありませんでした。それで言うところユカくんも役に立っているとは言い難いのですが、リユカくんの目的は『大魔王に連れ去られた母親を助ける事』でありアランの目的は『大魔王を倒す事』であってお互いの目指すものが一致しているという理由もありません。

こうして平行線の間答はビアンカちゃんが帰ってこないことで探しにきた父親であるダンカンがやってくるまで続き、渋るビアンカちゃんに「また明日話し合おう」とアランが言った事で納得して帰って行ったのでした。

そして翌日ビアンカちゃんが約束通り宿屋に向かった時には…アランたちは既に出発した後だったのです。

宿屋の人に聞いてみると手紙を預かっているということであり、受け取った手紙に書かれていたのは「待ってたけど来なかったということは親に反対されて諦めたんだろう。きつとまた遊びに行くよ」などという意味のわからない文章でした。ピアンカちゃんとは約束通り話し合うために朝からやってきており、待っていたけど来なかったなどと言われるような筋合いはないはずです。

しかしなんとアランは「明日話し合おうとは言ったけど時間は決めてないもん」という火に油を注ぐような言い訳で逃亡していたのでした。あまりにも汚い大人のやり口を見て怒りに震えるものの、既にその対象は村を出てしまっているためぶつけることもできません。

徒歩などで移動しているのであれば走って追いかけていくのですが、アランたちの移動方法は滝の洞窟へ行くときに自分の身体で味わっていました。その時にピアンカちゃんは自分の目と常識を疑うほどに驚いたのですが、なんとアランは陸や海ではなく空を移動していたのです。そしてリュカくんもそれが当たり前だと言わんばかりにまったく動じておらず、自分がこの村に引っ越してきて知らない間に世界の常識が変わってしまったのだらうかとすら思ったほどでした。

ピアンカちゃんが混乱するのは当然のことです。この世界に空を飛んで移動する人

間などアランくらいのものでし、他にいたとしても恐らく天界や魔界の住人でしょう。そしてそんな信じられない手段で移動しているアランを捕まえることなどビアンカちゃんには不可能でした。

「アラン兄さん、あれで良かったの？」

「待ってたのは本当だから嘘は言っていないよ？」

「そのためわざわざわざと明け方に起きてたんだもんね…」

ビアンカちゃんが怒りに震えている頃、アランたちは既にエルヘブンへと戻ってきていました。この世界では古代呪文であるはずのルーラなどアランにとっては日常の移動手段の1つでしかありません。これを知ればルラフエンという町あたりにいるかもしれない老人が腰を抜かすほど驚くかもしれませんが、アランもリユカくんもそんな事は知る由もないのです。

リユカくんとしてはビアンカちゃんとのきちんとした別れではなかったため心残りの部分もあつたのかもしれませんが、アランが強硬手段に出なければきつと話は平行線のままだったでしょう。きつとビアンカちゃんは怒っているでしょうが、無事に戻って来ることができたならその時に謝ればいいだけのはずです。

アランたちはエルヘブンで長老たちから聞いていた通りに海の神殿のある洞窟へと向かったのですが、そこには何やら頑丈な扉が行く手を阻んできたのです。扉には鍵穴があり、適応する鍵がなければ開くことができないのは明白です。きつと最後の鍵でもあればどんな扉だって開けることができるのでしようが、アランたちは最後の鍵なんて便利な物は持っていませんし、何よりもうこの世界のどこにも存在していないかもしれせん。

しかしテルパドールでも考えていたことですが、鍵がなければ扉を壊せばいいのです。その扉が鋼鉄製であろうとオリハルコン製であろうとアランには関係がありません。何なら凍れる時間の秘宝製であっても消し飛ばす秘奥を持つアランにとっては余計な手間だけでしかなかったのです。

そして扉の先にこれでもかとおわりやすく置かれていた石像の指に3つのリングをはめてみたところ、何やら空間が歪むような感覚と共に景色が変わっていったのです。

⋮

⋮

⋮



「さて、ここが魔界でいいのかな？」

「ここに母さんが…」

アランとリュカくんが飛ばされた先はどこかの建物の中であり、今までに聞いた話と通りであればここは魔界のはずという認識です。アバンたちと共に赴いた時とは方法が違うだけにアランとしても確証はありませんが、エルヘブンの長老たちがそう言っていたのだからきつとここは魔界なのでしょう。

『リュカ…引き返しなさい…来てはなりません…』

きつと逞しく成長したりリュカくんになら『あなたの力を信じることにしましょう』などと云って認めてくれるのかもかもしれません。しかしまだ子供であると言えるリュカくんの年齢を考えれば、母親であるマーサとしては止めるしかないのでしょうか。

「母さん…絶対に助けるから！」

そんな母の制止の声を聞いたからといって、それで大人しく帰るのであればリュカくんは最初から魔界になど来ていません。父の最後の言葉を叶えるために、そして自身もまだ見ぬ母に会いたいがためにここにいますのです。もちろん自分の力でここまでやってきたとはお世辞にも言えませんし、そこにはアランの力が大いに助けとなっていたのは紛れもない事実です。本来なら世界各地を徒歩で移動しなければいけなかったり、強力な魔物を倒さなければいけなかったりと自分一人だけであれば途方に暮れていたか

もしれません。

しかしそんなリユカくんは1人ではないのです。

もしかしたらこの世界ではないどこかには『子供時代を奴隷で過ごし大人になった後は天空の盾目的で結婚したり、子供が生まれたと思ったら妻が拐われて石にされたりしながらも最後は妻と子と共に母を助けに行くリユカくん』がいたかもしれません。そんな事は誰にもわからない事ではありますが、その代わり現在のリユカくんの隣にはアランがいました。

リユカくんにできない事を容易くやってみせ、その結果魔界へと足を踏み入れることができたのです。アランから多少戦いの手ほどきを受けたりもしていますが、まだまだ自分でも実力不足だと理解しているリユカくん：もしリユカくんがもう少し大人になつていればもう少し実力を身に着けてから挑もうと思つたかもしれません。しかし母を恋しいと求める少年にそこまで冷静に、そして客観的に判断することなどできないのかもしれない。

マーサは最後まで我が子を心配し思い直すように：引き返すことを告げてきていましたが、それはアランにもリユカくんにも受け入れられない話である以上この話は平行線でありませぬ。そしてお互いが引く姿勢を見せないということは、どちらがそれ

を押し通せるかというだけの事になるのです。つまりマーサがアランたちを力尽くで止めるような事がない以上、アランたちがマーサのいる場所へ向かうということは避けられないことでした。

「…どう考えてもあの山が怪しいな」

ほこらを出てみればそこは薄暗い世界が広がっており、空へと上がって見渡してみればある意味自然に溢れた世界でもありました。そんな中で一際目立つのが周りの山が丘に見えるほどに高い山であり、雰囲気的にそこが一番大魔王がいそうとアランは予想したのです。

アランが怪しんだ山はエビルマウンテンと呼ばれる場所で、そしてその予想の通り大魔王やマーサがいる場所でした。ここは大魔王の居城とも言える場所であり、大魔王バーンのバーンパレスのような場所だったのです。そしてそんな怪しい場所をアランが見逃すはずもなく…もはや空が道であるというアランのトベルーラ移動によって一直線に山頂へと飛んでいったのです。

「え…？リユカ…？あなたたち、どうして飛んでいるのです？」

マーサもきつとリユカくんたちは険しいエビルマウンテンを歩いて登ってくると思っていたのでしょう。大魔王の配下である凶悪な魔物たちがひしめくダンジョンを、罫を乗り越え傷つきながらも必死で前へと進んでくるものと考えていたのです。

大魔王の卑劣なトラップに…そして人間では大凡勝てないであろうモンスタールたちによって間違っても命を落としたりしないよう祈っていたのですが、そんな心配していた愛息子はなぜか空からやってきたのですからマーサが混乱するのも仕方ありません。

「母さんっ!!」

「リユカ!!」

しかしどうやって来たのかなど些細な問題です。今ここに父の思いを継ぎ、母を求めた少年の悲願は叶いました。母親のほうも成長を見守ることも叶わず別れることになってしまった愛しい子供と再会することができたのです。

アランに抱えられていたリユカくんは飛び出すようにマーサのもとへと走り、マーサもまたひと目で我が子とわかったのかリユカくんの名を呼び受け止めています。アランはこの感動の再会において蚊帳の外になってしまっていますが、だからといって水を差すような真似はしません。

「リユカくん、とりあえずマーサちゃん連れて一旦帰ろう」

「…それはできません。大魔王ミルドラスの魔力はあまりに強力です。その魔力を封じなければ勝つことなどできないでしょう」

赤ん坊だった我が子は少年へと成長し、もう会うこともできないと覚悟していたにもかかわらず神の導きなのかその姿を見て話すことまでできたのです。マーサにとって

は望外の幸運であり、できれば一緒にいたいものですがそうもいかない現実がありました。マーサはこのエビルマウンテンで大魔王の力を常に感じ取っていたのでしよう。そして自分を含め誰にも勝ち目がないと考えるほどに強力な力を見せられたことで伝説の勇者でも勝てないだろうと悲観してしまっていたのです。

そんな考えから我が子の未来を切り開くために…自分の命を賭して大魔王の魔力を削ぐことを決意していたのです。マーサはエルヘブンに生まれ、そして4人の長老を含めたエルヘブンの誰よりも強い力を持っています。その力は魔界との門を開閉することができるほどで、だからこそ大魔王によってここへと連れ去られてきたのです。

悲壮な覚悟を持っているマーサと、再会できたにもかかわらずまた別れるのではないかと不安なりユカくん…きつとこのままであれば神々への祈りと共に大魔王の力を削ろうとして、その結果大魔王によって反撃されてしまっていたかもしれない。しかし場の空気を読んだりできない自称伝説の勇者はそんな事は知ったことではないのです。

「とりあえずラリホー」

「…な……………ぜ……………」

もしこれがロカの時のように戦うことのできる人間だったのならラリホー（物理）で眠らせていたでしょう。しかしリユカくんの母親でもあるマーサにそれはできなかつたのか、アランはきちんと呪文のほうのラリホーでマーサを眠らせてしまったのです。

リュカくとマーサを抱え、エビルマウンテンの頂上から飛び立つアラン。その途中空から幾度も稲妻が落ちてきて行く手を阻んでいたのですが、もはや歩くよりもよく使っているトベルーラの熟練度はかなりのもののため当たることはありませんでした。この雷が大魔王による追撃なのかどうかはわかりませんが、アランがいなければ雷に打たれていたのは間違いないでしょう。

エビルマウンテンから魔界に来る時に使用したほこらへと向かう途中、小さな町つばいものを空から見ることができました。これが大魔王討伐の旅であれば「アレフガルドにもちゃんと町があつたし」などと考えながら立ち寄っていたかもしれないませんが、魔界に2人を置いて行くわけにはいかないと無視してとりあえず地上へと戻ることになりました。

リュカくんの目的は『連れ去られた母親を取り戻す』という事であり、マーサを見て遂にその念願は叶いました。これによりリュカくんがこれからしないといけないのは『大魔王を倒すこと』ではなく『やつと再会できた母親を守ること』なのです。そんなリュカくんを自身の目的である大魔王討伐に巻き込むつもりがないため、アランはわざわざ魔界にある町ではなく地上へと戻るといふ選択をしていたのでした。

「それじゃマーサちゃん的事よろしくね！」

「「この生命に代えても守り抜くと誓おう」」

どこに連れて行くのが良いかを考えた末に、アランはエルヘブンへ戻ってきて事情を話しマーサを守ってくれるようお願いしてみることになりました。長老たちも最初は眠っているマーサを見てひどく心配していましたが、眠っているだけという事で安心して力強く約束してくれたのです。

ベッドに寝かされたマーサとその隣で見守るリユカくんを見つつ、アランは2人のことを引き受けてくれた長老たちに後の事まで頼んでいました。マーサを取り戻したということとはリユカくんと長かった旅も終わりを迎えたということであり、母親探しというイベントが無事に完遂されたということでもあります。

思っていたよりも随分と時間のかかるイベントだったと思わなくてもありませんが、簡単だと思っていた母親探しが実は『魔界に連れ去られた』母親の奪還であった以上それは仕方ありません。それにリユカくんから頼まれた事で魔界への行き方や大魔王の存在を知れたなど良い事もたくさんあったのは確かです。厳密には「母親を探したいから強くなりしたい」と言っていただけなのですが、本来ならばあと10年以上かかってしまっていたかもしれない再会を短縮できているかもしれないのでアランのお節介も案

外役に立つのかもしれない。

「リユカくん、これからはお母さんを大事にするんだよ」

「アラン兄さん、もしかして…」

現在のリユカくんは10歳程度であり…年齢的にはディーノくんとあまり変わりませんが、戦闘能力という意味ではリユカくんはディーノくんほどのものを有してはいません。ディーノくんの場合は竜の騎士の子供であり父親である balan から戦いの指南を受けていましたが、リユカくんの場合は魔物との戦闘の経験があるとはいえ本格的に鍛えられていたわけではありませんでした。

そしてリユカくんはディーノくんたちやソロくんたちと比べて目的が『強くなること』ではなく『母を取り戻すこと』だったため、アランも「モンスターは自分が倒せば問題ない」とそこまで積極的に戦わせたりしていなかったのです。

そのため現在のリユカくんは武神流を少し使えるという程度でしかありませんが、それでもきつとお母さんを守るためにこれから強くなっていってくれることでしょう。そんな期待を込めたアランからの言葉を聞いて、反対にリユカくんはここでお別れという事を悟りました。

父であるパパスを殺された事で6歳にして孤独の身の上となってしまう、仇であるゲマたちに連れ去られたリユカくん…しかし自分ではどうすることもできない絶望の先



で出会った自称伝説の勇者であるアランは、そんなリユカくんの心の暗雲をすべて吹き飛ばしてしまつたのです。

そして極めつけにパパスの遺言で母が生きている事を知り、連れ去られた母を探したりリユカくんに望み通りの結末を齎したのもアランでした。天空の武具を集め、3つのリングを集めて魔界までの道を開き…更に一直線に母のいるであろう場所を予想して飛んで行って連れ帰ってきたのです。

そこまでの恩を受けて、しかも勇者の生き様(?)を間近で見せつけられているリユカくんが黙つて「わかりました」と了承するはずありません。まだ少年であり力不足は自分でも重々承知しているリユカくんですが、だからといってアラン一人に大魔王と戦ってもらおうなどとは思いませんでした。

「兄さんが行くのならボクも行くよ!」

「いや、これでもそれなりにモンスターと戦ってきた身だからね。任せといてくれていいんだよ」

自慢じゃないけど…と珍しく控えめに表現していますが、まさかアランが『それなり』と言っている相手が『魔王ハドラー』『大魔王バーン』『地獄の帝王エスターク』『なんか暗躍してた魔族デスピサロ』などだとは思わないでしょう。下手をすれば当代の勇者たちが世界の平和を取り戻すために仲間たちと共に命懸けで戦うであろう強大な魔物た

ちとの激闘を繰り広げてきていたなんて想像もできないはずです。

しかしアランからどれだけ大丈夫だと言われてもリユカくんのほうだって簡単に引くことはありません。父親であるパパスの血がそうさせるのか、それとも母親であるマーサも実は頑固なのかわかりませんがリユカくんは「一緒に行く」という意見を譲ろうとはしませんでした。

「相手は大魔王だよ？お母さんがまた拐われないように守ってあげたほうがいいんじゃない？」

「それならなおさら兄さんと一緒に大魔王を倒したほうが母さんが拐わなくて済むよ」

「ぐぬぬ…」

アランは優しく諭そうとしていましたが、リユカくんだって伊達にアランとそれなりの時間を一緒に過ごしていたわけではありません。母親を連れ去るやつがいるのならそいつを倒せば解決するというアランが言いそうな意見を言うあたりリユカくんがいかにアランの事をよく見てきているか、そしてリユカくんの思考がどうなっているのかわかるというものでした。

そして論破されてしまい唸るしかできなくなったアランに残された手は多くありません。そのまま一緒に連れて行って共に大魔王と戦うという選択肢もないこともない

のですが、アランの中のリユカくんの位置づけがそれをさせる気にならなかっただけなのです。

リユカくんにとってアランは大恩人であり本人の名乗る勇者という肩書も疑っていません。しかし対してアランはリユカくんの事を親とはぐれた迷子イベントの子供という認識でいるため、親と再会できた以上そこでこのイベントは終了だと思っていました。あとは生き別れの母子が仲良く暮らしていけば良いだけであり、そこに元凶を倒すためとは言えど死地に向かわせるなどできるはずがありません。

これはそういった思慮深い思いやりの心からの判断であって、決して「足手まといを連れて行っても邪魔なだけ」という戦力的判断ではないはずですよ。

「わかったよ。じゃあ一緒に大魔王を倒しに行くのでしょうか」

「うん！」

「それじゃあ今日はゆっくり休もう。マーサちゃんとも話をしないとね」

「そうだね。わかったよ」

「じゃあ……ラリホー」  
おやすみ

「……え？」

リユカくんの反対を受け付けられない態度に折れた……と見せかけたアラン。リユカくんも自分の想いが通じて喜んだはずだったのですが、そこはアランのほうがいかなる意味

で一枚上手だったようです。

竜の騎士のような強い耐性があれば抵抗できたかもしれないが、エルヘブンの民の中でも抜きん出た力を持つマーサの子であるリュカくんとはいえど呪文に耐性を持っているわけではありません。油断しているところに不意打ちのようにラリホーを使われてしまつてそのままぐつすりと夢の世界へ旅立ってしまった。

眠りに落ちてしまつたりリュカくんをマーサの隣のベッドに寝かせ、1人で魔界へと向かうつもりのアラン。これがパスがやつていたのであれば『妻子を残し世界のために大魔王に立ち向かう』という感動的な場面なのですが、アランと眠っている2人はまったくの他人です。しかし母子が残されて旅に出るといふ状況がアランの中で1人の人物を思い起こさせました。

それはオルテガという…勇者の父親でありながら物語が始まつた時から姿の見えない人物の事だったので。

もちろんアランはリュカくんを自分の子供だと思つていませんし、魔界から連れ去つてきただけのマーサを妻にしたいわけでもありません。ただなんとなく状況的に「オルテガつてこんな感じだったのかな？」とふと思つただけです。

「…行くのですか？」

眠っている2人を置いて部屋を出ようとしたアランでしたが、リュカくんが眠つたと

思ったら次はマーサが起きてしまいました。とはいえアランを止めようとしている様子ではなく、本当に魔界へ行くつもりなのかという事を問うているだけのようです。

「後は任せといてくれていいよ。リュカさんと仲良くね」

「どうしてそこまでするのですか？あなたは勇者でもないのに…」

どうやらマーサが聞いたかった本題はこれのようでした。決してマーサも『勇者とはエルヘブンの血と天空の血を受け継いだ者』と知っているわけではありませんが、マーサの持つ不思議な力もアランに勇者の持つているかもしれない何かを感じられない事から聞いておきたかったのかもしれませんが。

もはや神々に願いたい大いなる力で何とかしてもらわないといけないとさえ思えるような大魔王の強大な力を感じているマーサにとっては、魔界に向向いて大魔王と戦おうとしているアランの行動はただの自殺行為にしか映らないのでしょうか。

しかしそこにはアランとマーサで…この世界とアランとで大きな認識の違いが発生していたなど誰にも気付くことはできません。

アランにとって『勇者』という肩書は『大魔王を倒す者、もしくは倒した者』の事を指しています。そこに天空の血だとかそういう類のものなど必要だと思っていませんし、実際に魔王ハドラーや大魔王バーンを倒すのに役立ったのは大魔道士の秘奥や武神流の奥義などであってそんなものは必要ありませんでした。

アバンだって学者の家系で先祖に天空人がいたなどと聞いたこともありません。もしバランが勇者と呼ばれていれば……そしてアランが竜の騎士というものをちやんと認識していれば違ったかもしれませんが、自身の知識に大魔王ゾーマを倒した勇者の冒険というものがあつたためそこに至ることもできません。

もしソロくんたちとの旅で天空の城に行っていたりマスターなドラゴンと出会ったり、その時に天空の装備をソロくんが手に入れて「これが勇者の装備じゃ」などと聞いたりしていれば『天空の武器を装備できる者』勇者』という認識を得られていたかもしれません。しかしソロくんたちが天空の装備を手に入れることもなく、そして大魔王などといった肩書を持つような強大な相手もいなかった事もあってアランに認識を改めるような機会がやつてこなかったのです。一応アランがいなければソロくんの旅は過酷なものになっていたかもしれませんが、それはそれとしてアランがいたとはいえずスピサロの努力が足りなかった部分も大いにあつたのでしよう。

そのためマーサの質問の意図が読み取れずどう答えようかと考えたアランの頭に1つの閃きがあつたのです。この世界の誰もアランの事を勇者だと認めている中で自分だけは認めない……つまりそれが表す言葉の意味は「私にとっては私の旦那こそが勇者なのよ!」ということなのでしょう。私だけのヒーロー勇者という事で「たとえ愛する旦那が亡くなったとしても私の中で生き続けているわ!」と言いたかつたのだと考え

たのです。

この『私だけの勇者様』というマーサのパスへの深い愛情にアランは感動を覚えざるを得ませんでした。マーサはまったくそんな事を言っていないのですが、アランに搭載されているここ最近稼働していなかった恋愛脳は正常に判断できないほどに錆びついてしまっているようです。

しかしそう考えればシンシアちゃんがあんなにも「ソロが勇者なんだから！」と言っていた理由もわかりました。ソロくんの事を勇者と主張し続けるということとは…それはつまり遠回りに「あなたの事が好き」と言っているということです。あなたは私だけの勇者なのよ！とシンシアちゃんは必死にソロくんに語りかけていたと思えばなんと可愛らしい事でしょうか。

そんな事に気付かず自分が勇者だと言っていた事に今更ながらアランは恥ずかしいような申し訳ないような気持ちになりましたが、それを謝ろうにもシンシアちゃんはここにはいません。しかもその考えでいくとまるで「シンシアちゃんの勇者様は俺だ」とアピールしていたという風にも受け取ることができてしまうのです。まさかそんな事を考えられていると知ればシンシアちゃんはきつと覚えたての武神流の奥義をアランに向かって放つでしょうが、それさえもきつと照れ隠しだと生暖かい目で眺めてしまうのがアランなのかもしれません。

そんな風評被害にも程があるほどに恋する少女にランクアップ(?)してしまったシンシアちゃんはさておき、つまり目の前にいるマーサもまたシンシアちゃんと同じ考えをしていると思えば納得のできるものでした。きつとまだ新婚ホヤホヤで子供も生まれて幸せいっぱいのはずだったところを大魔王に誘拐されてしまったのですから、夫であるパパスが必ず迎えに来てくれて大魔王を倒してくれると思えばいいです。仕方ないのかもしれない。

しかし実際に迎えに来たのは愛する息子と勇者を自称する賢者なわけですから、思っていた展開と違ったため「お前じゃない」と言ってしまったのでしよう。気持ちには理解できるよ…と思いつつながらミミも理解していかないアランはマーサのためにもというつもりで真実を伝えてあげることにしたのです。

「マーサちゃんの言いたい事はわかるけどさ、勇者ってのは大魔王を倒す者の事を言うんだよ。つまり俺のことさ」

「あなたが大魔王を…?」

そのためマーサの言葉に対するアランの答えは1つしかありません。何よりも大事なのは大魔王を倒すことであって、私の旦那は勇者様的な話ではないのです。確かにフローラ女王とアバンの時は奇跡的に歯車が噛み合っていました。アランの中には「男はみんな誰もが勇者」みたいな意味不明な考えは持っていません。もちろんマーサやシ



ンシアちゃん含め誰も持っていない考えなのですが、いくらエルヘブンでも抜きん出た力を持つマーサといえどアランの考えを読み取れるわけではないため幸いな事に気付くこともありませんでした。

しかしそんな自信満々なアランの言葉はマーサにとつては驚きでしかありません。マーサはアランの事など何も知らないに等しく、知っているのは空を飛んで息子と一緒にエビルマウンテンまでやってきて自分を連れて地上まで戻ってきた人物ということくらいです。しかも大魔王の力を抑えるために神々の力を借りようとしていたのに、それを眠らせるという手段を以ってある意味邪魔した人物でもあります。

本来ならば魔界に誘拐されたマーサが更に誘拐されたわけなので、それをやったのが見知らぬアラン一人だったならばこうも大人しくしてはいられなかったでしょう。しかしアランの事を素直に信じられた根拠はリユカさんと一緒に来たという事と、戻ってきた先が自身の故郷であるエルヘブンであるという事があったからでした。

まさかアランにとつてマーサを助けるといふ事が『ただの迷子イベント』だと思っ  
ているなどと考えつかないため、魔界という危険な場所の中でも大魔王のお膝元であるエ  
ビルマウンテンに助けに来たのは決死の覚悟だったのだろうと思っ  
ていたのです。更にアランが「魔界なんて隣の国みたいなので、しかも何かあつても殴れば解決する楽  
な場所」などという程度の感想しか持つていないとは思わ  
ないでしょう。

そんなアランの「大魔王を倒す」宣言に、驚きと困惑のマーサとしてもどうすればいいのかわかりません。数年の間魔界にいて魔界の王の力の大きさを肌で感じてきただけに、たった1人で立ち向かおうとするのは『無謀』という言葉以外に思いつきませんでした。少しばかり力を持っているために増長し勢いで言っているにしては魔界まで乗り込んできて無事に戻ってくるという結果を出しており、そしてアランという人間を見定めるには情報などを含めわからない事が多すぎたためでもあります。

「とりあえず行ってくるからゆっくりしてなね」

「えっ……ちよつと待って……」

しかしマーサの言いたいことや聞きたいことはまったくわからないままアランは部屋を出ていってしまいました。この後マーサはリュカくんが目覚めるまで心配しながら悩むことになるのですが、リュカくんからアランのやってきた事を聞かされても結局悩むのでしょうか。

…

…

…

「お前が大魔王か？」

「ほう……たかが人間ごときがよくここまでやってきたと褒めてやろう」

エルヘブンから魔界へと舞い戻り、更にエビルマウンテンをウロウロしていたアランはやつと目的の相手を見つけてることができました。今までは相手のほうから来てくれていたり誰かが進む先を見つけてくれたりしていたため、1人でとなると思っていたよりも時間がかかってしまったのです。

扉を開けた先は暗闇の空間が広がっており、そしてそこには1匹の魔物が待ち構えていました。

「俺は勇者アラン！マーサちゃんに代わってお前を倒しに来た！」

「勇者だど？ククツ、笑わせるわ。そなたからは天空の気配を微塵も感じぬ……大方あの人間どもに乗せられてやってきたというわけか」

魔界の王であるミルドラスはアランの名乗りを一笑に付し、そしてマーサと同じく勇者ではないという判断をしていました。その理由は天空の血脈を感じないからということであり、ミルドラスはこの世界における勇者というものを認識しているのかもしれない。

「とはいえわざわざ魔界まで足を運び、更にこのエビルマウンテンを進みここまでやってきたのは褒めてやろう。今なら褒美としてこの魔界の王たるミルドラーズの配下にしておいてもよいぞ」

「またそれか…悪いがその手の勧誘は間に合ってるよ」

アランにとっては魔王からの勧誘など今更のことではありますが、しかし魔王という存在にとつては冒険の旅をしてきて自分のところに来てきた者を誘わなくてはならない何かがあるのかもしれない。これは魔王ハドラーや大魔王バーンも等しく行われてきた様式美のようなもので、もしかしたらそこで「断る！世界の平和は私が守つてみせる！」ならば貴様を倒して世界を我が物にしてくれるわ！という流れこそが開戦の合図の共通認識だったという可能性もあります。

そうなる。「また勧誘か…」というアランは様式美というものを理解しない粗忽者ということなので、魔王側からすれば「雅というものを理解していない育ちの悪い人間だな。こんなヤツに勇者の資格などないな」と悪印象で捉えられてしまう事でしょう。ミルドラーズにとつて人間など重要視しておらず、しかしマーサを連れ去つてきたことからわかる通り利用できるようであれば人間であつても使うという柔軟性は持ち合わせています。

今となつてはマーサの力など使わなくとも魔界と地上を繋ぐ事に問題はなく、そして

邪魔になるであろう天空のマスタードラゴンの力の気配も感じられません。そのためマーサを連れ戻されたとしても支障はないのですが、それはそれとしてせっかく連れてきたのに勝手に連れ戻されるといふのも気に入らない部分がないわけではありません。「そなたがあの人間を連れて行ったのはわかつていふ。だが…それならば代償というものは必要だと思わぬか？」

「ああ、その通りだね。それならまずはお前が勝手に連れて行った代償を払ってもらおうとしよう」

誘拐してきた者の身代的なものを要求する魔界の王と、魔界に連れ去った事に対する代償を払わせようとするアラン…本来ならば「勝手に攫ってにおいて何をふざけた事を！」などと怒りに震えるような場面のはずが、もはや他人が見れば魔族同士の諍いにか見えないこともありません。

もちろん結果的にはグランバニアから魔界へと連れ去られたマーサを取り戻しているのでアランの行動自体は正しかったと言えるのですが、魔王ハドラーとの戦いの頃から今に至るまで考え方については何も変わっていませんでした。悪の親玉さえ倒せれば後は野となれ山となれ精神だといふその行動は、それが正解なのかどうかなんて誰にもわかるはずがないのです。

アバンとフローラ女王をくつつけたのだからアランの「勇者とお姫様は結ばれるべ

き」というとても利己的な思考で半ば強引なものでしたし、ソアラ王女とバランをカール王国に連れてきた上にアルキード王国に堂々と「お前たちには渡さない」と宣言したのも自分勝手な理由でしかありません。

大魔王バーンと戦ったのも世界の平和などといった大層な理由もありませんでした。そしてソロくんたちとの旅なんてアランにとっては散歩程度のものでしたのです。そんな中で遂に魔界で大魔王と戦うことになったのですが、ある種念願叶ったとはいえどもそれによってアランが正義の心に目覚めるはずもありませんでした。

「ならば…愚かな人間に魔界の王たる所以をみせてやろう！」

「伝説の勇者に勝てると思うなよ！」

こうしてアランと魔界の王ミルドラスによる戦いの火蓋が切られたのでした。

…

…

…

アランがミルドラスとの戦いに突入した頃、アランによって眠らされていたリユカくんが目を覚ましました。

父親の悲願であり、自身も探し求めていた母親をやつと見つけることができた事で気が緩んだ事もあったのでしょうか。そこにアランのラリホーが重なったことで随分と眠り込んでしまったのです。

「兄さんっ!」

なぜアランがわざわざラリホーを使って眠らせたのかわからず、起きてすぐにアランを探すもその姿は見当たりません。今までアランがリユカくんにラリホーを使ったことなどなく、更に今までは起きたらアランの姿があっただけに嫌な予感のようなものがあつたのです。

「リユカ、起きたの?」

「…母さん」

そんなリユカくんがいる部屋に入ってきたのは探し求めていた母親…マーサでした。マーサはアランが出ていった後、エルヘブンの長老たちと今後の話し合いを行っていたのです。アランの事はそれほど詳しく聞くことはできませんでしたが、それでも3つのリングを集め魔界への扉を開くために行動していたことなどを知ることができました。

長老たちは今後エルヘブンでマーサとリユカくんを守るつもりでしたが、マーサのほうはどうすべきか悩む部分もあつたための話し合いだったのです。それはマーサがグ

ランバニアの王妃であり、その子供であるリュカくんは身分的には王子でもあったからでした。もともとパパスがグランバニアの国王でありそのパパスに見初められ結婚したマーサが王妃になってリュカくんが生まれたのです。

そしてマーサはグランバニアの城から魔界へと連れ去られており、そのためグランバニアに無事を知らせる必要があるという王妃としての責務も持つていました。直接見ていたわけではありませんがリュカくんがアランと一緒に行動して魔界へやってきた時点で夫であるパパスの行く末は何となく理解しており、せめてその事を伝える事が夫の愛した国にマーサができる数少ない事でもあると考えたのです。

そんな話し合いが一段落し愛息子の様子を見に戻った頃に丁度リュカくんも目を覚ましたのでした。

「…本当に、大きくなったわね」

「母さん…父さんは…」

「聞かせてちょうだい。あなたたちがどんな旅をしてきたのか…あの人の事も」

マーサはリュカくんから語られた話を聞き、パパスがどれだけ自分を探すために各地を旅していたのかなどを知ることができたのです。従者であるサンチョがいたとはいえ、幼子のリュカくんを連れて旅をするのはきつと大変だったでしょう。それでもリュカくんを…息子を城に置いておくことなく一緒にいることを選んでくれたのはとても



嬉しい事でもありました。

サンタローズで少女とお化け退治をしたり妖精と仲良くなったりという冒険の話で微笑ましく聞き、そして話はパパスの最後へと移っていきます。パパスの最後は悲しいながらも我が子を守るためのとても誇らしい最後であり、もしそこにいるのがマーサであつたとしても我が子を守るために同じ行動をしたでしょう。しかしそこから先は魔物に連れ去られてしまったという内容になり、今ここで無事なりユカくんを見ていながらも心配になってしまいました。

ところが魔物に連れ去られた先で起こつた出来事はマーサにとつても俄には信じられないような内容だつたのです。そのあまりにもあまりな話にいくら息子が見てきたとはいえずぐに飲み込むことができませんでした。マーサの頭の中では理解する前に疑問が次から次へと湧いてきており、むしろそんな怒涛の日々と出来事を体験してきたリユカくんが心配になるほどです。

連れ去られた先でリユカくんにとつて仇である魔物をアランが倒した：これは良い事です。その前に人質を無視していなければ、ですが。そして魔物を倒した後に人質を蘇生させた：もはや意味がわかりません。

空を飛んで山を下りたというのはエビルマウンテンに飛んで来ていた事から理解できます。しかしなぜ一緒に連れ去られたヘンリー王子をラインハットに送り届けたつ

いでに太后を殴り殺すのでしょうか。魔物だったから良かったようなものの、もし偽物じゃなかったら大騒ぎじゃ済まなかったでしょう。

サラボナでフローラちゃんという女の子と仲良くなれたのは良かった事です。リュカくんとそう年齢の変わらない女の子が親の決定で成人男性と結婚する事にならなくて良かったと思います。その後に魔獣の封印された壺の色を見てくるだけでいいのを持って帰ったという話がなければ……町で魔獣が暴れてアランが倒したそうですが、そもそも持って帰らなければよかったですか？という感想しか出てきません。

伝説の勇者の装備を一式集めることができた……確かにアランは天空の武器を装備していました。マーサにだってその武器の不思議な力を感じ取ることはできましたし、それが勇者の証明と言われれば納得できないことありません。しかしそれまでの旅路での行動に勇者要素なんてあったでしょうか。

聞いているうちになんだか頭痛がしてきたような気がするマーサですが、まさかこれらが全部真実だとは思いません。子供だからきつと大袈裟に……誇張して話しているのだらうと現実逃避のように理解することにしたのです。

リュカくんもきつと連れ去られた時はおそらく気も動転してしまっていて人質が死んだと思ってしまうたのでしよう。ラインハットでも太后が殴られるという衝撃が大きかったと考えられます。そしてサラボナでの山のように大きい魔獣というのは、まだ

まだ背も小さい子供には少しばかり大きなモンスターがとてつもなく大きく感じたのでしよう。キラキラとした目で語るリュカくんはきつとかなり度の強い色眼鏡で見えていますのかもしれない。

「そう……とても大変な旅だったのね」

「ううん、アラン兄さんがいたから何も怖くなかったよ」

「……ところで、どうして兄さんって呼んでるのかしら？」

リュカくんの話を聞き終わり、今までの旅を労りながらマーサはどうしても気になっていた事を聞くことにしました。マーサとパパスの間には子供はリュカくんしかおらず、当然の事ながらマーサはリュカくん以外の子を生んだ覚えなどありません。

ここでリュカくと年の近い子であればパパスの隠し子的な疑いになるのですが、アランはどう見ても成人しており正確な年齢はわからないまでも年の離れた兄には見えませんでした。

「最初は勇者様って呼んだんだけど、呼ぶのなら兄さんって呼びなさいって言われたんだ」

「そういうことだったのね」

つまり当時のリュカくんは唯一の親族だった父親を失ったばかりで母親は行方不明……マーサはそこでリュカくんが寂しい思いをしないようにアランが兄役を買って出て

くれたということだろうと考えました。他人行儀に呼ぶよりも兄弟のように接することでもリユカくんの孤独を癒やしてくれようとしていたと理解したのです。

そこにはアランの年頃の悩みにおける解決法だったとは想像もできませんでした。いろいろな子供たちと接してきているアランが唯一悩んでいたのが「おじさん」と呼ばれることだったのです。ディーノくんやシンシア王女はアランの事を名前で呼んでいましたが、マアムちゃんから呼ばれたりソロくんたちも出会った当初におじさん呼ばわりだったためまだ「おじさん」とは呼ばれたくないちっほけなプライドからアランが出した苦肉の策だったのです。

アランがそんな理由で兄呼びを強制していたとは思わなかったため好意的に解釈しているマーサ。リユカくんを救ってくれた事を含め無事に戻ってきてくれた時には改めてお礼を言いたいところなのですが、現実的に考えて再会は非常に難しいだろうということも心の内では冷静に理解していました。

魔界に連れ去られてからずっとその存在の強大な力を間近で感じていたマーサには、そんな相手にアランが勝てるとはどうしても思えなかったのです。もちろん勝ってほしいという気持ちではあるのですが、魔界に生息する魔物たちと一線を画す力を持つ相手に勝てる未来を想像することができなかつたのでした。

…

…

…

「はあ…はあ…」

「人間よ、この姿となった私を相手によくここまで戦ったと褒めてやろう。だがそれもここまでのような」

魔界でのアランとミルドラーズの戦いは激しいものでありアランが優勢だったのですが、ミルドラーズが真の姿へと変わってからは劣勢に立たされてしまいました。悠然とした態度で今まで抗ったことを褒めるミルドラーズに対して膝をつくアラン… マーサが心配していた状況がそこにはあったのでした。

## ドラクエ5に行ってみた4

「愚かな人間よ、所詮そなたなど周りから勇者だと囃し立てられただけの哀れな存在だ」  
「はあ…はあ…どうやら、そうみたいだね…」

もはや勝負はついたとばかりに何やら言葉でも精神攻撃をしているミルドラス：  
やはり魔族だけあって人間の絶望などといった負の感情は大好きなのでしょう。対するアランもその言葉を否定することなく、今の状況を考えれば認めざるを得ないのかも  
しれません。

「ようやく認める気になったか。ならば…」

「ああ、どうやら俺はまだ勇者になれていないらしい…こんなもん邪魔なだけだった」  
「…なに？」

ついに負けを認めたとはいきや天空の剣を地面に突き刺し、防具を外していくアランにミルドラスもその行動の真意が掴みませんでした。諦めたにしても装備をわざわざわざわざ理由などありませんし、そのまま絶望の中で散れば良いだけだったのです。

「それじゃあ……ここからは賢者アランが相手になってやる」

アランの身体をベホマの光が纏い、戦いの疲れを癒やし放たれた言葉は降参や後悔の言葉ではなく：「次は賢者として戦う」というミルドラーズには何を言っているのかわからない内容でした。これ以上何をどう足掻いたところで勝ち目などないはずなのに、その表情には絶望などの負の感情は相変わらず見えることはありません。

ミルドラーズへと放った言葉の通り、諦めるどころか自称勇者から自称賢者へとその場で気持ち的に転職したアラン：他の人間がそれをやったなら何も変わることもなくそのままミルドラーズによって葬られていたことでしょう。

しかし天空の武器を外したアランの変化は劇的なものでした。

それもそのはず：天空の装備に勇者と認められていない者は1つも装備できないはずの物をアランは無理やりフルセットで装備していたのです。本来ならば1歩も動けないはずが、それでも戦闘行動までできた事によってミルドラーズと戦えてしまったのでした。しかしやはり天空の装備に認められていないため、武器のほうもアランのほうも本来の力を発揮することができなかったのです。

本人がまったく意図せずに違う意味での舐めプを行っていた事になってしまっていたのですが、それでも流石に魔界の王であるミルドラーズの真の姿に対して勝つことはできませんでした。反対に追い詰められてしまったため、負けるよりはと遂にアランは

勇者として戦う事を諦めたのです。

そして天空の装備を捨てたアランの動きはそれまでのものと別人のようでした。これまでのミルドラスとの戦いにおいて天空の剣は切り裂くことすらままならず叩きつけるように扱っており、もはや剣でありながら鈍器とあまり変わらないような使い方をしていました。更に防具も動きにくいだけであり、本来のスピードを活かすこともできませんでした。そんな戦い方でもミルドラスを真の姿にさせることには成功したのですが、やはりそこまで止まりだったのです。

ところがなんとということでしょう。天空の防具を捨てた事によって本来のスピードが戻り、剣を捨てて素手となった事で攻撃力が上がるというミルドラスにとって詐欺のような展開となり形勢が一気に逆転してしまうことになってしまったのです。

「貴様、一体…何をしたア!？」

「言っただろ?勇者辞めて賢者になっただけさ」

「ふざけるなアア!!」

しかしミルドラスが怒るのも当然でしょう。どこの世界に武器防具を外して名乗りが変わっただけで強くなる人間がいると思うでしょうか。そしてそんなアランの行方はミルドラスにとって馬鹿にされていると激昂してしまうのも仕方ありません。

そんな激しい怒りのミルドラスに比べ、装備を捨てたアランのほうは本来の戦い方



に戻ったことでその力を存分に發揮していました。今までの戦い方が嘘だったかのよう  
に武神流の奥義は拳を当てることでその箇所を崩壊させ、反対にミルドラーズの攻撃  
が当たったと思ってもひらりと躲しているのです。そして対するミルドラーズは真の  
姿となったことで巨体となっており、アランにとっては攻撃し放題で会心の一撃打ち放  
題といった具合でした。

「これが閃華裂光拳……そしてこれがメドロローアだ！」

魔族の姿から怪物へと姿を変えたミルドラーズを武神流の奥義で殴り倒し、更にブ  
オーンの時と同じようにメドロローアで胴体に大きな風穴を開けられ……更にトドメとば  
かりに閃華裂光拳が怪物の顔へと突き刺さり、致命傷にもかかわらず未だ生きているミ  
ルドラーズはやはりその名に恥じないだけの力を持っているようです。

「ぐふっ……よもやただの人間がこの私を倒すとは……だが……ただでは終わらぬ……」

全身を破壊され大きな風穴まで開けられているというのに絶命に至っていない魔界  
の王ミルドラーズ……まさしく魔物の王に相応しい生命力でしたがもはや戦える状態で  
はありません。そして己の敗北を悟ったからなのか最後の足掻きとばかりにミルド  
ラーズは自分とアランのいる空間を塞いでしまったのです。

「貴様も……朽ち果てるのだ……」

せめて道連れにするというミルドラーズの最後の行いを止めることができず、息絶え

た魔界の王とアランのみがその空間に取り残されることになってしまいました。いくらアランであっても空間をどうこうするような知識や力は持っていません。アバンであれば何かと便利アイテムを駆使して舞い戻ることもできるのでしようが、残念なことにはアランはそんな便利アイテムを持ち合わせていませんでした。

「えーと…どうしよ…」

アランの記憶の中では大魔王ゾーマを倒した勇者もアレフガルドに閉じ込められていたような気がするのですが、それはそれとしてここから出るのにどうすればいいのかまったくわかりません。精霊ルビス様的な存在が「よくぞ魔界の王を倒してくれました」などと言いながら助けてくれる展開を待つてみるものの、特に何も変わる様子も見当たりません。

もしかしたらトロツコに乗っている自称天空人を助けたりゴールドオーブ的な物を取り戻して、水没しているお城を浮上させたりしていればマスタードラゴンの存在が助けてくれたかもしれないかもしれません。しかしそんなイベントなどまったく知らないアランにとって助けてくれそうなのは精霊ルビス様しか思い浮かびませんでした。

しかしそんな困ったアランの呟きは誰にも応えられない事なく闇へと溶け込んでいくのでした。

…

…

…

「アラン兄さん!!」

アランとミルドラースがどこか別の空間に移動したことによつて誰もいなくなった戦いの跡地に大急ぎでやってきたのはリュカくんでした。

マーサとの再会を改めて喜び、そして今までの冒険の話をした後にリュカくんは再度魔界の地へと足を踏み入れることを決めたのです。自分の力不足が原因で置いて行かれた事は心のどこかで理解しつつも、だからといってそのままアランの勝利を信じて待つということが今のリュカくんには少し難しかったようでした。

サラボナで見た古の怪物ブオーンに対してだって何も役に立てなかったのですから、更に強大な魔界の王に対して自分が何かできるとまでは考えていません。しかしそれでも今まさにそんな敵に対して戦っているアランの事を思えば、たとえほんの少しであつても何かをしたいという気持ちしかありませんでした。

そしてそんなリュカくんの決断を聞いた母親のマーサもまたリュカくんと共にエビルマウンテンへと訪れていました。

最初はエルヘブンの長老たちから止められたりもしましたが、リュカくんの意思は固く1人で飛び出されるくらいならとマーサも一緒に行くことになったのです。もしアランが敗れていて魔界の王が残っていた場合には神々の力を借りてもリュカくんだけでも逃がすためという魂胆もあり、そこには子を想う母の愛故にエルヘブンの長老たちも認めざるを得なかったという事情もあります。

しかしいざ魔界へとやってきてマーサが感じたのは「魔界の王の力を感じられない」という事でした。今までは嫌というほどその強大な力を感じられていたというのに、その圧迫感とでも言うべき圧力を感じなくなっていた事から「もしかしたら…」という気持ちを持ってやってきたのです。

「これは…アラン兄さんの剣…」

急ぐリュカくんと一緒にエビルマウンテンを奥深くまで進んで行くと激しい戦闘の痕跡がそこかしこに残されているにもかかわらず誰もいません。そしてリュカくんはその場所でアランが装備していた天空の武器を見つけたのです。

もしアランが戦って敗れたのであれば遺体も残されているはずですし、勝っているのならアランがいらないのはおかしな事でした。なのに天空の武器だけがその場に纏まって置かれているという不思議な状況は一体何がどうなったのかリュカくんにもマーサにもまったくわかりません。

「どうして兄さんの装備だけがここに…？アラン兄さんは…？」

「リュカ、落ち着きなさい。もしかしたらアラン様は神々の使いだったのかもしれないわ」

「神々の使い？」

どういった戦いが繰り広げられていたのかわからないため、マーサもリュカくんも状況を推測するしかできません。その中でマーサは『アランは神々の御使いであり、魔界の王を倒し役目を終えたことで天へと帰っていったのでは？』という予想をしたのでした。

何せ戦っていたはずの両者がおらず、そして装備だけがまるでその役目を終えたばかりに置かれているのですからそれ以外考えられません。どちらかが道連れに自爆などをしたのであれば武器が纏まって置かれているはずはなく、更に天空の剣が地面に突き刺されて鎧や盾も一緒に置かれていることからそんなロマン溢れる希望のビジョンが浮かんだのでしょうか。

アランが魔界の王を倒し、そして身体が光になって天へと戻っていったというのであればこの場に天空の装備だけが残されていたことに辻褄が合うと考えたのです。そしてそんな自身の推測をリュカくんに話して聞かせ、リュカくんもあまりの唐突な内容に半信半疑ながらアランがいらないという事だけは理解することができました。

まさか真実は『伝説の武具を「重くて邪魔」という理由で脱ぎ捨てて戦っていた』なんて想像もできなかったのでしょう。リュカくんがもう少し成長していればアランの得意な戦闘方法が素手だと理解していたかもしれないませんが、天空の装備が揃った段階でアランは一応装備していたので考えつくことができなかったのです。

「リュカ、エルヘブンへ戻って皆にこの事を伝えてあげましょう」

「うん…せめて兄さんの装備は持って帰っていい？」

「ええ、ここに置いておくわけにはいかないものね」

魔界の王が倒れたとしても周囲に魔物がいないわけではないため、リュカくとマーサはアランの形見（）の装備を持って地上へと戻ることにしました。激しく傷ついた痕のある武具を見て熾烈な戦いだったことは容易に想像できるリュカくんたちですが、天空の装備はアランの戦いにおいて足を引っ張るだけでまったく役に立っていません。とは思わないでしょう。

こうして2人は魔界からエルヘブンへと戻っていったのでした。

そして時は過ぎ…

少年だったリュカくんは立派な青年へと成長していったのです。

魔界から戻ってきたリュカくとマーサはエルヘブンで魔界の脅威が去ったことを伝え、しかしそのままエルヘブンに滞在することはありませんでした。それはマーサにとつて残された責務：グランバニアでパパスの最後を伝えるという仕事が残っていたのです。

マーサはパパスに見初められグランバニアで王妃として過ごしましたが、ミルドラスによってグランバニアから連れ去られています。そして国王であるパパスがマーサを探す旅に出て非業の最期を遂げたため、せめてその立派な最期をグランバニアへと伝えたいと考えたのでした。

リュカくと共にグランバニアへと戻ったマーサはサンチヨらとも再会し、そしてパパスに代わって国政を執り行っていたオジロンにもその事を伝えました。その際に王妃であるマーサと王子であるリュカくに「グランバニアに戻ってきてほしい」という旨が伝えられましたが、2人ともそれを固辞してしまいました。

そしてエルヘブンに戻った後しばらく母子で穏やかに過ごしていましたが、リュカくんの心の中には燻った思いがありました。リュカくんの人生の半分以上はアランと共に過ごしてきており、一緒にいた期間で言えばパパスよりも長かったのです。そしてパ

パスとは悲しい別れとなってしまいました。アランとは別れとも言えないような最後だった事が関係していました。

もちろんマーサが言っていた『天に帰っていった』というのも考えられないわけではありませんが、それならそれで別れの挨拶くらいしてくれは？という希望に似た思いもあつたのです。そのため「もしかしたらアラン兄さんの事だから実はどこかでフラしてるんじゃない？」という考えも捨てきれなかつたのでした。

リユカくんの中でそんな思いが大きくなっていき、遂に1つの答えに行き着いたので。それは：「とりあえず探してみよう」という今までのアランの行動を受け継いだ考えでした。母親であるマーサを探す旅だつて明確な目的地もわからずに飛び回つて見つけていたのですから、何事も動き出してみないとわかりません。それが良い事なのか悪い事なのかわかりませんが、そんなアランの行動を受け継いだリユカくんもとりあえずアランを探しに世界を旅してみようと思つたのでした。

「リユカ、ぼーつとして何を考へてるのですか？」

「ん？ちよつと今までの旅の事をね」

「私たちとの旅の事？それともアランとの旅の事？」

「…どつちもかな」

少しばかり昔とも言えない昔を振り返つていたリユカくんは声をかけたのはサラボ



ナで知り合った幼なじみフローラちゃんでした。そしてそこに合わせて聞いてきたのは金髪の幼なじみピアンカちゃんです。

リュカくんがマーサや長老たちを説得して許可をもらい旅立った後、ひとまず借りていた天空の盾を返そうとサラボナを訪れたのです。そしてルドマンに今までの旅の話をし、無事に母親と再会できた事やアランが魔界の王を倒した事などを伝えたのです。当のアランはどこにいるのかと聞かれたりもしましたが、リュカくんもわからないため旅をしている旨を告げたところ：なぜかフローラちゃんと一緒に付いていくということになったのです。

フローラちゃんにとってアランは町の恩人でもあり個人的にも感謝している人物のためもう一度会いたいという気持ちを持っていました。そこに魔界の王を倒して世界を救ったというのですから、まさに本人の言っていた通り伝説の勇者だったのです。そしてそれだけでなく：マーサの言っていたという『アラン神の使い説』もフローラちゃんには何となく納得できる気がするものでした。

アランは初対面の時からフローラちゃんが結婚話に乗り気じゃない事を看破し、そしてその後にアランが取った行動は優しく話しかけるなどではなく上空に連れ出すというものでした。まるで地上ではなく空の上こそが自分にとって本来いるべきところとでもいうように自然に連れ出され、そして地上を見下ろす大きな視点で話を聞いてくれ

たのです。

そんな風に良いように勘違いされているアランの初対面の時の行動が、実は「子供は空が好き」というデイーノくんたちで培った経験によるものだなんて知るはずもありませんでした。

そのためアランを探すリユカくんに同行したい、そして修道院とサラボナくらいしか知らない自分もまた世界を見て回りたいという気持ちに火が付いたのでしよう。

とはいえそれを簡単に許すほどルドマンは放任主義でも愛情薄い父親でもありません。しかし父と娘の苛烈なまでの口論を制したフローラちゃんは言葉通りにリユカくんの旅に同行することになり、ハラハラとドキドキが混在した2人旅が始まったのです。ルドマンとしてはいつその事リユカくとフローラちゃんが一緒になってくれれば…という考えも頭を過りましたが、あまり余計な事を言うともた舌戦になりかねないと自重したりという事もありました。

しかしルドマンの心配を他所にそんな2人旅も長くは続かず…サラボナを出発して報告がてら立ち寄った山奥の村でピアンカちゃんの旅の仲間に加わったのです。

アランにありつたけの文句を言おうと思つて待ち構えていたピアンカちゃんでしたが、その目的の人物が魔界の王を倒していなくなつたなどと聞かされれば驚きを隠せません。しかしそれはそれ…勝手に置いていったことについてはまだ許してはいないため

強引にリュカくんの旅に参加することにしたのでした。

そこにリュカくんがフローラちゃんという可愛い女の子との2人旅という事から嫉妬や焦燥といった感情があったのかどうかは本人にしかわからない事です。アランに文句を言うため…というだけのためにわざわざ探す必要など無いと思いますが、そんな事を言う間もなくピアンカちゃんは父親を言いぐるめてトントン拍子に話を進めてしまったのでした。

そのまま3人で西の大陸を進み、途中ルラフエンという町では古代魔法を研究しているという老人に出会って念願のルーラを習得したりもしましたが：アランはルーラが古代魔法なんて言っておらず普通に使用していたため、なぜルーラを使えたのか本人がいないだけに謎は深まるばかりです。

ルーラが古代魔法と知ったことでマーサの言っていた「天の使い」説が説得力を増したりしつつ、ラインハットへ立ち寄ってヘンリーと旧交を温めたりしながら3人は旅を続けました。いろんな町などを巡っていると必ずと言ってても良いほどに勇者の噂が流れており、もしかしたらアランがいるかもとそれを確かめたりしながら空振りばかりでもありました。

話というものは人から人へと話が伝わっていく間に少しずつ変わってきているのでしようが、勇者の大きな噂は巨大な魔物を倒したり死者を蘇らせたりというものがほと

んです。そしてリユカくんはそんな噂を直接目にしてはいるのですが、中にはリユカくんの知らない噂などがありアランがそこにいるかもという希望が出てしまうのです。

そうやって勇者の噂を追いかける中で小休止として移動が楽になったためエルヘブに帰ったら迎えてくれたマーサから「あらあらまあまあ」と微笑ましく見られたり、グランバニアでサンチョやオジロンと話したりと母親を探し求める時とは違う穏やかな旅でした。

オジロンやサンチョはマーサやリユカくんがグランバニアに戻ってきてくれることを諦めていないようで「将来のお妃様を連れて帰って来た」などとっては喜び、実は王子だったことにピアンカちゃんもフローラちゃんも驚いたりする一面もあったりしたのですが：とはいえ玉の輿を狙ってリユカくんと一緒にいるわけではないので2人ともあまり気にしていません。

もしこれが「どちらかを選んで結婚しなさい」というような選択を迫られていればリユカくんも心穏やかではいられなかったかもしれない。

しかしリユカくんにはアランとの旅の中でそういった面についてもアランの経験談を聞いていました。かつてリユカくんはアランになんとなく聞いた事を覚えていたのです。

「ねえ兄さん、兄さんは結婚とかしてないの？」

「俺くらいになると結構大変だったんだよ？たくさんの候補を用意されたりさ」

「その人たちはどうしたの？」

「ちやんと皆幸せに暮らしてるよ」

こういつた会話があり、リユカくんの中でアランは一夫多妻で全員を幸せにしたという認識になってしまっていたのです。実際は『魔王ハドラーを倒した後には大臣たちから娘などを結婚相手として提案されて断るのが大変だった』『その子たちは大魔王を倒したから平和な世界で幸せに暮らしている』という内容であつてアランが幸せにしたとは言つていません。

地上を消し去ろうとしていた大魔王を倒したのである意味『幸せにした』という言葉は間違つていないのですが、そこをきちんと伝えなかつたのはアランの中でちよつと見栄を張つてみたかつたからなのでしょう。その結果リユカくんの結婚観が少々狂つてしまいました。それはきつと見解の相違というものなのです。

そんなかつてのアランとの会話を思い出しつつ、グランバニアを出た3人はまた勇者の姿を求めて各地を巡つていくのでした。

なおトロッコが設置されている洞窟なんて用事もありませんし、海底に沈むお城の存在なんて知ることありません。そのため何かのきつかけでもなければお城はこの先

も沈みっぱなしで、トロツコの洞窟では延々とグルグル回り続けるトロツコが存在するのでしょうか。

そして奇跡の教団は今も勇者アランの偉業を広めており、ますますその規模を拡大しつつありました。

これらの流れを受けて、世界がどのように進んでいくのかは誰にもわかりません。

それでもきつと…アランの思想を受け継いだリュカくんが何とかしてくれるはず。す。

この世界に天空の勇者が誕生するのかどうかは誰にもわかりませんが、アランが暴れに暴れた結果きつと天空の勇者も使命を課せられることなく幸せに暮らせるかもしれない。

リュカちゃんとフローラちゃんとピアンカちゃんが今後ラブコメを演じるのか修羅場を演じるのかわかりませんが、きつと空の上からパパスも暖かく見守ってくれているこ

とでしよう。





⋮

⋮

⋮



「いやあ助かったよ。俺は大魔王を倒した伝説の勇者アラン」

「ボクは勇者イレブンです。過ぎ去りし時を求めて旅をしています」  
「へえ〜…よくわかんないけどなんか冒険の二オイがするね」